

悲しきかなや
身は籠鳥



折葉坂三番地

あらすじ

王法乱れ仏法地に墜つ平安の末期。摂津源氏の棟梁、源頼政はみやこの夜に聞こえる怪しき声を射よとの命を受ける。姿の無いばけものを射るなど無理難題であるものの、頼政の立場はそれを拒絶できるものではなかった。

かくして始まった茶番のばけもの退治より、頼政は運命の奔流の中に飲み込まれてゆく。院と帝の対立、藤原摂関家の暗躍、源平の争乱の中を生き抜いた一人の男が、生涯を賭して遺したものとは。

波乱の平安末期を舞台に、人と妖怪の絆を描く大河浪漫、ここに登場。

1 悲しきかなや身は籠鳥

目次

序	いつまで	4
一	義朝坂東へ下る	8
二	藤原の娘	26
三	紫宸殿の怪異	50
四	頼政辟邪の弓	80
五	鎮西八郎為朝	110
六	ふたつの乱	136
七	怪鳥ぬえ	168
八	木ノ下	200

九	平家にあらずんば	228
十	「玉葉」治承二年五月十二日	256
十一	椎を拾いて	274
十二	名馬「仲綱」	304
十三	頼政決起	336
十四	渡辺競	362
十五	恨弓「源三位頼政の弓」	390
結	心より心に伝はる花なれば	426

3 悲しきかなや身は籠鳥

序 いつまで

建武元年（一三三四年）、秋。

後醍醐帝の元、一五〇年ぶりに武家より政権を取り戻し、華々しくも始まった新政は早くも行き詰まりを見せていた。

乱れた世に遍く威光をもたらす筈だった後醍醐帝ご自身による親政であるが、帝とそれを支える公卿たちは、自分たちが長らく政治の中心を離れていたことを自覚するに至らなかった。彼らは幕府の統治の中で増大した武士の権勢を理解せず、実質的に土地を治める武士たちを、平安の昔と同じく己の走狗として扱おうとしたのである。

建武の新政とは、鎌倉幕府の統治を否定し、天地とそこに生きる人々をみな帝のものへと戻す王政復古の行いである。長らくの武士の支配に辟易していた公家たちは、これをこぞつて歓迎した。

しかし鎌倉殿の立志以来、武士たちには弓馬の道を修め、己の力で所領を守り続けてきた歴史がある。それはまさに一所懸命の努力。今更、帝のお言葉とは言え、権勢を笠に着た貴族た

ちの横暴に諾と従う謂れは無かった。

土着の武士が求めるのはなによりも実利。自身の支配する土地からの収入である。彼らが戦場で求める武勇も勲功も、全ては一門を守り抜くだけの実利を得る為のものなのだ。有名無実化した官位や名誉など、彼等にとつて十分な恩賞には程遠いものであった。

かくして、新政に集つた武士たちの足並みは乱れに乱れた。権勢に取り入つて甘い汁を吸おうとするもの、もはや着いてゆけぬと離脱するもの、なお愚直に帝への忠義を守ろうとするもの。政を司る者達はその様では、官吏がまともに働くはずもない。

混乱するみやこを治めるための責務は放棄され、苦しむ民草は見向きもされぬ。帝はこれを見て大層嘆かれた。なぜ自分達がかつての栄華を取り戻したのに、武士たちはそれに従わぬかと。

その間にも領地の補償を失つた武士の不満は募り、政所は慢性的な人員不足のため政道も立ち行かぬ。洛内でも強盗、殺人が横行し、それを止める者たちもおらぬ。治安は悪化の一途をたどり、怪しげな薬や疫病が広まり、辻を病死者が埋め尽くす。

人々は亡者のように生気を失つて辻を這い。餓えた者たちがその病の肉を食らつて死んでゆく。地獄絵図のごとき光景が毎日のように繰返された。

王法廢れ、仏法地に落ちたその様を、末世と呼んだものもいるやもしれぬ。

そんなある日。

にわかに天に黒雲湧き起り、宮中は内裏の紫宸殿の屋根上に一羽の怪鳥が姿を見せた。

その姿は、古今の記録にも見つけることのできぬ異様なものであったという。

羽先を延べた長さは一丈と六尺。身体は蛇で人は頭。うねる尾は家屋を一回りできるほどに長く、先の曲がつた嘴には鋸のような歯を生やし。両の脚には長い距^{けづめ}をもち、その先は劍のごとき鋭さを備えていた。

「——いつまで」

巨大な翼をはためかせ、怪鳥は荒廃するみやこを見降ろしてそう鳴いた。

憎悪か、悲哀か、あるいは嘆きか。曇天の下に響く甲高い鳴き声は絶えることなくみやこに届き、火花と稲光を伴って人々を震え上がらせた。雲間を裂く雷鳴は御簾を貫き、帝の元まで届いたという。

「いつまで、いつまで」

幾百年を過ぎてもお愚かさを改めることもなく、人と人とが争い憎み合う。死と穢れに満ちたみやこの空に怪鳥は鳴いた。

いつまで。
いつまで。

六枚つづりの楡の葉が、風に煽られ、土煙の中へと消えてゆく。
ぬえどりの、のどよぶように哭く叫び。

正体不明の怪鳥の嘆きは、いつまでもみやこの空に響き続けていた。

一 義朝坂東へ下る

——保延三年（一一三七年）、平安京。（たいらのみやこ）

桓武帝の即位より三百と六十年。それまで新たな帝の即位と共に遷都を繰り返していたこの国のみやこを、千年先まで続くようにと願いを込めて定められて以来。この地は「平安」の名と共に繁栄を続けてきた。

そのみやこ、左京は二条十五町、みやこの外縁部とされる京極大路の河原東に、近衛河原屋敷と呼ばれる館がある。

みやこに住む者達があえて、その繁栄を外れた郊外に居を構える理由は二通りある。貧しいか、それに相応しいだけの官位を持たぬかだ。しかしこの屋敷の主の名を聞けば、なぜこのような場所にと疑問を抱く者も少なくはないであろう。

成程、屋敷はさほど大きなものとは思えぬ。しかし厩に繋がれた馬はみな逞しくも毛並みも美しい坂東駒。屋根は総て瓦葺きで、庭は隅まで手入れがなされている。館の構えも華美にならず、確かな調度を整えられて、主の実直さと上品さをよく表していた。

法成寺の斜向かいに佇むこの屋敷の主こそ、摂津国渡辺党を率いる摂津源氏の棟梁、源頼政である。頼政は当年とつて三十一。この年蔵人に任官し、六月には従五位下に叙されたばかり。引退した父・仲政に変わって摂津源氏の一門を背負うこととなった矢先であつた。

「まったく、あの男にはほとほと愛想が尽き申した！」

そんな頼政に向かい、近衛河原屋敷の一室、客を迎える広間で怒りをあらわにするのは、まだ十五にも届かぬどうかの冠者（若者）である。

名を義朝。源義朝。後の世に頼朝、義経兄弟の父として知られることになる、この国を代表する武門、河内源氏の御曹司であつた。

激しい憤りと共に、義朝が口にするのは、彼の父——河内源氏の現棟梁である六条判官源為義の行いであつた。

「——あれは、惨めな男なのです」

まるで知らぬ相手を評するように、義朝は吐き捨てる。

「働きにて得た地位を、己の蛮行で水泡に帰す。それを顧みることもなく、同じことをもう三度も繰り返しております。繰り返される乱行に、もはや河内源氏の名は地に堕ちました。内裏の公卿たちは皆、棟梁の有様に呆れかえっております。源氏の長は、粗野で頑迷な愚か者であると。あの男は、そのたびに落ち込み、省みているような素振りを見せますが……であれば、

同じ過ちを繰り返すことなどあるものか！」

力に任せて床を叩く義朝。頼政には歳若い彼の苦悩が手に取るように分かった。頼政とて、元服してしばらくの頃は、摂津源氏を背負って立つにはあまりにも頼りなく、不甲斐ない父を疎ましく思つたものだ。

まして、実際に父の失態、欠点がこうもありありと目につくとなれば、その怒りはもつともと言えよう。

「まあ、為義殿はあれがご気性であるからなあ」

しかし、頼政の立場としては言葉を濁さざるを得ない。当の息子である義朝が目の前に居るのだ。たとえ彼が容認していたとはいえ、摂津源氏が河内源氏の嫡流の名誉を貶め、表立って非難する訳にはいかなのである。

勇猛さを示すことと、粗野であることは一見似通つていて、その実大きな隔たりがある。ことに、このみやこにおいてはそれを強く求められた。

恐らくは為義自身も、そのことを理解できていない訳ではない。

しかし元々酒癖が悪く身内に甘い為義は、これまでも幾度となく問題を起こしていた。ことに罪を犯し、乱行を働いた郎党を匿い、悪僧を庇い立てて反発を招いたことは枚挙に暇がない。頼られると否と言えぬ気性ゆえか、同族意識からか、実際に悪事をした者であつても突き

離すことができぬのである。

また為義自身も度々、他の武家と衝突を起こしていた。もはや彼の素行不良は誰も庇いだてできるものではなく、後ろ盾であった鳥羽院からは勘当され、同じ源氏の中からも孤立を深めていたのである。

荒くれどもに混じって戦に明け暮れ、馬を駆っては酒を喰らい、仏道も分からぬでは、貴族たちには扱いにくくて仕方のない事だろう。罪を犯そうとも郎党や友を守ろうとするのは、あの意味では得難い美德であろうが——それで寺社や貴族と争ってばかりでは、院の心証が良くなるはずもない。

「これが、河内源氏の長のなすことでしょうか。私には分かりません。それが源氏に必要であるのだというなら、そんなものは途絶えてしまえばいい。そう思いませぬか、頼政様！」

「うむ……」

いくら慎んでも改まることのない父の姿を見ながら、義朝は己に流れる河内源氏の血すら嫌悪しているようだった。

「このような有様では、源氏の再興など夢も夢。私はそれが悔しいのです！」

荒くれ者達の集団である郎党達を厳しく律し、訓練された軍勢力として鍛え上げる。それが義朝の理想であった。制御できぬ武力は、今の京にあって百害あって一利なしと、義朝はそう

考えているのだった。

その一環としてか、義朝は頼政を慕つて良くこの近衛河原を訪れていた。若くして歌の才能を評価され、また宮中の政務にも関わる頼政について、みやこ仕えのいろはを学んでいるのだ。ただの貴族の私兵としてではなく、朝廷に身を置くことを望み、政務にも積極的に関わろうとするのは、戦一辺倒で他の事に頓着の無い父や兄弟への反発もあるのだろうと、頼政は見てゐる。

情熱に燃える若者の、それゆえに危うき理想の前に、頼政は小さく吐息する。

「義朝殿。……己が清盛殿のように成れぬのが、不満か」

「それは……」

急にその名を出され、義朝はむつつりと押し黙つてしまう。はつきりと口に出さぬとは言え、義朝が彼を意識しているのは明白である。

頼政の摂津源氏と義朝の河内源氏、勢力基盤としては分かれているものの、両者の系譜は共に基経王を祖とおおぐ軍事貴族である。清和帝より降下し、「源」姓を賜った源基経より分かれ、河内に本拠を築き、頼信、頼義、義家の三代にわたって武名を顕した河内源氏に対し、かの酒吞童子退治の源頼光より、摂津渡辺港に居を置いてみやこの鎮護に当たった辟邪ヒキシヤの武の一門が、頼政の摂津源氏であつた。

それに対して、桓武帝より分かれたた高望王に始まる一門が平氏である。わけでも伊勢平氏の正統六波羅流を継ぐ忠盛・清盛親子は、今のみやこにおいて昇陽の勢いのただ中であつた。

先年、熊野本営を造営した功により忠盛は源頼光以来の内昇殿を赦されていた。また彼ら親子は西国に明るいことから瀬戸内の海賊討伐にも追補されていた。大陸との交易の要所である瀬戸内海を押さえることは、平家に莫大な利益をもたらしているのである。

そも、この海賊討伐も、もとは為義をその役目に充てることが予定されていたが、彼の素行不良を理由に貴族たちが次々と反対の声を上げ、忠盛父子に変更されたという経緯もあつた。

多くの勲功を上げる平氏が、武門の源氏にとって変わらうとしているいま、その次代の存在感に義朝にとって無視できぬものであらう。

「あやつも、つい五年も前までは伊勢の平太などと呼ばれ、瀬戸内の海で悪友どもと海賊ごっこをしていたものだが。……時間の流れとは早いものだ」

伊勢平氏嫡流、平清盛。

義朝の五歳上、さらには同じ嫡流同士とあつて、清盛は常に義朝と比較された。しかし鳥羽院の信頼を得、軍閥貴族として深くみやこに食い込んだ平氏一門と、度重なる内紛で凋落した源氏ではいまや家格に大きな隔たりがあつた。いまだ無官の義朝に対して、清盛はわずか十二歳で今の頼政と同じ従五位下を与えられ、左兵衛佐に叙任しているのだ。北面武士としては破

格の従四位下。父に変わって中務大輔、肥後守を兼任している清盛に、義朝は逆立ちしたところで太刀打ちできぬのは明らかであった。

だが、それを口にしたところでこの若者が憤りを収められるとは思えない。頼政は思案の後、重々しく口を開く。

「義朝殿。そなたが為義殿を心苦しく思う胸中は、わからぬではないが——もう少し、父君の事を慮ってやるわけにはいかぬか」

「頼政殿までそのような事を仰るのか！ あのような男を、理解せよと！ 酒に酔って女御に乱暴を働き、罪なき人々を犯し殺すような郎党に絆されて匿い、同朋だと言つてのけるような男を！」

吐き捨てるように言い、義朝は拳を床へと叩きつける。その目には若い情動の滾りが赤々と燃えている。己が、己こそが世の寵児たらんと理想に燃える心だ。

「頼政殿、われらは源氏なのです。ならず者の野盗、悪賊どもとは違う。その武勇をもって名を示し、このみやこを守ることが務めでしょう。その長が、あのような振る舞いなど、断じてあつてはならないのです！」

彼の激しい憤りは、自身が厭っている父譲りのものであろう。その憎しみの根は深いのだと頼政にも察することができた。恐らく義朝は、厭う父や兄弟達に囲まれ、そんな憤懣や鬱屈を

どこにも吐き出すことができず、深く胸にとどめて日々を送っているのだ。

少年の胸の内にのぞく深い蟠りに、頼政はたまらず首を振る。

「義朝どの」

「――失礼、取り乱しました」

彼もすぐに言葉が過ぎたことに気付いたようだった。まだ息も落ち着いてはいないが、義朝は無理矢理声を落ちつけようとする。彼は炎のような激情を内に秘めているが、同時にそれを制する事が大切だとも知っているのだ。根底にあるのは父への反発だが、それを悪罵や憤懣にせず、悪き手本として己を律する教譜としていた。

「今のみやこにあつて、我らが生きる術はひとつ。弓馬の道を修め、規律と礼節をもつて帝の御為に働く――それに尽きます。その為には我等とて、粗野なままではならぬのです。……走狗として使われ、殺し合いしか能のない、体の好い使い走りでは源氏に未来はない。武を修め、それを行使するために必要な心構えを持たねばならないと、そう思います」

「帝の御為、か」

頼政は思う。だが、そのような武力が必要とされるのはどんな時であるのかと。

やがては河内源氏を率いるであろうこの少年が歪まぬよう、やはり言っておかねばならぬ。

頼政は深い吐息と共に義朝へと向き直る。

「義朝どの。そなたの言葉を否定するわけではないが、果たしてそれはまことに、源氏の目指すべき道だろうか？ ……俺にはいささか、違って思える」

「……なんと、これは頼政殿のお言葉とは思えませぬ」

再び激昂をあらわにしかけた少年を制し、頼政は続ける。

「まあ聞け。知つての通り、摂津源氏は辟邪の武だ。帝やみやこを脅かす危難を排すためにある。しかし、俺は今まで一度も、暴れる鬼や、山を砕く大百足を射たことはない。頼光公や秀郷公のような活躍をしたこともない。……武士の役目がばけもの退治であるなど、本気で考える者など、どれほど居るのだろうか」

「当たり前です！ そんなのはただの御伽噺だ！ 頼政殿は私を童のように申されるのか！」

「そうだ。そなたの幼き弟たちとて、そのようなことは信じまい。では、我等源氏が帝の御為、その力をもって討ち滅ぼさねばならぬという夷敵は、いま一体どこにいる。人心を、国を脅かす邪悪なばけものなど、もうどこにも居らぬのだ」

義朝の曾祖父、八幡太郎源義家がその名を馳せた、奥州での前九年、後三年の役。幾度もの北征で蝦夷地が平定され、奥州はみやこに従った。大宰府の守りも健在である。源氏がその武をもって征伐すべき相手など、もはやこの日ノ本には残っていないのだ。そも、奥州平定すらも元をたどれば結局はかつての平氏・源氏一門の内乱である。

いかに統制され、制御されていようと。武力が必要とされる時は、その相手が同じく武力をもつ時以外にあり得ない。その敵がいなくなってしまうた今、帝の御為といいながら、源平の武者が争うのは身内の乱心、同士討ちの為だ。それはお互いに子を、親を、兄弟を殺し合うことで家を永らえるに他ならない。

（そのようなもの、一体我等のうちの誰が望んでいるというのだ）

人の情、愛憎は当然のものである。仲間の無念のため復讐を果たさんと願う心もまた、自然のものである。しかしそれらを殊更に波立て、要らぬ火種とする者たちがいる。頼政は一門を率いるようになってからことに強く、その存在を感じていた。

このみやこには、帝の御為にと働かんとする心すらも、自らの益の為に利用する者たちがいる。道長公の頃より衰えたなどと揶揄されるが、いまだ藤原摂関家の勢力は絶大であり、院とその愛妾たちの勢力は日々拡張を続けている。比叡山の大衆たちは仏法をもって政争に名乗りを上げ、いまやそこに平氏一門も加わりうとしていた。

それに目をつぶり、この複雑怪奇なみやこの今を蚊帳の外としていては、生き残ることはかなわない。頼政は日々その思いを強くしていたのだった。

「この国に、もはや我等の倒すべき敵はいない。聡明なそなただ。そんな今の世で我らが武を振るうということが、どんな結果をもたらすかは自ずと分かう。……簡単なことだ。争うの

は人同士、勝った方があれば負けた方がいる。敵を討ち果たし、己が勝利を掴もうと、その子や兄弟は苦汁を舐め、いつか屈辱を晴らそうとする。子が仇を討てば、そのまた子が同じことを繰り返す。そんなことは今も昔も、本邦も大陸でも変わらぬよ。今の世は、源平の争いとはまさにそれだ。子孫が絶えるまで永劫に相争う事で、互いを擦り減らし、一時の栄光を掴むだけの無益な争いなのだ」

「……………」

義朝は、唇を噛み、じつと頼政の言葉を聞いていた。分からぬはずがない。それだけ聡明な少年なのだ。

「帝の御為に尽くすことは俺達源氏の務めだ。それは今も昔も変わらぬだろう。……ただな、帝の御為にという言葉に疑うこともなく従うというだけではなく、己が闘うその相手を自ら見定め、決める。このみやこの在り方に踏み込むのなら、そなたはそれを心に留めおかねばならぬ。少なくとも、清盛どのはそれをしているのだ」

いっしか、義朝は真剣な顔で頼政の言葉に聞き入っていた。こうして端々に見える大器の片鱗を感じるたびに、頼政は彼が短慮に走ることなく、多くの者たちを受け入れる度量を持てるように育つことを願ってやまぬのである。

「俺はつまらん男だ。弓引きの他には歌くらいしか取り柄がない。が、幸いなことにそれを評

価してくれる方々がいる。だから俺はそれを、己の生き方とした。……俺のやりかたを、貴族に媚びた腑抜けと称する者がいるのは知っているさ。だがな、義朝どの。これまでの武士とは他のやり方を探らねば、我等はただ使い潰され、滅びていくだけなのだ。

俺たちは見つけねばならぬのかもしれない。貴族や院の威光に頼ることなく、自らの手で所領を護り生きてゆく、武家の国を。……分かるか？」

「……わからぬでは、ありませぬ」

「そうか。まあ、俺もこんな大それたことを一代で成し遂げられるとは思っていないさ。我々が考えるべきは源氏を継いでゆく子孫のことだろう。——そしてそれはな、義朝殿、そなたの父、為義殿も同じことだぞ」

「な……!? いま何と申された！ 頼政どのそこまで耄碌されたか！」
激昂し、立ち上がる義朝を制し、頼政は静かに首を振る。

「そう憤らずに聞け。義朝殿。そなたは為義殿が、何故あそこまで官位に固執されるか、考えてみた事はあるか？ 慣れぬ作法をたどたくし習い覚え、己の失態で官位を剥奪されても、再び勲功を立てそこに返り咲こうとしているのはなぜか。聡いそなたに分からぬはずがない」
言い含めるように頼政は語る。反発というのは、似ているから起こるものだ。血の繋がった親子同士で、それが分からぬはずがないのだ。

「……………」

「すべて、河内源氏の継嗣たるそなたに不自由させまいとの心からだ。やがては一門を率いるそなたに少しでも良い形で嫡流を譲り、より良い形で源氏を率いていけるようにと。……さすがに不器用ゆえにそれを自身で台無しにしているところまでは底いきれぬ。だが、そなたのように己の激情を制し、相手の心中を慮ることができるものだからこそ、いたずらに嫌うばかりではなく、それを解ろうと努めてやるべきだ。その上でそなたは、そなたのすべきことを成すのが良いと、俺は思う」

静かに語り終える頼政。俯き、じつと膝の上に小さな拳を握りしめて、義朝は無言であつた。

「すまぬな。少し、余計なことまで喋りすぎた」

あまりにも過度な想いをこの冠者の小さな肩に背負わせてしまったかもしれぬ——そう思い、頼政は自嘲する。

（愚かしい事だ。俺は、俺にも出来ぬ事を、この少年にさせようとしている）

もはや言うまい。努めて口調を明るくし、頼政は話題を変えることにした。

「……そう言えば、義朝殿。また弟が生まれるそうではないか」

「ああ。はい。まだ母の胎の中だというのに、大層暴れて眠る間もないと聞きます」

義朝には、義賢、義憲をはじめ多くの兄弟がいる。今度生まれる赤子は八番目の兄弟になる

そうだ。

「これは、まだ生まれぬうちからそれとは、なかなかの大物だな。そなたも兄として、さらに励まねばならぬな」

「はい」

「俺の息子も、最近随分と生意気盛りになりおつてな。一端の口をきいてばかりで、ずいぶんと手を焼かせる。そなたのを見習わせたものだ」

「仲綱殿は、頼政殿に似てお優しくあられますから」

「言いおるな」

顔を見合わせ、二人は笑う。少年の顔に浮かんでいた陰が薄れたことに、頼政はひとまず安堵した。

ややあつて、義朝は静かに居住まいを正し、静かに頭を下げた。

「頼政殿。……ありがとうございます」

「氣にするな。俺ができることと言えば、愚痴と説教くらいだからな」

「いえ。……これは、今日のうちは胸に秘めておこうと思つていたことなのですが――」

改めて向き直り、まっすぐこちらを見据える義朝の真摯な瞳に、頼政はつい、目の前に居るのがまだ十五に満たぬ少年である事を忘れそうになる。こうした瞬間、頼政はこの少年に時代

の河内源氏の棟梁の器を見るのである。

「近々、私には東国へ下るようにとの命がくだります。……恐らくは、頼政殿とは長いお別れとなりましょう」

「なんと、それはまことか?！」

突然のことに、頼政は動揺して腰を浮かせていた。あまりにも急な話であつた。いずれは嫡男を継ぐであろう息子を、まだ若いうちに単身地の果ての坂東へと向かわせるとは——あらためて、為義と義朝の間にある溝を実感し、頼政は唸るばかりだ。

頼政も幼い頃、下総守に任じられた父に連れられて坂東に下った経験がある。しかし通例ではそのような任官があつても、領地を与えられたものが自らその地に赴いて治世を行うことは一般的ではなかつた。特に畿内の軍事貴族においては顕著である。この時の頼政の下向も一時的なものであつたし、のちに伊豆や若狭を所領として与えられて以降も、頼政自身が長く京を離れたという記録はない。

「はい。父よりそれとなく聞かされていたことです。それまでにもう一度お会いできるかは分からぬゆえ、今日は無理を押して会いに参りました」

「……それは……事前に言ってくれば、もてなしもできたものを」

「いえ。良いのです。そうすれば頼政様は、別れを前にした慈悲で私の醜い言葉にも黙って領

き、憤懣を受け止めてくださったでしょう。私もまたその心地よさに、父の想いを諭されたお話に耳も貸さず、大事なことを学べぬままでしたでしょうから」

穏やかな表情で首を振る義朝。もはやその目に迷いはない。

坂東には千葉、上総、大庭、三浦、その他多くの有力豪族がひしめき合う割拠の地である。所領を巡る争いは絶えず、面子をぶつけ合つての小競り合ひは日常茶飯事、郎党を率いての合戦も珍しくないと聞く。

そこに旅立つとあつては決して命の保証が為されるものではなかった。仮に再会が叶うとしても五年、十年先となるのは間違いない。聡明であるとはいえまだ少年だ。不安に押し潰されそうになることもあるだろう。それを堪えて、義朝は頼政の話に耳を傾けていたのである。

頼政は、勝手にこの少年の器を測っていた事を恥じた。その資質も見誤り、源氏の末を見ての言葉も、まだ幼いゆえの肉親への反発、我儘であろうと決めつけていたのだ。

「……すまぬな。俺の迂闊さでそなたの誇りを損なってしまった。許されよ、義朝殿。この通りだ」

「そんな、頭を上げてください！ 頼政様！」

あるいは——為義はそんな地へと息子を送り込むほどに、彼を疎んじているのか。そんな事まで思い浮かぶ。

しかし、義朝の顔は晴れやかであつた。

「頼政様。本当にありがとうございます。くよくよと思い悩んでおりましたが、これで覚悟が決まりました。坂東は広い。かの地には弓馬を良くする者たちが多く、広大な草原を駆ける馬は逞しく鍛えられています。また、鹿島には武神の加護にて優れた武具を作る者達が住まうとも聞きます。彼等を新たな友とし、その信頼に足る男となれるよう、この義朝、今日のお話を糧に努めたいと思います」

「……そうか。強いな、そなたは。……仲綱にも見習わせたいものだ」
少年の顔にもはや迷いはない。頼政はただ静かに頷いた。

「なに、今生の別れというわけでもありませんまい。そのうち、息子でも連れてひよつこりと顔を出しましょう」

そう言つて笑う義朝に、頼政もまたしかと微笑み、精一杯のもてなしをして送り出したのであつた。

25 悲しきかなや身は籠鳥

二 藤原の娘

左京五条七町下ル。半分に欠けた月が顔を覗かせたみやこの通りを、甲冑の擦れる物々しい警備の音が響く。具足に太刀を帯び、松明を手にした郎党たちが統制の取れた動きで走り回っていた。それを馬上から指揮するのは弓を携えた武士の姿である。忙しく報告を繰り返しながら辻を巡り、通りを行く彼等の間には酷く張りつめた空気が漂っている。

「異常ないか」

「はい」

率いる配下——己の抱える郎党達からの報告を受ける頼政の姿は馬上にあった。跨る黒柔毛の馬は篝火の夜の中も怯える様子なく、具足姿の頼政に手綱を預けている。

近頃では、古くよりみやこの警備の任にあった検非違使に変わり、院や帝の私兵として組織された武士団が洛内の守りを固めることが常とされていた。頼政の率いる渡辺党は摂津国渡辺港に勢力基盤を持つ武力集団であり、白河院の時代に滝口武士として宮中の警護を任されて以来、その役目を務め、平安京の安寧を保つ一助となっていた。

頼政の摂津源氏は大江山の鬼を退治した源頼光以来の名門として、彼等を率いる立場にある。従五位下に叙せられたといえども源氏の武士。弓馬の道を志すのであるからには、具足を身に付け、郎党を率いて警護に当たるのは常であつた。

巡回を終え戻つて来た郎党達が、頼政の前に馬を進める。

「渡辺連源太、同じく与右馬允、戻りました」

「こちらにも異常ありません。数名、辻をうろつく怪しいものを捕えましたが流民の類でした」
「そうか。……引き続き警戒を続ける。気を抜かぬ様にな」

「はっ」

頼政の号令一過、戻つてきた郎党達が控え番と交代し、再び巡回に散つてゆく。

常の倍の人数を動員し、連夜の警備を続けているのには訳がある。

この一月ばかり、洛内では不審火が頻発していたのである。火の気のない場所に突如として炎が燃え上がり、警備の衛士たちが駆け付け付ける頃には跡形もなく消えているという、実に不可解なものだった。幸い、まだ市街への被害は起きていないが、その火のあやしきことに人々は恐れ、不安は高まる一方である。

しかもこの不審火が一度や二度で済まぬとなれば、不穏な空気はますます濃くなるばかり。いつ大火となつてみやこを焼き焦がすのではないかとの流言まで起こる始末だ。もはや衛士に

は手に負えぬと判断され、頼政ら北面の武士にも動員の命が下されたのである。

（此度の不審火、院のお耳にも届いていると聞く）

この時代、何よりも人々は火を恐れた。荒ぶる天候、降り注ぐ天災に、祈るほかは抗う術を持たなかった時代であるが、土地よりの収穫を無に帰す嵐、都市の基盤を叩き壊す地震、神意ともされた雷とも違つて、火災というものは唯一、人の手に寄つても起こすことのできる災害だからである。

雨の続かぬ季節、風の強い日を選び、あとはわずかな火種さえあれば、みやこを焼き滅ぼすことも不可能ではない。陰陽の叡智を結集して気脈霊脈の要所を整え、盤石の備えで築かれた平安京であつてもその例外ではない。たとえ千年の繁栄を約束されようと、人々が集まり、その住処が集まるみやこであるからこそ、燃え広がる炎はそれらを容易く飲み込み灰塵と帰す。ゆえにこそ、不審火騒ぎはひどくみやこの人々を悩ませていたのだった。

「厄介なものだ。これだけ多くの者を率いてなお、まるで足りぬか」

「このみやこは、実に広うございますからな」

頼政の隣で、精悍な顔つきの郎党が応える。渡辺授薩摩兵衛は、同省播磨次郎と共に渡辺党の主力であり、頼政とは幼い頃から共に育ち、誰よりも信頼する腹心であつた。

「授、どう見る」

「さて。……確かにみやこには良からぬ策を巡らせ、殺しても足らぬほどに憎む相手をお持ちの方は多くいらつしやいましょうが……果たして、このみやこを燃やし尽くしても構わぬと思われる方が、どれほどいるものやら」

授の言葉に頼政も頷く。不審火の火元には公家の邸宅も多く見られ、だからこそその目的は、事故を装った政敵の暗殺ではないかと言う説が主流であった。頼政にはそれを前提としたような命令が下り、必然的に警護は巡回よりも大内裏周辺の、貴族の邸宅を中心として動かねばならなくなっていた。

しかし、そのような策謀を巡らせる者が、ひとたび起れば止めることのできぬ火災を手段として用いるのは、どうにも短慮が過ぎるのではないかと思えてならない。本来ならばさらに巡回の範囲を広げて洛内全体を見回るべきなのだ——鳥羽院の私兵と言う滝口武士の性格上、それを逸脱することはできないのだ。

「賊を追うにも縄張り争い。ままならぬものですな、頼政様」

「……追うべき場所が分かっているだけ良しとするさ」

桓武帝の御世、朱雀大路を中心に、碁盤の目のように美しく築かれた平安京も、長き時を経て歪みを見せていた。東西の繁栄は大きく西に傾き、いまは左京（帝のおはす宮から見て、右左と区別する）がその中心である。反対の右京は寂れ、没落した貴族の屋敷が苔生し、管理を

離れた大路が区画ごと放棄され、草木の生え放題となつて、西南の桂川のあたりでは、本来みやこには作つてはならぬはずの畑地にされている区画もあるほどだ。

内裏にある貴き人々にとつてみれば、洛内といえど荒れ朽ちた右京などみやこの外の事であるかもしれぬ。だが、それははたして正しきことであらうか。

（考えても詮無きことか）

頼政は浮かび上がる疑念を苦い顔で飲み込み、額の皺を深くするばかりだ。生やしたばかりの髭を擦つて、己に活を入れ、氣を引き締め直す。

その隣で授も吐息していた。彼もまた、酒呑童子を討ち滅ぼした辟邪の部、摂津渡辺党の生え抜きである。今の日々には辟易しているのかもしれない。

「お主も不服か、授」

「……いえ、申し訳ありません。出過ぎたことを申しました。みやこを脅かす賊を捕えるのは、我等のお役目であると承知しております」

「言うな。こんな場で繕う必要もないだろう」

居るとも知れぬ賊を追いかけて回して地に塗れ、這い回することは、果たして武士の名誉と言えるのだろうか。頼政はその弓に並ぶもの無しと讃えられる業前を持っていたが、若くから一心不乱に弓馬の道に打ち込んだのは、盗賊や火付けを捕える為ではない。

朝廷に背く夷敵を討ち、世を乱すあやしきばけものに相對し、戦場にて己の武勇を高らかに名乗り上げて、正々堂々戦つて見事勝利をおさめる。そうしてこそまことの勲は打ち立てることができるのであるうし、それは今も変わらぬ武士の望みである。

しかし今はどうだ。こうして公家に院に後ろ盾を求め、その走狗とならねば戦支度にも事欠く始末。西も東も四道は制圧され、帝に逆らう夷敵などとうに討ち滅ばされてしまった。武士たちが戦い、勝ち抜き、その勇名を打ち立てる相手など、どこにいるのと言うのだろうか。

頼政らの摂津源氏とても、ただ諾々とみやこの治安維持を全うするだけでは郎党達を養う事はできず、ゆえに貴族としての出世を考えねばならぬ。こと、みやこに置いて官位というものはあればあるだけ事欠かない。何をするにもこれがなくては始まらぬと言う有様で、宮中の有象無象は、身に付けた服と官位を持つて相手を断じるものだ。

そんな彼等の言いなりとなり、走狗のごとく、卑俗な盗賊を追い回す日々。これが武士の在り方なのか。

(いや、よそう)

それ以上を考えることは不遜だと、頼政は首を振る。

(……過ぎた考えだ。俺達の望みは、盤石なるみやこの安寧なのだ。違うか) その事に不満は無い。

無い、はずだ。

澁む思考を振り払おうと、頼政はもう一度首を振った。

「しかし、仲綱にも困ったものだな」

夕刻、具足に身を包んで出仕しようとする頼政に、自分も連れて行ってくれと押しかけた息子のことだ。仲綱は一人前に新品の具足を着込み、頼政らに付いてみやこの警備に当たろうとしたのだった。

「意欲があるのはいいが、危なっかしくて仕方がない。……男子というものは皆あんなものか？」

「お尋ねにならずともお分かりでしょう。私に答えさせるのは少々、卑怯ではありませんかな」

授に視線で問い返され、頼政は決まり悪く咳払いをした。それを見、授は目を糸のようにして微笑む。

「……少しでも、殿のお力になりたいとお考えゆえの勇み足ですよ」

「俺は、子供たちにあまりこのような働きをさせたいとは思わぬのだがな。矛盾していると分かっているが」

元服を迎えたばかりだというのに、仲綱はいつも頼政にできることはないかと訴えてくる。

あの年頃の子どもは、少しでも早く一人前になりたいと背伸びをするものだが——やはり仲綱もまた、武名を求める源氏の血筋なのであろう。

そうして頼政の脳裏をよぎるのは、坂東へ下った義朝のことだ。みやこに留まっている頼政にも、あの若武者の坂東での活躍は漏れ聞こえてきた。

かつての縁に寄って千葉氏の庇護を得た義朝は、いまや上総御曹司の名でその名を知られる坂東屈指の実力者へと成長していた。窮屈な畿内を飛び出してわずか数年、大庭、三浦、下総などの大豪族とも親交を結び、広大な坂東を駆け廻り、勢力争いや土地を巡っての紛争に首を突っ込んで存分に若い情熱を振るっている。

彼が言葉通り、己の居場所を見出したことは、素直に嬉しく思うし、また羨ましい。

そうして生きることは、きっと自分には出来ぬと分かっているからこそ。頼政はそう思うのを止められなかった。



十一月にしては生温い風の中に思いを悩ませていたからか。いつしか刻限は夜更けとなり、欠けた月が天頂へと辿り着いていた。

息急き切って駆け付けた郎党の連が、頼政のもとに左京三条七町、西洞院にて火の手ありの報せをもたらしたのはその時である。

頼政はただちに授以下の郎党を率い、号令一過馬を北へと走らせた。馬の蹄が群れをなしてみやこの大路を北上する中、あたりにはきな臭い匂いが立ち込めはじめた。

「頼政様！ あれを！」

先行していた郎党の一体が指し示した先に異常を認め、頼政は目を見開いた。先刻まで火の気すら感じなかった三条の辻に、煌々と燃え上がる火柱が立ち上っていたのだ。半月の空に登る煙は火花と、紅い火の粉を伴い、ごうごうとみやこの辻を照らし出していた。

一目で尋常な炎ではない事が見て取れた。赫々と燃え盛る炎は、まるで生きているかのように身をくねらせ、灼熱の輝きをもって天を焦がす。夜を照らす炎はまるで、天高く聳える山が火を噴くかのごとき業火である。

「ごう、と一際大きく炎が輝いた。思わず閉じた瞼の隙間から炎の輝きが入り込む。その凄まじきこと、これほど離れていても目の奥がじんと痛むほどだ。先を走っていた郎党達がたまらず手綱を絞り、急停止をさせられた馬のいななきが夜に響く。

「こ、これは」

「面妖な……」

豪の者で知られる渡辺党の武士たちですら、思わず足を止め、息を呑むほどの異様であつた。まだ火柱の根元の辻まで距離もあるというのに、彼らは一様に立ち昇る炎の姿に氣押され、遠

巻きに見守っている。

「狼狽^{うろた}えるな！」

躊躇する郎党達の元に駆け寄り、頼政は鋭く声をあげて檄を飛ばす。

「我等の務めを忘れたか！——行くぞ！」

威圧されていた郎党達は、主の叱咤ですぐに冷静さを取り戻した。滝口武士の役割とは、まさに異変の場と主犯を押さえることである。火柱と共に嘖き上がる黒煙をものともせず、馬の脚を早めてまっすぐに火柱の元へと向かう頼政に、授、省が続いた。

すぐに他の者たちも後を追う。

しかし、奇妙なことはさらに続いた。天を焦がさんばかりに猛っていた火柱は、頼政達が辻を曲がる寸前で中程から弾けるようにその形を崩し、ぱたりと消えうせたのである。

頼政達が西洞院に辿り着いた時、すでにその場には燃える炎の輝きはなく、薄暗く焦げた炭がわずかな煙を上げるのみ。

初めから、火の気などなかったかのように辺りは静まり返っていた。

「こゝ、これは……一体……」

駆け付けてきた郎党達は呆然とその場に立ち尽くす。授の発したつぶやきが、皆の心を代弁していた。

あれだけの炎だ、なにも燃えるものがなく火が尽きるとは思えない。わずかでも風があれば、大火となつてみやこの半分を焼き焦がしてもおかしくないほどの火勢であつた。脛の裏に焼き付いた炎の輝きを確かめるように数度瞬きをして、頼政は注意深く周囲を窺う。

「ここは……三条中納言殿の屋敷、か？」

辺りはおおよそ寂れ、酷く荒れ果てた一帯だつた。かつて村上帝の御世に一条摂政と覇を競つた三条中納言、藤原朝成の住まいとして知られる三条西洞院は、いまや打ち捨てられて荒れるばかりとなっている。政争に敗れた彼がみやこを追放され、百年以上の時が過ぎてなお、怨敵を呪う朝成の悪霊が出るなどと噂され、流民の類も近付かない場所であつた。

荒れ果てた壁や伸び放題の雑草。頼政は朽ちた屋敷の残骸を窺うが、そこには炎どころか、燦る煙も、わずかな火の気すらも見えぬ。ただ、崩れた土壁と荒れた地面が拡がるのみだ。先刻の火柱の名残などどこにも見当たらない。

「頼政様、……これは、如何なることでしょうか？ あれは、幻だつたのでしょうか」

「授、省、お前達も見たのだろう？」

「己の目を疑う訳ではありませんが、しかし……」

二人はいまだ信じられぬとばかりに首を捻る。頼政も同じ思いであつた。

いかなる奇妙か。頼政の供をしていた者達を含め、巡回していた多くの郎党達は先程の猛る

火柱を目にしている。これが一人二人ならば気の迷いと片付けることもできようが、皆が同じ幻を見るなど有り得るのだろうか？

「……念のためだ、あたりを探れ」

洛内に明らかな異常を認め、このまま何もせぬでいる訳にもいかない。困惑しながらも頼政の下した指示に従い、集まっていた郎党達が走り出す。

とは言え、手勢を率いた騎馬の一団が押し寄せたのだ。余程の馬鹿でなければ早々にここから立ち去っていることだろう。犯人を見つけることは困難だろうと、頼政は考えていた。

そばに残した授に言いつけ、頼政はその場で馬を降りる。

「俺も様子を見てこよう。授、お前はここらを見張っている」

「頼政様、お待ちください！」

案じる声を背中に聞きながら、頼政は崩れた土壁の隙間を覗き込んだ。瞬きを繰り返して夜目を効かせ、月明かりの中で慎重に地面を検める。

「……これは」

辻の端に小さな紙片が落ちていた。ちょうど何かのまじないのように、人型に切り抜かれた紙が、半ばほどで焦げ、破られたように風に揺れている。

思わず伸ばした指の先で、紙片は突如小さな炎をあげてぼうと燃え尽きる。白い灰になつて

崩れて消える紙片を見て、頼政はごくりと息を呑んだ。

間違いない。ここで先程まで、燃えていた炎は現実のものだ。

あのわずかな間で、天を衝くまでに高く燃え盛り、一瞬で消えうせる——。一体、いかなる炎であればあのような振る舞いを可能とするのか。地獄にて亡者を焼くという黄泉の炎か、はたまた、富士の山を焦がすという火口の焰か。

その時だ。頼政は咄嗟に身を翻し、腰に挟んだ短刀を引き抜いて背後へ向かつて鋭く投じた。

「——誰だ！」

誰何の声と同時に、授も事態を察し、頼政の脇に素早く駆け寄る。郎党から弓を受け取って、頼政はじつと暗闇に目を凝らした。

すると、驚くべきことが起きた。地に突き立った短刀の柄が突如として炎を上げて燃えだしたのである。脂を含む杉の枝が燃えるように、燃え上がる炎の中から、ゆらりと人影が姿を現した。

燃える炎に揺らめく影は、壺装束に市女傘。旅姿の女性のものである。いくらか日に褪せ、汚れてはいるが、美しい仕立てから高貴な姫君の纏うものと見えた。

背は小さく、まだほんの童女と言つて良い年頃だろう。とは言え、いかな姿をしていようと、もこのような場所にいる事自体が怪しげなのは間違いない。

「誰ぞ、止まれ！」

短刀を構えた授が再度の警告を飛ばす。頼政は簞より鎬矢（鏃先が尖っていない、打突用の矢）を引き抜き、いつでも射れるように弓を握った。

「……ふん。篁め、自慢の人払いの符だなんていいやがって、書き損じが混ざってたじゃないか。お陰で余計な面倒まで拾いこむ羽目になった」

しかし、市女傘は躊躇う様子もなく近づいてくる。ぼそぼそと訳の分らぬことを呟く娘の様子に、頼政は困惑を隠せない。

（先程の炎、こやつか？）

白拍子かなにかだろうか——そんな思いが頼政の頭をかすめるが、それにしても雰囲気がかしい。とはいえ、まだ童とっていい娘にいきなり弓を向けるのも躊躇われ、頼政は警戒を解かぬままじつと娘に狙いを定める。

「娘、動くな！」

だん、と飛び出したのは授である。頼政の意図を素早く汲み取って、短刀は腰に戻して素手で娘に掴みかかる。

しかし、娘を捕えて地面に組み伏せんとした授の身体は、そのまま宙を待っていた。如何なる技か、娘の細腕は倍ほど大きな授の体軀を捕え、地面へと叩きつけたのだ。

がくんと白眼を剥く授を見て、頼政はその身を案じるよりも早く、鋭く弓を引き絞り、立て続けに矢を放っていた。

恐るべき速さで、三条の矢が射られる。いずれも鎬矢ではあるが、三人張りの弓で射られれば骨も腱も碎かれるに十分な威力をもつ。その狙いは娘の左右の足と手。

夜闇の中、灯りと言えば僅かな松明と月灯りだけという状況で、頼政の矢は狙い過たず十間先の娘の手足を確実に射抜き、小さな身体を大きく弾き飛ばした。

「授！」

さらに矢を番え、娘から視線を離さぬままに郎党の名を呼ぶ。返事は無い。どうやら意識を失っているだけらしいと理解し、頼政はじりじりと娘の方へ距離を詰めてゆく。

だがその時だ。倒れていた娘の市女傘がぴくりと動いた。そのまま、何事もなかったかのようになり立ち上がるではないか。

「……ひどい事をするな。私じやなきや死んでいたぞ、いまの。そっちから突つかかってきたんだらうに、一方的に撃ちやがって」

信じられぬ思いで頼政は眼を瞬かせた。間違いなく手足を撃ち抜いたはずだ。関節を砕いたか、少なくとも、痛みでまともに起き上がる事などできないはずなのに。娘はすんすんと鼻を動かして、小さく舌打ちをする。

「……？ 様子がおかしいな。それにこの匂い。……ひよつとしてお前ら、あいつらの仲間ってことじゃないのか」

幼い、澄んだ声だった。だがその声音、どこか年相応な童らしさを感じさせぬ。年経たように振舞っているとも思えない、妙な落ち着きがあった。

「何の事だ」

「わからないなら分からないでいいさ。こつちの話だから。……それより今の弓。ひよつとしてあんたが摂津源氏の頼政か？」

急に名を呼ばれ、頼政はわずかに返答を躊躇った。しかし、今は少しでも時を稼ぐべきであった。散っている郎党達がそのうち戻ってくる。そうなればこの娘を捕えることができるだろう。そう判断し、頼政は静かに首肯する。

「……いかにも、俺が頼政だ」

市女笠の下、娘の口元がふと緩んだ。探し人を訪ね当てたことへの安堵ではない。諦めを感じさせるような、意地の悪い笑みだ。娘の浮かべた表情が気に入らず、頼政はわずかに苛立つ。

「お主はこの娘か。見たところ、いずこかの家のものと思うが、かような夜更けに出歩くとは」

夜のみやこならずとも、公家の娘が一人で外を出歩くなど考えられぬ。しかし、目の前の娘

の所作は庶民のものとは思えぬほど、美しく洗練されていた。そして今の身のこなし、およそまともな出自とは思えない。

恐らくはあまり表沙汰に出来ぬ理由で、人気のない郊外に匿われている、いずこかの愛妾であらうか。そう頼政が考えを巡らせていたあたりで、ふいに娘がくすくすと笑い声を漏らした。

「名前……そうだな、そう言えば、久しくそんなもの、聞かれていなかったな」

可笑しくてたまらないというように、袖で口元を覆い、背中を丸めながら。娘は静かに名乗る。

「藤原紅子。藤原朝臣紅子ふじわらのあそんこれこのいらつめ娘」

「な……」

古風な名乗りであつた。頼政が故事に通じていなければ、意味が分からぬまま聞き逃していたかもしれない。みやこにあつて古くより権勢を誇り、絶大なる影響力をもつ摂関家の名である。

とてもこのような場を歩きまわる娘に相応しいとは思えなかった。

「……藤原朝臣の姫と申されるか。そのようなお方が供もつけず、夜更けに一人このような場所を歩かれるとは信じられませぬが」

流民の分際で藤原一門を騙るなど、不遜を通り越して無謀である。とはいえ藤原の姓は無視するにはあまりにも大きな存在である。風体に反してまともな受け答えの出来ることから、こ

の娘はそれなりに確りとした出自のものであるとも思われ、一矢で射殺すことは躊躇われた。慎重に狙いを絞りながら、頼政は再度問う。

「そうだな、信じぬのも道理かもしれない」

少女は喉の奥で笑うようにして、するりと市女笠を取った。長い髪がばさりと揺れ、雲間から落ちた月明かりが娘の顔を照らす。

「——なんと……」

頼政は今度こそ、声を失っていた。笠の下から現れたのは、足元に届かんばかりに垂れ下がる長く美しい髪。しかもその色は、降り積む新雪のごとき真白である。

白子は頼政も見た事はあるが、母の胎の中に色を置き忘れた彼等は一様に枯れ木の様な身体をし、弱々しくも、一人で陽の下も歩けぬほどに病がちなものばかりである。かように美しい娘に生まれるなど、聞いたこともない。

それに見たところ、娘の手足は宮中に囲われ歌を読む日々を送るほどに艶めかしくはなく、たおやかな強さを感じさせた。野山を歩き、武も嗜んで鍛えこまれている様子も見える。

「信じるか、信じないかはお前に任せるよ」

紅子娘という名乗り同様の、紅い瞳が頼政を見る。まだ幼子であるはずの彼女の視線は藤原の姓に相応しい威厳と圧迫感を備え、まるで射留めたように頼政の動きを封じてしまう。

頬を流れ落ちる冷汗を感じながら、頼政は上顎にへばりついた舌を無理矢理に引き剥がした。「……では、あなたのお言葉が真実であるとして、あなた様はどなたの御子でありましょうか。左府頼長様か、それとも関白忠通様か」

藤の姓の圧倒的な存在感を前に、自然と、頼政の態度も改まったものとなっていた。それがおかしいのか、娘はくくくと笑い声を漏らす。

「……ああ、おかしいっただけだな。あんなな小僧どもが私の親か。でも、そうだな。仕方ない事か。あの夜の望月を見上げたのも、数えてみれば随分と昔だ。お前には分からないか。教えてやるよ。我が父は車持皇子——藤原不比等だ。聞いたことくらいあるだろう」

頼政は耳を疑った。

聞いたことがあるも何も、かの人物は、今より五百年も昔に生きた藤原家の祖ではないか。（やはりこの娘、気が触れているのか）

あるいは、藤原の一派に連なるといふのは間違いではないのかもしれないが、おそらく父と呼ぶ相手を誰かと混同しているに違いない。

だが、先程の炎と無関係でないとするなら、他にも誰か潜んでおるのかもしれない。そうでなくとも、あの焰について何かを知っているかもしれない。まともな受け答えも出来ぬ様子だが、それでも不審な姿を見せるようなら容赦なく射殺さねばならぬと心に決める。

「その、貴きおかたの姫君が、如何なる理由にてここに居られるのです。まさか、時を超えてきたとは申しますまい」

「時を？ ははは、もつと悪い手段さ。もつと単純で、もつと醜悪だよ。

私はね、死なない。……死ねないんだ」

そう、戯言のように口にして。自嘲のように口元を歪め、娘は天に浮かぶ月を振り仰いだ。半分欠けた月に目を細め、ぎりど唇を噛み締める。

「お前も知っておくといい。己の家を憂うのであれば、藤原の家に関わるのはやめておくべきだ。あれは皇の大樹に絡み付く藤の蔓。己一人では立てぬ脆弱ないきものだ。蜜に魅かれた者達を残らず絡め取り、食らい尽くす。命が惜しくば近寄らぬようにするといい」

「これは、……車持皇子のお子の言葉とは思えませんな」

「身内だからこそ。互いの尾を蛇のように食い合う奴らのあさましい姿を飽きるくらい見続けた。お前たち源氏も元をたどれば皇の系譜、藤に囚われ朽ちてゆくのを見るのは忍びない。お前自身はそれを覚悟の上かもしれないけれど、あたらしい者達までそれに巻き込まぬように。忠告だよ」

義朝の事を言っているのだと、頼政には分かった。

一介の、気狂いの少女が知れるような情報ではなかった。やはりこの娘、ただものではない。

頼政は改めて弓弦を引き絞り、娘に鋭く問いかける。

「お主は何者だ、なぜそのようなことを——」

「知れたこと。見てきたからさ。この五百と余年、ずっとこのみやこをね」

それを待たず頼政は矢を射ていた。今度は鎗矢ではなく鋭い尖矢である。腿を射抜かれ、娘の身体が吹き飛ぶ。

が、またも彼女は意に介さず、その場にむくりと起き上がった。

「うち、あんまり酷いことするなよ。いくら治るからって好き放題しやがって。間違えた分くらいは大目に見てやってんだぞ」

「……く……」

「ついだからお前にも忠告してやる。お前が慕うあの女は、藤原の家よりもおぞましきげものだぞ。早晚、お前を切り捨てる。腸を食い破られる前に、早々と手を切るといい」

「なんだと……？」

「惚けても無駄だ。お前の飼い主のことだよ、頼政。あいつは狐だ」

「狐……？」

その言葉には、心当たりがある。

いまのみやこは複雑怪奇な勢力が相争う陰謀と策謀のるつぼである。帝や摂関家すらその地

位を危うくされ、確かなものなどない。だからこそ、力無き者達は庇護者を求め、卓越した政治手腕をもつ勢力の傘下に加わることを強いられた。多くの武士たちが貴族や帝、摂関家に近づく中——頼政は後鳥羽上皇の寵愛深き愛姫、藤原得子を後ろ盾としていたのである。天皇の寵愛を受ける姫は、その子、女房らを中心として強い権力をもつ。彼女はまた、藤原摂関家中御門流の鳥羽院の寵臣、藤原家成の従兄妹でもある。摂津源氏がその勢力の寄る辺とするのに十分であり、摂関家とは独立した勢力として距離を置くに都合が良かったのである。この藤原の娘がそれを言っているのは明白であった。しかし、狐とはいったいどのような意味か——困惑を深める頼政が、それを問いたただそうとした刹那。

「——頼政様！ どちらに居られますか！」

辻から彼を呼ぶ郎党達の声が上がる。連、与達があたりをひと巡りして戻って来たのだらう。「そろそろ頃合いか。……せいぜい、食い殺されないように気をつけるんだな」

「待——」

たとと地面を蹴って、大きく後ろに飛び退る娘。飛び出しかけた頼政の前で娘の身体が闇の奥に消えてゆく。

そして同時に、ぼうと炎が弾けた。

突如、篝火の如く宙空に炎が現れたのである。燃え盛った篝火が、みるみる膨らみ、こころこ

うと天に向かつて伸び始める。燃えるものなどないと言うのに、盛る炎はいかな大火よりもなお熱く、灼熱に輝いて、頼政と、駆け付けてきた郎党達の目を焼いた。

まるで日輪——否、地より噴き上がる富士の炎。なお煙を吐き続ける、永劫の山の火焰。藤原紅子を名乗る娘の身体を中心に、闇が駆逐されていった。

いかなる奇跡か、魔なる技か。娘の身体を藁のように焦がすはずの炎は、しかし娘の身体を取り巻き、大きく姿を変える。それはまるで、鳳凰がその翼を広げるかのよう——

(灰か)

唐突に頼政は思い至る。あの娘の髪は、白でも銀でもない。あまりの業火に焼きつくされ、わずかに残った灰なのだ。絶えぬ炎に身を纏う、富士の娘。それが彼女なのだ。

炎は見る間に火柱となり、高くみやこの空を焦がした。

こうと一際大きく炎が弾け、盛る炎に炙られた頼政が思わず熱波から顔を庇うようにした刹那。現れた時と同じ唐突さで火柱は消失し、娘の姿もまたどこへともなく消えていた。

臉を通して焦がしていた輝きは失せ、かわりに、ぞつとするほどの暗闇があたりを押し包んだ。我に返った郎党達が頼政の元に走り寄ってくる。

「頼政様、ご無事ですか！」

「……ああ、大丈夫だ。怪我はない。あそこで授が目を回している。誰か、手当を頼む」

言い残して、頼政は娘の居た場所へと近付いた。まだ熱気が残る辺りには、白くなって燃え尽きた木があった。管理を離れたこの屋敷のものだったであろうか。手を伸ばせば、頼政の手が触れたか触れぬかのところで、木はざらりと灰となって崩れ落ちた。

いかなる凄まじき火力があれば、生木がこのように燃え尽きるのだろうか。

郎党達は慌て、娘を追おうとしていたが、もはやその姿を辺りに見つけることはできなかつた。尋常の手段では追えぬ方法で、どこかへと去ったのだろう。頼政はそう確信する。

まだ瞼の裏に焰の輝きが焼き付いているようで、駆け寄って来た者の顔すら判然としない。闇に慣れていた目は、娘の起こした炎の明るさによって失われ、辻の薄暗がりはずかかな月明かりでは見通せぬのだ。

（いや、これがいまの平安京の闇なのか）

あるいは――それまで頼政自身が知らず身を浸していた、みやこの暗闇の深さを、今の娘の炎が思い出させてしまったのかもしれない。

炎が落ち着いた時にはもはや、娘の姿はなく――ちりちりと焦げる灰が、天の月を目指すように夜闇の中へと消えてゆくのみであった。

三 紫宸殿の怪異

時は下つて、仁平三年（一一五三年）。

頼政は先の二月で五十歳となり、美福門院への昇殿を許されていた。

表立った派手な勲功はないものの、その忠実な働きぶりと歌壇での活躍をもつて鳥羽院の信頼を勝ち得たのである。

天皇、上皇の寵愛を受ける姫のうち、院号を与えられたものを女院と呼び、彼女たちの権力は上皇と同等のものとされた。上皇に倣つて院庁を置き、別当・判官代・主典代その他諸司を任じ、殿上を定め、蔵人を補すのである。

美福門院とはすなわち頼政が後ろ盾とした鳥羽院の寵姫・藤原得子へ宣下された院号である。近衛帝の母として皇太后位にあり、村上源氏、中御門流の公卿に派閥を形成する美福門院はいまや鳥羽院政における最大の实力者と言つて過言ではない。その元にあつて頼政の地位は、摂津源氏を率いるに確かなものとなつたのである。

しかし、頼政の気は晴れない。

美福門院昇殿と共に、これまで踏み入ることの許されなかった宮中の深くまで出入りをするようになった頼政は、門院殿のそこかしこから、じつと窺うような視線を感じ続けていた。

（門院殿ともなれば、人の出入りも多かろう。まして新顔の俺が注視されるのは仕方のないことのはずだ）

そう考え、努めて気にせぬようにしてきた頼政だが、時を経ても頼政を窺うような視線はなぐならない。それらが門院に媚びる者たちや、反対に彼女を邪魔に思う公卿たちの注視であると気付くのに、そう時間はかからなかった。

昇殿ののち、頼政の滝口武士としての宮中警護の役目はさらに重要性を増したが、それと比例するように頼政の名は広く知られ、宮中の政争に組み入れられることとなったのである。

そして同時に、頼政は美福門院の良からぬ噂を聞くようになった。いわく、鳥羽院を誑かす毒婦。いわく、国を傾ける悪女。

——美福門院こそが、人心を惑わす女狐であると。

彼女がそう評されるだけの理由は、確かにある。たとえば、鳥羽院には元々正妃の待賢門院藤原璋子が居たが、彼女は美福門院を呪詛したとの嫌疑にて出家に追い込まれている。これは確かな証の無い風説の類であったのだが、美福門院はこれを最大限利用して政敵たる待賢門院を宮中より追放したのだ。

他にも縁戚関係の公卿を集めて政治派閥を形成し、養子とした娘を入内させ藤原摂関家の政争に關与するなど、美福門院にはその策謀を窺わせる事例には枚挙にいとまがない。女だてらに國の政を左右する様は、なるほどそのような悪評を呼ぶにふさわしいものであった。

（俺を拾ってくださった方だ。疑うようなことはできぬ。——だが）

あの女は狐だ。

食い殺されぬように、精々氣をつけろ。

藤原紅子の言葉は、年を増すごとに頼政の心に深く食い込んでいた。

まこと、宮中とは魔窟である。陰謀渦巻く宮中の混沌たるや、頼政の想像を絶してなお深く、暗い。ひとつの判断の過ちが一門全てを滅ぼしかねぬ重責は、慎重な頼政をしてなお神経を削るものであったのだ。

あの娘との出会いが摂津源氏と美福門院との結びつきを断たんとしたいずこかの勢力の画策であるか、或いはただの氣の触れた娘の出まかせであつたのか。今となつては定かではない。あれから頼政は何度となく紅子の行方を探させたが、その足跡は遙としてつかめず、ついにその真意を確かめることはできぬままだった。

「嫌な空だな」

今宵も宮中は暗い。頼政はうんざりとして空を振り仰いだ。帝のお住まいである清涼殿の屋根を覆うかのように分厚い黒雲が渦巻き、空には星ひとつ見ることができなかった。妙な肌寒さを伴って西寄りの風が吹く。みやこを覆う黒雲は、ここ十日ほどまるで晴れる様子を見せぬ。

澱む空は、まるで今のみやこの混乱を象徴しているかのようだ。故に、そのような噂が流れ始めたのも必然であつたかもしれない。

「——のう、聞いたかの、あの話」

「なんと、そちも聞いたのか」

「そう、それよ。あのばけものの噂じゃ」

「は、は、は。なにを馬鹿な。大方どこぞの臆病ものが風の音でも聞き間違えたのだろ」

「いな、これを聞いたというのはかの中御門の某という御方」

「帝も御気分がすぐれぬという。これはますます真実やもしれぬぞ」

その出所も知れぬ、怪しげな噂であつた。

夜な夜な、宮中を脅かす不気味な鳴き声があるというのだ。ひゅおうひゅおうと、嘆き悲しむ悲哀の叫びのとき声が、渦巻く黒雲と共にいずこかより現れ、みやこの夜空を不気味に鳴くという。その鳴き声の恐ろしきことには、勇猛で鳴らした北面の武士たちですら次々に倒れ

るほどであり、ついには帝までご気分を害することになった——というものだった。

こうして晴れぬ重苦しい空も、この怪しき鳴き声の主、得体の知れぬばけものが呼び起こした瘴氣と黒雲に覆われているためであるのだという。

まったく馬鹿げた話であつた。しかし世に満ちた不穩の種を感じ取ったからだろうか、この鳴き声を聞いたという者は宮中、市井を問わずに後を絶たなかった。いつしか御殿の屋根に止まる、怪物の姿を見たという噂まで流れ始める始末である。

これを真に受けた公卿も少なからずいたらしい。形なきものを恐れるなど頼政にしてみれば呆れた話であるのだが、常日頃、憎き政敵を呪詛し合うような間柄とあつては、この恐るべきばけものはより身近に感じられたのかもしれない。

頼政をはじめ、宮中を守る武士達には、警備を厳しくせよと通達が繰り返された。

しかし姿形すら定かではないばけものを寄せ付けるなという命令こそ無茶な要請である。できることと言えば見張りの人員を増やし、警備の間隔を強める程度だった。それで網にかかるのは、不穩な世の乱れを格好の機会とばかりに盗みを働くこそ泥やら、鬱屈した気晴らしに無軌道に暴れる若者、あるいは喰いつめてみやこに流れ着く流浪の民ばかり。

肝心かなめのばけものの姿は、捕えるどころかなおも茫洋として、黒雲の中に隠れたままであつた。

頼政達の奔走は噂を消すには至らず、迷信深い公卿たちはますます恐れを深くしていった。いったい武士どもは何をしているか——そう、口がさない貴族たちは殿上から夜な昼なと陰口を叩く。それは滝口武士として宮中の警護を預かる摂津源氏、頼政への避難としても向けられていた。

「まったく……役に……」

「……門院も……なぜ……のような」

今日もまた、すれ違い様に無遠慮に頼政の顔を覗きこみ、ひそひそと囁き交わす貴族たちが足早に通り過ぎてゆく。

「口を開けばばけものの話。皆、我等の働きが足りぬと言わんばかりです。……まったく忌々しい」

頼政の隣でうんざりと吐息するのは頼政の息子、仲綱である。今年で二十七、ついこの間まで腕白に父を困らせていた少年は、いまや立派な摂津源氏の嫡流であった。仲綱は頼政に従って早くからみやこに馴染み、父に倣い歌にも励んでいた。いまは摂津源氏の次代を率いる武士として衛府の守護の役目にある。

「仲綱」

「は……失礼しました」

頼政は静かに咳払いをし、息子をたしなめる。この場にあつては、貴族たちの叱責に言い返すのは得策ではない。

事実として、怪しき鳴き声の主を突きとめることは叶わず、頼政達はみやこの空を脅かす脅威を排除できてはいないのだ。その一点をもつて武士たちを役立たずと評することは、彼ら貴族の立場からすれば当然の態度であるのだろう。聡明とはいえまだ若い仲綱には、親子揃つて能無しと囁かれることは我慢のならぬことであつたらうか。

「仲綱。お前の気持ちも分かんではないが、堪えろ。ここはそういう場所だ」

「……はい」

ぜんたい、この平安京にあつて、武士たちの最大の悩みは、貴族たちの戦への無理解であつた。弓馬の扱い、陣の組み方、行軍のすべ、兵站の保ち方。それらの総合である兵法とは高度な知識に基づく専門技能である。この時代の兵法はほぼ、大陸の貴重な兵書を研究・解析することを得られるものであり、それを可能にしているのは頼政ら、限られた一部の武士たちだけだつた。

貴族たちは故事の政談や歌にこそ深い知識を持つものの、実際に武力を動員するために何が必要なのかまで、詳しく理解している者は少なかった。律令によつて政治祭祀が戦と分かれたれて三百と余年。平安の世が過ぎ、藤原の姓に代表される貴族たちはただ狭い宮中を安寧に治め

ることにのみ執心し、その外に目を向けることはまずない。

みやこの秩序を司る彼等にとつて、頼政達は走狗、物言わぬ刃と同じだ。ひとたびかれを捕えよと命じれば、それを着実にこなす。公家にとつて武士はそれが出来て当然の道具であり、それが出来ぬのは無能である。獲物を前に斬れぬなまくらな刃は役立たずであり、あろうことか刃のほうに斬りたくないと言いだすなど在于てはならぬ常識なのである。洛中の異変を討てと命じた貴族たちにとつて、それができぬ頼政達が誹りを受けることは必然なのだった。

ゆえに、頼政のように一門を背負つて立つ棟梁は、出世によつて相応しい地位と教養を身につけ、後ろ盾となる人脈の構築に努めねばならなかったのである。

「父上。……父上はどうお考えですか」

「何がだ」

「ばけものの事です。……いえ、そのようなもの、居はしないというのは私にも分かります。しかし、いまや郎党の者たちにも、怪しげな影を見たと言う者が始めているのはご存じでしょう。不要な噂に踊らされぬよう、授や省にも言い付けましたが、このままでは本気にする者が出るのは時間の問題でしょう」

「……件のばけものとやらが、帝を悩ませているという話だったな」
吐息と共に頼政は眼を閉じた。

噂がただの出鱈目だと断じれるのならば対処もあろう。しかし、あの鳴き声が聞こえ始めて以来、近衛帝が病に伏せりになり、御気分がすぐれぬままであるというのは事実であった。驗あらたかな高僧を呼び寄せ、秘法を持つて加持祈祷を繰り返しているものの、一向に効果がないという。毎夜、東三条の森から吹き寄せる黒雲が清涼殿まで届くと、帝は大層怯えて、起き上がることもできぬという。

やはり我慢がならぬと言うように、仲綱は杓を握りしめる。

「それも、帝をお守りする我等の怠慢である」と、面と向かつて悪罵を垂れる者まで出ています。

……父上、私にはそれが悔しくてなりません。居もしないものをどうして仕留めよというのでしょうか。私にばけものの姿が見えさえするなら、この手で討ち取つてみせるものを」

齒軋りをする息子に、頼政は静かに吐息した。

功を焦る若い志は、言い換えれば情熱的な上昇思考だ。決して悪いものではないだろうが、今からこの調子で、果たして息子は宮中の老獪な公家たちに踊らされずにいられるのだろうか。仲綱は摂津源氏の嫡流、やがては頼政に代わつて一門を率いていく立場なのである。

「言いたいものには言わせておけ。俺たちは御役目の手を抜かずに尽くせばいい。それだけのことだ」

「ですが、父上！」

「……仲綱」

「またも声を荒げる息子に釘を刺し、頼政は口元の髭を撫でる。人前ではみつともないと思い、昇殿を機会に止めようとしたが、どうにも抜けぬ癖となっていた。

「お前までそのようなことを言い出すな。郎党たちが動揺する。いたずらに騒ぎを広げるのは、俺達のすべきことではないだろう」

「……申し訳ありません」

うなだれる息子に、頼政はやれやれと首を動かした。

「討たねばならぬばけものなど、もうこの世に残っておらぬさ。そんなことは皆知っている。だがな、無理だろうと俺たちはそれをせねばならぬのだ。……誰も彼も、明日がどうなるか不安を胸に抱えている。何か起こるのではないかと怯えているからそのようなものを見るのだ」

「では父上は、帝のお具合が悪いのもそうだと仰るのですか？」

頼政の物言いは、確かに帝を蔑にすると捉えられてもおかしくない。見れば供に連れてきた郎党たちも仲綱と同じような顔をしていた。やはり彼等も、心のどこかで妖しきばけものの実在を信じているのかもしれない。

しばし思索し、頼政は問い返した。

「ふむ……ひとつ聞がが仲綱、お前は怪物の姿をはつきりと見たものを知っておるか？ 授、

省、お前たちはどうだ。直接見ておらぬでもいい、伝え聞いたというだけでも構わぬ。その恐ろしいばけものとやらの、姿かたちを教えてください」

問われて仲綱、授らと顔を見合わせるが、確かにその場に誰も、件のばけものの姿を答えられる者はいなかった。皆が皆、誰それが言っていた、あいつが見たという話を聞いた。それだけだ。

「そういうことだ。お前達が聞いておるのは噂に過ぎぬ。はつきりとその姿を見たというものが居るのなら、その姿形はもっと明瞭に広まるものだ。誰もそのようなものは見ていない。ただ、己のうちに怖れが溢れ出しただけだ」

(もつとも、その怖れこそが、一番多く人を殺すものだが、な)

敢えて続きは口にせず、頼政は仲綱と郎党達に向き直る。

「力を余らせ、武を振るうものは、往々にしてその力を披露出来ぬことを窮屈に感じるものだ。ゆえに、それを余すことなくぶつけることのできる、恐ろしいばけもの、ただ害を為すだけの悪鬼や妖怪にいて欲しいと思つてしまう心がある。

……世の中と言うのは、複雑で面倒なものだ。それらを一息に解決することは難しく、少しずつ、退屈な努力を重ね、時間をかけ対処していかなければならない。それを怠けようとする心が、慢心や驕りを、見えぬ相手に押し付けて、ばけものとするのだ」

そんな雰囲気は頼政の身内だけではなく、いまや宮中全体に蔓延しているようだった。

だが、こいつを殺せば万事解決、退治すればすべてまるく収まるというわけものなど、今の世には存在しない。世の問題の実際は全て人が成すものである。

「仲綱、あの声は虎鶯とらづぐみの鳴き声だ。昔、下総の山の中では良く聞いたものよ。空が雲で塞がれておるとな、あのように不気味な声が良く響く。それだけのことだ。だが俺たちはそれを取り除かなければならんのだ。無理は承知の上でな」

恐れこそがなによりも人の不和を招く。恐怖を育てるのは、その正体を知らずにいるからだ。頼政はこうして度々、不満を訴えてくる郎党たちを収めたが、宮中を満たす噂は日に日にならぬのを増していった。

昼夜を問わず分厚い雲が空を覆い、一向に日は姿を見せぬ。その有様は確かに異様ではあった。口がさないものの中には世の終わりではないかと言いつつも出ずる始末であった。

三条猪熊に邸を構える、左小弁源雅頼が頼政のもとを訪ねたのはそんな折のことだった。

この男、一見頼政と同じ源性をもちにするが、そもその「源」が異なる。頼政の摂津源氏も義朝の河内源氏も遡れば清和帝の系譜にあるが、雅頼の源は村上源氏。すなわち村上帝より分かれた宮中貴族である。

彼の父は白河院の寵愛篤き「薄雲中納言」源雅兼。書や学問を受け継ぎ故事典礼に詳しく、

宮中では朝儀にも意見を求められる重鎮である。雅頼も若くして太政官の左少弁にあり、やがて父雅兼の地位を継ぐことは確実であろうと噂されていた。

顔を白く塗り黛を付けた、いかにもな貴族の装いは、摂津で渡辺党の荒武者とも接する頼政の好むところではなかったが——まるこい顔、目と口をまるで細い線にしたかのような造作は良く目立ち、妙な愛嬌の良さと相まって、みやこ風の美男として愛されていた。

雅頼の来訪は夜更け、しかも事前の報せからもほとんど間を置かずの急なものである。いかな名門とは言え、あまり常識的なものとは言えない。

（あるいは、それだけ緊急の用事ということか……？）

ほとんど面識のない相手だったが、わざわざ訪ねてきた相手は無碍にするわけにもいかず、頼政は近衛御門大路の邸宅にて雅頼を出迎えた。

「このような夜更けに突然、お邪魔して申し訳ない。頼政卿に至急、お伝えせねばならぬことがありますゆえ、ご無礼お許しあれ」

「……いえ」

親子ほども歳の離れた頼政の前に、雅頼は懇慫に頭を下げる。元々糸のように細い目をさらに細め、女御のように袖で口元を覆う笑みは、どうにも頼政の好みではない。

「さて、このように毎夜空も晴れず、気の巡りも澁むばかり。まこと不快な日が続きますな。」

それ、見るも恐ろしき妖しき黒雲、気味の悪い風が続くこと。摂津源氏の長、頼政卿ともなれば物ともせぬのでありましようが、私のような者には恐ろしくてたまりませんよ」

「ご謙遜を、雅頼殿」

「いやいや、まことの事でありましよう。まったく、陰鬱なことこの上無い空模様。帝もすっかりお塞ぎになり、お伏せりになったままと聞きます。おいたわしいことですねあ」

わざとらしく声を上げて一頻り涙ぐみ、雅頼はゆるゆると首を振った。

「頼政卿。名に聞く摂津源氏の長である貴卿であれば、夜な夜な世を騒がす怪異の噂、お聞き覚えと思いますが」

「雅頼殿もそのお話を持ち出されるか。……帝のお心を悩ませる怪異、晴らす術を見つけることができず不甲斐ないばかりであります。お叱りは受けましよう。」

……が、我等摂津源氏、渡辺党一門を上げて、寝食を惜しんで宮中の警護に励んでおります。

事実、何名もの不審が怪しげな振る舞いに及ぼうとしたものを事前に召し捕りました。雅頼殿がそれをご存じないとは思えませぬ。それとも雅頼殿、我等がその怪異を黙って見過ごし、帝を脅かしたと申されるか」

その通りだとするなら、酷い難癖であつた。

幾多の勢力が権力闘争を続けている宮中では、些細なことを理由に責任を問われ、地位や官

位を失う危機と隣り合わせた。しかし、実際に居もしないばかりものを指して、それを見逃した責任を取れなどと、それはあまりにも道理が通らぬものではないか。

「故事に通じた左少弁殿が、世を脅かすばかりものが居るなどという風説の流布に、積極的に加担されるおつもりか」

それは頼政とても看過できぬ部分だった。一門を率いる主として、ここで院の信頼を失う事は、一族郎党の没落を意味する。怒りをあらわにする頼政に、雅頼はまるこい顔で両手を広げ、心外だとばかり大仰に肩を竦めてみせた。

「否、否。お待ちください、頼政卿。私どもも摂津源氏の皆さま方の腕は存分に存じております。まあそういういきり立たずにお耳をお貸しくだされ」

手招きをして見せる雅頼。言葉こそ丁寧を取り繕っているが、二十も年上の頼政を呼びつけるものであり、言外に自分はお前たちとは違ふのだという矜持が滲み出ている態度であった。

「聞くまいとすれども、件の噂は嫌でも耳に届いて参ります。ましてこのように曇り続き、一向に空も晴れず、鬱々と気が塞ぐのも当然と言えましよう。ただでさえ新院を唆す悪左府の振る舞いは目に余るばかり、閑白様も帝もお心を悩ませております。そのお痛ましきこと……。

そのような中で板挟みにされ、頼政卿がお疲れになるのも仕方のないことでありましよう。ですが、私どもとてただの棒杭ではありませんぬ。いかにこのみやこを満たす鬱屈を晴らさんも

のかと、知恵を絞っておるのですよ」

「すると雅頼殿、あなたはこの夜を乱す怪異を見つけ出し、晴らすすべをご存じですか」

いまだ憤りを押さえることはできず、なかば、揶揄を込めての物言いだったが——雅頼はそんな皮肉をさらりと受け流し、大きく頷いたのである。

「然り。今日はその算段を付けに参りました」

「なんと」

まさか肯定されるとは思ひもよらず、頼政は目を丸くする。およそ博学で知られる雅頼の口から、真面目くさってばかりの退治の話が出るなど完全に予想外であつたのだ。

「ここから先は内密の話となります。どうか、口外なされぬよう」

雅頼はゆつくりと頼政ににじり寄り、声を潜めた。

いつの間にか——頼政は、自分が逃れられぬ場所に踏み入ってしまったことを理解した。このみやこに古きより絡まる藤の蔓は、知られずに己の脚にも這い登り、あらゆるものを引き寄せ巻き込む。

——あれは皇の大樹に絡み付く藤の蔓。己一人では立てぬ脆弱ないきものだ。蜜に魅かれた者達を残らず絡め取り、食らい尽くす。いつかの忠告が頼政の脳裏をよぎった。

「頼みというのは他でもない。頼政卿にはこのみやこを騒がすばけものを、射ていただきたい

のです。なに、そう難しい事ではありませんまいよ。ばけもの退治となれば、源頼光の酒呑童子討伐以来のお手のものでありましょう。かの八幡太郎義家様は、堀河帝の御世に紫宸殿に住まうばけものをその涼やかなる弓の鳴弦で払ったではありませんか。それに並び称される弓の業前をお持ちの頼政殿をもつてすれば、容易いこと。否、いかなばけものとても射殺せぬはずがない。……そうでありましょう？」

「……些か、話が見えませぬな」

頼政にはそう唸るのが精一杯だった。不穏な方へと転がってゆく話を押し留めることができない。底知れぬ不安だけがみるみる膨らんでゆく。

これが藤の蔓、皇の大樹に絡みつき、絡め取る支配の姓だ。

嫌な汗が背中に浮かぶ。頼政の胸中などお構いなしと、雅頼はさらに身を乗り出してきた。白粉の塗りたくられた顔が間近に迫る。糸のように細い目は、頼政を捕えて離さない。

「左様、射殺せぬはずがないのです。他の猪武者には出来ぬお話なのです。宮中にその名を知られ、門院の覚えめでたき摂津源氏の頼政卿でなければなりません。貴卿ほどの名の知れたお方であれば、間違いないばけものを仕留めてくださることでありましょう」

さも上手い方便だと言わんばかりに、ゆつくりと繰り返す雅頼。

帝を謀ると平然と言つてのける彼の目に底知れぬ闇を覚え、頼政は内心で戦いた。

（——これが、この国の中枢に居座る力か）

頼政は戦慄した。

今日の来訪は突然なものでも、雅頼の独断でもなかったのだ。雲の上の駆け引きの中、念入りに準備された大きな計画のひとつなのだ。

誰が、何のために、どうやって——。そのいずれも頼政にはまるで見当もつかぬ。

この国を、三百年以上に渡って支配し続けてきた相手——頼政がいま対峙しているのは、その長きに渡る因習であった。

「雅頼殿、昔より朝家に武士を置くのは逆族を討ち、勅命に背く者を滅ぼすため。目に見えぬ怪異変化を退治せよなどと命じられたこと、いまだかつてないはずです」

胸中の動揺を押し隠して答えた頼政に、雅頼は余裕たつぷりに首を振った。

「いやいや。頼政卿、実利を取ってお話いたしましょう。つまり、ばけものなど実際に居らずとも良いのです。源氏の誉れ高き貴卿の弓が、その因となる怪異を討ち払ったことが確かに知らしめられれば、それで十分。」

この空の荒れが急な冷え込みと秋風によるものであることは、陰陽寮の天文博士達によつて既に明らかです。数日の後に南の地で明けに雨、遠からず雲は晴れましょう。なれど、帝はいつまたあの不気味な鳴き声のばけものがやってくるのかと、怯えておはすことになる。それは

まったく宜しくない。

頼政殿には、その不安を射って頂きたいのです。皆を悩ます、漠然とした不安。それに形を与え、祓うのです。なに、古きより行われた祭祀と何の違いがありますか。帝の御心が晴れるのであれば、その弓、滝口武士として振るうことにまさか異論はありませんまい。帝のお心を案じておられる美福門院様も、これを快く受け入れてくださいましたよ」

「……………」

頼政は思わず歯噛みした。その名を出されてはもはや退路はない。

(嵌められた……のか)

門院にまで話が回っているとは——いや、雅頼がここに来てきた時点で、それに気付くべきだった。苦々しくも苦渋を噛み締め、頼政は己が誤っていたことを痛恨の思いで受け止める。これは藤原摂関家による高度な政治的画策だ。あるいは鳥羽院すら了解の上かもしれない。

今の宮中で、近衛帝と先代の帝、新院崇徳の間に対立があるのは周知の事実である。頼政の後ろ盾である美福門院は近衛帝の母であり、現関白の藤原忠通と結託して先帝崇徳の失脚と近衛帝即位を画策した張本人であった。

このわけもの退治に頼政が呼ばれたのは、必然であったのだ。

賢しくも殿に昇り、政に口を挟むようになって、頼政は己が思い上がっていたことを痛感し

た。そも、神代より続く宮廷で、四百年にも及び権謀術数を巡らせる彼等の弁舌に、主流より外れた源氏の末風情が叶うはずもなかったのだ。

それでも。一縷の望みをかけ、頼政は抵抗を試みる。

「雅頼どの。我等を買ってくださるのは有難いことでありますが、前陸奥守にあやかるのであれば、俺の名は場に合わぬでしょう。河内源氏の嫡流の為義殿——あるいは、義朝殿が居られる。お二方を差し置き、俺が独断でそのようなお役目を受けるとあつては……」

先年、義朝は坂東より戻り、鳥羽院の北面武士としての活動を始めていた。かの地での十年はあの少年を逞しく成長させていたとみえ、いまや義朝は上総御曹子の名で知られる押しも押されぬ河内源氏の嫡流である。父・為義に代わって下野守に任じられ、同時に従五位下にも叙せられたばかりである。なにより、八幡太郎源義家から見ても、為義は直系の孫、義朝は曾孫にあたる。頼政の摂津源氏よりよほど近い関係だ。

（……すまぬ。為義殿、義朝殿）

まるで二人を売り渡すような物言いに心が咎めたが、せめてこの場合は彼らに遠慮して辞すことにし、時間を稼いで対策を練ろうという判断だった。

しかし雅頼は大仰に首を振ってみせる。

「ああ、それはいけない。いけませんよ頼政卿。仮にも帝を害するだけものを討伐するのであ

れば、相応の格というものが求められましょう。品性の欠けた卑しき坂東武者に、ただしき力が振るえるはずがないではありませんか。よろしいですか頼政卿、これはおぞましき悪鬼を調伏する正しき行いなのです。莊園の管理もせずに収穫を奪って我が者とし、家を潰し合つて女を奪い、郎党同士で殺し合うような野蛮な連中では、とても満足に事はこなせぬでしょう」

雅頼は暗に言っているのだ。無位無官の坂東武者が行うのではなく、摂津源氏の名門、頼政が成すからこそ、ばけもの退治の意味がある——否、その正当性が担保できるので、と。

「これは、帝のご意向でもあります、頼政卿」

「——」

駄目押しのようには雅頼は告げた。その名を出されて、頼政に肯定意外の選択肢は許されない。

「そうですね——三日後の、亥の刻程がよろしい。この氣候が変わるのはちょうどその頃になる。頼政殿に、その場で怪異を射て頂く。よろしいか？」

「……………。承知いたしました。……謹んで、お請けいたします」

「いやいや、そう畏まらずに。本日は内々に、あくまで私は頼政卿と世間話をしにきたのですよ。正式な通達は日を改めて、しかるべき場所から行われましょう。なに、いつもの警護と何ら変わりはありませんまい。その時に確実に相手を仕留められると言う保障もあるのですから、むしろ気楽かも知れませぬな、ははは」

からからと笑う雅頼。頼政は頭を垂れ、無言のままにそれを受けるしかない。否やなど、あろうはずもない。



それから日も空けずのことだ。いつにも増して陰鬱な気分が出仕のため身支度を整えている頼政のもとに、仲綱が慌てた様子でやってきた。

困惑を浮かべながらの息子の様子に、頼政は手を止めて応じる。

「父上、どうにも怪しげなものが訪ねてきておりますが、……いかがすべきでしょうか」

「うむ？ なんと申した、仲綱。誰だというのだ」

「……それが、どうも判然とせぬのです。なにやらみやこで商いを営むという、團三郎なる商人だと言いますが、さる方からの紹介で父上にお会いしたいと申して居りまして……」

珍しく歯切れの悪い仲綱に、頼政は眉を顰めた。

「どうした。素姓の確かでない者であれば追い返してしまえばいい。その紹介とやらが確かなもので、急を要するのであれば会おう」

「その……です。かの者は、太政官左小弁である雅頼卿の使いだと書状も携えておりまして。

確かめたとくろ偽物ではないようでした。——ですが、どうにも風体に怪しいところも多く、どうしたものかと……」

「……ああ、良い。俺が出る」

要領を得ない息子の様子に痺れを切らし、頼政は早々に身支度を済ませて外へ出た。郎党を呼びつけ、出仕が遅れる旨を知らせる使いを出す。どうせ大した仕事はなく、できることなら今は宮中には上がりたくない気分だったのだ

(商人、か)

しかも仲綱曰く、雅頼の肝煎りであるという。

みやこでは様々な品々を取り扱う商売が盛んであり、貴族のもとには懇意になろうと珍品名品を持ち寄って頭を下げに来るらしい。頼政の屋敷にも、頻度はそれほどではないが商人が使いをよこし、取り次ぎを求めてくることがあった。だが頼政の知行など他の貴族に比べればたかが知れており、商売するのであればもつと相応しい相手はいるはずである。頼政の摂津源氏は彼らに比べて、お世辞にも裕福であるとは言い難い。

しかもこんなにも朝早く、堂々と武家に乗り込んでくるとは確かに大した度胸であった。若輩の息子ではまだあしらいかねると見え、父に取り次がざるを得なかったのだろう。

(それにしても、何をうろたえていたのだ、仲綱のやつは)

ほどなく、屋敷の客間に通された件の人物と対峙して、頼政は仲綱の困惑を理解した。

「お初にお目にかかります」

恭しく頭を下げるその男——否、彼女、である。

雅頼の書状を手に頼政の前に進み出た商人は、驚くべきことにまだ若い女だったのだ。

「お主、女子か？」

「は。紛らわしい限りで申し訳ありませんのう。このような身で商いをしておると同業者に舐められることも多く、父の名である団三郎を名乗っております。……近衛河原の頼政様に置かれましては、どうぞお見知りおきを」

おもねるように、しかし卑屈になることはせずに頭を下げる商人『団三郎』。

女子であるのは確かだが、歳のころは判然としない。まだ十代とも、三十を超えているともとれる。長い黒髪を後ろに流し、格子模様の長布を襟に巻いた、見慣れぬ装いをしている。化粧気はなく眉や頬は最低限、見苦しくないように整えてあるだけだった。全体的にふくふくと丸く、口元は素直な感情を表し、穏やかな目元をしていた。

みやこ育ちではないと見え、ところどころ粗野な様子こそ見えるが、高貴な者たちとも目通りを叶った事のある、ある種の落ち着きを備えてもいた。

「生国は伊予、幼い時分に越佐の海を渡りまして佐渡へと移り住み、長らく漂泊の旅を過ごし

ておりました。今は隠居した父に代わり、このようにみやこの辻の屋根を借りて商いをさせて頂いております身。そのような身の上によりまして、佐渡に少々顔が効きますゆえ、このような身ながら重用していただいている次第にございます」

佐渡は四国と並び、古くよりの流刑地である。海の果てにあるかの島は配流された朝廷の貴人や武士が今も暮らす地であった。確かに彼等の動向を探ることはみやこにとつても重要な意味を持つと思われ、商人を抱えるには良い口実となるだろう。

「実のところ、頼政様とは鳥羽院の歌壇に、歌会の千代紙などを提供させて頂いた御縁がございましたのう」

団三郎はどこからともなく美しい飾り紙を取り出し、見事な手つきで親子鶴を折ってみせた。その色飾りには頼政も覚えがある。

「世の騒乱は深く、一度の嵐で身代も飛ぶような時分。叶う事なら武門の大樹に寄らばと思ひましてな。ご無理を承知で雅頼卿にご紹介いただき、こちらに参りました次第です」

すらすらと、立て板に水の口上を述べる団三郎。通り一遍、紋切り型の挨拶ではなく、頼政の経歴にも触れており、歌壇への配慮も混ぜた、頼政の立場を十分に知った上でのものだ。

なるほど、かの雅頼の紹介としては納得のいく相手であろうか。仲綱には先日の雅頼とのやり取りは知らせていない。あれは内密のものであり、ぎりぎりまで事実を知るものは少しでも

少ない方がいいと判断したためである。

「成程。事情は分かった。……で、お前は俺に、いったい何を売りつけに来た？」

「雅頼卿より、頼政殿が宮中のあやしき闇を討つお役目をお手伝いたすよう申しつかりっております。此度のばけもの退治に役立てて頂こうと、頼政様のもとに魔を貫き妖を祓う矢をお持ちいたしました。どうぞ、お検めくだされ」

「——ほう」

恭しく畏まり、差し出された絹の布包み。それを解き見せる団三郎に、頼政は思わず感嘆の声を漏らしていた。口上こそ実に怪しげなものであったのだが、それに反して彼女の差し出した矢が実に見事なものであったからだ。

魔を討つ矢など、みやこでは詐欺の常套句だ。いかに射ても狙い過たず獲物を撃ち抜く。悪鬼を撃ち滅ぼす品である。手にしているだけで降りかかる禍を払いのける。一度定めた標的を狙い続ける。さる高名な法力篤い僧侶が、破邪の念を込めた——そんなもつともらしい口上で、あるいは胡散臭い肩書で、形ばかり二束三文の安物売りつける悪辣な者達が多い。また、己の腕を顧みることなく、そんなものを真に受ける武士が多いのも事実である。

かの「八幡太郎ゆかりの弓」なるものを所有しているのは、今のみやこに三十人はくだらないであろうか。

しかし、団三郎が差し出した矢は一目で名品と分かる、見事な品であった。

「矢羽根には三十三節に分かれた山鳥の尾を用い、軸にははるばる越佐の海を超え、佐渡は矢島にしか生えぬ、五つ節の双生矢竹を用いた、尖り矢にございます」

「……ふむ」

矢は全てで五本。どれも素晴らしいつくりであつた。長らく弓馬の道に打ち込み、多くの弓矢に触れてきた頼政も、その出来栄えには唸らざるを得ない。

何か不備でもあればそれを口実に断ることもできるはずであり、頼政は念を入れて確かめるが——団三郎の矢にはまるで文句のつけようがない。

(……今回の仕掛けの黒幕は、これほどのものを用意できるわけか)

改めて自分の踏み込んでしまった場所を渦巻く膨大な権勢を感じながら、同時に頼政は、団三郎への評価も改めていた。

「双生矢竹は、名の通り必ず二本一揃いで生え、同じ数だけの節をもつ、破邪の力を秘めた竹。

山鳥の矢は、かの坂上田村麻呂が安曇で鬼を撃つた時にも用いられたものにございます。……おっと、頼政どのに置かれましては釈迦に説法ですかのう」

からからと大口を開けて笑う団三郎。まるで女子らしくない振る舞いであつた。機嫌を損ねればどのような目に遭わされても可笑しくないだろうに、実に豪胆な娘だと頼政は呆れる。そ

してまた、どうにも憎めない、愉快な笑い声なのだ。

「貴きお方の苦しみを鎮め、あやかしき魔を払う大仕事。所詮、儂一人出来ることなど限りがあります。精一杯手を尽くさせて頂きました」

「ふむ。いや、大したものだ。俺の腕でも扱い切れるかどうか分からぬ。……なるほどな。此度の役目、俺だけでは役足らずということか」

「なんの。儂は微力ながらお力添えさせて頂くのみ。頼政様は帝を脅かす怪異を討つわけですから。それに用いられる武具にも細心の注意を払って用意せよということなのでしょうな」

「大した念の入れようだ」
おそらく碌な時間もなかったであろうに、まったく文句の付けようのない仕事である。頼政は十分な報酬を払って矢を受け取り、団三郎をねぎらった。

なかなか見られぬ好人物でもあり、ついでもてなそうと奥に上がるよう促したが、団三郎はそれを固辞して屋敷を去っていった。

「父上、いかがでしたか」

「なかなかの人物だったな。……仲綱、お前がもう少し若かったら、妻に取らせていたかも知れんぞ」

いきなり婚姻の話まで振られ、目を白黒させる息子の様子に、久々に腹から笑って、頼政は

満足した。

その日のうちに頼政は郎党を走らせ、この団三郎なる商人を調べるように命じた。雅頼からの書状を疑う訳ではないが、なにしろ女の商人など、怪しげな素姓の者であるのは確かである。

三日ほどをかけて調べさせた限り、概ね、彼女の語っていたことに嘘はないようだった。この団三郎という女、確かにみやこで商いをしているらしい。一見ではそうと気づかれぬ様に装ってはいるものの、見目良い女が男のように振舞うのは静かな評判となっていた。

団三郎自身の不思議な魅力も手伝ってか、案外と手広い商いをしているらしい。

彼女はともこの機会に頼政の摂津源氏、渡辺党の庇護の元での出世を目論んでいるらしいかった。やがては平氏の六波羅殿に従う豪商・朱鼻の伴朴、奥州藤原に仕える金売り吉次のごとく、みやこに名立たる商人となろうとしているのだという。

おおよそ女というものは大局を見据えるのには向かず、情に流され損得を見通すのは苦手と思われるが、そのような素振りは微塵も感じさせぬ。また団三郎は実に弁舌も巧みで、一刻も話しこめば十年來の親友とばかりの親しみを覚えてしまふらしい。出自ばかりははつきりとしなかったが、案外どこかの貴種の出であるかもしれないと、頼政は考えた。

「――考えてみれば、俺も女子に使われる立場であつたな」

美福門院のように権謀術数渦巻く宮中で権勢を振るう者もいる。内助の功にて夫の出世を守

り立てる妻の話は枚挙に暇がない。

(讃岐もいずれはああなるのだろうか、な)

今年十二になる娘のことを思い出し、頼政は一人苦笑するのだった。

四 頼政辟邪の弓

穏やかに燃える篝火が、九間の弘屋根を照らす。

分厚い黒雲の隙間からかすかに顔を覗かせる月が、東庭に軋むような夜闇を際立たせていた。帝がご政務をおこなう紫宸殿は、四方に廂を持つ荘厳な檜皮葺の大屋敷である。その南の大床、左近衛桜と右近衛橘が枝を広げる広大な庭に、摂津源氏の長、源頼政の姿があつた。

南の弘廂を背に、じつと夜空を睨む彼の背後には時ならぬざわめきが満ちていた。宜陽殿に続く軒廊こゑぞうには、昇殿を許された公卿や殿上人たちが詰めかけ、高欄の上から興奮に目を輝かせている。

常ならば夕暮れとともに閉ざされる南門には、物々しく薙刀や太刀を刷いて武装をした衛士が警護に立ち、厳しく出入りを取り締まっていた。彼らの間を忙しく走り回っているのは、ことの始終を記録する役目を負った太政官の判官や主典たちだ。

此度の異変の検分、そして帝をお守りするためという体を取っているが、その実は物見遊山である。頼光以来の辟邪の武として名高き摂津源氏の棟梁、源頼政によるだけの退治。蚊帳

の外の貴族たちにはさぞや見物であろう。

しかし頼政がこれから挑むのは、ただの虚言。ばけもの退治の真似事なのだ。

「茶番だ」

浮かれ気分で賑わう公卿たちの中に雅頼の姿を認め、頼政は誰にも聞こえぬよう陰鬱に呻いた。できるだけ感情を表に出さぬよう、俯いて具足を確かめる。

頼政の出で立ちは、緑に染めた二重の狩衣に、愛用する滋藤の弓と、団三郎より渡された山鳥の尾の尖り矢を取めた矢筒である。

焚かれた篝火が火の粉をあげ、夜空へと吸い込まれてゆく。夜が深まるにつれ、東よりびょうびょうと風が吹き始め、森がざわざわと揺れていた。刻限は間もなく訪れようとしている。

帝の御座は北西の清涼殿にあり、いまま主上は夜御座所の中でこの暗き夜を恐れておられるはずであった。それをお守りするのであればここで待つのは本来筋違いであるのだが、『かつての八幡太郎の故事を鑑み』頼政が怪異を討つのはこの紫宸殿であると決まった。倒す前からその場所が定められているという奇妙な事実、頼政は暗い笑みを覗かせる。

（いや、たとえ茶番であろうと、それで俺が納得できるのなら良いのだ）

この黒雲、重苦しい風という悪天候に、帝が怯え、お心を悩ませていることは事実である。ばけもの退治の真似事に付き合ひ、それで帝の塞いだお心が晴れるのであれば、それも立派な

武士のつとめであるはずだ。

そう考えて割り切ろうとした。しかし、できない。

(……どうやら俺は、自分で思っているよりも余程融通の利かぬ堅物だったのだな。この茶番に俺の弓を使わされることが、こうまで忌々しいとは)

少し前まで、頼政は己がもう少しばかり、小器用に生きることのできる男だろうと思っていた。その自負もあった。かつて頼政自身も義朝に語ったように、いまの摂津源氏の在り方は軍事よりも貴族に偏りつつある。頼政も宮中警護の役目こそあれ、いまは武人よりも歌人としての立場を強くしていた。当代に比類なき弓の使い手と呼ばれながら、武勇によって勲を立てる事など、とうに諦めていたつもりだったというのに。

「皆様方。主上を苦しめ、妖しきばけものを仕留めることができるのは、摂津源氏を率いる古今無類の弓の使い手、源頼政卿を置いて他にありません」

推挙にあたり、雅頼は頼政に更なる官位や新たな知行国、そして帝や鳥羽院の元への昇殿も許される四位以上への昇進の口利きと、様々な報奨を約束してきた。それは取りも直さず、この頼政の偽のばけもの退治がそれだけ大きな政治的意味を持つことを示している。

事実、この一件を引き受けて以来、頼政は一層門院の覚えもめでたく、一族郎党にも様々な便宜が図られていた。

我等の弓は朝廷に背く夷敵を討つものであり、正体の知れぬばけものを払うなどできぬものであると、一旦は固辞してみせた頼政であつたが、それでもなお、勅命であることや義家の故事を引き合いに出して強いられ、ついには承諾せざるを得なかつたのである。

「頼政様！」

厳肅な場に似合わぬ大声に、頼政は顔を顰める。

声の主は赤ら顔の若者であつた。頬をてからせた砲面はまだ少年と呼んでも差し支えないだろう。薙刀に風羽根の矢を帯びてなお、六尺をゆうに超える見上げるような体軀に、力を有り余らせているのがよく分かる。

井野早太——通称を猪早太。近江国の郎党である。生まれは遠江といい、半年ほど前より頼政に仕えていた。一度なにかに氣を取られると、脇目もふらず目の前の事に突き進む性質で、なるほど猪と渾名されるのに相応しい。

「このような場のお供に、俺を選んでくださつて、感激です！」

この少年は、幼い武家の子どもにありがちな、自らの勇氣と鍛錬を特別のものと信じ込む、幼さがいまだ抜けておらぬ氣性だつた。まだ一度も戦場に出た経験などないというのに、己の活躍を信じて疑わずにいる。

よく言えば勇猛で一途、まともに評せば時流を見極めることのできぬ單純さ。このばけもの

退治が真実と信じて疑わないだろうことは、容易に想像できた。

頼政が敢えてこの場から腹心たる渡辺党の郎党——授や省を遠ざけたのは、故あつてのことだ。今日この夜は、高度な権謀の上に成り立っている。その裏にある秘密を気取られ、万が一にも余計な気を起こす者を立ち入らせるわけにはいかない。まかり間違つてそのような事があれば、頼政は容赦なく彼らを殺さねばならなかった。授も、省も、けしてこのような場で失つてよい人材ではない。

ゆえに頼政は、猪と渾名されるほどに愚鈍と評判の早太を隨身に選んだのであった。

「頼政さま！ お任せ下さい、どんな恐ろしいばかりものが出てこようと、この早太が突き殺してみせます！」

「ああ、頼むぞ」

できるだけ投げ槍にならぬように、いかにも信頼しているという態度を装つて、頼政は彼に頷き返した。我ながら芝居にもならぬ拙い装いだつたが、早太はまったく疑う様子もなく、頼みにされたことに感動を噛み締めているようだった。

南庭の一片を遠巻きに見守る公卿や判官達を見回し、早太は感極まつたように拳を握りしめる。具足の手甲がみしりと音を立てた。

「見てください。これほど多くの者たちが、この怪異を前に我等を頼みにしておる！ 腕が鳴

りますな、頼政さま！」

「……そうだな」

早太に素っ気なく答え、頼政はこつそりと吐息した。多少、目鼻が効きさえすれば、周囲を囲む公卿たちの様子でここがどんな場か察するだろう。まことにこの場が正体不明のばけものに脅かされており、噂にあるように危険であるならば、このように見物人が詰めかける事などありえない。ここに集まった者たちは皆、これが茶番であり、見世物であることを承知しているのだ。

彼等はいわば証人だ。頼政がいかに勇猛にばけものを倒したのかを、尾鰭付けて宮中のそこここで、帝の耳に入るよう語るのだろう。

（何たる悪趣味か）

滝口武士の矜持すらも見世物とされていることに、頼政は強い不快感を覚えていた。

この場に集まっているのは皆、藤原家中御門流や美福門院の勢力に属する者たち。つまり、近衛帝と対立する新院崇徳を疎ましく思っている者たちばかりだ。頼政の弓は彼等の武の象徴として、妖しきばけものを討ち払うのである。

ますます心を沈ませてゆく頼政の隣で、早太は己の役目を疑う様子もなく、絵巻の中のような境遇に心を躍らせている。

呆れるほど単純なわかものだ。自分の腕が頼みにされているのだと微塵も疑っていない。彼を選んだのは万が一事が露見しても扱いやすいだろうと考えてのことだったが――肩から額から湯気を昇らせる早太を見て、頼政は早くも辟易し、後悔しはじめていた。

（もう少し、頭の回るものを選ぶべきだったな。気取られるかもしれないと恐れすぎたか）

これが茶番のばけもの退治であることに疑問を抱かせぬため、頼政は手づから早太に短刀を一振り、与えていた。実のところそこらで見繕わせた凡庸な品である。が、早太は頼政の言葉通り、これがばけものを討つために設えた銘作であると信じ込んでいたようだった。

まだ準備も整っておらぬと言うのに、早太は紫宸殿南庭の前にどんと仁王立ちになり、大きな目を剥いてぎよろぎよろと空を凝視している。よほど血の気が余り切っているのか、ぎりりと握り締めた薙刀がいまにも弾けんばかりに撓んでいた。

（俺にも、このような時分があつたのだろうか）

頼政は想いを巡らせる。

辟邪の名門、摂津源氏に生まれ、父仲政のもとで物心ついた時には、頼政の毎日は渡辺党の武士たちに囲まれ、ひたすらに修練の繰り返しだった。大江山の鬼を退治した頼光公のように、悪鬼を討ち滅ぼし、帝のお力となるのだと、ひたすらに弓馬の腕を磨いた。

猛者ぞろいの渡辺党に囲まれてなお頼政は弓を得意とし、長じる頃には誰にも負けぬ弓の使

い手となつていた。坂東の武者は常の数倍の強さで張つた剛弓を軽々と引き、その矢は人の体すら千切るというが、頼政は精妙かつ鋭い矢をもって、馬上や乱戦の中でも狙い過たず標的を射抜くことを得意とした。

この時代、戦術と戦略は不可分である。郎党を率いるものとなれば大将同士での一騎討ちも当然とされ、摂津源氏の棟梁として相応しい実力が求められた。頼政も幼き頃はそれを疑いもしなかつたはずだ。

功名を求め、ひたすらに武勇を磨き、戦場で相応しい武者と相見え、力を尽くして戦い勝利をおさめる。そんな華々しい、絵巻のような日々を送ることができると、疑いもせず信じていた頃があつたはずだ。しかし、こうして思い返そうとするものの、頼政にはもうそんな幼い頃の自分を見出すことができなかった。

若くして引退した父に代わり、一門を率いてみやこの政争に身を投じ、激動の中を必死に生き抜いてきた間に、そんな若々しい情熱は摩耗し、擦り切れてしまったのかもしれない。後に残るのはただ、やるせない憤りと落胆だけだ。

今の世は平和すぎるのだと、頼政は思う。

いや。無論、争いは毎日のように起きている。しかしそれは絵巻物のように分かり易いものではなく、人の憎悪や執念、嫉妬が醜く絡まり合つた、複雑怪奇なしろものだ。吉備津彦の鬼

退治のように、藤原秀郷の太刀足退治のように、悪鬼の首を落として、それで全てがめでたしめでたしと収まるものではない。すべての争いは己の利のために起こされ、競争相手の足を引きずり降ろし、栄華を一人占めせとするものである。

もはやこの世に悪鬼はおらず、藤原の家も、女院達も、寺社の者すら、人と人が争うことを隠そうともしない。己の邪魔となる相手を敵として滅ぼし、排除するために争いは起こされる。

頼政達武士ですらその例外ではないのである。坂東での権益を巡り、父為義との対立をなお深める義朝。もはや軍事貴族の一大勢力として朝廷に食い込んだ清盛。そしてまた、摂津源氏を率い、美福門院の私兵となつた頼政も、同じことだ。

いまはこのみやここそがその魔窟。潜む悪鬼とは、頼政を含めた人々自身の欲なのである。ここに居る限り、人は人と争わねばならぬ。あまりにも平和すぎたこの国から、いまやばけものは消え失せ、人は人といがみ合うことでしか生きていられぬのだ。

「早太」

「はい！」

この純真な若者に何か声をかけてやるべきだろうか。頼政はそう思案する。けれど、己の力が何よりもすぐれ、いかなる困難にも負けないのだと信じている時に、年寄りの言葉はただ耳

煩いだけだ。

「あまり、気負い過ぎるなよ」

「大丈夫です！」

自信たつぷりに腕を握って見せる早太。頼政の意図はやはり伝わっていないようだ。頼政は再度吐息をこぼし、静かに弓を手にして庭の中へと歩み出た。



ほどなく、東三条より巻き起こった生温い風がひゅうひゅうと唸り、紫宸殿へと押し寄せてきた。うつすらと月が透けていた空には一際黒い雲が湧き起こり、みるみるみやこの空を覆い隠してゆく。人々の間からざわめきが漏れはじめた。

（刻限だな）

ちらと殿上に視線を巡らせれば、雅頼が小さく頷いて合図を送る。弁官たちの指示で南庭を照らす篝火が増やされ、隠れた月の灯りを埋めるように火の粉を上げた。

びようと風が吹き付ける。木々がざわざわと枝を擦る音に混じり、いずこの森からかひよう、ひゅおおおうと響く虎鵜の鳴き声が届いた。

「こ、これは……」

「おう……あの声、聞こえるか……?」

「聞こえる、聞こえるぞ……なんじゃ、あの声は……」

ざわめく見物人たちのどよめきが頼政を苛立たせた。軽い気持ちで押しかけながら、いざ何かが起こりそうとなればたちまち恐れを露わにする。既にすっかり怯えて浮足立っている様子の公卿まで見え、まったく情けなくなるばかりだ。

「ぬう、いよいよ出おったな、ばけもの!」

一方、早太は怖気づくどころか眼をらんらんと輝かせ、薙刀を構えいまかいまかとばけものが飛びだしてくるのを待ちかまえている。主である頼政を押しつけ、どこどかと庭を歩きまわるさまは、猛った猪そのものである。

まったく、誰が呼んだか猪早太とは良くしたものだ。その気迫は戦場であれば弱音を吐く初陣のものたちを奮い立たせただろう。そうして、そのまま氣勢を上げ敵陣に打ちかかり——馬上の将に挑んで、そのまま首を刎ねられた同じような若者たちを、頼政は多く知っていた。

頼政を無視して南殿の前に陣取る早太に、頼政は声をかけた。

「下がっておれ、早太」

「下がりませぬ! 頼政さまは見ていてください、私めがこのばけもの、討ち取ってごらんに

います！」

(それでは困るのだ馬鹿者が……！)

まったくこちらの意図を介さない早太に内心で悪罵をぶつけたくなるのを堪え、頼政は無表情を取り繕う。

この場の段取りは、全て頼政がばけものを射抜くことで進むようになっていく。早太の立場はあくまで隨身、頼政の傍について補佐をするためのものだ。それを彼はまるで理解していない。

目上の勲功を第一に考える、郎党として最低限の役割すら把握していないらしい。恐ろしく単純でまわりの見えぬ彼のことだ。頼政の立場などわからず、己が一人だけものを討ちとってしまおうと考えているに違いない。

軒廊より、雅頼が珍しく笑み以外の表情をつくって頼政を見た。この分からず屋の郎党をどうにかしろということだろう。

(泣きたいのは俺だぞ、雅頼よ)

今回の茶番は摂津源氏の棟梁という頼政の家格をもとに仕組まれたものだ。そこで出自もあやしき郎党が紫宸殿に土足で跳び上がって踏み荒らしたなどとなれば、もはや渡辺党どころか源氏全体の醜聞となりかねない。ばけもの退治などという芝居は霞んでしまう。

（しかし、確かに俺が愚かだった。……まさかここまで聞き分けのない若者とはな）

早太にきちんと言い含めることができなかったのは悔いても仕方がないが、ここまで頭の足りぬ男とは思ひもなかった。いみじくも郎党として仕えているのだ、戦場の仕手くらいは弁えているのだと考えていたが——早太は主人を蔑ろにしてでも武勲を立てんと逸る猪そのものである。

後で徹底的に教え込まねばならぬ——そう思い、頼政は強く早太を叱責した。

「控えろ早太！ 死にたいのか！」

「命など惜しくありません！」

「容易く死ぬなど申すな。無謀を勇氣と履き違えてはならぬ！ お前は徒に血を流して、帝のお住まいである御庭を汚すつもりか！ 辟邪の滝口武士の役目を何と心得る！」

言うが早いか頼政は早太の襟を掴み、ぐいと庭に引きずり倒した。どさりと投げ飛ばされた早太に公卿たちのどよめきが上がる。それに背を向け、頼政は手筈通りに紫宸殿の南面、張り出した大廂を見上げる。

「——」

頼政の背には、団三郎より渡された山鳥の尖り矢二本を修めた矢筒がある。箆を纏う事は許されなかったため、頼政が持つのはこの二矢だけだ。

もし一の矢をし損じて、直ぐさまに二の矢を放つて仕留めるといふ心構えである。そも、戦場において持ち込む矢の数を限るなどというのは馬鹿な話であるのだが——これも雅頼の指示であつた。いかな頼政とて帝の御前に出るのだ、その武装は仔細に渡つて検められている。万が一にも、内裏に持ち込むものに呪詛などが絡み付いてはならぬからだ。

頼政がぎりぎり許されたのが、この矢、二本だつた。

『なんと弱気なことか……帝の推薦を受けられた頼政殿が、二の矢の故事を知らぬとも思えませぬがなあ』

居合わせたある公卿は、頼政の姿を見てそう皮肉つた。二度の機会をもつことで、一度目の機会を外しても良いという気の緩みが生じ、事態を悪化させるというつまらない戒めである。正体の妖しきばけものとして、矢を外すなどということは摂津源氏の体面からも許されぬというわけだ。頼政に期待されているのは、八幡太郎義家と同じ、英雄としての振る舞いなのである。頼政に言わせれば、戦を知らぬものの戯言であつた。

手数は、策は、兵力は、使いこなす技量さえ持つのなら、用意すればするほどいい。それをつまらぬ矜持で見栄を張るから、易く敗北するのだ。

しかし彼らの無理解はそれを許さず、二の矢を持ち込んだ事自体、ばけもの退治の立場としては眉を潜められるような状況であつた。

（さて、射損じたのならば——雅頼殿の頸の骨を射抜き、俺も死をもって詫びる積りだったとでも弁明をするしかないだろうな）

茶番であろうとも、この一矢に一門の行く末が掛かっていることは確かなのだ。仕損じることは許されない。丹田に活を入れ直し、頼政は紫宸殿の屋根を睨みつけた。

お誂え向きな事に、ますます激しくなる風を恐れ、公卿たちは軒廊の奥に引つ込んで身を寄せ合いながら遠目に様子を窺っていた。全ては段取り通りに進んでいる。黒雲と風は刻限通りに吹き始めた。あとは頃合いを見て頼政が屋根の上にはけものを見つけ、そこに矢を放つ。見物人の中には雅頼が手配した者たち混じって居り、彼等がばけものを見た、頼政がそれを仕留めたと騒ぐことになっていた。

いるはずもないばけものを、こうして退治する算段なのである。

「……………む、？」

檜皮葺の大屋根の上、渦巻く黒雲を見つめていた頼政は、ふと眉をしかめた。

はじめは見間違いか、と思った。だが、違う。

すでに黒雲に隠れて月のない空、焚かれた篝火の中に夜目を利かせて眼を凝らす。

（気の迷いではない）

——ゆらり。帝の御座所を見下ろす空、紫宸殿の屋根の上に、這いつくばるような影がある。

間違はなく、何かがいる。鳥ではない。しかし、獣とも見えぬ。小さな黒い影は四肢を強張らせて身を丸め、檜屋根にじつとしがみ付いている。

ざらりと――輝く目が頼政を見た。

示し合わせたかのように、ひょうひょうと不気味な鳴き声が響いた。風に煽られた虎鵜の声が、御殿を震わせる。

「出、出たあ！」

頓狂な叫び声上がる。吹き付ける風と虎鵜の恐ろしい鳴き声に、弁官の一人が耐えかねたように逃げ出したのだ。手にしていた書簡を投げ出し、一目散に走り出す彼につられて、あちこちから叫び声上がる。押し合う彼らの背にぶつかり、篝火がゆらゆらと揺れる。

「いるぞ、あそこだ！」

「ばけもの、ばけものだ！」

一旦起きた混乱は容易には収まらない。たちまち恐慌が辺りを満たしてゆく。もともと、野次馬気分で押し掛けた者たちだ。しっかりと結末を見届けてやろうと心を据えていた者はそう多くなかったことが災いした。腰を抜かすもの、逃げ出すもの、悲鳴を上げるもの、殿のまわりはにわかに騒然となる。

そんな中でも頼政は己を失うことなく、しっかりと地を踏み締めて弓を構え、矢筒より抜いた

山鳥の尖り矢を番えた。視界の先に屋根上の黒い影を捉え、ぎりり、と左手に込められた弓の撓み、弦の軋みが耳を擦る。

魔を討つ鏃の先は、御座所の上、黒雲と共に張り付いたうずくまる黒い影を狙う。

「南無八幡——」

何度となく繰り返された八幡太郎の故事に倣うように、頼政は自然と八幡菩薩への加護を願っていた。研ぎ澄まされた意識の中、引き絞った弓の先に、射抜くべき標的をしかと見定める。

（あれは——）

良く良く見れば、屋根上のあやしき影は随分と小さいものだった。頼政の半分ほどしかない背丈の、小さな、小さな——手足。

頼政は驚愕に両の目を見開いた。ばけものなどではない。あれは、あそこにいるのは、（童ではないか！）

薄汚れ、今にも泣き出さんばかりに震えているが、間違いない。あれはばけものではない。人だ。黒雲のように揺らめいているのは、檻樓めいて汚れた黒い衣だ。四肢の強張りは漲る力ではなく、怯えて必死にしがみつくゆえの身震い。ちらと見える白いものは爪ではなく剥き出しの手足。ぎらぎらと輝いているのは、恐怖に見開いた二つの瞳だ！

頼政は咄嗟に視線だけをずらし、軒廊の雅頼を見る。

怯える公卿たちの中、雅頼だけはしつかと頼政を見ていた。穏やかな、線ばかりで構成されたまるこい顔の頬笑みは、万事抜かりなしと――そのように雄弁に語っていた。

（――雅頼……っ！）

頼政は全てを察した。これも雅頼の采配なのだ。いもしないばけもの退治に、より確実な公算を付けるために。万が一にも疑いを差し挟ませぬために、その標的に生きた人の子を用いたのだ。

そうだ。ばけものを射抜いても、血が残らぬでは、軀が残らぬではその証にならぬ。だからと言つて獣を仕おうにも、屋根の上に括りつけることもできぬし、そもそも矢を向けられ黙つて射られるのを待つてゐる獣などいない。警備の厳しい殿中で、あらかじめ殺しておいた死骸を使うこともできぬだろう。

ではどうするか？ 怯えと畏れで満足に動けぬ幼子を用いるのだ。外見などに拘る必要はない。ばけものが哀れを誘うために幼い娘の姿に変じたのだとでも、方便を立てればいいのだ。恋多きかの左少弁の元には多くの色子が抱えられていると聞く。どこかの娘に産ませた、使ひ捨ての童だろう。頼政にそのことを告げなかったのは、いかなる弓の名手として淡々とばけものを討つのは不自然だとの思いから、この茶番に信憑性を持たせるためか。

だが、いまの頼政にとってこれはあまりにも予想外過ぎた。鏃がぶれ、視界が汗に滲む。頼

政は動揺を押し隠すためぎりりと齒を噛み締め、弦をさらにきつく引き絞った。

苦しむことのないよう、せめて一息に。狙うは董の頭だ。

じつと屋根上のばけものにとらみ合い動かぬ頼政に、周囲は怯えながらも固唾を飲んで見守っている。

（……射ねば、ならぬ）

たとえ何が標的であろうと、頼政の弓はそれを討つ。それが彼の務めであつた。

この一矢には頼政の体面だけではない。仲綱をはじめとした息子たちや一門、郎党たちの行く末も掛っているのだ。帝の命を受けた身、辟邪の武にばけもの退治が叶わぬでは、もはや頼政に出世の道も、みやこでの居場所も残されていない。それどころか、摂津源氏の重鎮である頼政がこの弓をしくじれば、義朝や他の源氏の者たちにもその不名誉は振りかかるだろう。

部門の誉れ、源氏の弓——頼政の肩にはそんな名前の魔物がしがみ付いていた。

じわりと脂汗が吹き出し、眼に入る。歪む視界、軋む弓。引き絞った弦がきりきりと軋み、もはや猶予なしと告げる。

「頼政さまあ！」

早太が声を振り絞って叫ぶ。あの若者は、頼政がいまにも屋根上から襲いかからんとしている凶暴なばけものと、僅かな隙も見せぬよう対峙しているようにでも映っているのだろう。

だが違う。怯え震えている無力な童と、それを射殺すのを躊躇う頼政がいるだけだ。

「南無八幡大菩薩——！」

突如として膠着を破ったのは頼政の大音声であつた。弓というのは留め置くものができぬものだ。一度引けば、後は放たねばならぬ。そしてこの祈りの声は、果たして何を思つて放たれたものか。びようと放たれた矢は、夜闇を鋭く裂き貫いて——

(しまった……！)

射た刹那、頼政は手ごたえのなさをはつきりと感じ取つていた。懊悩と迷いが手元を狂わせ、たか、童の生きたいという想いのなせる奇跡の業か、魔を孕んだ風が悪戯に矢を曲げたか。頼政の弓は、射抜くべき標的を外していたのである。

魔払いの山鳥の矢は頭を抱えうずくまる童の頭を大きく外れ、その脇腹を貫いて、紫宸殿の檜屋根に突き立った。

「おお……っ!!」

事態を見守つていた公卿たちから、一斉にどよめきが上がる。離れた軒廊の上に居た彼等の中に何が起きたのかを正確に把握していた者はいなかったが、頼政が矢を放つても、ばけものの叫びが聞こえなかったことから、何かの異常があつたのを察したのである。

その場で誰よりも呆然としていたのも、頼政であつた。

「……………あ、……………ぐっ」

屋根上の幼子は、脇腹に刺さった矢を掴み、苦悶の呻きをあげていた。黒い衣を引きずり、屋根を這って逃げようとする。動くということは生きており、であるならば、何かを喋ることができはずだった。それはつまり、事が露見する可能性を残しているのである。

これは明らかに、頼政の失態であつた。

一矢を損じたのであるから、今すぐにでももう一本の矢を番え、放たねばならぬ。だが頼政はその事も忘れていた。

「頼政卿……………！」

動揺していたのは雅頼も同じだった。まさかあの源頼政が、狙いを誤るなどということは想像もしていなかったのだ。武士としての心根などまるで知らぬ雅頼だが、頼政の腕は信頼していた。重責を負ってなおこのような大舞台で失態を犯すような者ではない事を、誰よりもよく理解していた。万一のことがあろうとも、二矢めを持って抜かりなくばけものの頭を射抜き、絶命させて見せるであらうと信じていたのである。

軒廊の欄干へと身を乗り出した雅頼が、絶望と共に紫宸殿の屋根を見上げたその時である。

——ずり、と。

怯えに身体が竦んだか、腹に突き刺さった矢の痛みには耐えかねたか。あるいは単に足を滑ら

せたか。屋根上で数度身を竦ませた童は、支えを失つて大屋根を滑りだしたのだ。

檜皮葺の屋根はひとたび滑り出した童の体を支えることなく、たちまち転がる小さな身体は、廂の上から飛び出し、かすかな悲鳴と共に紫宸殿の屋根から落ちる。

あまりにもあつけない、小さな音を立てて、童の体軀が固い地面にぶつかり、跳ねた。

「——やった！ み、見事、見事なり、頼政卿！」

軒廊の上であることも忘れ、雅頼は咄嗟に叫んでいた。

あの高さから落ちれば、命は永らえても助かるまい。どうせこの暗闇だ、矢がどこにどう当たったかどうかなど分かりはしない。傷が浅かろうと、落ちる時に軀から抜け落ちてしまったとでもどうとでも言い訳が付く。

ばけものは確かに、頼政の矢に射殺されたのだ。これでそう格好がつく。一度は呆然となりながらも、一瞬のうちにそこまで打算を巡らせ、確信しての叫びだった。

一方、頼政は完全に放心していた。落ちてきたばけものの生死を確かめ、止めを刺さねばならぬことも忘れて。まるで阿呆のように、ただ、屋根を転げ落ちる童の姿を見ていた。

小さな身体が檜皮の上を跳ね、しがみ付こうともがくも空しく、宙を舞う。童の年頃はちょうど、ことし十二になる頼政の娘と同じくらいだ。その、幼い子供が屋根を転げ落ち、頭から地面に叩き付けられる、一部始終を。頼政は呆然と見つめていた。

雅頼が思い描いていたように、仕留め損ねたことを気付かれぬと安堵していたわけでもない。ただただ、強い後悔があっただけだった。

「これは一体何だ。なんとしたことか、この騒ぎは——」

渾然となる南庭に、突如のざわめきが続く。宜陽殿の方より重々しい声が響いたのだ。

人垣がばつと左右に割れ、そこから姿を現したのは誰あるう、新院崇徳の覚えめでたき宇治左大臣、「悪左府」藤原頼長である。膨大な和漢の書に通じて学識の高さを賞賛されて「日本一の大学生」と呼ばれ、内覧の地位まで得、いまや兄である関白藤原忠通に代わって藤原氏の長たらしんとしている彼は、頼政の仕える美福門院と対立する政敵であった。

「な……!?」

突然の乱入者の顔に、雅頼は今度こそ青褪めた。今日この場は雅頼が入念な準備のもとに整えたのである。邪魔が入ることなど無いはずだったのだ。衛士も弁官たちも息のかかったものを集め、事前に許した者以外を立ち入らせぬように言い含めていた筈である。それがなぜ、いったい、どうして——。混乱の極みに達した雅頼は、いよいよ最悪の事態を覚悟する。

実のところこの日、頼長が内裏を訪れたのは全くの偶然であつた。執政の座についたばかりの頼長は意欲に燃え、学術の再興につとめ、弛緩した政治の刷新を目指していた。聖徳太子の十七条憲法を規範に、乱れた天下を撥乱反正すると豪語する彼は、今日も寝る間を惜しんでひ

とり政務に励んでいたのである。

「こ、これは、宇治左大臣どの……このような夜半に、どうしてこちらに……」

「其れは我が聞きたいことである。説明せよ。この様に内裏に集まり、そちらは何をしていたのか」

自他ともに厳しく、綱紀の乱れには特に過敏な頼長である。悪左府の名の通り、苛烈な気性を見せて公卿たちと問答を始める。

そんな中、小さな呻き声が頼政の心を引き戻した。

「う……、あ」

声は地面に落ちた童からだ。地面を大量の血で汚しながら、童は苦悶を上げて身を起こそうともがいていた。

（――まだ、息がある）

頼政は思わずその場を飛び出していった。篝火が爆ぜ、ひときわ大きく燃え上がった炎が、闇の中に小さな身体を映し出した。

赤く血に塗れた童は、顔じゅうの穴から血をこぼしていた。少しでもばけものらしく見せるためか。擦り切れた墨染の黒い衣を着せられただけの童――否、娘である。

露わになった衣の下から覗く、細い肢体は柔らかく、泥に汚れてなお、白い。艶めかしい白

い脚先は、土を踏んだ事もないように清らかだ。

まだ娘が生きている——その事実に、雅頼が悲痛なうめき声を絞り出し、頭を抱える。最悪の出来事が続いてしまった。かの悪左府頼長がこの事態を看過する筈がない。ただちにあたりを檢分し、策謀を看破して、内裏で娘を射殺すなどと一体何の企みかと、激しく関係者を糾弾するに違いなかった。

万一娘が命をとどめ、口をきけば全てが露見し、薄雲中納言ともども雅頼も身の破滅である。それどころか、彼らの後ろ盾となつた黒幕たちまでその地位は危うい。

「ばけものめ！ まだ息が有るかあ！」

その時である。凍り付いた場の空氣、まるで意に介さず飛び出した巨漢がいた。早太だ。字の通り、猪のごとくまっすぐに、若い郎党は地面に転がる娘の元へと走つた。薙刀は邪魔だとばかりに放り捨て、頼政を肩で突き飛ばし、眼前の獲物に鼻息荒く、目をらんらんと輝かせて腰から短刀を引き抜く。

篝火の中に、ざらりと白刃が閃いた。

「みやこを騒がす、おぞまじきばけものめが！ 俺が仕留めてくれるッ！」

「……………ウ、あ」

呻く娘は、焦点の合わぬ目で折つた脚を引きずつて逃げようとするが、早太はまるで意に介

さない。地面に転がるその身体を引き寄せて、振り上げた短刀を突き立てる。

「止め——」

「うおおおおおおおお!!」

止める、という、弱々しい頼政の静止の叫びは、早太の雄叫びに掻き消された。まるで大猿のような遠吠えが、びりびりと内裏を揺らす。

鈍い音がして、娘の腿に短刀が根元まで埋まる。地面を這って逃げようとした娘の右脚から下がねじり折るように斬り飛ばされ、くるくると宙を舞った。

「あ……………」

白い脚の断面から桃色の肉と白い脂肪がはみ出し、一瞬遅れて血が溢れだす。

突然と、膝から下のなくなった脚を見下ろし、娘が表情をゆがませる。その身体に馬乗りになつて、早太は頼政が与えた短刀でもって、娘の胸を骨ごとま二つに断ち割っていた。

がらあん、と早太の投げ出した薙刀が地面に転がる。

「捕まえたぞ! 逃がさぬ、逃がさぬぞ、ばけものめ!」

早太は満面の笑みと共に、もはや這う事も出来ぬ娘の身体を地面にねじ伏せた。髪を思い切り掴み、血まみれの短刀を恐怖に竦む娘の首へと押し当てる。

ぷつり、と白い首に血が浮かんだと見えた次の瞬間には、早太は躊躇なく娘の頸を跳ねてい

た。千切れた首から血が噴き出し、ごぼごぼと、気道から漏れ出る空気がそれを泡立てる。

白目を剥いて動かなくなった娘の頸を、振り上げ、早太は吠える。

「オオオオオオオオオオオオオオ!!」

その雄叫びは、歓喜であつた。帝を脅かし、みやこを襲つた恐るべきものの首級をあげた——その感動に早太は涙さえ流して喜んでいたのである。

今まさに、彼は狂乱の神話の中にいる。早太が殺しているのは無力で哀れな童女ではなく、みやこを騒がせた恐るべきものであるのだ。

早太はなおも何度も何度も短刀の刃を返し、娘の身体を切りつける。足に続いて腕も切り落とし、胴を一つに割つて心臓に白刃を付き立てる。続けて、下腹を裂き胎を切り刻んで検めた。万が一、ばけものの仔が潜んでいてならぬからとでもいうのだろう。

「やった! やりましたぞ、頼政様!」

娘の身体が九つに千切れるまでに存分に斬り刻むと、早太は敬愛する主人より拝領した血塗られた短刀と、落とした娘の首を掲げて破顔する。返り血を浴びる若者の凄惨な笑顔に、公卿たちが顔をそむけた。

ぼた、ぼた、と滴る短刀を掲げ、早太は頼政の元に駆け戻る。

「頼政さま! やりましたぞ! 確かにみやこを騒がす化けもの、討ち取りました!」

返り血を浴びた身体を篝火の中に浮かび上がらせ、肩を大きく上下させ、ふいごのように白い息を吐き出して。満面の笑顔で早太は叫ぶ。

まさか正気を失ってしまったのではないか——頼政がそう疑いたくなるほど、この若者は誇らしげだ。ただの無力な娘を殺したことが、この世一番の大業だともいうように。

「お……おお！ 見事、見事、頼政！」

早太の様子を見て、雅頼がすぐさま叫び、庭へと飛び出した。彼にとつても千載一遇の賭けであつたろう。

今の機会を逃しては、もはや全てを有耶無耶にする手段はない。

「みごとだ頼政！ 良くぞ、この恐ろしきばけものを討ち取った！ 辟邪の武、摂津源氏の証、しかとここに見たぞ！」

己でも何度となく声を上げながら、雅頼はしきりに回りの者たちに合図を送る。最初、あまりの事に呆けていた公卿たちも、やがてそれに気付いて、口々に歓声をあげはじめた。

「な、なんと——何と恐ろしい、恐ろしいばけものであつたか！ それを、み、見事一矢にて射殺すとは——！」

「そ、そうじゃ、なんと、禍々しい……見よ、その恐ろしい手足——虎のようではないか！」
「うむ、なれば身体は、巨きな猪むじなのごとく——」

「あの恐ろしい口はどうじゃ！ 人とも猿ましろともつかぬ不気味な顔をしておるではないか……」

「お、尾は蛇くちなわ！ 蛇であるぞ！」

口々に、皆が、見えてもいなかった恐ろしいばかりの姿を叫び立てる。碌に打ち合わせも出来ていないためか、出鱈目に述べられるばかりものの姿は、頭は猿、手足は虎、尾は蛇と、まったくちぐはぐで、とても生き物の姿とは思えぬものであった。

息を荒げ、娘の死骸を抱えて仁王立ちとなる早太の元に、ぱっと雑式たちが駆け寄り、娘の頸と身体を奪うように筵に包んだ。

同時に雅頼も頼長の元へと駆け戻り、面食らった様子の悪左府の視線を遮る。

「さあ、左府どの、どうぞこちらへ……！」

「待て。話は終わっておらぬぞ。そちらは何をしておるのかと聞いておる。此れは何の騒ぎであるか。答えよ、よもや怪しげな企みではあるまいな？ 我の前でそのような——」

「さあ、さあさあ！ すぐにご説明いたします、ともあれ今はお早くここを離れましょうぞ！ ここは危のう御座います。確かに仕留めましたが、あのような恐ろしいばかりのもの、いつ何時呪詛を吐いて再び暴れるとも限りませぬ！ さあ、お早く、お早くこちらへ！」

雅頼と公卿たちに囲まれ、困惑の中遠ざけられてゆく頼長。

その間も、まるで、報奨を賜った時のように。

誇らしげに娘の頭を掲げ、下ろそうとしない早太。

その手に下げられた哀れな娘の頸は、事切れたまま、じいつと頼政を睨んでいる。
斬り裂かれた眼窩からこぼれ落ちかけた眼球が、ぴくりと――動いたような気がした。

五 鎮西八郎為朝

頼政の名はたちまちみやこじゅうの者達の知るところとなった。

頭は猿、手足は虎、身体は猪、尾は蛇。

——そして鳴き声は虎鵲。

みやこの夜を騒がした恐ろしいばけもの、鶴と呼ばれるようになった怪物を、一矢のもとに射殺した英雄を、多くの人々が褒め称えたのである。流石は辟邪の武、摂津源氏の棟梁である、辻を行く者たちは噂しあつた。かの夜の頼政の偉業はまたたくまに宮中の者たちの知るところとなり、ばけもの退治より数日を経てついに帝のお耳にも届くこととなった。

宮中を脅かした恐ろしきばけものが討たれたことに近衛帝は大層お喜びになった。そして頼政は帝のお住まいである清涼殿へと召され、帝より直々にその勲功を労われることとなったのである。

頼政が御座所へと参内したのは、政務が終わった夕刻のことであつた。清涼殿の東庭、半分の月が山の端に顔を覗かせる中、正装した頼政は緊張の面持ちで畏まる。

むろん、いまだ従五位下の頼政が直に帝にお目通りを願うことなどできるはずもなく、直接お言葉を賜ることも許されない。

それを仲介するのは内覧の役にある宇治左大臣、藤原頼長であつた。

「摂津頼政。此度の働き見事であつた。宮中にありし怪異を討ち、みやこに安寧を取り戻したこと、主上は大層お喜びであられる」

「は……！」

頼政はただ伏して、そのお言葉を賜るのみである。

頼長が帝のお言葉を伝えるなか、頼政は近衛帝が御簾越しに何度か、粘つく咳をお漏らしになるのを聞いた。控える近衆を呼ぶ御声も弱々しく、お噂以上にお身体を悪くしている様子であつた。

ばけものの噂とは別に、帝が長くお伏せりになつていふ話は頼政も聞いていたが、その後様子は想像以上に悪いと見える。それでも君臣の功を労うため、病の身を押しして頼政にお会いになるのであるから、まこと皇の貴きお人柄という他は無い。

「貴殿と摂津源氏の一門、なお一層の力を尽くし、みやこを守る勤めに励むようにと帝は仰せであるぞ」

「有難きお言葉にございます」

頼政が頭を垂れ、そのお心使いに深く感じ入っていると、頼長がつと腰を上げた。帝の近衆より一振りの太刀を頂戴し、頼政に差し出したのである。

「これなるは、主上より貴殿に賜られる此度の報奨である。号を獅子王。あやしき怪異を退けた、貴殿の武勇を讃える宝刀であるぞ」

頼政に与えられたのは、黒漆塗糸巻の拵も見事な、三尺五分五寸の見事な太太刀であつた。黄地錦の糸巻の拵に、木瓜を象つた練革鐔、これに橙の錦包の太刀緒が見事な調和を添えている。およそ拵や柄にまで糸巻きの拵えを施す美しい様式は、頼政も未だ目にすることがないのであつた。

「獅子は大陸の遙か西において百獣の王とも称される勇猛な獣である。あやしき怪異よりみやこを守る武勇の証としては、此れ以上ないものであらうぞ」

悪左府がちらと博学ぶりを披露し、公卿たちがおおと感嘆の声を漏らす。

「……………」

頼政はただ、大太刀の前に伏すばかりであつた。強く湧き起こる慙愧の念が、彼の胸の内を占めていたのだ。

（……俺は、いったい何をしている）

虚構で塗り固められたばかりもの退治で、帝に取り入るなど、神仏を恐れぬ不遜であらう。目

の奥に焼き付いて離れない、骸となった娘の視線が、頼政を深く懊悩させる。

無抵抗の童女を射殺して、それを勲功と誇る。

それが辟邪の武、摂津源氏を率いる者の名誉なのか。ぎりりと噛み締めた歯が軋みを上げた。頼政とて、昨日今日宮中に仕え始めたわけではない。政治というものが綺麗事だけで済むものなどとは、口が裂けても言えぬ。しかし、物心ついてよりずっと励んだ弓馬の道は、罪なき娘の命を犠牲に、まがいものの栄誉を得るためものだったというのか。

（俺は、こんな……ッ）

帝直々のお召しである。まさか断るわけにもいかず参内こそしたものの、帝がそのお優しい言葉をかけ、公卿たちが口々にその武勇を褒める中、頼政の懊悩は深まるばかりであった。

「……いかがした。何ぞ不満でもあるのか、頼政よ」

その胸の内を察したのか否か。悪左府がじろりと頼政を見下ろした。冷徹な、冷静な、為政者の視線である。若くして藤原長者たらしとする彼の見識をもつてすれば、頼政達の拙い隠し事など一目で看破されてしまいそうに思えた。

（動じるな。気付かれては、ならん。……事は俺だけのものではない。露見すれば、必ずや大きな禍根となる）

それだけは、避けねばならない。

「……慎んで、拝領いたします」

悲壮な決意で必死に動揺を押し隠しながら、頼政は慎重に大太刀をおしただいた。

拝謁はほどなく終わりを迎えた。帝の前を辞し、頼政が御殿の前を半ばほどまで降りたときである。軽やかな鳴き声が東庭に響いた。

「あれ、この声は……杜鵑かや」

帝がお喜びの声を上げる。

丁度、時は四月も十日を過ぎたばかりである。どこからともなく訪れた一話の杜鵑は、東庭の呉竹に留まって、さらに二度三度と鳴いた。山の端が朱から藍へと変わる刻限、弦月の明かりの中を彩る美しい鳴き声に、公卿たちもおおと顔をほころばせた。

ここで頼長、ふと頼政のほうを向き、

「ほととぎす 名をも雲居に あぐるかな」

と詠んだ。杜鵑がその美しい声を雲間に響かせるように、頼政が勇名を挙げたことを褒めたものである。しかしその真意は——あの日あの晩、ばけもの退治の現場に居た頼政の胸の内を測るものであった。

なんと狡猾なことか。悪左府は頼政が拝謁を終え、気が緩む一瞬を狙いすましてその真意を探ってきたのである。

何故あかも都合よくばけものが現れたのか。摂津源氏という辟邪の武門であれど、いまだ院や御所への出入りを許されぬ頼政が、何故それを準備万端で迎えることができたのか。どうして内覧の地位にある自分がその段取りを知らされておらぬのか。

悪左府が頼政に向けているのは、政敵、美福門院への警戒と、その走狗たる頼政への明らかに疑念であった。

摂津源氏の棟梁、源頼政の真意は如何に。その実力、まことあやかしを払うに足るものか。悪左府頼長は、頼政の返答如何でたちまちそれを暴き立て、即座に彼等の企みを白日の下に晒さんとしていたのである。

しかし頼政、これに対してすかさず右の膝をつき、左の袖を広げて、夕空にかかる弓のような月を見上げて歌を返した。

「弓張り月の、いるにまかせて」

「……ほう」

悪左府は眉を跳ねさせて感嘆の声を漏らした。咄嗟の事にも動じず見事な歌を返した頼政に感心しただけではない。

頼政の返歌が、ただ月のある方に弓を射ただけであると、謙虚な姿勢を貫いたものであったからだ。これはひとえに、公正無私に宮中警護の任に励むことを意味し、身命を賭して帝にお仕えすることを誓うものでもあった。

即座にこう返した頼政の心は、まこと二心なく帝への忠誠の証であった。

「これは、見事な……」

「流石は頼政卿……歌壇での評判はまことであつたか」

居合わせた公卿たちが惜しみない称賛を送る。これには帝もいたく感心され、御簾の向こうより頼政を思い遣る再度のお言葉をおかけになった。

「ふむ。見事。弓矢を取って並ぶもの無きどころか、歌の道にも優れるとは。此れぞ摂津源氏の誉であるな」

悪左府頼長もまた、これをもって認識を改め、頼政の実力を認めたのである。

だが、はたして事実を知る頼政の胸中はいかばかりであつたろう。

咄嗟の機転などではない。討つたはずのばけものはおらず、無残に命を散らした童のことを思い、頼政はただただ、心根の素直なところを吐露したに過ぎなかった。

しかし頼政の真意は人に知られることなく――ばけものを退治した頼政の名は、彼の預かり知らぬところますます広く知られることになるのである。



――開けて久寿二年（一一五五年）。

この年、頼政はみやこに常備された兵器を管理する役目、兵庫頭に任じられ、ますます宮中になくはならぬ存在となっていた。職務もますます忙しくなり、知行との往復で忙しい仲綱に代わつて、次男の頼兼といった息子達にも徐々にその手伝いを任せるようになっていた。

「もし、ここな屋敷は摂津源氏の近衛河原屋敷でよろしいか！」

豪快極まりない声が近衛河原屋敷の門を叩いたのは、そんな折の事だ。

俄かに騒がしくなる門の方に頼政が目をやれば、制止する郎党たちをもものともせず、一人の男がずかずかと屋敷へと上がり込んでくる場所であつた。

「ええい、止まれ！　っ、止まらぬかつ！」

「おお、そこに見えるは摂津源氏の棟梁、源頼政殿で相違ありませんか！」
喚く連に与をまるで気にも留めず、目を輝かせ男が叫ぶ。

その声の大きいこと言ったら、庭の池にさざ波が立つほどであつた。

背には山のように大きな荷物を背負い、片手が塞がついているというのに、渡辺党の武者たち、大の男が六人がかりになってしがみつくのを氣にも留めぬ。それどころか男は彼らを軽々と持ち上げ、子猫でも放るようにぽいぽいと投げ飛ばす。

屈強な渡辺党の猛者達がまるで子供扱いだ。数間も宙を飛び、庭に転がされて目を回す郎党達に、さしもの頼政は驚きを隠せない。

「いかにも俺が頼政だが、そなたは……？」

「おう、これは失敬、ご挨拶が遅れましたな！」

赤銅色に焼けた太い腕でどんと胸を叩き、男はにかりと白い歯を見せる。

「陸奥四郎、源為義が一子、鎮西八郎為朝が参りました！」

源為朝——義朝の異母弟は、そう言つて大きな声で笑つた。

……成程、名乗りの通り、彼は若い頃の為義によく似た雰囲気を持っていた。

良く見ればまだ二十歳にも満たぬ冠者であるが、とてもそう呼ぶのは憚られるほどの偉丈夫である。身の丈は七尺をかるがると超え、立ち上がれば屋敷の天井を突き破らんばかり。日焼けした肌は赤銅色、伸び放題の髭がまるで鬼のよう。分厚い胸板や胸元や丸太のような手足には無数の矢傷があり、既に歴戦の風格すら窺わせる。

そして、何よりも驚くべきはその腕だ。鬼と見まごうばかりの太く大きな手は、左手が右手よりも四寸ばかり長いのである。これは、ひたすらに弓の鍛錬を続けた者に現れる特徴であった。見かけだけではなく、真に鋼のように鍛えられたものであることをありありと示しているのである。

異母兄、義朝の面長で細やかな立ち振る舞いの京貴族にも好まれそうな容貌とは異なり、太い眉に日焼けした頬、鋭い瞳という豪傑の造作である。決してみやこの基準では美形とは言えぬものの、この男はなぜか目を離せぬ奇妙な魅力にあふれていた。

この男の笑う顔を見たいと、共に戦場で肩を並べたいと、そんな感想を抱かせるのである。迷惑に思うことこそあれ、心から嫌う事などできそうにない——そんな男であった。

「これは土産です、皆で食つてくだされ」

どしんと地を震わせる大荷物の中身は、どこで捕えたか、呆れるほど大きな猪の燻製の塊である。仏門の加護篤き京では獣肉食は禁忌とされ、穢れとしてすら捕えられている。頼政も少なくとも表向きはそう振舞っていた。

が、為朝はまるで意に介していない。郎党達の迷惑そうな顔もどこ吹く風、俺もご相伴に預かるとしように言い出し、土産のはずの燻製を勝手に引き千切って美味そうに齧り始めるのである。近くに居た郎党に酒までねだり、いよいよ手がつけられぬ。

獣肉のことを抜きにしても、すくなくともこのような振る舞いは供のものにさせるべきであつて、仮にも河内源氏嫡流、為義の子である為朝のような立場のものがするべきではない。頼政が呆れていると、為朝は大きな声で笑うのだった。

「これは失敬！ なにしる鎮西は荒れておりますからな！ 能襲どもも隙あらば卑劣に襲ってくる！ そのような所でやあやあ我こそはなどと叫んでも、誰が主だ徒だと言つておつては始まらんです。ともに火を囲んで飯を食い、轡を並べ戦場を駆ける！ これがかの地の流儀でありますぞ！」

そう言つて、大きな猪肉の塊をみるみる平らげてゆく。まったくもつて呆れた男であつた。これには頼政もすつかり毒気を抜かれてしまった。不思議と、為朝の所作を怒る気持ちになれぬのだ。如何にも奔放なこの男には、どこにも無理をしている様子がない。

ただ風が吹くまま、あるがままの自然体で、笑い、食べ、飲み、話すその姿は、頼政達の心を不思議にとらえて離さぬのであつた。

「頼政殿もいかがですか！ 美味しいですぞ！」

「……うむ、頂こう」

もはや笑うしかない。苦笑しながらもそれに応じる頼政である。こうなつては威厳も家格もあつたものではないと、頼政は郎党達にも加わるように言つて、自分は為朝の向かいに腰を下

ろした。

そも、源氏の武門とは本来こういうものではなかったか。坂東に根付く武者達は皆、広大な野辺に馬を駆け、弓を引いて励み、夜には火を囲んで酒を酌み交わす——そんな日々を送っているのだ。みやこに近い摂津にあつても、そんな気風はまだ多く残っていた。

（俺も大概、みやこに染まっていたのか）

しかしこればかりは、みやこに面した地域に所領を持ち、長らくの人生を権謀術数渦巻く宮中に置いていたゆえのこと。頼政を責めるには値しないだろう。

いつしか場はなし崩しに宴席の体を取り、頼政は為朝と共に杯を重ねていた。

この為朝、母は摂津国江口の遊女といい、兄弟の末の弟だというのに幼いころから手のつけられぬ暴れ者で、歳の離れた兄達を泣かしてばかりだったという。とかくやることなすこと規格外、百人を相手に喧嘩して全員河に叩きこむなど、常識では測りかねることばかり繰り返した。さしもの父為義も扱いかねて、まだ十をいくつか過ぎたばかりの為朝を、厄介払い同然に鎮西へと送り込んだのである。彼もまた、義朝とは別の意味で、遠ざけておきたかった男なのだろう。

この頃の鎮西は、坂東になお比して未開の地である。朝廷の威光が届くのもせいぜいが太宰府まで、それより南はまったくの魔境と言つていい。実質は勘当同然の扱いであつただろう。

しかし為朝は疎まれているとも知らぬままこの父の命を忠実に守った。肥後国阿蘇郡にて平忠国の娘、白縫を娶ると、鎮西総追捕使を自称して九州全土を暴れ回り、菊池氏、原田氏といったかの地の古豪達と合戦を繰り返すこと数十回。次々と城を攻め落とし、その領地を奪い取って、わずか三年でこの鎮西をほぼ平定したのであった。

この狼藉に溜まりかね、香椎宮の神人が朝廷に訴えたことで、ようやく為朝の行いが明るみに出た。為朝は勅命によるものと言い張っていたが、そのような事実はなく、結果的にこの狼藉は為義の責任問題とされたのである。これを理由に為義は検非違使の任を解かれ、為朝にはみやこに出頭するよう宣旨が下ったのであった。

みやこに呼びもどされた為朝、詮議の場でも相変わずであった。居並ぶ重鎮を前に堂々とこれは自分の独断で父に咎はないと釈明し、あと半年もあれば九州をあまねく平定できたのだと悔しがってみせる始末である。

「——その時の親父殿の顔といったら、まったく愉快なものでありましたな！」

まこと、世の常識では測りかねる、まるで絵巻物の中から出てきたような、豪快な荒武者であつた。

さて。既に述べたとおり為朝の父は河内源氏嫡流の源為義である。

鳥羽院や近衛帝との距離を遠ざけられた為義が新たな後援者を求め、新院崇徳と悪左府頼長

に接近していることを頼政は知っていた。実のところこれは美福門院に通じた関白・藤原忠通による源氏の隔離工作であり、為義の検非違使解官も、美福門院と信西、忠通らの頼長失脚工作の一環とされていた。遠く坂東での為義、義朝親子の争いも、元をたどればそこに因を發するものである。

近衛帝を擁する美福門院、関白忠通らと新院崇徳を報じる悪左府頼長。両者の対立は日ごと増す中で、現在の頼政の立場もまた微妙なものである。

頼政の後ろ盾である美福門院は、近衛帝の母として新院崇徳を酷く疎んでいる。今後、帝と新院の対立が決定的なものとなれば、頼政もまた、美福門院の下、近衛帝陣營の戦力として数えられる立場にあるのだ。

つまりこの為朝の来訪は、頼政の動向を窺うためのものであると考えるのが自然であつた。為朝自身も、鎮西より屈強な二十八騎を連れて新院の元に駆け付けたという噂である。

頼政がそれとなく為朝に探りを入れてみようとした矢先——、この若者はぐいと盃を干し、大きく首を振ってみせた。

「まったくもって、毎日つまらぬ話ばかり。誰某がどこそこに組した、某と某が手を組んだ、いや裏切つたと、ごちゃごちゃとせせこましい事ばかりで、まるで面白くない。これが天下のみやこであるというなら、なんとも息苦しくてかないませんな！」

為朝はばしんと膝を叩いて、頼政を見た。腰をおろしていても、やはり頼政からは見上げるような巨軀——まるで山が喋っているかのである。

「俺はあまり頭が良くない。そのような小難しいことは苦手です。それよりも頼政殿！ 此度、頼政殿をお尋ねしたのは他でもない。先年の鶴退治についてなのです！」

「……その話か」

頼政は渋い顔をするのを堪えられなかった。最近では大分機会は減ったとはいえ、一時は毎日昼と夜と関係なくその話ばかりを求められ、いい加減に辟易としていたのだ。

「頼政殿のお名前は、遠く鎮西にまで響いております。みやこを騒がせ、あろうことか帝の御身を脅かしたばけものを、見事一矢にて仕留めた、古今稀に見る弓の名手だと！ 剛弓の名では安房守清盛殿も有名ですが、俺もこう見えて、弓には少しばかり自身が有りましてな！」

言って為朝、ぎりりと拳を握って見せる。その力強いことと言ったら、頼政も目を疑うほどだ。いっそ、これが人の力かと疑ってしまうほど。坂東武者は並みの男が十人がかりでも引けぬ弓を使うというが、為朝の弓はそのさらに五倍の強さで張ったという、常識を外れた剛弓だという噂がまことしやかに流れている。

恐るべきはそれが誇張ではないことだ。彼は本当にそれを可能にする、人外じみた臂力を持っているのであった。

「そのお話を聞きましてな、是非一度、頼政殿とは弓比べをしたいと思っておりました！」

豪快に笑う為朝。頼政は驚きを押し殺し、冷や汗を流さぬように取り繕うので精一杯だった。

（……こやつが、敵に回るかもしれないのか）

日に日に対立を深める新院と帝の対立を思い、頼政は陰鬱に頷く。渡辺党は、仲綱は、そして自分は、勝てるのだろうか。武士が己の価値を疑うなどとはあつてはならぬことだが、その信念すら揺るがすほど、為朝の力は本物であった。

そんな為朝は、まるで子供のように目を輝かせ、頼政に話をねだるのである。

「頼政殿！ 鶴とはいいたい、どのようなばけものでありましたか!? 大層不気味で禍々しい姿をしていたと聞いておりますが！」

「うむ……」

どう答えたものか。為朝の純真な視線に困り果て、頼政はつい郎党達を見てしまう。無論のこと、彼等は何かを察してくれるようすはない。誤魔化すのはどうにも後ろめたく、さりとてこの場でさもあつたかのごとき作り話を出来るほど、頼政は口の器用な男ではない。

「まだ、みやこにそのようなばけものが居たというのは驚きです。俺はてつきり、そのようなものたちはもうとつくに狩り尽くされたと思っておりました。俺も先頃、鎮西で暴れていた折に、このように大きな大蛇に出くわしましてな！」

「……なんと？」

そんな頼政の胸中を知ることなく、大きく手を広げ、為朝は話し始める。それはまったく真実を疑いたくなるような、荒唐無稽なものだった。

曰く、彼が配下の二十八騎と共に、鎮西の山を越えようとしていた時だ。後方を進んでいた兵糧を運ぶ牛馬が荷車ごと突然姿を消すという事態が立て続けに起きたのである。為朝達は熊襲の襲撃を疑い、すぐに荷車の搜索を始めた。

そこに現れたのは、なんと七本の首を持つ大蛇であった。そのひと巻きは山を囲うほど大きく太く、ぎらぎらと輝く鬼灯のような腫の上には、二本の角まで生えていたという。

毒の息吹を吐き散らす大蛇にたちまち四人の兵が命を落とし、さらに二人が生きたまま丸飲みにされた。二十八騎の筆頭、荒法師の悪七別当や、劍豪・打手城八らが奮闘したが、大蛇の巨躯と鱗に阻まれ、ともに刃が通りもしない。

為朝はこれを見てすぐさま愛用の剛弓を構え、七寸五分の鏃を持つ槍のような矢を次々と射かけて七つある頭を次々に射抜いていった。六つ目の頭を潰したところで矢が尽き、為朝はなんと太刀を抜き、大蛇にうちかかったという。

そのまま組合、組伏せ、叩き、切り伏せること十と数合。大蛇も最後まで毒を吐いて抵抗し、さしもの為朝も意識が遠のきかけたが——仲間達の協力もあってついに最後の首を落とし、九

死に一生を得たのだった。

「その大蛇の鱗と言うのがまた馬鹿でかいものでしてな、ためしに三枚ほど剥いで牛に引かせましたが、動かないどころか牛のほうが目を回してひっくり返つてしまふ始末！ なかなか愉快なさまでしたぞ！」

からからと笑いながら、愉快そうに語る為朝。

まったく耳を疑うばかりの法螺話、とても信じられぬものである。頼政もこれを人伝に聞いたのなら一笑に伏しただろう。仮に目の前に本人がやつてきて話したとしても、それがこの為朝でなければやはり信じなかつたはずだ。

だが——楽しそうに話す為朝の言葉は、どうしても偽りには聞こえない。そも、彼が嘘などを吐く理由がないのだ。為朝は出世を求めている訳ではなく、たびたびの命令を無視して鎮西を暴れ回り、強敵との戦の日々にくそ生き甲斐を見出していた。まったくの天真爛漫な野生児、みやこでの官位や出世など気にもかけていないだろう。戦功や武勇を厭うことはないだろうが、それはみやこで求められるものとは全く別の性質のものと言つていい。

つまり、為朝は武名を広めることになど頓着していないのだ。そんな彼が、どうして偽りのばけもの退治の話をつくりあげ、対立の可能性の高い頼政に話す必要があるうか。

為朝が子供のように目を輝かせて語る武勇伝に、頼政はいつしか引き込まれているのだった。

「いや、この話、誰にしてもなかなか信じてもらえぬのです。上皇様は大層喜んでくださいましたがな。法螺話と思われるのはどうでも良いのですが、どうせなら同じようにばけものを退治した頼政殿にも話を窺い、その鶴とやらが一体どんなばけものであったのかを聞きたいと思いましてな！」

まるで少年のような屈託のない笑顔で為朝が訊ねてくる。いや。実際にそうなのだ。鎮西で戦に明け暮れ、歴戦を潜りぬけた屈強な豪傑であるが、かれはまだ十七、八の青年なのである。（……義朝どのも、あの若さで坂東を治めたのであったな）

頼政は気付く。彼は、頼政がずっと昔に忘れてしまった憧れの、神代の英雄のような人生を、そのまま送っているのだ。

まぶしいばかりの姿を前に、頼政はただ、胸の奥にわだかまる重苦しいものを感じていた。

「――すまぬが、その話はあまり好まぬ」

「ほおお、それはまた如何に？ 帝を脅かしたばけものともなれば、さぞ恐ろしく手強いものだった筈！ 臆したともなれば恥でありましょうが、そこに立ち向かい見事仕留めた頼政殿の勇氣、誇る者などおりますまい」

「……………」

疑うことを知らぬ為朝の純真さに、頼政は言葉に詰まる。

手が無意識に杯をあおり、懊悩が吐息となってこぼれた。

「……為朝殿は、あまりみやこの息苦しさには慣れておらぬようだが……ここで武名を誇るというのは、いろいろと窮屈なものだ」

「窮屈？ これはなんと、思いもよらぬお言葉ですなあ」

首を傾げ、顎を擦つてみせる為朝。これが雅頼や公卿連中の言葉であれば、間違ひなく皮肉であろう。しかしどうやら、ほんとうに為朝には分かつていないらしい。

「ここはそういう場所なのだ。強いということが、ただ強いというだけのまま置いてはくれぬ。名を立てれば、それは多くのものを集める力になるのだ。政と言う力にな。俺の弓は——それを褒め、慕う者たちを集める旗印とされる」

ゆっくりと、言葉を選びながらの頼政の話に、為朝は真剣に聞きいつていた。

武勇伝にまるで子供のような顔を見せるかと思えば——一転して思慮深く、頼政と己の立場を察している。まさに戦の子。もしもあと二百年——いや、百年でも早く生まれていれば、彼はまこと、生き残った最後の鬼や大百足を仕留めた英雄として名を残したのかもしれない。

だが、それを許されるには、今の京はあまりにも明るくなりすぎた。

天地初めの時より、常に人のかたわらにあった闇は、いまは遠く討ち払われ、いかなるげけものも居らぬことを明らかにしている。

為朝もまた理解しているのだ。これからみやこで起きるのは鎮西で夷敵やばけものを払う戦いではないことを。人と人の権謀、策謀に巻き込まれて、正義も善もなく繰り広げられる戦であることを。

そして。その上で為朝は、敵に回るやもしれぬ頼政に鶴の話聞きに來た。次に遭う時は戦場であり、これが今生の別れになるかもしれぬと知りながら。

「――為朝殿」

もし、全てのくだらぬ柵から解き放たれたとして。ふたたび一から人生を歩むことが許されたとして。自分はこの男のように生きることが出来るだろうか？ 頼政は己に問いかける。

恐らく、否。たとえ一から生まれ直したとしても、こう生きることができまいと、頼政は感じていた。性分なのだ。いかに振る舞ってみせても、己に似合わぬ行き方は歪みを生む。

（話すべきだ――）

そう思った。鶴の真実を、この男にだけは告げておくべきだと、そう思った。彼、鎮西八郎為朝であれば、たとえ真実を話したところで軽蔑などすまい。

（……違う。軽蔑などされてもよい。この男だからこそ、話しておかねばならぬことなのだ）己が、鶴退治を成した摂津源氏棟梁の源頼政であるということが。ただの虚構の武勇であるのだと。恐らく為朝はそれを聞いてもただ己の心のままに憤り、怒り、そして頼政のことを理

解してくれるだろう。

だが、だから話すのではない。赦されるから話すのではないのだ。

真実、本物の英雄を前に、虚構はその嘘を白日のもとに晒されねばならないのだ。

だが、だが。

「……………」

「どうなさいました、頼政殿？」

「いや……」

——だが。頼政はその続きを口にできなかった。

いまのみやここにどこに目が、耳があるか分からない。頼政の胸中に秘め置かれてさえいれば、それは彼の心を苦しめるだけのものではないが、喋るという事は誰かに聞かれる可能性を持つ。仮にここでそれを口にしてしまえば、為朝が決して口外せぬと誓おうとも、秘密は秘密ではなくなるのだ。もしこれが、新院方に広まってしまえば？ あの時、恨みがましい娘の、切り落とされた生首が脳裏をよぎる。

頼政の武名が偽りであり、その弓の腕の評判が地に落ちれば——摂津源氏、渡辺党の一門は行き場を失ってしまう。今の頼政の地位は、積み上げられた無数の勲功の上に成り立っている。その中核にあるのが、件の鶴退治であった。そこを揺るがされてしまえば、鳥羽院の寵愛篤き

美福門院の信頼も、頼政の武名に集まる郎党達も、失いかねないのだ。

為朝が不当に頼政を追ひ詰めることはないだろうということは確信できる。しかし、摂津源氏の棟梁、美福門院の意向をもつて近衛帝に協力するという立場がそれを留まらせた。

頼政の抱えた秘密は、もはや誰とも共有すること叶わず、墓場まで持つていかなければならぬのである。

(ああ……)

頼政は痛感する。

(俺は、いつの間にか、自分でも思いもよらぬほど、ひどく臆病で、おそろしく詰まらぬ男になつたのだ)

そもそも、鶴退治の真実など誰に話したところで、誰に軽蔑されたところで、どうでも良いはずだった。頼政のした行いは、それに相応しく、あさましくも非道なものだった筈だからだ。源氏が己の道を選ぶ自由をもたんだなどと義朝に偉ぶりながら、頼政は体面のために己を捨てたのである。

一門のため、皆の為と言ひ訳を繕ひ、今更それが明らかになることを恐れるなど——なんと卑劣で、矮小なことか。

そんなちつぽけなものを、守らねばならない。あの時、雅頼の言葉に反論を徹さなかったば

かりに。まるで他人事の振りをしていた自分が滑稽に思えてくる。この呪いを作り出したのは自分自身だ。自身のつくりだした呪詛に、頼政は縛られているのだ。

この迷いは、その呪いの苦しみであるのだ。

長い沈黙ののち、頼政はゆつくりと口を開いた。

「為朝殿」

「うむ？ なんですか？」

「俺からもひとつ尋ねたい。……おそらく、このままでは今のみやこで、新院と帝の戦は避けられぬであろう」

「でしようなあ」

「そなたの兄、義朝殿は、いまやそなたや父君とは離れ、鳥羽院の信頼篤き北面武士。戦となれば院は帝をお守りするため、義朝殿のお力を頼みとされるであろう。なれば、そなたは兄や為義殿と戦場で弓を向け合う事になるやもしれぬ。それを——どう思われるのか」

さて。それは真実、頼政の聞きたかったことであろうか。迷いが聞かせた、詮無き問いではなかったか。

為朝はしばし考え込んでいたが、やがてゆると首を振った。

「兄君にも困ったものだ。子が父に弓引くことなど、ありえぬことです。ですが——俺がこう

して、上皇様に惚れ込んでしもうたように、兄君にも帝や鳥羽院様のお力にならんとする理由
 がありでしょう。俺はあまり頭が良くない。政のことはまるで分かりませぬが、兄君は聡明
 だ。……その兄君が深く思案して決めたことです。道義にはもとれど、恨む理由にはなりません
 まい」

笑みと共に答える為朝。それはまったくの本心、心の底からの言葉であり、兄義朝を責め
 る心など微塵もないことが明かであった。

(ああ……)

まこと、この男は英雄なのだ。

兄弟と相争うこととなつてもまるで氣にかけた風もない。義朝とて表向きは冷徹に振舞つて
 いたが、父と袂を分かつことに血を吐くように義憤に耐え、私情を押し殺して我を貫いていた。
 しかし、為朝はその躊躇いすら感じておらぬ。

ただ、強き相手と良い戦ができればそれでよい——あまりにも奔放で豪快な、自由な魂を、
 頼政は心から羨ましく思うばかりであった。

結局、為朝は頼政の歯切れの悪い話にも眉一つ潜めず、丁寧にも礼を言つて辞していった。ち
 ようどその帰りに居合わせた早太はそんな彼を評し、いつものように大口をたたく。

「頼政さま！ あの手、鎮西八郎などと申していましたが——噂ほどではないようすな！

単身乗り込んできておきながら、頼政さまに臆してす（ず）逃げ帰るなど！」

「そうではない。そうではないのだ」

早太の物言いにうんざりと頼政は口を噤む。

こいつにはわかるまい。

正直、分かってほしくもない。頼政はそう思った。

六 ふたつの乱

久寿二年（一一五五年）。頼政の『鶴退治』以来、しばらくは快方に向かつていた近衛帝の病状が再び悪化したのはこの年の七月のことであった。たとえ治天の君として人の生死まで自由にすることは叶わぬ。生来病弱であつた帝は、激動の宮中でわずか十七歳の生涯を終え、崩御されたのである。

お若くして亡くなられた帝にはお子がなく、早急に次の帝を決めねばならぬ事となつた。

鳥羽院には崇徳の弟、雅仁親王がいたが、皇位継承とは無縁の遊興にふける毎日であつた。ことに昨今の流行歌である今様をお好みになり、朝な夕なと歌い続け、喉を潰すことも一度ではなかつた。鳥羽院もこのご様子をお嘆きになり、即位の器ではないとまでお零しになつたという。

そこで後継として名前の挙がつたのは雅仁親王のお子である守仁親王、近衛帝の姉であつた暲子内親王、また崇徳院のお子である重仁親王らであつた。しかし守仁親王はまだ幼少であり、父の雅仁親王を飛び越えての即位など例がない。暲子内親王とて女帝は称徳帝以来四百年に渡

つて例がなく、重仁親王に至つては、崇徳院の院政を阻止せんとする美福門院らの思惑によつて慎重意見が続発し、いずれも決め手に欠けていた。

そして、王者議定の結論は思わぬものとなる。雅仁親王のお子である守仁親王を即位させることを前提に、その中継ぎとして雅仁親王が後白河帝として即位されたのである。

この暴挙とも言える新帝擁立は、我が子を帝にという崇徳院のお心をひどく苦しめ、美福門院らとの関係をさらに悪化させるものであつた。新帝選定の議定に参加したのは関白藤原忠通、源雅定、三条公教ら、いずれも美福門院と関係の深い公卿たちであり、そこにどのような思惑が働いていたのかは考えるまでもない。また、守仁親王は生まれてすぐに生母を亡くし、美福門院の元でまるで実の子のように育てられていた。近衛帝を喪つた彼女の画策がどのようなものであつたか、窺い知ることはたやすい。

いかな寵愛深き美福門院の行いとはいへ、鳥羽院がこの女院の横暴を看過なされたことを訝しむ声もあつた。鳥羽院がなぜここまで、我が子であるはずの崇徳院を疎まれたのか——その真実は崇徳院のお血筋にあるとされるが、それはけして表沙汰にはならぬ秘密であり、事情を詳しく知るものは皆口を閉ざすばかりであつた。

こうして院でありながら政より弾き出されてしまった崇徳院のお心とはいかばかりであつたろうか。

皇に連なる血筋にありながらこの国の政に関わることもできず、ただ父鳥羽院のお指図のまに皇統より追い出されて日陰へと追いやられる。そんな新院のお心を案じ、その力になろうと奮起したのがかの宇治左大臣、**「悪左府」**藤原頼長であった。彼もまた藤原摂関家の長の地位を巡り、兄である藤原忠通と激しく争っていたのである。

帝と新院、藤原摂関家の内紛、これに院の寵愛する美福門院、高陽院らの女院たちを交え、宮中の混沌は誰にもその全容を窺い知れぬものとなっていた。複雑怪奇なる権力抗争はいや混乱を増し、波が重なりその高さ荒さを増すかのように、みやこを覆い尽くしていったのである。

事の発端は、長く病に伏され、ついには若くして御隠れになった近衛帝について呪詛の嫌疑が持ち上がったことであつた。ある時、この呪詛を行ったのが誰あろう、**悪左府頼長**であるという噂がまことしやかに語られたのだ。

むろんこれが真実かどうかは定かではない。しかし、儒学や律令を重んじ、論理を優先して慣例を無視する頼長の政治手法は、院近臣の中級・下級貴族の反発を招き孤立していた。和漢の書に通じた博識と優れた政務能力で辣腕を振るつた頼長は、同時に各所で恨みをかっていたことは想像に難くない。この噂が流れたのがちやうど妻の喪に服していた時期ということもあり、頼長は完全に宮中に戻る時期を逸してしまつたのである。

だが、開けて保元元年（一一五六年）、新帝後白河による新体制がまだ固まりきらぬ中、突如

として鳥羽院が病にお倒れになったことで再び事態は急変する。ご高齢であったとはいえ健勝の鳥羽院が床に伏せる中、院の後ろ盾を得て権勢をほしいままとしていた忠通、美福門院らはこれに激しく動揺した。美福門院らのいまの立場は全て鳥羽院あつてのものである。それを失つては公卿らの反発は必至であり、それはまた崇徳院、頼長らにとつては千載一遇の逆転の機会だった。

この時、病床にある鳥羽院は、新帝と崇徳院の間に起きる争いを見越して、五人の有力な北面武士たちの名を上げ、彼らを含む十名に祭文（誓約書）を書かせ、美福門院への協力を約束させていた。この中で、兵庫頭源頼政の名は、下野守源義朝、足利藏人判官源義康に続いて三番目に見ることができるといえる。

しかし当の頼政の心中はまったく複雑なものであった。院がその力を頼みにしていることは光榮の極みであるが、同時にこのみやこを戦場に変え、帝と院が争うなど、前代未聞である。「……できれば、なにも起きねばよいが」

そう思う頼政の思惑とは正反対に、新帝と崇徳院を支持するそれぞれの勢力の対立は深まるばかりであった。

その中でも一際その動静に注目を浴びたのが、誰あろう安芸守平清盛である。この時清盛は三十九歳。すでに武家としては破格の正四位に任じられ、伊勢平氏一門を率いる棟梁であった。

清盛は後白河帝、関白忠通とも関係が深い一方で、彼の義母である池禪尼は崇徳院の乳母であり、また父忠盛が重仁親王の後見であつた頃から、いずれの勢力からも陣営に加わるよう声を掛けられていたのである。

この時期既に、清盛は北面武士の中でも筆頭に数えられる勢力に成長していた。彼の動向いかんで伊勢平氏一門が動き、さらには形勢を見てそちらに寝返る武士たちもいるだろう。

かつての瀬戸内で、荒くれの海賊に混じつて海をかけていた伊勢平太が、この複雑怪奇な戦の趨勢を決める立場となつたのである。



後に保元の乱と呼ばれることになるこの戦いは、後から振り返つてみれば始まる前に趨勢の決つていた戦いであつた。

保元元年七月五日。崇徳院と頼長が同心し、国を傾けようとしているという風聞が広まり、俄かに洛内は色めきたつた。直ちに後白河帝の勅命によつて誓約書を出していた足利義康らが招集され、東三条の頼長の邸宅が没収される。

住居すら失つて追いつめられた頼長はついに決起を決意した。彼はかねてより協力を呼び掛

けていた河内源氏棟梁、源為義らを率いて起死回生の一手に出たのである。

時を同じくして崇徳院も少数の側近と共に宮中を脱し、七月九日にはみやこの東、白河御所へと御座を移された。

明けて七月十日にはここに宇治から上洛した頼長も合流し、鴨川を挟んで両者は対峙。院と帝の決戦は避けられぬものとなったのである。

この日の夜、世が乱れる事を告げるかのように空に箒星が現れ、人々を恐れさせた。天もまた、国をふたつに割る争いを嘆いていたのかもしれない。

崇徳院が軍事拠点としては脆弱な白河御所を本拠とされたのは、南にある平家の本拠、六波羅を牽制し、清盛の合流を促すためであつたとされる。

しかし、この時すでに清盛の姿は頼政らと共に御所、高松殿にあつた。ここには他に足利義康、平信兼ほか、主だった武士たちが結集しており、彼らが動員した兵の数はあまりも凄まじく、軍、雲霞の如しと評されるほどであつた。

清盛を後白河陣営に引き入れたのは、またも美福門院らの画策によるものであつた。鳥羽院が祭文を書かせた十名の中に肝心の清盛の名はなかったが、彼女はその巧みな政治手腕で清盛署名の祭文を作り上げ、彼の招致に成功したのである。

かくして、後白河陣営には若き河内源氏と伊勢平氏の嫡流が轡を並べ揃うこととなつた。

赤地水干小袴の義朝が坂東の精銳二〇〇騎余を率いれば、清盛は紫皮の京甲冑に紺地水干小袴と対象的な出で立ちで、陣營の中で最多の伊勢平氏三〇〇騎を引き連れていた。

対する崇徳陣営には、陸奥四朗源為義、その子鎮西八郎為朝らの兄弟、平忠正らの名前こそあれど、兵は圧倒的な寡兵。頼みにしていた六波羅からの援軍も公卿らの応援もなく、日和見の貴族達は皆、後白河陣営に加わっていた。

戦局は圧倒的に崇徳院の不利だったのである。元々、呪詛の嫌疑や帝位篡奪の風聞に迫い詰められ、後がなくなつてからの決起だったのが災いしていた。

白河御所において、為朝は崇徳院も同席する軍議の場で、兄義朝や清盛の力を正しく評価し、不利な状況を覆すために強く夜襲を勧めた。が、悪左府頼長はそのような卑劣な振る舞い、治天の君に相応しからずと跳ね付け、頑として許さなかつたという。

頼長にしてみれば国の趨勢を決める皇位の正当性を問う戦いである。正しき作法の元で堂々と行われるのが当然であり、自分達が嫌疑をかけられているならば、なおのことそれを順守せねばならぬとの思いによるものであつただろう。為朝が鎮西で夷敵を討伐するようなつもりで発言したことが気に入らなかつたともとれる。

また、白河御所には明朝、興福寺よりの援軍として僧兵一〇〇〇が駆け付ける手筈となつており、寡兵で大軍に挑む愚を避けんとした頼長の判断は確かに彼らしい合理的なものであつた。

しかし今回ばかりは、論理と道理を重んじる頼長の性格が災いを招いた。

時を同じくして、後白河陣営でもまた義朝によって夜討ちが献策されていた。これまた同席していた関白・藤原忠通は野蠻な策とこれを嫌ったが、後白河帝の参謀を務めていた僧の信西はこれを「先んずれば人を制す」と認め、清盛・義朝による夜襲が決行されることとなったのである。

激突が必至となった時点で、義朝、清盛という兵家に指揮を任せた後白河陣営に対し、最後まで頼長が指揮権を譲らなかつた崇徳陣営に勝ち目はなかつたのだ。

十一日未明。清盛、義朝らの混成軍は大路を西へと急行。鴨川の大橋を渡り三手に分かれて白河御所を包囲した。

頼政はこの夜襲には加わらず、後詰として渡辺党の郎党一〇〇騎余と共に土高松御所の警護にあたっていた。この時点でもはや後白河陣営の優勢は確定したと言つてよく、一門に大きな被害を出さぬまま勝利を迎えることができるのは頼政にとつて願つてもないことであつたが、早太は太刀合いとならなかつたことが不満のようで、しきりに敵方が攻めてこぬかと不満を漏らした。

「……攻めてこられたら困るのだ」

「なぜです！ あのような軟弱な輩、私一人で蹴散らしてみせます！」

頼政の独白を聞きとがめたか、同輩たちが顔をしかめるのも構わず、早太は叫ぶ。

「あちらは寡兵だ。攻めてくるとなればまさに今、夜襲であろう。数を頼みに攻めれば勝てるこちらと違って、彼等は後がない。まさに命を賭し、死力を尽くして攻めてくるだろう。それを迎え撃てば、少くない被害が出る」

「見くびらないでください、頼政様！ 私はもつと強いです！」

「……ああ、お主はそうかもしれぬな。だが、お前が十人分の働きをしたとして、相手が百人であつたらなんとする？ 覚えておろう、かの陣営にはあの為朝がいるのだぞ」

「無論、百人分働けば良いのです！ あのような田舎武者に負けはしません！」

「……そうか」

言つても無駄かと、頼政は吐息した。あの鶴退治以来、早太は妙な自信をつけ、尊大に振舞うことが多くなつていた。会う者会う者に自分は帝を脅かしたばけものを突き殺したのだと自慢し、頼政の与えた短刀に『骨食』などと名を付けては勿体ぶつて見せびらかしていた。その思ひ上がりぶりには、授、省らの郎党達も顔を覆わんほどであつたという。

ふんと鼻息荒く仁王立ちとなつては、敵陣より攻めてくる騎馬を求めて周りの迷惑顧みず薙刀を振り回す早太に呆れ返り、頼政は額を抑える。

「……あやつは、一度負け戦を知らねばならぬな」

「父上、私から言つて聞かせましようか」

「言つて聞くものではなからう。それで済むならとうにそうしているさ」

仲綱に答え、頼政は苦笑した。

摂津渡辺党の猛者に囲まれながら、早太は戦のなんたるかを何も学んでいない。ただ猪のように敵陣に突つ込み、敵将首を打ち落とせば、それで勝敗が決すると思つている。将は多くの供に守られ、また名のある武士はいずれも練達のつわものばかりだ。少しばかり蛮勇をかきた若者など、すぐに殺される。

早太とそう変わらぬ年齢でひとりみやこを離れ、一軍を率い、坂東を制圧して清盛と肩を並べるまでに成長した義朝の姿を思い、己一人で戦の趨勢は変わらぬということをはやく早太に教えねばならないと、頼政はそう思うのだった。

さて、夜襲によつて戦の趨勢ははやばやと決していた。押し寄せる源氏平家嫡流の連合軍に、ただでさえ寡兵の上、ろくな備えのなかった白河御所は防戦一方となるまで押し込まれてしまつたのだ。

そも、この争いは治天の君を巡る争いである。

この国が、帝の威光にて統治されているのであれば、それに弓引く者は全てが逆賊。そもそも崇徳院方に大義などなかったのだ。

それでも豪傑為朝はその剛弓をもつて奮戦した。夜討ちの策を却下されてなお、彼は兄義朝ならば必ず同じ策を取るであろうことを見抜いていたのだ。白河御所の西門に陣取った彼は、五人張りの剛弓を嵐のように放つて攻め寄せる清盛・義朝混成軍を食い止めたのである。

この乱最大の激戦区となった西門では、戦闘終了までに名だたる武士の多くが、為朝の放つ剛弓に蹴散らされた。また、彼の引き連れた鎮西の猛者二十八騎は、そのわずかな人数からは測り知れぬほどの活躍をしたのである。

鏝が七寸五分という、為朝の矢の凄まじきことは想像を絶していた。

西門攻略に名乗りを上げた清盛配下の伊藤景綱は、その息子である忠清・忠直兄弟をたつた一矢で失った。為朝の矢は忠清の身体を鎧ごと貫通し、さらに忠直の腕を引き千切つてその身体を吹き飛ばしたという。

猛勇と聞こえる伊賀国の山田小三郎伊行なる武士が混戦に紛れて為朝を射んとした時も、為朝はその矢が放たれるのを悠々と見送つてから、返す矢で伊行を馬の鞍ごと射通して絶命させた。

為朝の奮戦は凄まじく、ついには攻め手の清盛ですら撤退を余儀なくされる。敵を前に背を向けるなど平家の恥だと憤り、清盛の息子、重盛が果敢に為朝に挑まんとしたが、清盛はこれを叱咤し、戦の目的を見失うなど叱りつけた。戦場にあつてなお実利を見失わぬ清盛の冷静さ、

大局を俯瞰して見据える視点の恐るべきことは限らない。

変わって西門の攻め手となったのは義朝であった。彼は腹心の鎌田正清と共に手勢一〇〇余騎を向かわせるが、為朝の矢にたちまち二十余騎が射殺され、正清自身も門より打って出た為朝に蹴散らされてしまふ。

ついに義朝の本隊と対峙することとなった為朝は、頼みの配下二十八騎を率いてそのまま白兵戦へとなだれ込んだ。奇しくも坂東と鎮西、場所は違えども父より遠ざけられた兄弟が、一歩も譲らず殺し合う、源氏の因果を感じさせる一戦であった。

わずかな時間で両者は併せて一五〇騎以上の死者を出し、そのおびただしい血が西門を染め上げた。深巢七郎清国、大庭平太景義といった名だたる武者がさらに為朝の弓に射られ、重傷を負ったという。

鎮西八郎為朝。まさに源氏の志を体現したかのような武者であった。固く閉じられた門扉ひとつをぶち抜いて吹き飛ばすその弓矢は、雷が落ちるかのように凄まじく、彼に見えた兵たちはみな、今もその恐ろしさを夢に見ると聞く。

夜が白み始める頃、義朝もついに為朝の守る西門から撤退。犠牲の大きい為朝側も、これを追うことはしなかった。

夜戦を仕掛けることこそ成功したものの、上皇方の奮戦に攻めあぐねていた義朝はここで興

福寺よりの援軍の情報を掴み、敵陣が加勢を得る前に雌雄を決すべく、白河御所への火攻めを立案する。

洛内での火攻めなど前代未聞であり、白河御所のすぐ近くには法成寺もある。仏閣に火を駆けるなど、およそ人のすることではないとされていたが——許可のための伝令を受けた高松御所の信西は、帝の意向さえあれば寺などすぐに建てられると、およそ僧籍にあるものとは思えぬ言葉で、義朝に許可を与えたのである。

さらに信西は頼政らの兵も戦場へと投入するよう命じ、一気に決着を図った。

かくして義朝らの手によって白河御所は燃え上がり、上皇方は総崩れとなった。頼政が渡辺党を率いて白河御所に駆け付けた頃には、折からの西風も手伝って既に御所は火の海であった。院と今上帝が治天の君を巡って争うという戦は、終わってみればわずか一夜で決着を見たのであった。



さて、乱が終結すればその後始末が急務である。幸いにして帝のおはす内裏には被害は出なかったものの、火に巻かれた白河御所の再建や逃亡者の捕縛など、すべきことは山のようにあ

った。

まずは論功行賞と逃亡した残党の捕縛である。忠通は頼長に奪われていた藤氏長者の地位を取り戻すことを認めた宣旨を受け、戦功のあった武士たちには恩賞が与えられた。清盛は播磨守、義朝は右馬権頭に補任され、また足利義康と合わせて内昇殿を認められている。

一方、敗れた崇徳院は一時その身をくramしていたが、十三日になって実弟の覚性入道親王の居られる仁和寺に出頭する。この上は仏門に入り俗世を捨てて乱の責を負う御覚悟であったという。

これによつて上皇方の貴族や武士たちも次々に出頭することとなった。そんな中首謀者の一人悪左府頼長は頸に流れ矢を受ける重傷を負いながらも逃亡を続け、大和にまで逃げのびて老齢の父・忠実に面会を請うがこれを拒絶。失意のうちに命を落とす。乱の終結より三日が過ぎた十四日のことであつた。

これらの戦後処理の中で一気に台頭してきたのが、後白河帝の側近であつた僧の信西である。元は宮中にあつて儒学を治める家系であつたこの男、かつては悪左府頼長もその学識を認める男であつた。しかし家格によつて世襲となつた大学寮の役職は彼を受け入れず、信西は満足な出世を望む事もできず失意のままに出家を志したのである。

だがこの信西、出家してなお心は俗世にあると言つてはばからず、同じ仏門にあることを利

用して鳥羽院へと近付いたのである。その試みは見事成功し、彼はその学識を存分に振るつた。院の元で確かな影響力を発揮し、凋落する摂関家や北面武士たちを意のままにし、美福門院や藤原氏中御門流とも蜜月の關係を築きあげたのである。

そも、近衛帝崩御の後、守仁親王の即位を前提に後白河帝の擁立を決めるという奇策を成すため美福門院と共に暗躍していたのはこの信西であった。先に述べたように乱の最中も義朝ら北面武士の献策を聞きいれ、戦の正道にもとる夜襲や寺院を巻き込みかねない火攻めという非常手段すら了承して、騒乱を早期の終結に導いた。これにより、新帝後白河からも信西への信頼はさらに篤いものとなり、彼の権勢はなお高まっていたのである。

その帝の信頼をもつて、信西が敗れた崇徳陣営に下した処断は、仏門にある者の言葉とはとても思えぬ苛烈で暴虐なものであった。

まず、崇徳院は讃岐へと配流と決められた。帝の地位にあったお方が配流されるというのは実に四〇〇年ぶりの重い処罰であった。

さらには上皇側に加担した武士たちに対し、菓子乱以来行われていなかった死刑を復活させ、死罪をもつて此度の大乱を起こした罪を罰することとしたのである。

しかもこの処刑は同じ血を分けた親兄弟の手によって成されるべしという、まさに非道なものであった。

このため父兄弟と決別し後白河帝の元に参陣した義朝は、自らの手で父為義、そして血を分けた兄弟を処刑するという屈辱を強いられた。処刑の場にあつても為義らは義朝を恨みはしなかつたというが――嫡流を受け継ぐその手で家族を斬つた義朝の胸中はいかなるものであつたろうか。

いかな義朝とて、父や弟たちとこんな形での離別することは想像もしていなかつただろう。為義と義朝の対立は確かに深まつていた。それぞれが己の理想を託し、みやこで後ろ盾とした勢力が異なれば、戦場で相まみえることは自ずと心に決めねばならぬことだ。

それでも、彼等は心底お互いを憎んでいたのではなかつたはずだ。互いを塵殺しようなど考えてすらいなかつたはずだ。だからこそ、義朝はこの戦にて河内源氏が滅びぬよう、慎重に事を構えて戦に臨んだ。

雌雄を決し、命を落とすのが戦場であれば、最期にその武勇を示し、親子兄弟で刺し違えてもその名誉を保つ事が出来ただろう。

だが負けを認め投降した者を捕えて首を落とすなどというあさましき所業に、どこに武門の名誉が残るのか。

かつて彼に論じた言葉が頼政の胸中に蘇る。義に殉じ、戦つて敗れた父達を断腸の思いで斬つたのであろう義朝の苦悩は、想像も及び付かない。

そしてまた、もう一人の河内源氏の息子——為朝だ。

捕えられた為義の息子の中で、為朝だけは死にゆく父の嘆願もあつて命を永らえることとなつた。とはいへ二度と弓を握れぬように腕の腱を切られ、伊豆——それも遙か海を隔てた大島への配流である。もはや二度と赦されることはないと考えて良かった。

恐らくもう会うことはないだろうと思ひながらも、頼政は、かなうならばもう一度彼に見え、今度こそ鶴退治の真実を告げてやりたいという心を抑えきれずにいた。

源氏の英雄の凋落を悔いる無念ゆえではない。それは、この秘密を共有することの出来ぬ苦しさを、少しでも和らげたいという、頼政の心の弱さである。

（何のことはない。俺は、自分が楽になりたいだけだ）

弱音を押し殺し、頼政は勤めに邁進した。乱の中では目立つた勲功こそなかったものの、美福門院が頼みにする武士として、みやこにほど近い摂津国に基盤をもつ頼政の一門は重宝されていた。また頼政自身の歌才もあつて、彼の名はさらに高まつていったのである。



こうして世を揺るがした院と帝が争う大乱は終わりを迎えたが——乱の後に大きく明暗を分

けた二人がいた。

誰であろう、源平それぞれの嫡流、平清盛と源義朝である。乱を収めた勲功によって新たな官位を得たとはいえ、伊勢平氏きつての名門である清盛と、凋落の最中にあった河内源氏の義朝にははじめから大きな差があった。義朝も乱以後はその功績を評価されていたとはいえ、かたや正五位下、下野守・左馬頭兼任。かたや正四位下にして播磨守、さらには大宰大貳。

瀬戸内の制海権を得た清盛が、貿易や海賊捕縛によつて莫大な利益を挙げたのに対し、義朝の得た地位はささやかなものでしかなかった。

この頃から、義朝は昏い光を目に宿し、どこか自棄になる言動が見え始める。嫡男の頼朝を、後白河帝の稚児として差し出し、形振り構わず出世を望むようになったこともその一つである。

後より振り返ってみれば、彼の変貌はこの頃から始まっていたのだ。

その要因はいかなるものであろう。保元の乱の戦後処理が、義朝の胸中に深い憎しみの炎を燦らせたのかもしれない。清盛も叔父の忠正の処刑を行っていたが、親子兄弟を皆その手で殺すこととなった義朝とは比べるべくもないだろう。

あるいは、日々躍進を遂げる清盛以下平氏一門の繁栄が、彼の心に暗い嫉妬の陰を落としたのか。いずれにせよ、真相は神ならぬ頼政には解らうはずもない。

（——何事も起きねば良いが）

頼政の願ひ空しく、保元の乱より数年と経たぬうちに再び宮中には不穏な気配が立ち込めていた。帝の元で辣腕を振るう信西への不満である。

もともと、かの頼長が認める学才の持ち主だ。信西もまた博学と弁舌に長け、合議の場でも幾度となく相手の意見の矛盾を突き、理路整然と攻め立てた。苛烈ながらもその英断を好むものも少なからずいた頼長と違っていたのは、信西の弁舌がひどく執拗で、容赦のないものであったことだ。あまりに優秀すぎて世に余ると評されるほどの優れた才をもって、相手に反論を許さず、微に入り細に渡って誤りをあげつらい、ひたすらに己の意見の正しさを示すのである。これは帝の面前であつてもお構いなしであつた。

相手が音を上げ、間違ひを認めて許しを請うても、信西はまったく引く様子もなく、徹底的に論戦をもつてやりこめた。この偏屈なまでの『正しさ』は、かつて彼が儒学の道より締め出されたことへの歪んだ執着心ゆえのものであつたろうか。

ともあれ、この様子で信西に対する不満が募らぬわけがない。まるで己が国の中心のごとき振る舞いをする彼に、多くの者が反発を抱いたのである。

乱より二年が過ぎた保元三年（一一五八年）には、美福門院との密談によつて後白河帝が息子、重仁親王に譲位して上皇となられ、親王は二条帝として即位する。

これは鳥羽院存命の頃から決まっていた路線とは言え、当初よりも時期を早めてのことであり、『仏と仏の評定』などと揶揄された。仏門にあるものが王法を飛び越えて帝を決めることへの痛烈な皮肉である。

そしてまた信西の専横に、徐々に後白河院もそのお心を彼から遠ざけていった。代わって院が頼みとされたのは、凋落から息を吹き返した藤原摂関家において、新たに関白となった藤原信頼である。

同時に、念願であった二条帝の即位によって美福門院も用済みとなった信西から距離を取り始めていった。彼女の望みは我が子同然に育てた二条帝自らによる親政であったのだ。

こうして信西が院、門院、帝のいずれからも反発を受けていることを察した新関白・信頼は、後白河院の寵愛を頼みに暗躍を始めた。

平治元年（一一六〇年）冬。信西排除の急先鋒となった信頼は、各派の協力を取り付けて決起したのである。その陣営には河内源氏の源義朝、また頼政の姿があった。

信頼は武士の力に着目し、坂東にある知行国を通じて彼等を援助し、義朝を自らの子飼いとすることに成功していた。頼政もまた、二条帝の親政をもくろむ美福門院によってこの場に動員されていたのである。

決起は熊野詣のためにみやこを離れた清盛の留守を狙って行われた。信西、信頼双方と良好

な關係を築き、どこかの勢力に偏ることなくみやこにおける最大勢力となった清盛は、いまや誰にとつても相手取れぬほどの強大な存在であつたのである。

反信西によつて結託した院政派、二条帝親政派は、清盛の不在で軍事的に空白となつた院御所の三条御所を襲撃。後白河院の身柄を確保すると院御所に火を放つた。奇しくも、信西はかつて自分が許可をした火攻めによつて御所を追われることとなつたのだ。

信西はからくも逃げ出して向かつた先の山城国で、部下に命じて己を地中深く埋めさせ、搜索の手を逃れようとした。しかし事はすぐに露見し、その身体は地中より掘り出されて首を落とされたのである。仏門のまま俗世をほしいまま恣にした男の、あまりにもあつけない最期であつた。

だが、話はここで終わりはしなかつた。信西憎しで挙兵こそしたもの、実際に標的となる彼の排除に成功したところで、各派の足並みは乱れに乱れたのである。そもそも二条帝親政派、後白河院政派、各々の政治路線はまったく違ふ方向を向いており、求める着地点は別なのだ。同じ反信西を掲げて兵を起こしたは良いものの、自らが政権の中枢に返り咲くことしか考えのなかつた信頼、自らが政を行うことを望む後白河院、二条帝の親政を望む派閥との間に亀裂が生じてしまつたのである。

信頼は決起の成功にすっかり気を良くし、みるみる増長を始めた。二条帝と後白河院、双方を内裏に軟禁状態として、信西に代わつて自らが政治の中心になることを画策したのである。

これは各派の激しい反発を招いた。

さらには、清盛への対応が大きく彼等の命運を狂わせた。

信西が自害した翌朝、帝と院を掌中に収めた信頼は政権を掌握し、自分の信奉者たちだけを宮中に参内させて臨時の除目を行った。この除目で義朝は播磨守、義朝の嫡子である頼朝には右兵衛権佐などが任じられた。他の公卿や既に官位にある者たちを無視した一方的なものであったという。

この専横によって、信頼は自らを近衛大将として悦に入っていた。居合わせた毒舌家で知られる藤原伊通は、この除目をして「人を多く殺した者に官位が与えられるなら、なぜ三条殿の井戸に官位をやらぬのか」と痛烈な皮肉を浴びせている。三条殿では御所を焼いた火から逃れようと、多くの人々が井戸に飛び込んで命を失っていたのである。

およそ、この信頼という男には政権奪取後の視点がまるきり欠けていたと言っている。院の寵愛にて成り上がった男は、治天の政治に必要な知識も経験もまったく持ち合わせていなかったのだ。すっかり戦も終わった気分でのんびりとしている信頼に、義朝はすみやかに清盛を討つための軍勢を差し向けるべきだと進言した。わずかな手勢のみを連れて熊野参詣の途中である清盛を討つ機会は、この時を除いてなかったのである。

が、信頼はこれを一笑に伏した。もはや清盛の後ろ盾は失われ、おそるるに足らずと軽んじ

ていたのである。信頼は御所の眼と鼻の先にある平家の本拠六波羅への対応もろくに取ることなく、暢気に除目を繰り返すばかりであった。

軍事貴族、伊勢平氏の清盛をいまだ残るみやこの最大兵力、恐るべき不安要因と捉える義朝らに対し、姻戚関係や院の寵愛を絶対視する公卿の彼には、己の藤の姓やみかどの威光へ弓引く存在が理解できなかったのであろう。

決起から十日を過ぎてもなお動く様子もなく、御所に留まり、まるで自分が帝であるかのよう朝議の上座に座って公卿の輦轡を買う信頼に、鎌倉より駆けつけた義朝の長男、悪元太義平はひどく憤ったという。

そうこうしているうち、清盛は紀伊の豪族らの協力を得てみやこへと舞い戻る。熊野の山中ではわずか数十名に過ぎなかった清盛の手勢は、帰途の最中に現地の豪族、郎党らの合流によって三千騎もの数に膨れ上がっていた。義平は先の乱の教訓を挙げ、清盛らがみやこに入る前に待ち伏せ、夜襲をかけることを進言するが、信頼はこれもひきよう者の策略と退けてしまう。かくしてさしたる妨害もうけぬまま、清盛は悠々と六波羅に帰還。一門と合流を果たし、鴨川を挟んだ六波羅御殿には平氏の赤旗が翻った。

この期に及んで、信頼は清盛の帰還を自分への服従が目的と捉えており、まもなく彼も宮中に参内して己に頭を下げ、恭順を示すであろうことを疑っていなかったという。

が——二十五日深夜。内裏に幽閉されていた二条帝が清盛の手引きによって御所を脱出。六波羅に行幸されたことが明らかに、宮中にはわかに騒然となった。

さらには同時期に後白河法皇も姿をくらましていることが発覚し、信頼らの立場は一気に悪化した。帝の為という名目を失い、信頼らはただの賊軍と成り果てたのである。この時点で彼等の命運は決したと言つて良かった。

二十六日未明。しらじらとみやこに雪の積もる中、二条帝を迎え御所となった六波羅からは、清盛の嫡男・重盛と弟・頼盛が御所へと進撃。「反乱軍」を討伐に向かった。奇しくも、四年前の乱で共に戦った二人が相對することとなつたのである。

ここまで信頼に順じていた義朝も、ここにいたつて彼への失望を露わにし、日本一の不覚人と罵るに至つた。担ぐにはあまりにも疎かな神輿であつただろう。しかしそれも事が起きてからこそ述べることができるのであつて、殊更に義朝の短慮を責めるには及ばないのかもしれない。この時点で、義朝が抱えていた兵力はごく僅かなものであつた。もともと、この乱は信西を排除する目的で起こされたものだ。乱の当初は他の派閥も協力していたし、御所で院と帝を確保できる手勢さえあれば十分だったのである。

義朝の軍勢はわずか、三千騎を率いて凱旋した清盛とまともに戦える状態ではなかつた。しかしそれでも義朝らは奮戦する。『鎌倉悪源太』義平はその通称の如く暴れ回つた。鎌倉より

連れてきた猛者十七騎を連れて五〇〇の囲みを突破し、重盛を御所紫宸殿の右近橋左近桜の前で激しく応戦する。ついで彼は名刀抜丸を携えた頼盛を追いつめたものの、結局は多勢に無勢。既に陣営の頭である信頼に求心力はなく、彼の元からは離反者が続出していた。味方のはずの武士たちが門の守りを放棄し、逃走するという事態となつて信頼勢は総崩れとなる。

清盛は内裏が戦場となるのを避けるため、信頼らを御所の外へ誘い出す計略を立てた。平氏の別働隊が御所に入り込み、御所に火を放つたと流言を流し、義朝らの動揺を誘つたのである。短期間のうちにみやこで乱が繰り返されたことで、誰もが火計の威力と有効さを思い知り、それを無意識に恐れていた。そこを衝いた実に巧みな策略であつたと言える。まさか御所に火を放つなど有り得ないことなのだが、先例があるゆえに『まさか』と思わざるを得ない。清盛の鮮やかな計略であつた。

もはや味方もなく、攻め手は増える一方。ついに御所の守りを放棄した義朝らを嘲笑うかのように、御所の門は閉ざされた。これをもつて義朝達は完全に孤立してしまつたのである。

戻る場所を失い、義朝らは決死の覚悟で平氏の本拠六波羅へと向かつた。たとえ骸を晒そうとも、平氏に一当てせんとばかりである。逃げのびた手勢を六条河原で再結集させ、六波羅に攻撃を加えるつもりであつた。

その途中、彼等は六条河原を挟み、偵察に出ていた頼政らと対峙することとなつた。

共に白旗の徴を掲げ、源氏の軍勢どうしが蹄を並べて対峙する。西より進み出たのは義平である。彼は憤りも露わな力強い声で、おなじ源氏でありながら清盛に加勢することの不義理を詰った。

「そこなるは摂津源氏、兵庫頭源頼政殿とお見受けする！ 我は鎌倉恵源太義平！ 父義朝のため坂東よりこの地に参った！ 元は同じ志に集った同じ源氏の一門！ それがどうして、今、平氏の味方をして我等の前に立ちふさがる！ 源兵庫頭と呼ばれながら、不利と見れば勝ちの尻馬に乗るとは、摂津源氏の名も地に落ちたものだな！」

これには流石の渡辺党も怒りを見せる。参陣していた仲綱もまた、くやしげに顔を歪ませた。

「ふん、生意気な口を利くな、坂東の猪武者風情が！」

早太もまた頼政の隣で悪罵を飛ばしていた。

頼政の仕える美福門院は二条帝を擁立し、その親政を望む派閥である。乱の当初こそ、邪魔な信西排除にこそ協力したものの、その二条帝が既に六波羅へと行幸されているというのなら、もはや信頼に力を貸す道理はない。

義平としてそれを知らぬわけでないだろう。そもそも彼も同じ源氏の一門、叔父にあたる木曾源氏の義賢を、坂東の戦いで討っているのだ。

その上でなお、彼は源氏の在り方を問うているのだろう。なるほどあれが河内源氏。坂東に

生きる武者の姿か。義平の姿は為朝に重なって見え、頼政はひどく懐かしい思いに胸を揺さぶられる。

「……父上、どうしますか」

「何もするな。ここを固めておけば、彼等は六波羅の正面から、陣の最も分厚い場所を攻めねばならなくなる。死地に挑む者たちに、あたらずを出すのは余計な犠牲を招くだけだ。あちらもそれは理解している」

そう固く申しつけつつも、頼政は愛用の滋藤弓を手に一人、自らの率いる二〇〇騎の前へと進み出た。馬上に太刀を抜いてこちらを見つめる恵源太義平、そしてその後ろの義朝に向けて、弓を構える。

「これは異なことを言うものだ！ 俺達は累代磨いた弓箭の武名を守るため、帝に付き奉る。これを裏切りと呼ぶせるものか！ こちらを糾弾するなら返して問おう、鎌倉恵源太義平、並びに上総御曹司義朝、そなたらはかの不覚人藤原信頼に同心し、この乱を起こして一体何を得たというのか！」

朗々と響く頼政の声に、対岸の源氏の者たちがざわめいた。威嚇のためとはいえ、摂津源氏頼政の弓の腕前は広く皆の知るところである。ここに対戦の意志あらば、直ぐさま河内源氏の大將を射抜くと、頼政は宣言しているのだった。

同じ源氏が六条河原の対岸を挟んで睨み合う。皆が固唾を飲んで見守る張り詰めた空気の
中に動いたのは義平であった。馬を巡らせ、手勢を率いて一気に河原へと駆け下ろうとする。
そこへ頼政は鋭く弓を放った。その手が震むほどの立て続けの四射である。川面を裂く四筋
の矢は、吸い込まれるように義平の身体と走り——ばしっ、ばしっ、と激しい音を立てて砕ける。
義平がその太刀をもつて頼政の鎗矢を断ち斬つたのだ。しかし三矢を受けたもののそこまで、
最後の一矢を兜の吹返しに受け、義朝は河原の手前でたまらず手綱を引いた。前足を挙げ馬が
いなくなる。

郎党と共に疾駆する馬上を狙い一矢も外さぬ神速の射技に対し、義平もまた、飛び来たる矢
を見極めて打ち落とすという離れ業をやつてのけた。互いに口上に述べた武威が嘘偽りではな
く、まことのものであると示したことになる。

「——義平、戻れ」

冷静な判断を下したのは義朝であった。一度は首を振つたものの、再度父に窘められ、悪源
太は洪々河原へと引き上げてゆく。

結局、頼政の言葉通り、六条河原を挟むしばしのにらみ合いの後、両者は結局本格的な衝突
のないままお互いに兵を引いた。後の世にはこれを、悪源太の先走りによって摂津源氏と河内
源氏の間に決定的な関係の亀裂を生じたものとする記録もあるが——それは真実ではない。

そも、この遭遇は偵察中の頼政らに義朝達がたまたまち合つたことによる偶発的なものであり、小規模な衝突こそあつたものの本格的な戦闘はほぼ行われずに終わった。義朝らは六波羅への道を探していたのであり、頼政らも積極的に彼等を害するほどの理由を持たなかつたためである。

たがいに兵を引く中、馬を巡らせる義朝と、一瞬だけ頼政の視線が合う。

(……義朝殿。やはりあなたは、為義どののお子であるな)

かつて坂東に向かい夢と希望に溢れていた少年の顔は、一門を率いる重責の中、武士として生きることを貫こうとした、深い苦悩が刻まれていた。

思えば彼が坂東へ下つたあの日以来、義朝とは時間を取つて話す事もできずにいた。

彼の苦悩を想い、頼政は慙愧の念に堪えぬばかりだ。河内源氏の棟梁として、義朝の取つた手段は決して最良のものではなかつたろう。しかし彼が一門を、同朋を守るためにいかな心境にあつたかを思うと、頼政はただいたずらに義朝を責めることはできぬように思われるのであつた。

「……どうか死を急がんでくれ、義朝どの」

彼が坂東にて多くの友とめぐり合い、かけがえのない出会いをして「上総御曹司」と呼ばれるようになったことを。源氏の嫡流として旗印に立ち、多くのものを守らねばならぬことを知

ったことを。どうか己の誇りとし、貫いて欲しいと、頼政は思つてやまぬのであつた。
……それが叶わぬものであらうことを、知りながらも。



数刻後。六条河原に集結した源氏は、一気に六波羅になだれ込んだ。死地に向かい、死に物狂いとなつて攻め上る坂東武者に、これを迎え撃つは漆黒の鎧兜に身を固め、黒鹿毛の馬に跨り黒塗りの矢筒を背負つた清盛である。

二条帝を迎え、御所となつた六波羅は激しい合戦場と化した。降り注ぐ矢は雨となり、雪は解け屋敷は血で赤く染まるほど。至る所で源平の兵士が打ち合い、斬り合い、泥の中に転がてなお組み合つて。矢は折れ太刀は碎けて争いは続いた。悪源太義平も押し寄せる兵士の大軍に囲まれ、三方斬りまくつて応戦したもの、ついには押し負け、退却を余儀なくされた。清盛に最後の突撃を加えんとした義朝も、忠臣正清の進言を得て逃げのびることとなつたのである。義朝は坂東に向かい再起を図るが、その途中で嫡男頼朝とはぐれ、尾張に落ちのびた先で莊司の裏切りにあつて、腹心正清と共に討たれた。義平はみやこに潜伏して清盛の命を狙つていたところを発見され、捉えられて処刑された。場所は奇しくも最後の決戦の地となつた六条河

原であつた。

乱の首謀者、信頼は乱の終結後に従者にまで裏切られて、身ぐるみを剥がれた情けない姿で出頭し、あさましくも命乞いをしたことで失笑を買いながら、処刑された。彼は処罰の瞬間までみつともなく泣き叫び、最後まで死を受け入れなかったという。義朝の投げつけた日本一の不覚人の言葉は正しかったのであろうか。

二度の大乱は、みかどと公家の地位すらも大きく変えるものであり、院・関白・公卿らによるこの国の政のありかたをも問うものであつたと言えるだろう。これは政争においても強い武力をもった陣営が勝つことを示し、武士の時代の萌芽を告げるものであつた。

ことに、保元・平治の乱における平家の躍進と、源氏の凋落は顕著である。

河内源氏の一族はわずかの例外を除いて残らず討ち取られ、徹底してその罪を断じて処刑された。一方、平家は一門が次々と昇殿を果たし、隆盛を極めることとなつた。ことに帝を救いだし救世の英雄となつた清盛への評価は凄まじく、六月には正三位、八月には参議となつて、前例なき公卿への任官を果たしたのである。かつては六位の位にて公家と隔絶されていた武士たちが、ついに政の中心へと進出した瞬間であつた。

院・貴族・寺社いずれにも属さない独自の勢力を保ち、自らの動向をもつて政局を傾けることに成功した清盛の才覚は比類なきものであり、軍事貴族の到達点とも呼ぶべき傑物と呼部に

相応しきものであったと言えよう。

振り返ってみれば、二度の大乱において敗れ去った者たちの敗因は、すべて、今のみやこにおける清盛の権勢を見誤ったが故であろう。伊勢平氏の棟梁の握る権勢は、いつからか誰が想像するものよりも遙かに大きく、そして巧みだった。

そしてまた、河内源氏の凋落の中、頼政の摂津源氏は、この二度の大乱を見事乗り越え、みやこにおける唯一の源氏という確たる立場を築いたのである。

勝者が敗者となり、死者は死をもつて処刑され、勝った味方同士が決別して争い合う、武力による紛争解決が現実のものとなった時代。この難局を切り抜けることができたのは、ひとえに頼政の政治的才覚、無駄な犠牲を好まぬ戦場での確かな状況判断、また歌壇における評価がもたらした貴族としての人脈があつてこそ成せた業であつたろう。

だが、知己の若い者たちが次々と命を落とし、理想に、義に殉じていくなかで、気付けば頼政を知る多くの者たちが、政争の舞台より退場していったのである。とくに、己よりも若い者たちが次々とその命を散らしていく様は、摂津源氏の長にどのように映つたであらうか。

そして——平家全盛となつたみやこの夜の空に、再びあの怪しき鳴き声が響き渡るのである。時に乱より二年後となつた二条帝の御世のことであつた。

七 怪鳥ぬえ

応保二年（一一六二年）――

ふたつの乱を乗り越え、六波羅の栄えは日の昇ることくこの世の盛りとなり、いまやみやこは平家一門の隆盛を讃える声ばかりが満ちている。

清盛はついに正三位権中納言へと至り、檢非違使別当や皇太后宮権大夫を兼任。もはや押しも押されもせぬ宮中の重鎮にまで登り詰めていた。嫡男の重盛も二十五歳の若さで既に正四位下の内蔵頭。その弟の宗盛、知盛に至っては十代半ばで頼政の従五位上に並ぶ勢いである。

二条帝もことに清盛を強く頼みにされていた。平治の乱でそのお命を清盛に守られて以来、かの帝は清盛に全幅の信頼を置き、清盛もまた乳父の立場から二条帝の後見役として活躍を続けていた。また六波羅の主は摂関家とも婚姻により太い関係を保ち、蓮華王院の建立などを通して後白河院や寺社への気配りも忘れない。

六波羅には数百を超える屋敷が立ち並び、その隆盛にあやかるとする人々が詰めかける。平家は軍事貴族の中より頭一つ抜け出し、さらなる高みを駆け昇らんとしていた。

そんな中、気付けば頼政は今年で齡六十。いまや平氏全盛のみやこに、ただ一人残った源氏の長老という立場にある。

「……すっかり老いぼれたものだ、俺も」

この十年でみやこは大きく様変わりした。院、帝、摂関家、源氏、平氏。多くの者たちが歴史の表舞台から姿を消し、そしてそれに代わる新たな者達がこの国の権勢を握ろうとしている。長年に渡って宮中の政を左右し、頼政の後ろ盾であり続けた美福門院もまた、去ること一昨年の十一月、平治の乱の終結を見届けるかのように命を落としていた。

そんな中、頼政はふとした折に己の衰えを自覚することが増えていた。髪に混じる白髪は量を増し、いまやその髪は灰色に近い。

六十という年齢で、既に出家や引退を考えてもおかしくない頼政が、いまだ嫡子への承継を済ませずなお棟梁に留まり続けているのは、この平氏全盛のみやこのなかで摂津源氏が生き抜くための方策であった。

息子達の器量、働きに不満はない。平治の乱に前後して頼政は伊豆に知行国を得、仲綱ら兄弟はその代行としてみやこと坂東を行き来する生活を送っている。あくまで表向きの役目は頼政のものだが、摂津源氏の実務は半分以上彼の息子たちが担っていたと言つて良い。

しかしそれでも、いまだ宮中との人脈や歌壇での評価は父に及ばず、複雑怪奇なみやこの権

力闘争の中で、摂津源氏一門の重責はこの老将の双肩にかかっていたのである。

幾多の別れに追憶の中で想いを馳せ、頼政は吐息する。敵と味方が激しく入れ替わる困難な政局の中、様々な危難を乗り越え、一門を栄えさせ続ける彼の名は、周囲からも一目置かれる存在となっていた。

（平家、源氏……そして俺はどうだ）

頼政は思う。己が機を見るに敏であつたわけではない。かつての過ちを胸に、ただ他の者たちの姿を見て行いを改め続けたに他ならない。要は人一倍臆病であつたと、それだけのことだ。

しかしみやこを去っていった者たちのことを思うたび、源氏の同胞を捨て、ただ一人生き残り続ける自分に、頼政はどこか後ろ暗い思いを抱かずにはいられない。

そして、春も終わりとなる五月のはじめ。あの夜の鳴き声が再び頼政を苛むこととなつたのである。

「頼政殿！ 兵庫頭殿！」

まだ朝も明けきらぬうちからの騒ぎであつた。

近衛河原の屋敷にまろぶように駆け込んできた郎党は、床でまどろんでいた頼政を叩き起こさんばかりの大声で、みやこに再びあやしき怪鳥が現れたという報せをもたらしたのである。

「……それは、まことか」

鶴、再び現る——その報告を聞いた頼政の驚きようは並のものではなかった。支度もそこそこに急ぎ宮中に向かい、頼政は直ちにそれを見たという弁官のもとを訪れる。

昨夜より床に伏せったままという彼を叩き起こし、問いただしてみるものの、怯えるばかりの彼の言葉はまるで言葉を成しておらず、支離滅裂であつた。それでもどうにか宥め落ち着かせ、漏れ聞こえる独白めいた証言を繋ぎ合せてみると、それはまったく怪しげで不可思議なものであつた。

昨日のことであつたという。まだ宵の頃にあつて、突如として東三条の空より黒雲が湧き起こり、月星を覆い隠してあたりから光を奪つた。同時にどつと生温い風が押し寄せ、燭や篝火を残らず吹き消してしまつた。そして訪れた暗闇の中、清涼殿の方角から、忘れもしないあの怪しげな鳴き声が響いたのだというのである。

この不気味な鳴き声は宮中だけに留まらず、承明門を越えみやこの各所にまであまねく響き渡つた。貴族の邸宅や人々の行き来する辻、果ては洛外にまで、聞くも恐ろしき鳴き声にあてられ、正気を失くすものたちが続出したという。この騒ぎに警護にあたっていた北面の武士が直ちに集結したが、黒雲の中に姿を隠すばかりのものにはまったく手出しがでなかつたという。

「頼政様……！」

「うむ」

ともあれ、一刻を争う事態であつた。頼政は直ちに兵庫頭としての指揮のもと、授、省らに命じて渡辺党の郎党を招集。平氏の郎党とも協力して即日、洛内外の警護を強化させた。巡回の兵は常の三倍。まるで戦のような有様である。

彼らは物々しい武装を露わにみやこの各所に散つていった。

しかし、それを嘲笑うかのようにその夜も、不気味な鳴き声は続いたのである。この日も黒雲の中にその姿は見えず、怪しき声のみが夜空にこだました。その恐ろしき事すさまじく、ひとたび雲が揺れ、風が押し寄せれば、屈強な武士がばたたと気を失い倒れるほどであつたという。

この怪しき声は、みやこ中に響き渡り、人々はかつての怪異を思い出して恐怖した。

鶴だ。

鶴が、再び現れた。

かつて頼政が紫宸殿で射殺した正体不明の怪鳥が、再び姿を見せたのだという。

その噂を裏付けるがごとく、恐ろしき鳴き声は、それから連夜に渡つて続いた。

夜ごと丑寅の鬼門より現れる瘴気の黒雲に乗り、時折混じる雷鳴とともにひゅおうひゅおう

と恐ろしき鳴き声が空に響けば、人々は家に閉じこもり、怯えて眠れぬ夜を過ごした。二条帝もまたこの声を酷く恐ろしくお思いになり、ついにはお伏せりになってしまふ。

十年を経て再び現れた鶴の鳴き声は、みやこを恐怖のるつぽへと叩き込んだのである。

(これは、いかなることか……)

頼政の困惑は深かった。

全ての状況は十年前と酷似しており、またまるで違っていた。あの時あったばけもの退治はすべて雅頼の——あるいはその黒幕の仕組んだ茶番であったはずである。あの場にばけものなどは存在せず、頼政が演じたのもあくまで形だけ。殺されたのは哀れな娘独りであるはずだった。

しかし——いままさに、その時のばけものが再び現れ、かつて射殺された呪詛を叫びながらみやこを荒らし回っているのだ。

とても信じられぬ思いであったが、頼政自身もみやこの警護に回る中で郎党達と共にこの鳴き声を聞いた。とても虎鷲の声などとは思えぬ、恐ろしき、おぞましき、哀しき鳴き声。たった一声で盤石なるみやこを揺るがし、心の臓を掴まれるかのごとき恐怖を叩きこむ鳴き声は、まことこの世のものとは思えぬ恐ろしきもの。

ついに頼政も今のみやこに現れた「何か」の实在を感じざるを得なかったのである。

第一に疑つたのは、十年前と同じように、いずこかの公卿らが同じ企みをしているのではないかということだ。しかしその線は非常に薄いものだった。頼政は事の次第を問ひ正すためさりげなく雅頼に連絡を取ったが、若くして蔵人頭となっていた村上源氏の俊才は、酷く困惑した応答をするばかりであつた。

直接会いもしたものの、雅頼に何かを隠しているような素振りは見えなかつた。あえて関係者に事実を伏せ、二度目の茶番に信憑性を持たせようとすることは有り得ないではないだろうが、何も知らぬ武士にならともかく、十年前にその当事者となつていた頼政にいまさら隠し事をする意味がない。

となれば、雅頼らではない他の公卿による画策であるが、これもまた現実的ではない。いかに深謀に通じ策略に長けた者たちであろうと、かつての怪異退治の関係者全員に秘密を隠し通して謀を行うのは不可能であろうし、なによりもいまの宮中には十年前にはなかつた清盛という強大な勢力が存在する。

であるのなら——必然的に、これは誰も預かり知らぬこととなつてしまふ。つまりは、現れたばかりのものは偽りではない、本物の怪異であるという事だ。

(そのようなこと、あり得るのか。……あれはまことのばけものだというのか)

いずこかより忍びこんだ賊がばけものを騙つてゐるという推論も不可能ではないが、この怪

鳥は連日連夜、宮中深き清涼殿の屋根の上にまで現れるのである。みやこの空を駆け廻るといふような芸当、まっとうな人間には起こせる業ではないことは明らかだった。

(……まさか、な)

ちらと頼政の脳裏をよぎるのは、あの不思議な娘、藤原紅子のことだ。もう二十年以上も前の事になるというのに、まるで昨日のように思い出せる。確かに奇妙な力をもった娘であつたが、しかし、この騒ぎの主が彼女であるとは、どうにも思えなかつた。

無論、この間頼政達もただ手をこまねいていたわけではない。北面武士たちは毎夜、このばけものを撃退すべく出撃を繰り返したが、いくら弓を唸らせ矢を雨と射掛けんとも、黒雲の中の怪しき影にはまるで当たる氣配を見せなかつた。

かの「指御子」安倍泰親が陣頭に立ち、陰陽寮の者たちも全力を尽くして奔走しているが、いかなる不思議か、かれらの用いる破邪辟邪の術もこの怪鳥には一切の効き目を持たぬという。泰親の言葉によればそれも道理であり、かのばけものがかつての鶴であるならば、それは正体を持たぬあやしきものである。古今、呪詛の類は全てその相手を見定めねば効果を顕わさぬものだ。猪を捕える罠が、空を飛ぶ鳥に効くはずがないのと同じように、正体を見定めることのできぬばけものの名を捕えて殺すことはできぬというのだった。

「ええい、どうにかならんのか！ このままみやこをばけものの成すがままにさせるなぞ、渡

辺党の名折れぞ！」

「しかし、姿も見えぬ、射ても当たらぬとなれば、我等にはどうしようもありませぬ！ 殿の上から空を駆けて組討てともおっしゃるのか」

「……構わぬだろう、一矢で当たらぬなら千の矢を射るのだ。渡辺党百人をもつて矢の尽きるまで射かければいいではないか！」

「落ちて着け。空に向けて射た矢が外れ、どこに落ちるのか考えてみよ。既に流れ矢で多くの被害が出ておるのだぞ。この上ばかりものを仕留められる保証もなく、いたずらに被害を広げてはそれこそ我等の無能を示すも同じだ。名誉も何もあつたものではないだろう」

「だが……！」

論議の場は、膿んだ様な熱に満ちていた。源頼光以来の辟邪の武、摂津渡辺党の猛者たちが毎日頭を突き合わせ、どうにか対策を講じようとしているが、いかにも手詰まりだ。空論する議論に時間は無駄に費やされ、また、夜が来る。

あの恐ろしき、鵠が来るのだ。

二条帝がお伏せりになり、みやこの各所で吹き荒れる瘴気の黒雲のその被害は甚大な数へとなりつつあつた。二度の乱を平定した平家も清盛も、この鵠には何ら対処の方法を見出せず、陰陽寮すら手を焼く有様。

そうしてついに、摂津源氏棟梁、兵庫頭源頼政に、再び鶴討伐の勅命が下ったのである。

「奴は、……俺を、殺しに来たのかもしれない」

十年前の過ちの報い。虚構で塗り固めた己を、かつての自分が滅ぼしに来た。頼政にはそう思えてならなかった。これは報いだ。ありもしない鶴退治の名声をもって、ふたつの乱をのうと生き抜いた自分への裁きなのかもしれない。

「……父上？　どうかされましたか……？」

「いや、なんでもない。……摂津源氏源頼政、謹んでお受けいたします」

息子達が案じる中、頼政は帝の使者より勅をおしいただく。

かくて。遥としてその全容も掴めぬまま、頼政は再び鶴退治の舞台へと引きずり出されたのであった。



五月も下旬の二十日。

清涼殿の東庭、呉竹や河竹の林が囲む庭に、摂津源氏の長、源頼政の姿はあった。

十年前は立ち入ることを許されなかった清涼殿は、四方に廂を持つ荘厳な檜皮葺の大屋殿で

ある。帝がお住まいになつて寝起きする御座、東庭に面した廂は中でも最も大きく、傾いた陽の中に美しい陰を浮かせている。

日の落ち始めた庭に、あの時と同じように頼政は二矢をもつて望む。その隣には十年前と同じように猪早太の姿があつた。

「まさかあのばけものが再び現れるとは！ 二度と化けて出られぬよう、今度は百千に刻んでくれる！——腕が鳴りますな、頼政様！」

これもまた、かつての鶴退治に倣つての人選であつた。

勅命が下つた時から、主の一大事のため授や省はすぐさま頼政の守りをかけて出、遠く伊豆からは事態を聞きつけた仲綱が急ぎ戻ると使いを寄越した。

頼政もまた、今回ばかりは渡辺党の助力を求めるつもりだった。しかし宮中では『かつての鶴退治の英雄たち』の名を挙げる声があまりにも多く、二条帝もまた頼政と早太の二人を頼みにされたため、清涼殿への立ち入りを許されたのはこの二人だけだったのである。

「氣負い過ぎるな、早太」

「大丈夫です！ 今日こそ俺の実力、お見せいたします！」

実際のところ、前回のような茶番ではない本物のばけもの退治には、彼よりも相応しい者がいくらでもいた。より正確に言うならば、早太よりも役に立たないものを探す方が難しかった。

そんな頼政の胸中を知らぬまま、早太は頼もしげに胸を張ってみせる。恐らく彼の胸の中にも、十年前の追憶があるだろう。頼政のように苦々しいものではなく、誇るべき栄光として。

既に早太は二十七。とうに少年とは言えぬ歳になった。渡辺党の郎党として幾度も戦場に出はしたものの、いまだろくに戦功も上げられぬままにいる。

しかし、早太はそれを恥とも思わない。それどころか、自分は鶴退治という偉業を果たした男なのだぞと、事あるごとに威丈高に振る舞った。

実力も伴わぬのに、態度ばかり大きな彼は、当然仲間達からも嫌われていた。しかし早太には、それらの諫言もみな嫉妬と映るのである。早太の胸に燦然と輝くのは、頼政に従って、帝を恐れさせるだけのものを討ちとったあの瞬間である。その勝利は十年が過ぎてもなお色褪せることもなく、彼の誇りとなっていた。

言い換えるならば、彼が拠り所にし、唯一誇れるものがあの鶴退治の武功なのだ。

早太は戦場での作法を、人との戦の術をともに学ぼうとしなかった。なぜならば早太にとって己は既に英雄であり、戦場で些細な武功を求めて躍起になる必要がなかったからだ。無論そんなさまでまともに戦果を上げることができるはずもなく、彼は十年過ぎてもなお出世もままならぬほどであった。

が、早太はそれも意に介さない。そのような瑣末なことに拘るなど、英雄の自分には相応し

くないとまで言つてのけた。

もはや猪早太の武名は、鶴を退治することではしか保てない。彼にとって、十年ぶりに現れた鶴は、普段蔑ろにされる己の実力を示すこの上ない機会であつたのだ。いるのかいないのかも定かではないけれども狩ることではしか保てぬ武功など、存在しないも同じだというのに。

愛刀『骨食』を振りかざし、全身に力をみなぎらせる早太。その力の入り様に、事情を知らぬ公卿たちは実に頼もしい猛者だと褒めそやす。それがますます早太を増長させるのである。

(……あの日、からか)

すべて、あの夜の出来事がこの若者の人生を狂わせてしまった。

早太のような男は、何があつても鶴退治に連れてゆくべきではなかつたのだ。

あのまま、訳の分らぬ陰謀に巻き込まれなどせず、普通の戦に身を投じ、そこで運良く生き延びれば。あるいは為朝のように……あそこまでとは行かなくとも、いかなる逆境にも心挫くことなく、力強く味方を鼓舞し勇ましく戦う武士へと育つたかもしれない。単純で頭が回らぬとて、多くの友を得、仲間として共に戦う男になつたかもしれない。

だが。早太は、若くして恐ろしきだけの『鶴』を——人の手にはとても及ばぬ怪異を討つてしまった。その自身は呪詛のように彼の心に深く染み込み、鎖のように早太の功名心を縛る。もはや何度失敗をしたところで、早太は己の栄光に疑念を抱くことはないだろう。

いまのはたまたま巡り合わせ悪く油断しただけだ。何しろ己は、あのばけもの、人智も及ばぬ怪物、鶴を退治した英雄なのだから――

思えば早太も、鶴の犠牲者であるのかもしれない。頼政はそれを不憫に思った。

（いや――違うな。俺のせいだ。ばけものの所為などではない）

いつのまにか、自分ですら、あのばけものが本當にいたような心持ちになっている。頼政は髭の下でわずかに苦笑する。

それも無理はないのかもしれない。設えられた舞台の全てはまるで、十年前と酷似している。違うことと言えば、ここが帝のおはす清涼殿であるということと、この場に満ちる恐ろしいまでの緊張。そして、全てを画策した黒幕の、張り巡らされた陰謀の存在だ。

近衛帝の御世には損得、利害によつて張り巡らされた策略と同じ悪意が、今度はその核を失つたまま再現されようとしている。

「……頼政様、いよいよ陽が暮れます！ さあつ、出てくるがいい、鶴め！ この早太が来た以上、もはや貴様の好きにはさせんぞ！」

（さて……どうなる。……何が出てくる）

逸る早太を隣に、頼政は一人黙考する。

清涼殿のすぐ傍には、昇殿を許された平氏子飼いの郎党達が警護を固めていた。授、省ら渡

辺党は、大内裏の外、みやこの門の近くで待機中である。万が一、頼政が鶴を取り逃がすようなことがあれば、直ちに彼等が駆け付け、合流する手はずである。

「すでに宮中に限らず、洛内外にまで被害が出ております。まして二匹目が現れたとなれば、三匹目、四匹目がいてもおかしくありません。万一、他のばけものが姿を見せた時にみやこを守るものが必要となりましょう」

早太と二人の鶴退治に臨む前、頼政はそう言つて郎党の動員を訴えた。

公卿たちはかつての鶴退治の再現を期待している。説得するには苦しい理屈だと考えていた頼政だが、意外にもあっさりとその提案は受け入れられたのである。清涼殿を守る衛士の数は倍に増やされ、渡辺党の配置も完了していた。

武士にあるまじき弱音と誇られることも覚悟していたのだが——やはりこの騒動は、誰かの画策によるものではないということなのだろうか。

頼政の手には以前と同じく、愛用の滋藤弓がある。しかし箆に収めた矢は団三郎の尖り矢とは違う、ただの矢であった。鶴の再出現に際し、頼政は団三郎に使いを出して魔祓いの尖り矢を求めたのだが——生憎と、彼女は今佐渡へ渡っており、連絡を取ることはできなかった。十年前に渡された魔祓いの加護あらたかな矢は、十年という歳月によつてすっかり色褪せ、まともに使えるものではなくなっていたのである。

言い知れぬ胸騒ぎを覚えながらも——頼政が篝火の中、弓を握りしめたその時だ。空に、物悲しげな鳴き声が響いた。

そして突如、生温い風が吹き抜けたかと思うと、その場にいる者たちすべての心に言葉に尽くせぬ怖気が湧き起こる。いかなる不思議か、あやかしの力か。獲物を前に獣が吐き付ける空腹の吐息、あるいは背筋をじとりと濡らす夜半の予兆であった。

こうこうと空がうねり、風が荒び、黒雲が空を覆う。

たちまち湧き起こった黒雲の中、月は隠れ、ごろごろと唸る雷光があたりを照らした。稲光が闇の中に清涼殿の屋根を浮かび上がらせる。

「こ、これは……」

居合わせた弁官たちが驚きの声を上げた。あの時と同じ光景——しかし、十年前と同じ顔触れはほとんど見当たらない。彼等にしてみれば初めての、恐怖の象徴、鶴との遭遇であろう。

「来た、来た、来たぞお！」

早太が叫ぶ。見開いた眼にははつきりと、喜悦があった。彼にとってまさに千載一遇の、鶴退治の機会が巡って来たのである。二度の鶴退治をもつて、猪早太の名は天下に轟く名声となるのである。

黒雲の中をふたたび雷鳴が走る。どろどろとうねる黒雲の唸りに混じり響くのは、ひゅおう

ひゅおおうと高い不気味な鳴き声。虎鶇に良く似て、しかし遙かにおぞましい。胸の奥に冷たい指を押し込まれたような恐怖に、頼政は思わず呻きを漏らす。

一際大きく雷鳴が響く。清涼殿のすぐ上で輝いた稲光の中、頼政ははつきりと見た。あの日、あの娘がしがみ付いていたのとそっくり同じ場所、殿の屋根上に、四つ足になってしがみ付くばかりの姿を。

「むうっ……」

思わずうなり声をあげ、頼政は眼を見開く。

「な——なんじゃあれは！」

周囲で驚愕の声が上がる。ほとんど悲鳴と言つて良かった。何度となく戦場となつたみやこの衛士平達をも震え上がらせるその異貌——。

それはかつて鶴退治の驚きとはまるで質を異にしたものであつた。ありえない現実、目を覚ましたまま悪夢に出くわしたような、理解できぬもの、許容できぬものへ対する嫌悪であつた。

事実この時までには、ここに集められた者達も、本心では鶴退治と言う名目には半信半疑だつたに違いない。

頼政もそれは同じだつた。戦場という混沌の中で、心を震わせる熱狂に手綱を取り、冷静な打算をもつて命のやり取りをする武士である。日常的に命のやり取りの場に身を置いているか

らこそ、人を害するものはまた人であることを、誰よりもよく知っていた。

この頼政の鶴退治は勅命によるものであったが、その上でなお本当にそんなわけものがあるのかと、疑っている者たちが大半だっただろう。

実際、それは十年前の怪異の折に、頼政が皆に言い聞かせたことでもあった。

だが——居た。

ばけものは、そこにいたのだ。

強風によつて篝火が煽られ、くねくねと衛士達の影がうねる。

その中でひととき大きな影があった。闇に包まれた清涼殿の檜屋根の上。黒雲のごとき霞みを纏い、はつきりと見定めることも難しい靄の向こうに、恐ろしき姿が張り付いていた。

頭は猿。

手足は虎。

身体は猪。

尾は蛇。

——そして鳴き声は虎鶴。

四肢から頭、胴から尾に至るまで、ちぐはぐに獣の身体を継ぎ合わせたおぞましき異様な姿。そのばけものは、誰も見たことがない歪で恐ろしい姿をしていた。

「あ、あれを、あれを見よ！　ば、ばけもの、ばけものじゃ！」

誰かが叫ぶ。狂乱はすぐさま波紋のように辺りに広がり、宮中を覆い尽くさんばかりに伝播する。追い打ちをかけるように雷鳴がとどろき、鵠のひよおおうという恐ろしい鳴き声がそれに拍車をかけた。

吹き荒れる嵐のように恐慌が巻き起こる。居合わせた公卿たち、そして警護の衛士達までもが、ただちに正気を失い、先を争って逃げ出したのだ。鵠の恐ろしき姿にあてられ、また立ち込める深い瘴気は人々の心を容易く侵し、恐怖と不安を植え付けた。

清涼殿は混乱のるつぼと化した。本来警護に当たるべき衛士達の中には、身動きもできぬままその場に倒れ伏す者まで出る始末。頼政は動かず、弁官たちは逃げ惑う公卿たちの中で右往左往するばかり。北の夜御殿、弘徽殿からは、鵠の鳴き声にあてられた女たちの悲鳴までもこだまする。

同時に、駆け付けてきた者達がある。平家の郎党達だった。公卿の誰かが平家に通じ、手引きしていたのだろう。あわよくば、頼政の手柄を横取りしようとしたのかもしれない。

彼らは勇ましく人垣を組み、清涼殿の東庭へと踊り出る。

——ひゅおおおおおおおう！

うねる闇のように定まらぬ姿を纏ったばかりものは、喉を膨らませて高く鳴いた。

耳を塞ぎたくなるような音に。ごうと黒い風が吹き寄せる。胃の腑を腐らせるような瘴気を纏った風に、たちまち郎党たちの垣根が吹き飛ばされる。

ぱあつと地を蹴ったばかりものは、その巨体からは想像も出来ぬほどの身軽さで宙を舞い、南廂より隣の殿屋根へと飛び移る。身を震わせ、鶴が一声を上げると天よりさらなる黒雲が巻き起こり、突風が篝火を吹き飛ばした。

「ぬう……ッ」

頼政は鋭く矢を番え、ばかりものに向けて放たんとした。

しかしばかりものはそれより早く、闇の中に身を翻す。不気味な声がもう一度響き渡ると、空には一層分厚い黒雲が立ち込めた。

どつと流れ込んでくる深い闇——人ならぬ者の世界と化した内裏で、惨劇が響く。

悲鳴が起きた。隣殿へ駆けだしていた弁官の胸から上が消えうせたのだ。太い爪に挟られて頭を失った骸は、ふらふらと数歩を歩いて欄干を乗り越え、地面に落ちた。

その隣では悲鳴を上げて逃げ出した侍従が地面に叩き伏せられて羽虫のように潰され、血糊となつて殿を汚す。小さな頭蓋が卵のように割れ、中身をぶちまけた。

「つ、ひいあああああああ!!」

ぞぶり。深々と腹を抉られ、仰け反つた胴から腸を引きずり出されては、郎党の一人が闇の中に引きずられてゆく。何かを噛み千切り砕くおぞましい咀嚼音が響き渡る。足元に転がつてきた丸い塊に頼政が思わず目を向ければ、それは中身の入った兜だった。

それでも流石は歴戦の郎党たちだ。狼狼を振り切り、怒号を上げて己を奮い立たせては、太刀を抜いて次々に怪物に飛びかかる。多勢をもつてばけものを押しつぶさんとする危害だが、はたして鶴がその身を一振りすると、十人がかりの囲みは蜘蛛の子のように散らされた。

なんとおぞましき姿か。ばけものの背よりは、左右で形の違う赤と青の翼が生え、別々に郎党達を跳ね飛ばしたのである。

瘴気の黒雲がうごめき、怖気をふるう鳴き声が響く。びしやりと、撒き散らされた肉片が帝の御座所を穢す。倒れた篝火が燃え上がり、ばちばちと火花と煙を上げていた。煙に焙られて噎せ返るような血煙が立ち込め、宮中の混乱はなお加速する。

「ぬ、鶴だ……!!」

誰かが叫ぶ。

鵒が出た。再び鵒が出た。この十年において膨らんだ恐怖が、形をとって現れたのだ。かつてみやこを荒らし、帝を脅かした正体不明のばけもの——それがかつての恨みを抱え、復讐に訪れたのだと。黒雲に撒かれ、一間先も見通せぬ闇の中でその畏れはさらに膨らむ。

「く……！」

ねとりと噎せ返る血臭、吹き荒れる惨劇の中、頼政は懸命に歯を噛み締め、怖気を堪えて弓を構える。

そこへ鋭い鵒の鳴き声が飛んだ。再び風が吹き付ける。どろどろと雷を纏う吼え声が、黒雲よりいかずちを呼び寄せる。轟く雷鳴が頼政の耳を激しく打った。顔をしかめ、なおも震える脚を叱咤し、目を見開く頼政。

「おのれ、おのれ鵒め、なんという狼藉か！」

しかし。頼政よりもその隣で憤りを膨らませていた者がいた。頭から湯気を噴かんばかりに顔を赤くした猪早太だ。青年は爆発するように走り出す。

「小癪なばけものめが、もう好きにはさせん！」

「早太、待て！」

「我こそは兵庫頭源頼政様、第一の郎党、猪早太！ この『骨食』の名にかけ、今ここで再び貴様を打ち滅ぼしてくれん！ ばけもの、覚悟しろっ！」

大それた名乗りを上げ、早太は太刀を放り捨てる。懷に大事に挟んでいた短刀を構えて、鶴に躍りかかった。大猿の遠吠えのような雄叫びが、清涼殿を激しく揺るがす。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

体軀に恵まれた早太の突進は、まるで大岩が転がるようだ。金剛石ですらま二つにせんばかりの気合いと刃筋で、短刀が振るわれる。

しかし、早太が振りかぶった刃は怪物まで届くことなく、空しく地面を掠る。

「……オ、……あ？」

からん、と早太の手から短刀がこぼれおちた。

一瞬の黒風と共に、青年の顔と右腕には黒々とした無数の矢が突き立っていたのである。信じられない顔で、己の右の眼窩から頸をつらぬいた矢を見下ろし、早太は血を吐いた。

「お、おのれ、ばけ、もの、……矢とは、ひきよう、な」

目玉が鏃に抉られ、眼窩からずるりとはみ出す。裂けた頬からだだと血と涎をこぼしながら、早太はなおもよろよろと、鶴に向けて歩み寄ろうとした。おそらく錯乱していたのだろう。早太は残る左腕で首筋に刺さった矢を無理やりに引き抜こうとする。頼政が制止する暇もなく、鏃の返しで喉笛を千切り、男の首から鮮血が迸った。

「あ、が」

ぐるんと、片方だけ残った眼球を白目を剥いてその場に事切れる——鵠退治の英雄、猪早太。同時。怪物を覆う黒雲の中に、赤黒いきらめきがいくつもいくつも浮かび上がる。それはまたたく間に鏃の姿を取り、早太の全身を串刺しにする。

いかなる怪奇であろうか。このだけもののひと声は、どこからともなく無数の鏃を呼び寄せ、雨霰と放つことができるらしかった。

地に塗れた早太の顔を虎の前足で踏み潰し、鵠はひとときわ高い声で鳴く。再び無数の矢が現れ、凄まじい勢いで郎党達を貫き、無惨に射殺してゆく。

「ひ…イツ……!!」

もはや、誰もその場にとどまろうとする者はいなかった。

頼政は弓を射ることができず、供の早太は斃れた。もはや鵠に敵う相手はこの場に居らぬ。惨劇の最中に放り込まれ、郎党達の土気もすでに瓦解していた。

我先にと逃げ出すもの、恐怖のままに矢を射るもの、錯乱して斬りかかる者。

平家生え拔きの郎党達が、恐怖に支配されていた。誰にも先駆けて先陣を切り、一番手柄を取ることを常とし、死と隣り合わせに合戦を繰り返す屈強なる猛者達が、だ。

いくら俊敏、強靱であろうとも、相手がただの獣であれば、十分に距離を取って郎党で囲み、次々に矢を射かければやがては弱り殺せるであろう。しかし、このだけものにはいくら矢を射

てもまるで通じぬ。次々と矢を射かけても、それらはまるで当たつてすらおらぬかのように、
ばけものの身体を滑り、外れ、素通りしてしまふ。

さらに恐ろしいことには、このばけもの、どういう理屈か矢を使うのだ。

鶴のひと吠えと共に数十、数百にも及ぶ矢が颯れ、鋭く空を裂いて無差別に辺りを薙ぎ払う。
その様はまるで一軍を相手にしたかのようなうですらあった。一匹で百の矢を放つばけものと、弓
を手にそれを取り囲む百の兵。同じだけの弓が同時に放たれ、倒れ伏すのは兵ばかりである。
郎党達は俊敏に駆け回る獣一匹を過たず狙い撃たねばならないのに対し、獣の側は身動きも
満足にとれぬ兵のどこかに矢が当たれば良い理屈なのだから、当たり前だ。

黒風が吹き荒ぶたび、郎党達の兜が五つも六つもまとめて飛ぶ。降り注ぐ剛弓に射抜かれ、
百舌鳥の早贄のごとく男達が地面に縫い止められた。臓腑を貫き損ねられた若い武士が、鼻と
口から血をこぼしながら呻いている。手足の太い部分を射抜かれたものたちは、血が全て抜け
るまで動けず、緩慢に死んでゆく。

丸太のような虎の手足が振るわれるたび、六尺余りの屈強な武士たちがぺしゃんと潰れ、五
穴から血を吹いてどうと倒れる。牙を剥きだして吼える猿の頭が兜をやすやすと噛み砕き、延
びた蛇の尻尾が締め付ける。

ひゅおうひゅおおおうと清涼殿の屋根を揺らす不気味な鳴き声と共に、黒い影は空を舞う。

腕を貫かれ、腹を穿たれ、屈強な兵たちが無残な姿で転がった。

殿の屋根から屋根へ、黒雲を巻き起こしながら飛び移る姿は、ああ、まさに頭は猿、身体は猪、手足は虎、尾は蛇。鳴き声は虎鷲。

哄笑のように高らかに鳴き叫び、鶴はみやこの夜を蹂躪してゆく。

帝のおわす、この国で最も貴き場所は、血と穢れに満ちた惨劇の場へと変わりつつあった。吹き荒ぶ殺戮の中、頼政はただひとり、弓弦を引き絞ったまま、動けずにいた。

内裏を蹂躪し、殺戮をまき散らし、喝采するように吠えて飛び跳ねる鶴。頼政は鏃の先にそのばけものを見据えて、何度も首を振り、瞬きを繰り返した。

「……俺は、夢を見ているのか」

乾いた声が、老将の喉を震わせる。

それを掻き消すようにばけものが吠えた。もはやその鳴き声は屈強な武士たちをひと吠えで脅えさせ、心を凍り付かせるに等しい。身を揺すった鶴の周囲で、郎党達の身体が千切れ飛ぶ。

——否。

それは、違う。

引き絞った弓、鏃の先に頼政が見るのは、無傷のまま気を失ってばたと倒れていく人々たちの姿。手足が千切れ、胴がま二つなどんでもない。地面に転がる者たちの身体には、細

かな傷しか付いていない。

（惨劇など、ない。——まやかしのだ）

理屈は分からぬ。だが、この場にいる者たちには皆、恐ろしいばかりものが暴れ、次々に人々を殺す恐ろしい光景が見えているのだろう。

しかし。

魂を震わせ、正気を失わせるようなその声は、頼政の耳には確かに、人の言葉となつて聞こえていた。

小さく高い、泣き叫ぶような疝氣を孕んだ娘の声である。

「なんでだよ！」

彼女もそれに気付いているのだろう。

むずがるように暴れ、地面を踏み鳴らし、鶴は頼政に叫ぶ。

「なんでだ！　なんでだよ！　どうしてお前には、わたしが見えてるんだよ!!」

——何ぞ。この身は、何ぞ。

頭は猿、手足は虎、尾は蛇、身体は猪。

否。そんなわけものは、ここにはいない。ただ、慟哭し、泣き喚く、幼い娘がいるだけだ。十年前に――頼政が殺した。

皆が恐れ、逃げまどう妖怪は。

あの時と同じ、幼い娘の姿をして、頼政の目に映っていた。

「どうして、お前なんか、お前なんかにわたしが見えるんだっ!!」

正体を見破られた事は、このわけものにとつて一番の恐れであるらしかった。憎悪を籠めた視線で鋭く頼政を睨みつけ、激しい鳴き声をぶつけてくる。しかしそれは呪詛を込めた赤黒い鎌のかたちを取ることもなく、頼政はただ、大声に顔をしかめるのみ。

娘の振るう手足には、虎のごとき屈強さはなく。

喉笛を噛み千切らんと立てられる牙も、肌に血を滲ませる程度。その正体を看破した頼政に、彼女はただ、無力であった。

「畏れ、だ」

頼政はつぶやく。

鶴。十年前に居たことにされたわけものは、独り歩きした噂のまま、眼にした人々の最も恐ろしい姿を取って現れた。帝を害し、みやこの夜を揺るがした恐るべきわけもの。その噂が最も恐れる姿をとつて、この場に現れたのだ。

ぶ、怪物なんだぞ！」

頭は猿、手足は虎、尾は蛇、身体は猪。

継ぎ接ぎの恐怖を纏い、正体不明を彩る姿を装って、ぬえどりの鳴くように、彼女は叫ぶ。哀しき声だと頼政は思った。

そしてすぐに首を振る。彼女をあのような姿に変えてしまったのは己なのだと。

「わたしに同情なんかするな！ いま、いま謝るならつ、……どうして、どうしてお前は、あの時、わたしを殺したんだっ！」

（――すまぬ）

ばけものも、人のように泣くのだなと場違いな事を考えながら。

頼政は静かに最後の一矢を手にとつて、弓を構える。

同時に娘も身を震わせた。一際濃い黒雲を呼び寄せて、少女の姿をその奥に隠す。

さらに空には先程に数倍する赤黒い鏝が現れた。あれは己の弓矢だと、頼政は直感していた。あの時、あの娘を射いた己の弓に、寸分の狂いもない。

そう、狙いを外し、彼女に死の恐怖を味あわせた、恨窮の弓。

涙を浮かべ、きつと頼政を睨み、娘が叫んだ。赤黒い鏝がぎらり煌めいて嵐のように押し寄せ、その数はまるで雨礫のごとく頼政を撃った。空を裂いて呪詛をまき散らし、瘴気を溢れさ

せてあたり一帯に突き刺さる弓矢の中、頼政はじつと彼女に相向かい、逃げなかった。

「……………」

ただしつかと娘を見据え、力強く引き絞った矢を放つ。

かつて名無しのばけものを射た矢が、一矢にて黒雲を吹き散らし——その奥より少女の姿を暴きだす。鏃に腕をかすめられ、声を上げた少女の胸に。

返す頼政の二矢が、深々と突き立っていた。

八 木ノ下

二度の鶴退治をもつて、頼政の名はみやこじゅうに知れ渡った。

大江山の首魁、酒呑童子を討伐した源頼光以来の辟邪の武、摂津源氏——その名を継ぐに相応しき、古今無双の源氏の長老。摂津源氏と渡辺党の名は平家全盛の世にあつて、なおその勇名をあきらかなものとしたのである。

二条院よりお住まいを移した二条帝は、恐ろしき鶴を射止めた頼政の活躍をたいそうお歎びになり、新たな御座に頼政をお招きになつて、手づから御衣を下賜なされた。

この時、取り次ぎを行った右大臣、歌の名手で知られる徳大寺公能は頼政に帝のお言葉を伝え、その肩に帝よりの御衣を掛けながら、

「五月闇 名をあらはせる 今宵かな」

と詠んだ。雲の上の雁を射たという楚国の射手、養由基の故事を引き、頼政は闇夜雨の中で

も鶴を見事射止め、名を馳せたことを称賛したのである。

この公能の歌に、頼政は澱むことなく、

「たそがれ時も 過ぎぬと思ふに」

と返し、御衣を頂いて退出した。二度の絶賛をうけながらも、それはただ己のおかれた環境が良かっただけなのだ。謙虚な姿勢を崩すことない頼政に、その場の誰もが称賛を送った。管弦・歌・朗詠等に優れる多芸多才な大炊御門の右大臣も、頼政の見事な歌才を褒める言葉を残している。

この時より程なくして、頼政は近衛河原の屋敷に、娘を一人住まわせることとなった。

奇妙な話であった。噂を聞いて近衛河原まで様子を見に行った野次馬達によれば、確かに少女の声が聞こえる。しかしそれらはとても姫君とは思えぬ品の無いものであり、声に合わせてそれを追いかけて回す足音が始終聞こえているのだと言う。

頼政には既に数名の娘がおり、その一人は二条帝の女房として出仕していることが知られていた。しかしこの娘は、明らかに彼女らとは別人であるというのだ。

この奇妙な娘を、頼政は己の傍から離さず、自ら世話を焼いてまで寵愛しているという。頼

政だけではない。どういうわけか摂津源氏の長の屋敷にあつて、この娘はたいそう大事にされているらしかった。

さて、これは如何なることか。その姿振る舞いを耳にする限りではからはやんごとなき姫とはとても思えぬが、さりとて下女とも思えない扱いの良さは、いつしか市井のささやかな噂となつていた。

なにしろ鶴退治の英雄、摂津源氏の棟梁が、その老いらくとなつて招いた娘である。口がさないみやこの人々の興味を呼ばぬはずがない。一体どここの出自であろうと、下世話な勘ぐりをするものたちは後を断たなかつた。

帝がいたく頼政のことを信頼なされるようになったという話も合さり、件の娘は菖蒲御前などというあだ名まで付き、帝が寵愛されていたやんごとなき姫君の血筋のものではないかという話までが囁かれるようになったのである。

なんでも、若き日の頼政は宮中にあつた美しき姫君を見染め、道ならぬ恋に落ちたが、その頃の彼はまだ勇名も無き幼き少年。とても叶わぬ恋であつた。しかし頼政はその想いを捨て切れず修練に打ち込み、ついに帝の信頼を勝ち得てその想いを遂げたのだというのである。

頼政が鶴退治に名乗り出たのも、その恋を叶えるためであつた——などという悲恋の成就を、さも見てきたかのように語る者まで出る始末であつた。

近衛河原の屋敷の者達となれば、もう少しばかり事実を知る。

この娘は近衛河原にあつて木ノ下このしたと呼ばれていた。市井の噂話とは似ても似つかず、頼政の恋の相手などとはとても思えぬ、気品に欠けた娘であつた。

年の頃は十を少し出たばかり。衣にも頓着せず、簡素な寺に入つた童女が着るような墨染の衣を引きずつて、裾からは白い足を膝上まで出して気にもせぬ。

ぼさぼさの髪は肩上で無造作に切り落とし、くしけずる事もなく、牙のように尖つた歯を隠すことも嫌がるほどだ。香も焚かず、眉を書くどころか化粧もしない。まるで洛外的路傍で寝起きする流民のような成りであつた。

そしてその素行は外見に輪をかけて酷い。なにしろ肌蹴た衣を気にせず屋根に登る、犬を追つて庭を駆けまわる、勝手に馬を連れだして日が暮れるまで駆けてくる——おおよそ、娘の振る舞いとは思えぬ悪戯ぶりである。貴族の子女どころか、坂東の悪童でもありえない野蛮な振る舞いに、眉を潜める家人も少なくなかつた。

郎党や家人への悪戯も絶えることなく繰り返され、肥壺に落とされる、書物を荒らされる、鶏が見えないと探しまわれば、庭で丸焼けになつた肉を頬張る彼女の姿が見られると、騒動ばかりをもたらす娘に、家を預かる女房達は頭痛の収まる日がなかつたという。

主である頼政が連れてきた娘ゆえ、表立つて言う事はばかられたが、多くの家人は扱い

ね、ひどく手を焼いていた。また、どうしてそこまでして頼政がこの娘を大事に扱おうとするのか、そのことは皆の疑問でもあった。

なにしろ摂津源氏の棟梁にして、二度の鶴退治を果たした武門の誉れである。かつては多くの姫君と浮名を流した彼が、老いらくにして出自も知れぬ童女を囲ったとなれば、口がさない者達でなくともあれこれと想像をたくましくしようというものだろう。

中には菖蒲御前の噂を真に受け、やんごとなきお方の係累が山中に棄てられていたのを密かに保護し、育てているのだと考えている者まであった。割と良い線をいっているなと頼政は苦笑する。

今日もまた屋敷のあちこちで起きる騒ぎを聞きながら、頼政は声を上げて娘の名を呼ぶ。

「木ノ下。木ノ下、どこだ」

「なんだよ頼政」

木ノ下は庭の木の上から、脚だけを枝に引っかけてぶらんとぶら下がっていた。だらしない墨染め衣の前襟が大きくはだけ、白い肌が覗いているのを気にもしない。

「聞いたぞ。また鈴を困らせたのか」

世話の為に付けた娘が頭から落ちてきた蛇に驚いて眼を回したという話を聞いて、家人がとうとう頼政に泣き付いたのである。彼等の必死な形相に、流石に頼政も見過ごしてはおけなく

なつた。

「へーんだ。あいつが五月蠅いからいけないんだよ。二言目には礼儀だ作法だつてさ、息が詰まるつての」

どこで摘んできたか花の蜜をつまみ、鋭い歯の間からべえと舌を出して見せる娘——木ノ下。

「このぬえ様にお小言だなんて、百年早いんだよ。……お前だつてそうだぞ、頼政」

「呆れたものだ、そんな大層なことが言えた様か」

「ふん、人間の格好なんて知ったことじゃないね」

生意気に口を尖らせる娘、木ノ下。

そのまことの名を、ぬえという。

……そう。彼女こそが二度に渡りみやこを騒がせた大妖怪、鵺であつた。

このことを知っているのは郎党達の中でもごくわずか、授や省を含めた忠臣だけである。

あの日、頼政の放った矢はついに彼女を傷付けることはできず、鵺を仕留めることは叶わなかったのである。しかし鵺もまた力を使い果たして倒れ、その場に崩れ落ちた。

頼政はひそかに鵺の遺骸と偽って彼女を匿い、近衛河原の屋敷へと連れ帰つたのだ。

ちようどその時、近衛河原には仲綱が伊豆からみやこまで夜を徹しての強行軍で駆け戻つて来たところであつた。できるだけ内密に事を運ぼうとした頼政だが、嫡男にまで秘密にしてお

くわけにはいかず、頼政は齒切れ悪く事の顛末を仲綱に話した。

まず仲綱は絶句し、次に激しく怒り、そして最後に父の正気を疑った。頼政があやかしの術に惑わされ、気狂いとなったのではないかと考えたのだ。

帝より討伐を命じられた妖怪を匿い、育てることにしたと聞かされれば、息子の対応は実に真つ当なものであったと、頼政ですらも思う。

正気を失った父の快癒を願い、仲綱はただちに信貴山は朝護孫子寺より徳の高いと評判の僧を呼び寄せ、加持祈禱を始めさせようとまでしたのである。

そんな息子をどうにか説き伏せ、納得させるまでには三日ほどを要したのであった。

「――父上が本心から仰っているのは分かりました。あれが幻であつたというのも、まあ納得するといえましょう。ですがやはり看過できません。このばけものは、帝を害し、父上の命をも奪おうとしたのですよ。早太もそうだ」

「それはなあ、俺と早太はこの娘の……まあ、言い方は妙なことになるが、この娘自身の仇だ。殺されてもおかしくないことをしたのだ。恨まれるのは当然だろう」

「父上、親が妖怪に取り殺されようとしているのを、子に黙って見過ごせというのですか！」「むう……」

「百歩譲つてその事を棚に上げるとしてもです。この娘が人々を恐れさせ、帝を脅かしたこと

は確かでしょう。父上はそれすらも庇うというのですか！」

「……それは、そうなのだがな……」

父が本気であると知ってな、お仲綱は強硬に反対したが、いつになく頼政の決意は固い。どうあつても譲らぬと知って、ついに仲綱も不承不承それを認めて折れ、説得を諦めたのであつた。

「仲綱はなまじ優秀だからな、つい面倒ばかり押し付けてしまう。気苦労をかけさせてばかりで申し訳ないものだ」

仲綱が伊豆に戻つた後、頼政は家人にふとそんな事を漏らした。

ぬえを人間の娘として迎えるのに際しては、団三郎があれこれと奔走してくれた。顔の広い彼女は、ぬえを戦災で身寄りを失つた娘という身分に仕立て、近衛河原に滞在させる手はずを整えたのである。

商人が金にもならぬ事にどうしてここまで心を砕くのかと、不思議に思つた頼政が訪ねれば、団三郎はかかかと痛快そうに笑い、

「頼政どの、儂にそれを聞かれますかのう。女だてらに商いをしておれば、女の身というものがいかに脆く危うげなものか、嫌でも思い知るものでしてな。守つてやらねばという親心の一つや二つ湧いてきますものじや。これは、恋歌の妙で知られる頼政殿もまだまだ女心が分かつておられぬと見える」

そう言われてしまえば、頼政は返す言葉もない。

「なに、こたびの退治にお手伝いできなかった埋め合わせと考えて頂いても結構。ただの貸しほど高いほどもないという言葉もありますからのう。たつぷりと恩を売らせていただくとしましようかの。なに、案じていただかなくとも、これで頼政殿と僕は一蓮托生ですからのう」

「怖いことを申すな」

「かかか。では、早速手配するとしましようかの」

したたかな女商人と、家人たちの献身によつて、ほどなくぬえは「木ノ下」として近衛屋敷で暮らすことになった。

もつとも、それからがまた大変だったのである。

はじめ、頼政はぬえに九重と言う名を送り、洛外近くに館を建てて、世話をする女房や家人をも揃えさせようとしたのだが——そんなおしとやかな名前は趣味じゃないとぬえがそれを断つたのである。

「ばーか。名前までつけて、わたしを囲ったつもりか？ 冗談言うにしたって自分の歳を考えると、頼政」

「——不自由はさせぬがな」

頼政とて、本気で彼女を自分のものにしようと考えていたわけではない。身元の知れぬ若い

娘を傍に置くために、一番対外的な説明をしやすい方法というだけだ。家格にやや不都合のある姫を傍に置くため、屋敷を建てることは古くから良く行われていた。

とは言えここまで素っ気なくされるとは思わず、頼政は内心、少しばかり戸惑ったのも事実であつた。自分で言うのもなんだが、頼政は顔にも歌にも所作にもそれなりの自信はあり、これまで求愛を袖にされたことはなかったのである。

「けつ、絶対に御免だつての。綺麗に着飾つて紅でも指して、頼政さまなんて呼べつてか。鳥肌立つちゃうね。それとも頼政、わたしみたいなのが好みなの？ 良い趣味してるねえ」
牙をむき出しにしてけらけらと笑う。粗野なしぐさだが、不思議と不快にならなかった。

頼政は別にそれでも構わなかったが、ぬえが乗り気ではなかったし、なにより齡六十を超えて若い娘を召し上げるのは如何なものかと、仲綱が実に嫌そうな顔をしたので流石にこれは諦めることになった。

かくして、ぬえは近衛河原の屋敷に、木ノ下としてかくまわれることとなつたのである。樹上の上のぬえを見上げ、頼政は腕組みして吐息する。

「お前は目立ちすぎるからなあ、少しは人の世に溶け込ませてやろうという心遣いだらう」
「余計な御世話だよ。第一」

ぬえがくると指を丸めると、そこから羽根の生えた小さな蛇のようなものが姿を現した。

彼女がそれをぱくんと口に含まと、たちまちぬえの姿は美しい姫君へと変じる。

これがぬえの力。『種』を植え付けた者の姿を覆い隠し、別のものに見せるという正体不明の力である。

樹の上の姫君というちぐはぐな姿をしながら、ぬえは元の姿と同じ声でけらけらと笑う。

「わたしに人間の作法を教えようなんてのが馬鹿馬鹿しいのさ」

「だが、その力も自在という訳ではない——だろう？」

共に暮らして一年余り。ぬえの力の特性というものを、頼政はようやく把握していた。はじめ頼政は彼女が見るものを騙し、姿を自在に変えることができるのだらうと考えた。しかし、どうにもそれでは辻褃が合わないことが頻出したのだ。ぬえの力——種を植えつけられたものが同時に複数の人々の目に触れた時、特に彼等が種の事を知らねば知らぬほど、それぞれの目には別の姿として映るらしい。

そしてその姿は、その時彼等が最も気にしているものの形を取ることが常であった。金の無心に頭を悩ませていれば錢に、腹を空かせていれば握り飯に。恋人に送る歌について思案していれば、その返歌を記した短冊に。

「常に、お主が見せたい姿を見せられるとも限らんのだ。その姿のままでも怪しまれぬようにしておくのは悪いことではなからう」

「やだね。人間の真似なんか誰がしてやるもんか。わたしは大妖怪ぬえ様だぞ。……頼政、お前に従ってやってくるのもただの気まぐれなんだからな。ちゃんと覚えておけよ」

「……わかったわかった」

みやこ広しといえども、摂津源氏の長にこのような物言いをする娘がどれほどいふことか。宮中でぬえを見た者達が皆が同じような姿を見たのは、あの場に居合わせた最大の関心事が、かつての頼政のばけもの退治によつて流布された「鵺」という恐怖であつたからなのだ。

みやこの夜を飛び回り、人々を脅かすばけもの。ぬえの『正体不明』は、誰もが恐れるその姿となつて映つたのである。ちようと、頭が猿で胴が貉、手足が虎などという、あやふや極まらない姿で鵺の姿が広まつていたからこそ、多少の違和感は無視されてしまつたのだらう。

ぬえがその力を最大限に振るうには、事前に入念な準備が必要であつた。多くの者たちが共通して恐れを抱く、確りとした姿がある時こそ、皆の恐怖はひとつに集まり同じ像を結ぶ。そうしてみやこの夜を騒がしたばけものはその姿を現したのだつた。

種を力に戻し、元の姿に戻るぬえに。頼政は腕組みをして苦笑する。

「しかし、ぬえよ。お主もきちんとしておればましな造作をしておるのだから、せめて化粧くらい少しは繕つたらどうかと思うぞ。その方が色々と楽だらう」

「またその話か。やなこつた。堅苦しい」

ぷいと顔を背けたぬえだったが、すぐにふと何かを思い付いたようで、ぴよんと枝を飛び降り、ふわりと宙を飛んで頼政の胸に飛び乗る。

「それとも頼政、やっぱりわたしに懸想してるのか？」

にんまりを口を緩め、ぬえは恥じらいもなく衣の襟をはだけてみせた。

まったく色気の欠片もない、肋の浮いた板のような胸元に頼政は苦笑する。

「ませたことを言うな、餓鬼の分際で」

「ふん、よく言うね」

ぬえはさらに大胆に衣を捲る。肉付きの薄い胸の下、みぞおちの辺りから、右の脇腹へ向けて、深々と矢の貫き通した傷痕があった。十年前にまだ人間だった頃の彼女を射抜いた、頼政の弓の痕である。

「……わたしを傷ものにしろって、その言い草はないだろ、頼政？」

「はしたない、そんなものを見せるな」

「ん？ なんだ頼政、興奮したのか？ いい歳して助平爺め」

胸元を見せつけるように寄せて見せながら、口元から尖った歯を見せて妖しく微笑むぬえ。少年のものとそう変わらぬ薄い乳房であるが、あどけない顔立ちが見せる妖艶な誘惑をもつてすると、とうに年枯れたはずの頼政の胸をざわつかせるのである。

まだ十一、二になったばかりと思われる娘のすがたは、ときどき驚くほど妖艶な一面をのぞかせた。とくにその妖しげに紅く濡れた唇や、伸ばし放題でくしやくしやと定まらぬ髪、肋の浮いた白い肌。いずれも美しさとは程遠い粗野なものであるはずなのだが、頼政には不思議と眼を離せぬ魅力があるのだった。

「ん、ほら、どうした、頼政？」

「……ああ、わかった、わかったからしまえ。……もう五月蠅いことは言わん」

「初めっからそう言えばいいのさ。意地張りやがって」

降参だと両手を上げる頼政に、ぬえは上機嫌で木の枝から飛び降り、その背中に飛びつく。そのまま彼を縁側に腰かけさせ、ぬえは頼政の膝のに頭を乗せ、ごろんと横になった。

「まったく、手のかかるじゃじゃ馬だ」

「引き取った奴が悪いのさ」

苦笑する頼政に、ぬえはにいと齒を見せ、屈託のない笑い声を上げる。

つられて頼政も笑った。宮中で求められる阿諛追従とはちがう、腹の底からの、心底愉快な笑いだった。

「そうだな、引き取った責任は取らねばならぬな。もう二度と悪さをさせぬように、見張っておくか」

「またそれかよ。気色悪いな、いい歳してなに言ってるんだっての」

摂津源氏の長を捕まえてこの扱い。見るものが見れば激怒してもおかしくはない。それでも、頼政はこうしてぬえと過す時間をなによりも心地よく感じていた。

あの日の夜の秘密を共有できる、かけがえのない大切な友を——こうして得ることができたのだから。



おおよそ、騒動を起こしながらもぬえ——木ノ下を含めた近衛河原の屋敷での毎日は、日々忙しく過ぎていった。いろいろと悪戯は耐えぬものの、ぬえの振る舞いは基本的に可愛らしいもので、本気で屋敷の外にまで迷惑をかけるようなことは起こさなかったのだ。

精々、やんちゃな男子が一人増えた程度のことであると、家人が安堵と共に理解し、仲綱が痛む額を押さえ、郎党が苦笑と共に受け入れて。

みやこの噂も七十五日と遠のくころには、いつしか木ノ下は近衛河原に欠かざる一人となつていった。

まともな育ち方をしていないため、子供のような見てくれに惑わされるが、ぬえは実のそこ

る頭の回りも速く、弁舌にも長ける。特に嘘や屁理屈では叶うものは居らず、理屈屋の仲綱でも言い負かされることもたびたびであった。

また、どこで学んだかは知らないが、ぬえは古今の和歌や古典の物語などにも一通り通じていた。いかにも人外らしいと言ふべきか、生来のものか、解釈はどれも捻くれたものばかりであつたのだが。

ぬえの元となつた少女の父はおそらくかの正四位参議の源雅頼。母の出目は定かではないが、みやこの宮中に入入りできる程度には恵まれた血筋なのである。受け継いだ才はあるのだろう。手のかかる子供のようなぬえであつたが、けして見た目通りの子供ではないことに、頼政は時々どきりとさせられることがあつた。

例えば、ある冬の日のこと。頼政が一人、屋敷の縁側で物思ひにふけつてみると、廂の上からぬえがひよいと顔を出してその様子を覗きこんでくる。

「どうしたのさ頼政。難しい顔して」

「……お前はまた屋根の上から……いや、まあ、なんでもないさ」

またもだらしな性格の木ノ下——ぬえに、頼政は眉をしかめたが、すぐに表情を引き締め、咳払いを挟む。

「ははあん。その様子じゃ女にでも振られたな」

「む」

「誤魔化しても無駄だよ、顔に書いてある」

この頃、頼政は二条帝の女房である、待宵の小侍従と呼ばれる美しい女と知り合い、互いに恋歌を送り合う仲となっていた。しかし最初こそ聡明で情感深い彼女の歌に魅せられ熱心に歌をかわしたものの、日々の職務やお互いの年齢差などもあつてつい音信も遠くなり、ついつい歌の頻度も離れていた。

そうしているうちに小侍従が若い男との新たな恋に移ったという話を聞いたのである。

「それでうじうじしてるんだな？ いい気味だ。いい歳こいて色気を出すからさ」

「そうは言うがな……」

歌のやり取りは貴族の基本教養とも言え、通い婚が通例であるみやこにおいて、このようなことは頼政に限らず宮中では多く行われていた。待宵の小侍従も二条帝のもとに使える女房の中でとく歌の情趣の深さと即詠の才でこの人ありと知られた人物であつた。

なによりも、小侍従のあらたな恋の相手は平忠度。まだ二十歳になるばかりの清盛の異母弟である。平氏の中においても文武に優れ、若くして藤原俊成に師事を約束されているという。

歌を通じて繋いだ絆が、歌によつて離れていくことは、頼政の歌人としての矜持にも関わることである。そう簡単に割り切れるものではない。

なおも眉間に皺を刻む頼政に、ぬえは呆れ顔をみせる。
そしてしばしの後、頼政の背中に飛び乗ってこう詠んだ。

「忍びこし ゆふくれなゐの ままならば
くやしや何の あくにあひけん」

「む」

「わかってないなあ頼政。いくらいい歌を詠むからって、ロクに会いに来てもくれない男にいつまでも心を残す女がいるかつての。待宵の小侍従なんて頭のいい奴ならなおさらだよ」

頼政は思わず唸っていた。夕紅の情景につれない男への慕情を織り込み、恋に飽きる移り気な心会えないことへの未練をちくりと混ぜた見事な歌だ。と技巧、即詠、籠められた情感。いずれの点でも申し分のない出来栄である。ただ耳にして覚えたというだけでここまで見事な歌を詠むことはできないだろう。

頼政は既にこの時歌壇にても広く認められ、その歌才を高く評価されていたが——その頼政から見ても、ぬえの歌は新しい独特の感性を持ち、新鮮に映ったのである。

頼政はしばし考え、こう返した。

「くれないの あくをばまたで 紫の
わかねにうつる 心とぞきく」

「なんだそりや。……ひっどい歌。男の嫉妬は嫌われるよ、頼政」
「うるさい」

不貞腐れる頼政の隣で、ぬえはふかふかと浮かびながらけけらけら笑う。
それもそのはず、頼政の返歌は紅花の色を落とす灰汁に、飽くを掛けて、相手の心移りを咎めるものだ。女々しいとは思いつつも、やはりそう簡単に心残りは断ち切れない。老いらくであらうとも、これは頼政の恋であつた。

結局、この後頼政と小侍従との関係は修復されることなく、距離は離れてしまふが——後に彼女が出家し、坂東に向かう時に、頼政はそれを案じる歌を送っている。

そこには疎遠になったかつての恋人に対し、優柔不断な男の背中を叩いて急かす少女の姿があつたのである。



さて、そんなふうには頼政とぬえが近衛河原の屋敷で共に過ごす時間は多くなっていたが、そんな時、決まって頼政の様子をじっと物陰から窺っていた小さな姿があった。

今日もまた、ひとしきり騒いで頼政をからかったぬえが、彼の傍を離れていったと同時に、そろりと姿を見せた彼の落ち付かない様子に、頼政は顎をさすって首を傾げる。

「仲家。どうした」

「……父様。お尋ねしてもよろしいですか」

身をかがめた頼政の元にぱつと駆け寄ってきたのは、まだ十にならぬほどの幼い息子である。仲家は、しばらくきよろきよろとあたりを窺い、周囲に誰も居ないことを確認してから意を決したように切り出す。

「父様は、どうしてあの——木ノ下のような女子をお手元に置かれるのですか」

真面目な顔をして聞いてくる仲家に、不意をつかれた頼政はむうと唸ってしまう。

「あのように父様を軽んじ、馴れ馴れしくするような振る舞い、仮にも摂津源氏の長に許されることではないと思います。それなのに、何故？」

「ふうむ……仲家。木ノ下は嫌いかな？」

「……好きになれません。あの娘は私とひとつふたつしか変わらぬ歳であるはずなのに、私の

ことをやたらと子供扱いして、からかうのです。母君や女房達はあのように、……その、はしたない格好もいたしませんし、粗野な言葉遣いもしません。父様、みやこの外にはあのような女子が居るのですか？」

頼政の息子たちの中で、一番年少の兄弟である仲家と、孫の宗綱は、ここ近衛河原でもよくぬえの悪戯の相手にされていた。何度騙されてもけろりとしている宗綱と違い、ことに気の強い仲家はからかわれるたび顔を紅くしてぬえを追いかけ回し、屋敷を騒がせるのが常であった。頑なな少年の反応をぬえも面白がっているようで、二人が庭先で睨み合っているのを頼政も良く見かけていた。ぬえの挑発に乗せられた仲家が、むきになって弓の勝負をするに至ったこともある。結果は——ぬえの挙動に散々心を乱された仲家の惨敗であった。

仲家とて色々と物心の付く歳だ。幼いながらに、明け透けに接してくる娘に対してどう接しているのか分からずに、心を持て余しているのだろう。なるほど、男にとって女はまるで底の知れぬ魔物のように思える時があるか、仲家は今まさにそのことを身を持って思い知っているのかもしれない。

「俺には、木ノ下は、お前のことをけして嫌ってはいないように思えるがな」

「そんなことはありません！ あいつは私に悪戯ばかり仕掛けてきますし、性質の悪いからかいをやめません。私だってあんな娘は嫌いです！ 父様、見ていてください！ あいつの弓の

腕前など、すぐに追い越してみせます！」

「……そうか、そうか」

両の拳を握り、心外ですとばかりに膨れる仲家をなだめ、頼政はなんとも微笑ましい息子の様子に頬を緩める。しばし口を尖らせていた仲家だが、やがて急に難しい顔をして、大きく首を振った。

「あの……そうではありません、父様、私が聞きたいのは」

「うん？」

「父様……その、あれは、あの娘は……父様の言うように、本当に人ではないのですか？ 木ノ下は、自分がみやこを脅かした恐るべきけものであるということです。そんなものが、本当にいるのですか？ どうしてこの屋敷にいるのですか？」

声を潜め、耳打ちするように問うてくる仲家。

どうやら、それが仲家の一番聞きたいことであるらしかった。

こうして正面切って頼政に訪ねることに、いくらか躊躇はあったのだろう。言葉には迷いがあり、それが仲家の決断を教えていた。幼い息子の真摯な視線がわずかに不安に揺れている。

頼政はどう応えたものかと腕組みをし、しばし思案する。

「……そうだな。仲家、遮那王を知って居るか？」

「牛若どのですか？」

知らぬがありませんと、仲家は拳を握って言い返した。父にまで子供扱いされたと腹を立てたのだらう。頼政は笑ってそうではないと手を振った。

牛若——その名は源氏にとつて特別な意味を持っていた。平治の乱にて処刑された、河内源氏の嫡流、源義朝の息子である。河内源氏のほとんどが命を落とした先の乱において、清盛が存命を許した数少ない源氏の嫡子であった。

牛若は乱の当時まだ生まれたばかり。母である常磐御前の元ですやすやと眠るばかりの赤子であつたという。乱の勝者となつた清盛は、かつての保元の乱の失敗を繰り返すことのないよう、源氏の残党を徹底的に狩り出し、次々に処刑したが——まだ幼かつた頼朝、義経らの兄弟たちを皆殺しにすることまではしていなかつた。

これには清盛の母の池禪尼や、嫡男である平重盛の嘆願があつたためともいう。幼子の命を奪うなど鬼畜の所業であると、母と息子に揃つて諭され、さしもの清盛も追訴の手を緩めねばならなかつたとの噂であつた。

とは言え、平家に背いた源氏の嫡流を在野に置くことが赦されるはずもなく、頼朝は二度と俗世に関わらぬことを約束させられて伊豆へ配流。牛若もまた、やがては出家し俗世より離れることを前提に、鞍馬山へ預けられることとなつたのである。

牛若の名を出され、仲家も生き別れた弟・駒王丸のことを思い出しているようだった。

「そう、牛若だ。あやつは、鞍馬の山で天狗に稽古を付けてもらつておると聞くぞ」

「天狗に、ですか……?」

片目をつぶつて言う頼政に、仲家は目を丸くする。まさかこの父が嘘を言うはずもないと信じているようだった。

源氏の嫡流となれば政治的にも利用価値は高い。平治の乱以降、源氏の郎党達も散り散りとなつて久しいと聞くが、彼等の中にはまだ源氏再興を夢見ている者たちが残つていてもおかしくない。おそらくは彼等のうち、武芸に長けた者が鞍馬の天狗と称して遮那王に武芸を仕込んでいるのだらうと、頼政は考えていた。

それはきつと、九分九厘正しい。

だが——残りの一厘ばかり、ほんものの天狗が遮那王に素質ありと見込み、修業を付けているようなこともあつて良いのかもしれないと、頼政は思う。

「お前も聞いたことはないか、五条大橋で 通る者達から刀を狩り集めていた武蔵坊弁慶などと名乗る巨漢の荒法師を、見事下した少年がいるという噂を。ここだけの話だがな、あれは牛若だ。悪さをする荒法師を懲らしめに、鞍馬からやつてきたのだと言うぞ」

「本当ですか……!」

仲家は拳を握つて目を輝かせる。背伸びをしてもやはり同じ年代の少年として、絵巻のような活躍に憧れる時期なのだ。

「そのように、世には不思議なことはあるものだ。確かに木ノ下は少しばかり人とは違う。だがな仲家、お主が木ノ下のことを良く分からぬと思うように、木ノ下もお主のことを良く分からぬと思つてゐるのだよ。……あいつはあいつなりに、お前たちのことを知ろうとしているのだ。まあ、少しばかり回りくどいのは悪いところだ。そこは父が叱つておかねばならんな」

「……………」

仲家は幼い額に眉を寄せ、懸命に父の言葉を理解しようとしているようだった。

「俺は、木ノ下も、お主の兄たちと同じように、共にこの家に暮らす家族であつて欲しいと願つてゐるよ」

父の言葉にゆつくりと頷く仲家の頭を撫で、頼政は微笑みかける。

それで仲家の戸惑いは解けたようだった。一礼して走り去っていく息子の後ろ姿を見送り、ひとり吐息する。

「河内源氏の嫡流、か」

そうして思い出すのは、伊豆に配流になつた義朝のもう一人の息子のことだ。

右兵衛権佐、源頼朝。幼いながら平治の乱にも参加していた彼が、伊豆で幽閉生活を送り始

めてもう十年近くになる。

はじめは決起を恐れていた平家も、今ではすっかり彼の存在を忘れつつあるようだった。それというのも彼が実に従順に、平氏の監視下においても一切の不審な点を見せずに過ごしているからだという。

頼政と頼朝が顔を合わせたのは、彼を伊豆へと護送する時のわずかな間だけだったが——たったそれだけでも彼の才覚の片鱗を垣間見るには十分だった。義朝も若くして聡明な少年だったが、頼朝はそれに輪をかけて優れた見識をもち、国の行く末を見通す先見性を備えていたのだ。己の立場と河内源氏嫡流としての重要性、今後の自分の行く末、また自分の命を嘆願してくれた池禅尼や重盛への感謝も忘れていなかった。

それだけの才を持ちながら、頼朝がかの地で仏門に帰依し、隠棲の身を過ごしているというのはいかにも惜しい。身内最肩を割引いても頼政にはそう思えてならなかった。

（清盛殿も、なさることの割に度量の狭いことだ）

若き日の清盛であれば、氏族家族などに囚われず、この才覚に溢れた若者を己のもとに招き、存分にその腕を奮わせたかも知れない。しかし——自分に弓引いた敵対者の息子を己の内に抱えるには、平家は大きくなりすぎたのだ。

あまりにも大きくなりすぎて、清盛の夢はいまのみやこの在り様に治まり切らなくなってい

るのかもしれない。先頃、人としての位の最高位である太政大臣を辞し、清盛は出家してみやこより離れた福原に大輪田泊を築き、遠く大陸との貿易に着手していたのである。

あるいは——伊勢の平太として海賊たちの船に乗り込み、瀬戸の海を駆けていた頃から、清盛入道の目指す先は、この小さな日ノ本には収まりきらなかったのかもしれない。福原に貿易のための港を築くとし、私財をなげうって建設を進めている清盛入道の元には、国内外の人々が多く集まるようになっていた。

今や国際港となった福原の栄えは綺羅充滿、堂上花の如しと謳われるほどだ。大輪田泊の港は整備され、最新鋭の唐船がずらり帆を並べている。清盛入道はかの地に大陸への交流を見据え、風通しの良い新たな為政の地を築くつもりなのだろう。

異人と帝との面会を禁忌とする慣例を破つて、宋国よりの使者と後白河院の面会をも実現した清盛に対し、九条兼実ら古参の公卿らはこれを天魔の仕業とまで激しく批判していた。

桓武帝の時代よりこの地にみやこが築かれまもなく四百年。平安京はその名の通り盤石のままこの国の中枢であり続けた。いまはそれによる多くの弊害を抱えている。南都の僧、延暦寺の強訴、皇の樹に巻き付く藤、摂関家の策謀。深く広がった多くの女院——皇を差し置いて治天の君となった院の君。それに従う近臣たち。

四百年の歳月の間に降り積もった、この国の為政にまつわる魔物。平治の乱も保元の乱も、

それに端を発した諍いだ。その乱を勝ち抜いた清盛は、乱の因となった古いしがらみを全て斬りはらわんとしているのだらう。かつての帝たちのように新たな地に始まりを刻む事で、それまでの古い因習を切り捨て、弊害を削ぎ落とさんとするように。

「いっそ、清盛入道が源氏を根絶やしにしておればまだ話は違つたのだらうがな」
あまり声にしては出せぬことを頼政は一人つぶやく。

それが出来ないところもまた、入道殿の人柄だらう。平家の屋台骨である彼は、恐ろしく先見性に長け、広い視野をもち、神仏や帝までも己の道具として扱うが、その一方でどこか非情になり切れぬ男だ。源氏の長である頼政を手元に置いているのもその一旦だらう。

修羅に徹し、歯向かった勢力を子孫に及ぶまで麁殺していれば、少なくとも遺恨を招かずに済んだらうことは確かなのだ。

彼が情けをかけた幼き命達は新たな争乱の若芽となつて、各地に根付いている。平氏に迫害された源氏は、泥を嚼る屈辱の中で、平家への反発心を、憎しみを、育てているに違いない。いずれまた争いとなるのは避けようのないことなのだらう。

「……俺が生きている間は、せめてそのような事がないよう願いたいものだ」
己の息子達、孫達の顔を想い、頼政は、ただそう願わずには居られなかった。

九 平家にあらずんば

さて、世が平氏一門の隆盛と共に栄える中、その名を忘れられながら、ひっそりとお隠れになったお方がいた。誰あろう、先の保元の乱にて皇族でありながら讃岐配流という重い罪を課せられた崇徳院である。

時はしばし巻き戻る。保元二年（一一五七年）、崇徳院は險しき波に囲まれた讃岐国での軟禁生活の中、深く仏門に傾倒されていた。

仏門の教えをひとえに案じ、世の無常を虚しく思われた院は、ご自身の罪を償い、極楽往生を願って五部大乘経の写本をお作りになられていた。

一口に五部大乘といっても、法華経、華嚴経、涅槃経、大集経、大品般若経の全百四十巻、百二十万文字にも及ぶ大業である。院はこれに昼夜を問わず熱中されたのである。果たして、この写経は三年もの歳月をかけて完成をみた。

これも仏の思し召しであろうか。ただひたすらに心を無にし写経を続けている間に、はじめはご自身を襲う運命の荒波、理不尽な仕打ちに対して荒立つこともあった院のお心にも、いつ

しか風のように穏やかなお心がお戻りになったのである。

もはや己がみやこへと帰ることは叶わぬ身、ならばせめてこの経典だけでもなにかの役に立ててもらえないかとお考えになり、崇徳院はご自分の弟である仁和寺の覚性入道親王宛にこれをお送りされた。願わくは、かつての政争相手である美福門院にもそれを知らせ、どこかの寺に納めて欲しいというものであった。

浜千鳥 跡は都に かよへども

身は松山に 音をのみぞ鳴く

とは、経典に添えられた、院自らがそのお心を記して詠まれた歌である。讃岐を離れぬ事が出来ぬ院が、せめてそのお心だけでもみやこを想うことを諦めきれぬお気持ちさが表されている。しかし。ああ、いかなる運命の不遇か。院の願いもむなしく、この経典はすげなくみやこへの立ち入りを断られ、送り返されてしまったのだ。経典には帝やみやこを滅ぼさんとする呪詛が込められているという疑いが持ちあがったためである。

まったくの根も葉もない噂であった。

しかし、時はまさに平治の乱の直前であり、その直後には美福門院も命を落としていたとい

う間の悪さがあつた。また、保元の乱の原因の一つに、悪左府藤原頼長による近衛帝呪詛の嫌疑があつたことも災いした。頼長と行動を共にしたことから、院にまで呪詛の疑いがかつたのである。

ひとえにこの国の安寧を願い、せめて經典だけでもみやこへと返したいという崇徳院のお心は、まったく謂れなき疑惑によつて無惨にも踏みにじられたのであつた。

この出来事は、院のお優しきお心を千々に引き裂くに十分すぎた。

院はお嘆きと共にお怒りを露わにし、別人のごとき恐ろしい形相で血を吐くような枯れる声で叫ばれた。嘆きを涙とし、憎しみを糧にし、このように乱れた世が望みであるのなら、その願いを成就せんと、舌先を噛み千切つた血にて五部大乘経に呪詛の言葉を記したのである。

願わくは、大魔王となりて天下を悩乱せん

五部大乘経をもつて廻向す

日本国の大魔縁となり、皇を取つて民となし、民を皇となさん
人の福を見ては禍とし、世の治るをみては乱れを發さしむ

それがいまの宮の望みであれば、その願いかなえようとはかりに。

以来、院は爪も髪も伸び放題のまま、まさに大魔縁の姿となって荒れ狂い、恨みと怨念にその心を焦がして、地の果ての讃岐で、死までの時を過ごされたのであった。

……そんな崇徳院のお心を案じ、讃岐へと渡った一人の僧がいる。

名を西行。俗名を佐藤義清と言ひ、元をたどれば藤原氏秀郷流の子孫であり、清盛、義朝らと同じ北面の武士の一人であった。

かの秀郷の子孫の名に恥じず弓馬に優れ、和歌や故実にも通じる彼には、若き日の清盛も一目置いていたという。そんな彼が突如、鳥羽院の北面を守る役目を辞し、出家を志したのは保延六年（一一四〇年）のこと。

代々衛府に仕え、歌才にて宮中の名家徳大寺とも親交を持つ順風満帆な人生の中での突然の出奔を知り、多くの者達は首を傾げた。中にはそれを道ならぬ恋に破れたためと語る者もいた。義清は鳥羽院の中宮である待賢門院藤原璋子に恋慕し、それをすげなく断られた故に世をはかなんだのだとも。

しかし、それは真実ではない。

義清の心を狂わせたのは、一本の桜の古木であった。

かれの生家である弘川には人知れず咲く墨染桜がある。吉野の山を彩る三千の桜の中で、ひととき美しく咲き誇るこの古木は、古くより多くの人々の心を奪い続けてきた、幽玄の存在で

あつた。

この世のものとは思えぬ墨染桜の美しさに魅入られ、現世への執着を失つて、その根元で命を断ち、幽明の境を越えた者すらあつたという。

義清もまた、この曰くつきの桜に魅入られた一人であつたのだ。

武門の藤原氏秀郷流にあり、恵まれた妻との間に二子をもち、院の信頼厚き北面の武士として御所を守る務めに励み。歌壇に知られた名家、徳大寺公能の推薦を受けて、崇徳院のもとでその才を存分に發揮しようとも、義清の心はつねにこの桜に囚われていた。

いや、むしろそのように優れた才を持ち、順風満帆な人生を歩んでいたがゆえに、彼はひどく危うい桜の美しさに魅されたのかもしれない。

苔生す桜の枝を彩る、儂き春の夜の鮮やかな花。咲いては散りゆく散華の幽玄に、義清の心は千々に乱れた。

この世はうたかた、確たるものなど何一つなく、形あるものはその姿を留めてはおけぬ。なれば、生の意味などどこにあるう？

人を容易く死へと招く桜は、物心つくばかりの幼き頃から義清にその問いを突き付け続けた。悩み、苦悩し、その果てに彼はついに俗世を捨て出家することを決意したのである。泣いて足元に縋る娘を庭へと蹴り落とし、あらゆる執着を捨てての現世との決別であつた。

西行と名を改めた彼は、心の赴くままに漂泊の旅に身を任せ、訪れた地に草庵を結びながら、仏道の中においてその答えを探していた。その後の彼の足跡は鞍馬、奥羽、高野などを転々と巡り、全国に見ることができるといえる。

そうして二十と五年。いつしか西行の名は歌聖として知られるようになった。行く先々で彼の詠んだ歌は、彼を後援する徳大寺家の元へも届けられ、やがて西行の名は鳥羽院の歌壇において不動の地位を結ぶまでとなる。

そうしてなお、西行の心を占めるのは、弘川の山に咲くあの桜であった。

若き日に、その目に焼き付けて以来、心を捕えて離さぬ古木の墨染。執着を捨てんと欲したそれこそが彼の歌の美しさの核となっていたことは、実に皮肉なことであつたろう。

そんな西行が讃岐を訪れたのは、仁安三年（一一六八年）のことである。彼が出家をしてより時は流れ、みやこではふたつの乱も過去のこととなり、世はまさに平家がその隆盛を極めるばかりであつた。

善通寺にて庵を結んだ西行は、かつての主、崇徳院のお眠りになられる白峰陵をたずねたという。

西行がこの地を訪れたのは、みやこの者達の心なき仕打ちによつて、怨念と執念の権化となりこの国を呪い続けた崇徳院の御心をお慰めするためであつた。あるいは、かつての北面武士

として帝のおはすみやこを守り戦わねばならなかったことへの、せめてもの罪滅ぼしであったのかもしれない。

みやこより遠く離れ、海を隔てた荒々しき地の果て。白峰陵はかつての帝であった御方がお休みになるには、あまりに粗末な^{みささぎ}陵であった。まるで、院ご自身の存在そのものを疎んじ、忘れ去ってしまったおうとするかのように――乱の終結以来、崇徳院の御霊はここに封じられていたのである。

数奇なる時代の激流に翻弄され、その優しきお心も無惨に乱されて、世を二つに割る大乱を起す因となつてしまった崇徳院の無念を、その胸の内を、果たして誰が知ることが出来たであらう。

荒々しい海に囲まれた遙か遠き讃岐の地で、死してなおみやこに帰ることもかなわず、お子である重仁親王や愛する皇嘉門院の様子を知ることすら許されず。崇徳院のお心はただただ、寂寥たる僻地の片隅で孤独であった。

せめてものお心で、日夜休むことなく三年を掛けて認めた五部大乘経すらもみやこに入れることを拒否されて、院はどれほど心をお痛めになったことであらうか。

一心に鎮魂の念を込め、経を唱え院のお心を慰撫するなかでも。西行の胸をよぎるのは、貴きお心をもつ帝すらも政争の口実にせんとする人間の傲慢、世の儚さであった。

どうか、このような昏き世が晴れ、崇徳院のお心が少しでも安らかになるようにと。西行はこの国に穏やかなる時代が訪れることを祈らずにはいられたのである。

しかし。西行の願いむなしく、安元二年（一一七六年）には建春門院・高松院・六条院・九条院が相次いで死去し、さらにその翌年には延暦寺の強訴、安元の大火、安元の大地震、鹿ヶ谷の陰謀という大事件が続発した。人々はこれをさらなる争乱の前触れであると噂しあつた。

ことに四月二十八日亥の刻より出火し、丸一昼夜を燃え続けた大火は、みやこの三分の一を灰燼と歸し、燃え盛る炎は大内裏まで達した。後に太郎焼亡と呼ばれ、千年を超える歴史の中で平安京を脅かした大災害のひとつに数えられるようになったこの大火によつて、多くの人々が貴賤を問わず命を落とし、みやこは多大なる犠牲を強いられたのである。

これをもつて崇徳院の怨霊の仕業であるとの噂は、一体だれの口より始まったものであろうか。讃岐に流罪となつた院が、あの乱の勝者としてみやこに残つた者たちをお恨みになつてゐるという事は、口がさない者たちの間ではまことしやかに語られていた。このたびの大火は、その怨念が引き起こしたというのである。

崇徳院のお人柄を知る者であれば、それがいかに根拠のなき事であるのかは明らかであつた。なるほど確かに、院は遠流の地で己の不明を、抗えぬ運命をお嘆きになつたことであろう。自らを弄んだ時代の流れをお怨みになり、その生涯を弄んだ者達を憎む事もあつたであらう。

しかし、それもすべてはこの国の行く末を案じ、思いやる貴きお心ゆえのことである。いたずらに、この国の大地に住まい、寝起きし暮らす者達を傷付け、苦しめるものではなかったはずであつた。

院の怨念を、まるで見てきたかのように騙る者達のなかには、この国の帝であつた御方を排し、遠ざけたことへの後ろめたさがあつたのである。

また、それを持つてたくみに人心を操り、かつての平家の非道を責め立てる材料とする者達がいた。かつての院の側近、藤原教長などは立て続けの災害に、多くの人々の急死を、院の無念が起こした事であると訴え、その鎮護と慰撫を求めた。それは全くの無私無欲から出た行いではなく、ましてや院への崇敬の念によるものですらなかった。

いまやこの国の中枢を占める平家一門を牽制し、公家を排そうとする彼等を正す手段として、人智の及ばぬ神意として用いようとしたのである。清盛入道は比叡山の太衆を蹴散らし、仏罰を恐れぬ豪胆さで神輿に矢を射たことでも知られる、実利主義者であつた。なればこそ、かつて彼が背いた崇徳院への憂いを突こうとしたのである。

死してなお、この国を脅かす大魔縁として仕立てられ、政争の道具として使われることに、院のお心がどれほど苦しめられたか——もはや、思い巡らす事すら難しい。

仏法乱れ、王法地に落ち、世はまさに末。

更なる戦乱を知らせる時代であった――。



安元三年（一一七七年）。

「……やれやれ、酷い目に遭った。くたくただ」

「お帰りなさいませ」

泥と汚れに塗れ、疲れ切った郎党を率いて近衛河原の屋敷へと帰還した頼政は、どかりと床に腰を下ろした。身体に張り付いていた具足を脱ぎ、背中に溜まった疲れをほぐす。

兜の下、白髪となった頭をぬぐい、湯で脚の泥を落としていると、庭の方から軽快な足音が聞こえてきた。

「頼政！」

ぴょんと高く飛び上がり、その上半身に飛びつく黒い影。小柄な少女が歯を見せて笑う。「やつと帰ってきたのか。いい加減退屈してんだぞ？」

「元氣そうだな、木ノ下。……すこしは育ったかと思つたが、変わらんな」

「へへー。頼政こそ老けたねえ」

「うるさい」

顔をしかめる頼政に手を伸ばし、皺だらけの頬を引っ張るぬえ。孫とじゃれ合う祖父のようだ。ぬえは昨年の延暦寺の強訴の降りに、頼政の知行である伊豆へと逃れていた。以後もみやこでは混乱が続いていたため、頼政とはおよそ一年半ぶりの再会となる。

久々の再会に、ぬえもすっかり上機嫌の様子だった。背中に飛びついて離れない彼女に苦労しながら、汚れた緑の水干を脱ぎ捨てる。

「仲綱のやつ堅物でさあ、せつかくこつちに戻ってきてからも屋敷から出るな、大人しくしてろって煩いんだよ。退屈で死ぬかと思ったよ」

抜け出して遊んでたけどな、とぬえ。頼政は口元の白髭を抑えて苦笑する。

「……しかしなあ、今回ばかりはお前が悪い。あまり仲綱を困らせるな。あれもお前のことを思つてのことだぞ」

「ふん。兄貴面しやがつて、言うことがいちいち理屈っぽくて気に入らないんだよねえ。頼政、お前の後継ぎの器じゃないぞ、あいつは。まだ二条院のとなりの娘のほうがマシなんじゃない？」

「こら、ぬえ」

頼政は叱責と共にぬえの額をぱちんと小突く。赤くなつた場所を押さえながら、ぬえはなんだよ、と口を尖らせた。

ここ数年で、ことにみやこの警備は物々しさを増した。清盛の従二位・太政大臣をはじめ、一門が宮中の官位・要職の大半を占め、全国に二百を超える莊園を有するなど、人智の及ぶところのなき栄華を極める一方、平氏は一門に逆らう勢力への徹底的な懷柔と弾圧を繰り返してきた。洛内には平家子飼いの禿が放たれ、影に日向に目を光らせているという噂までまことしやかに語られている。

洛内の動向は緊張の中にあり、いまや些細なきっかけが命取りとなつて、一門全体の凋落にも繋がりがかねないのである。留守を任された仲綱がぬえの奔放な振る舞いに神経を尖らせるのも道理であつた。

(……後継ぎ、か)

「俺のような男は、もう時代遅れなのかもしれない」

「そうだそうだ。いい加減爺さんなんだからそろそろ落ちつけよ、頼政」
「まったくだな」

頼政は今年で七十五。常ならばもうとづくにこの世を去るか、そうでなくとも出家し、家督を譲っている年齢である。それでもなお、彼は摂津源氏の棟梁として、難解な政治的駆け引きを要求されるみやこの騒乱の第一線に残っていた。

緊張を増すみやこ、混迷を深める政局。気の休まることの無い毎日の中で、頼政はこの娘と

会っている時だけは、まだ疑うことを知らなかった少年の頃に戻れるような気がしていた。

「とりあえず降りてくれ、ぬえ。俺はまだしばらく仕事をせねばならん。話は後だ」

「えー。なんだよ、一年半ぶりだつてのにまだ焦らすのか？ 酷いやつだな」

「あ痛、こら、やめろ、ぬえ」

ぐいぐいと後ろ髪を引き始めたぬえを、たまらず振り払う頼政。ぬえはそのままふわふわと宙を浮かんだまま、屋敷の裏手へと飛んでゆく。

「約束しろよ、絶対だからな」

「わかったわかった」

苦笑し、頼政は再度痛む腰を伸ばし、大きく吐息する。

「父上」

「なんだ」

現れるなり渋い顔をしているのは仲綱である。先程からずっと出るに出てこられず、物陰で様子を窺っていたのだ。梨ノ木の自宅と近衛河原を往復し、頼政の留守を預かる嫡男は、眉間に深い皺を浮かべ、父に向かって言い辛そうに切り出す。

「懐かしいのは分かりますが、少しばかりお控えください。良い歳をして摂津源氏の棟梁が出自の怪しき稚児を囲って放蕩三昧と言うのは体面にも関わりましょう。内裏は醜聞を欲し、平

家の手の者がそこかしこで耳を澄ませています。入道殿に知られれば父上の本懐すら危ぶまれましょう」

「……堅苦しいことを言うな。骨折り損の仕事を決ませてきたのだ。老いらくの楽しみくらい好きにさせてくれてもいいだろうに」

「何を仰るのですか！」

冗談のつもりだったが、仲綱はそうは捉えなかったようで生真面目に眉を立てる。なるほどぬえの言うことも一理あるな、と一人納得する頼政。

「父上にはもう少し御自分の立場を考えていただきたい。……昔はもう少し慎重であつたでしょうに」

まったく困り顔の仲綱である。それもまた父の本懐を知るからこそその苦言であつた。

頼政は、ながらく三位への出世を欲していたのである。

承安元年（一一七一年）に、うつほ柱の出火を食い止め、それまでの宮廷守護の勲功を讃えられて正四位下に任じられた頼政であるが、以来、長らく出世の機会に恵まれずにいた。

数えてみればわずか一官位の差でこそあれ、四位と三位の間には、それこそ天と地ほどの大きな隔たりがある。

三位より上の官位は、国の中枢に関わる公卿のみが就くことを許された位である。古くは律

令の興りとなつた御世より連なり、生涯を下働きで終える者と高貴なる血筋を隔てる明確な差が設けられていたのだ。その輝きは星の位とも喩えられ、名前を用いた呪詛は効き目を持たぬともされる威光を備えて、およそその加護や地位は驚くほどの差を持っているのである。

ゆえに、仲綱は息子も成人するほどの年齢にありながら、従三位を求める頼政を立て、嫡男の地位に甘んじてくれている。

——平家に非ずんば人に非ず。

もはや院や摂関家すら飛び越えて権勢を誇る清盛入道のなか、みやこに残された源氏の立場は非常に危ういものだ。帝や院、比叡の大衆すら自在にすることを可能とした平家の前にあつては、これまで巧みに生き残つて来た摂津源氏とて例外ではない。いまのみやこで平家への恭順を拒めば、たとえどんなに堅固な力をもとうと、たちまち失脚の憂き目にあい、果ては滅亡をまぬがれぬかもしれない。

そうした危うい立場を少しでも確固たるものにすべく、頼政は長らく公卿の官位、三位への昇進を望んでいた。それは八幡太郎義家以来の源氏の悲願でもあつた。

「まあ、良いではないか。兄上」

からからと笑いながら現れたのは、頼政同様具足姿の兼綱、政綱、そして若武者姿も凛々しい仲家の三名だ。仲綱の弟である彼等は、頼政ともども今回の騒動において、洛内の警護に動員されていたのである。

「親父殿の拾い癖がなかったら、我等もこうしてここで兄弟となれなかったのだ。兄上も思うところはあろうが、そこは斟酌してくれぬか」

「……む」

そう弟に言われてしまえば、仲綱とて口を嚙まざるを得ない。

この三人の兄弟、じつは仲綱と血の繋がった兄弟ではない。兼綱、政綱は頼政の異母弟である伊予守源頼行の子、仲家は関東管領であつた源義賢の子なのである。

頼行は保元の乱の後、軍兵の扱いを咎められて配流とされ、それを悔いて自害。義賢は坂東において鎌倉悪源太こと源義平と合戦し、命を落としていた。いずれも父と所領、一門を失つて路頭に迷つていたところを頼政が救い、養子とした息子達なのである。

他にも頼政は滅亡した源氏一門の子息を引き取り育て、またその生活を支援していた。兼綱、政綱の二人などは実の息子の仲綱、頼兼らに代わつて頼政と共に摂津源氏の郎党を率いるほどである。

ゆえにこそ、平家全盛の世において摂津源氏の頼政の名は高まり、畿内より姿を消しつつあ

つた源氏ゆかりの者達のよりどころとなつていた。

それは同時に、清盛が危険視している源氏残党の庇護者として、頼政の立場を危うくする行為である。しかしお互いの無事を確かめ笑い合う彼らがこうしてひとつの家族となったことは、頼政にとつて何よりの喜びであるのだつた。

（――俺は、長らく生き過ぎたのかもしれない）

最近、頼政はことにこのように昔を思い返すことが多くなつた。

振り返つてみれば、自分の人生は称賛などとは程遠い。ただ失う事を恐れ、臆病なだけであつたと、頼政は思う。

絶えず変わり続ける盤面の上、いくつもいくつも駒の増えては消えてゆくこの平安京で、ただその行く末を見、時勢を見極め――脅威を避けていただけで。いまや望むと望まざるとに関わらず、頼政はいまや源氏に残された柱であつた。

「しかし、話には聞いていたが酷いものだ。あれが寺社のやり方とは、まさに世も末だな」

「お前がそこまで言うほどなのか」

「俺も兄上のように近衛河原で寝ておれば良かったと後悔したよ。戦支度をした僧兵どもが大群で押し寄せて、場所も時間も関係なしに暴れ回る。民や町に被害が出ようと素知らぬ顔だ」

「挙句に己で乱行を働いておいてこれは神意だと言い張る始末です。あれでは夜盗と変わりま

せん！」

「仲家の言うとおりだ。清盛入道が腹を立てる理屈も分かるというものだな」

寺社といつてもいまや各地の莊園、有力豪族と結びついた政治権力である。ことに南都の興福寺、北嶺の延暦寺は自分たちの要求を通すため、神木・神輿を先頭に押し立てて入京し、国司の解官や莊園の拡充などを迫ることが常であつた。ここに後白河院ら朝廷が寺社統制を目論んで恣意的な僧位・僧官の昇進を行った事で、問題はさらに拗れていたのである。

ことに、この安元三年には、延暦寺の大衆たちが寺社への横行を働いた国司を排するべく強訴を行い、内裏にまで押し入る大騒ぎとなつた。繰り返される強訴に激怒した後白河院は近衛大将を務める平重盛、宗盛に対して比叡山の山門を攻撃するよう命じたのである。

最終的に、福原より急遽上洛した清盛が事態の收拾に努めたものの、山門との間に衝突を起こし死者まで出した平家嫡男の重盛は左大将を辞任に追い込まれた。

さらにはこの強訴の影で清盛を暗殺し平氏を打倒せんとする陰謀があつたことまで明らかになつたのである。反平氏勢力が鹿ヶ谷山莊に集まつて行われたこの密議に、なんと後白河院が同席していたことが判明し、それまで良好であつた後白河院と清盛の決別は決定的となつた。

頼政もまた、この騒動において院の命令で捕縛した天台座主明雲を伊豆への護送中に、叡山の大衆から襲撃を受けていた。如何に乱行を働こうと、彼らは仏門。反抗をせずにいればいた

ずらに犠牲を出し、さりとて迎撃すれば神に仏に弓を引いたと吹聴されるという実に厄介な相手だった。

重盛同様、頼政も一歩間違えば今の立場を失いかける瀬戸際をどうにか無事切り抜けての帰還であつた。

「それより仲綱、どうしたのだ、そんなに急いで」

「それが、つい先ほど――」

「やあやあ頼政の叔父御、お元気にされておるか！ お戻り、首を長くして待つておつたぞ！」
続けてどすどすと廊下を歩いてやってきたのは、無精ひげに垢じみた顔、擦り切れた行者の姿をした四十がらみの男である。古傷で自由に曲がらぬ脚を引きずつてひよこひよここと歩く様はどこか滑稽だ。

その名を新宮十郎行家。義朝、為朝の弟にあたる為義の末の息子であり、元の名を義盛といつた。平治の乱では兄・義朝に味方して従軍したが、戦陣の中で行方をくらまし、姉の鳥居禅尼を頼つて熊野別当行範の元に身を寄せ、いまは熊野の新宮に住むことから新宮十郎の通称で呼ばれる。

かれは先頃名を行家とあらため、熊野の山伏と称して各地を巡りつて働いていたのである。
「行家様、お久しぶりです」

「ん？ おお、その顔は仲家に、おお、伊豆の有綱も居るのか。なんだ、しばらく見んうちにでかくなりおつて。ああ、それよりも喉が渴いた、水じや、水を一杯くれぬかね」

催促した水を受け取ると柄杓からがぶりと飲みほして、ごしごしと顔を擦り、行家は庭に腰を下ろした。垢じみた顔がてかてかと光る。

「やれやれ、やつと人心地ついた……常よりこちらは歩きどおしよ。忙しくてかなわん、はは。身体がふたつ欲しくなるほどじや。叔父御も息災そうで何より、なにより」

「久しいな、行家殿」

実際は頼政と行家は五代も前の兄弟であるが、行家は親しみをこめて頼政を叔父御と呼んだ。言葉に含まれる馴れ馴れしさは、河内源氏の末ながら生き延び世を渡る巧みさゆえか。いくら訂正しても行家に改める様子がないため、仕方がないので、表向き彼は頼政の甥という立場になつていた。

「行家、此度はどちらに」

「堅田じや。あちらには湖族が出るなどと聞いておつたが、酷いもんじやのう。湖の上に帆を立てて、びゅうつとやってきたかと思つたらたちまち身ぐるみ剥がれてしもうたぞ。まあこれこの通り、土産だけは肌身離さず身につけておつたので無事じやがのう」

言つて行家、荷の底から取り出した干物などを有綱に押し付ける。

「戻るたびに思うが、みやこも日に日に息苦しくなるのう。聞いたぞ、平家が市中に赤衣の禿（ここでは年少の子供のこと）を放っておるのだろ？ 平家を誘ふ言葉はひとかけらとて聞き漏らさず覚え、六波羅に戻つて密告をするのだとか。なんとも卑劣なやり方よ」

声を押さえることもなく、平然と平家の批判を口にする。この行家、源平の争乱からちやつかりと熊野に逃れたことから分かる通り、口から先に生まれたような男であり、あれこれと策謀を巡らすのを得意としていた。

自らの足で厭うことなく各地を巡り、進んで地に塗れることもするが、どこかそそっかしいところが抜けず、良い考えが思い浮かべば一人先走る節がある。確かに彼の働きの頼政達は多くの恩恵を受けていたが、いまいち全面的に信用し難い、そんな男なのである。

「はるばる疲れたろう。上がつて湯でも使つていけばどうだ」

「いやいや、遠慮しておく。なにしろ半年ぶりのみやこじや。これからあちこちを訪ねて回らねばならぬのでな。……わしの帰りを待ち焦がれている女も居る。待たせておくわけにはいかぬでな。お気持ちだけ頂くとするぞ。ははは」

笑つて言いながら、行家は荷物の中から一帖の書を取り出し、うやうやしく頼政に差し出す。

「――安楽寿院より書をお持ちした。叔父御の助けとなれば幸いじや」

安楽寿院とは、鳥羽離宮にあつた仏堂のあとに建てられた寺院である。鳥羽、つまり鳥羽院

のお住まいを指し示しており、この安樂寿院は鳥羽院の娘である八条院——暲子内親王に相続されていた。

つまりは、頼政の元に届けられたのは八条院よりの書簡なのである。このことは頼政にとつて極めて重要な意味を持っていた。

「確かに。受け取った」

「うム。では、な。叔父御もどうか息災での中」

そう言つて、荷を背負い去つてゆく行家。頼政はすぐに郎党を呼びよせ、彼に気付かれぬよう後を尾け、見張るように命じた。

「……嫌なものだな、同じ源氏を疑うというのも」

また、この見張りは同時に迂闊なことを漏らした彼が、どこかの手のものに捕らえられぬよう陰ながら見守らせるためでもある。

行家のつとめとは、地方に住む源氏達の間を行き来し、その動向を『さるお方』へと伝える役割であつた。

河内源氏の末でありながら長らく放浪に慣れ、顔の広い彼には相応しく思える役目であるが、あの軽薄さは本当に頼りになるのかと不安になるばかりで、頼政にはどうも適任とは思えぬのである。

頼政の元には、行家を通じて兼ねてよりこの『さるお方』よりの文が何度となく届いていた。此度も同じ体裁の手紙を開き、頼政はじつと目を通してゆく。みるみる洪面となり、最後に大きな嘆息をした父を見て、仲綱が問うた。

「……どのようなご意向で？」

「いつも通りだ。まもなく時が来るゆえ、力を貸せとな。今の摂津源氏における不遇、押し付けられる理不尽を跳ねのけ正しき道理を取り戻すため、一心なく誠実に尽くすようにと仰せだ」これまでにも同じような手紙を何度やり取りしたことか。繰り返される言葉は目を追うことに調子を強め、頼政に二心のないことを繰り返し求めるとともに、万が一の翻意を疑うような様子さえ透けてみえる。

手紙の主が同じ文言を何度となく繰り返すうちに、書き連ねたことをより強く、深く信じ込んでしまっている様がありありと窺えた。

「余程、お焦りなのだろうよ」

このような証拠を文字として残すこと自体、余計な人目に触れる機会を増やすのである。まこと、内密に事を起こすつもりがあるのだろうかと思ひながら、頼政は文を灯りの蛾に翳した。手紙が残らず灰へと変わるのを待ち、吐息する。

「……困ったお人だ。鹿ヶ谷の一件があつてまだ間もないというのに」

手紙の主が頼政に迫っている事とは、平家打倒、現体勢の打破である。権勢をほしいままとする清盛以下の平家を打ち倒し、世を正すのだという並々ならぬ決意をもって、頼政にその急先鋒に立つよう求めるものであった。

たとえ計画の上、あくまで相談の上とても、わずかにでも外に漏れ出れば、たちまち頼政以下摂津源氏は全てを失ってしまう。注意に注意を重ね、慎重に扱わねばならぬものであるはずだった。そんな重要なものを、あんなにも不用心な行家に託すことを、頼政はどうにも納得できない。

手紙の主である『さるお方』より頼政に、現状を憂い決起を促す内々の相談があつたのは昨年のことである。幼少の六条帝を傀儡とし、専横を続ける平家を打倒し、今の世にふたたび帝による統治を取り戻すのだという言葉には並々ならぬ決意が込められていた。

その構想は途方もなく大きなもので、坂東の源氏にゆかりのある氏族や、木曾源氏、甲斐源氏、はては奥州の藤原氏まで、この国の各地に使いを送り、時期を示し合わせて同時に決起する計画であるらしい。

「仲綱、お主はどう見る」

「率直に言つて、時流ではありません。計画通り坂東や各地の源氏が意志を揃え、一斉に決起できるとは思えません。坂東で争いを繰り返す彼らが何よりも重んじるのは、現実的な実利で

す。いかに道理を訴えても、義憤だけで腹は膨れませぬ」

一所懸命の言葉にある通りだ。朝廷の威光薄き坂東では、武士は皆己の力だけで自分達の所領と一門を守り抜いてきた。彼等を義や忠だけで動かすのは不可能であると仲綱は言う。

頼政もおなじ考えであつた。

「これまでに何度もお諫めしたが、聞き入れてはくれなかつたからな。貴きお方ゆえに、みやこの外の事がご理解いただけぬ」

比べてはならぬことだろうが、あの狡猾で沈着な美福門院とはまるで違ふ。手紙の主は政のこまかな機微、駆け引きなどを御存じなく、ただ己の正しいと信じた道に邁進することを是とする向きがあつた。平家全盛の世の中の頼政の微妙な立場もあまりご理解されぬまま、ただ源氏の名をもつて平家に堂々と抗しうる武力と兵を率いているのだと、無邪気に信じて居られる様子である。

これではとても今の世を傾けることなどできないと、頼政は思う。

「……参つた話だ。この上はお目通りしてもいま一度、はっきりとお断りせねばならぬのか。だが、恐らくお聞きいれなさらぬだろう。さて、どうしたものか」

「お心までは測り知れませぬが……難しいところですよ」

仲綱も同意し、腕組みをして額に皺を作る。

（平家の専横、討つべし——か）

この『さるお方』のお立場、そして平家専横の世を正しき道へと戻さんとするお心とお人柄ゆえ、頼政はせめてお力になることができればと今日まで文をやり取りしてきた。かつての美福門院の元で多くの争乱に加担し、同じ源氏の者たちに非業の死を遂げさせてしまったに事に対する、頼政のせめてもの罪滅ぼしであったのかもしれない。

頼政は摂津源氏の長老として今日までみやこに生きながらえてきた。その中で、野望を抱かなかったわけではない。一人残った源氏の末として、みやこを支配する平家の赤旗を打ち倒し、再び源氏の隆盛を取り戻したいと夢想したことは幾度もある。

しかし、その機会はもう失われてしまったのだ。

（そんなものはただの懷旧だ。今の世に馴染めず、昔を恋しがるだけの俺の我がままだ。出来ぬことの為に皆を殉じさせることなどできぬ）

徒に相手を排することは、いずれ新たな弊害を生む——源平の争いはいつもその繰り返しだ。それは何も生まないことを、頼政は誰よりもよく知っている。争いなど起きねば良いと思っていた。それは今も変わらない。

だが——。だが、だ。

他の源氏はどうだろうか。

みやこにおける二度の乱は源氏を大きく凋落させたが、その禍根までを完全に断ったわけではない。朝廷の監視の届かない各地には、いまだ生き伸びた源氏の末が息づいている。彼らも、同じ思いを抱いたとしたら。

平家に迫害された父や祖父の仇を討たんと欲したら。

（俺は、どうする）

容易には答えの出ぬ問いを頼政は己に課す。みやこに残った源氏の長老として。摂津源氏の長として。

どうするべきか——この十年をずっと悩めども、いまだにその答えは出なかった。

十 「玉葉」 治承二年五月十二日

「よ、頼政様！ 居られますか、頼政様！」

騒がしい足音が廊を揺らす。蠟燭の炎がゆらりと傾いた。遣戸を引き開け、息咳き切つて客間に駆け込んだきた郎党は、ずいぶんと取り乱した様子だった。

頼政は不機嫌そうに眉をよじる。ちょうどこの時、頼政は久しぶりに近衛河原の屋敷を訪ねてきた団三郎と歓談の最中であつた。しばらくぶりに佐渡より戻つたという彼女から、かの流刑地の様子を聞いていたのだ。

「なにやら騒がしいですのう」

「ふむ。……その声は唱か。どうした、何があつた」

客人を前に非礼をとがめるが、郎党の渡辺唱とみなう丁七は大分と急いた様子である。

「一大事にございます！ 狐が、狐が出ました！」

「狐？」

怪訝そうに聞き返す頼政。ぴくりと、団三郎が顔をしかめた。

「そうなのです。宮中に、妖しき狐が姿を見せまして——それはどうにも、この世のものとも思えぬ有様で……!」

「曖昧だな。仔細を話せ」

慌てるばかりの唱に問いただしてみると、それはいかにも怪しげな顛末であつた。

渡辺党が摂津源氏の郎党として宮中警護の任にあるのは周知のことである。本日も唱らは昼から大内裏の巡回を行い、ちようど夕刻の休憩時間となつた時だつた。斎宮御所近くの木陰で涼をとつていた唱らは、突如殿の床下より不審な影が飛び出すのを目撃したのだ。

すぐさま仲間の一人が弓を構え、これを射んとした。しかし放つた矢はこの影を捕えたものの、鏃は何かに弾かれるように的を外したのだ。唱らは驚きなおも矢を射かけたが、影はそのまま甲高い鳴き声と共に姿を消してしまつたのだという。

「その、消える直前に……ちらりとですが、確かにこの目で見ました。あれは狐に違いありません。白い毛皮の、人の背丈ほどもある大きな狐だつたのです!」

「……ふむ。それを見たのはお前だけか?」

頼政は顎をさすり、思案を巡らせつつ髭に触れる。

「他にも何名かが見ております。仕^{たすく}などは、いずこかの名のある霊狐であつたのではないかと言ひ出して譲りませぬ。白獸は神使であるのだから、弓を向けるなどもつてのほか、言語道

断なのだと。……その、俺はおよそまともな獣では無かったとは思いますが、宮中に狐など聞いたことはありません。……しかも場所は陰陽領のすぐ近くとあって、いかなる事であるのかもはや判断がつかぬのです。矢が通らぬとなれば、件の鶴のこともあります、まずは御報告をと思つた次第で……」

述べながらも、唱自身も半信半疑であるのだろう。確かに神使の靈獣に弓を向けたとなれば、神罰が下ると考えてもおかしくない。苦慮している様子の郎党に頼政は大きく領いてみせた。「成程な……。今日の主番は兼綱であつたか。お前はそのまま報告に向かえ。仲綱にも合わせて報せよ。俺もすぐに様子を見に行く」

「はっ」

あわただしく駆けだしてゆく郎党を見送り、頼政は腰を上げた。家人を呼び、出仕の支度を申しつける。

「……すまぬが団三郎よ、そういう訳だ。俺は今から宮中に出ねばならなくなった。せつかくの機会に今宵はゆるりと佐渡の話でも聞きたかったが、どうやらそうもいかぬらしい」

「気にせんでくだされ、頼政殿もお役目あつての事じやろう。噂話を御所望ならいくらでもお聞かせいたしますのでな」

話を中断されたことに気を害した様子もなく、からからと笑う団三郎。

そのまま大人しく辞去するかと思われた彼女だが、團三郎は眉を動かし、意外なことを言いだした。

「しかし、その狐とやらどうにも気になりますのう……。うう、ものは相談じゃが頼政殿、儂も御一緒してもよろしいかな？」

「む？ ……それはどういう意味か、團三郎よ」

「そのままの意味ですとも。宮中までご一緒しても良いですかの。なに、儂もなにか頼政殿のお力になれるかもしれないせぬでな。細々とではありますが、こうして商いを営む身。みやこを遠く離れた地まで足を伸ばし、あやしきものを見る機会も多くありますからのう」

茶目つ氣を見せ、片目をつむって見せる團三郎。

「着いてくるのは構わぬが——」

「ああ、御心配はご無用ですぞ。宮中に入る赦しは得ておりますからの。頼政殿にご迷惑はかけぬと約束しましょう」

どうやってついでくるつもりだ——と言いかけた頼政を遮り、女商人は自信ありげに笑ってみせる。宮中に入りたいから便宜を図れと言われれば即座に断つただろうが、どうも彼女には確かな当てがあるらしい。

しかし、まともに考えて一介の商人が宮中に入る許しなど得られるものなのだろうか。團三

郎の顧客は幅広く、懇意にしている中には藤原摂関家の中枢に近いものもいるというが——それとこれとは別物である。

半信半疑のまま、頼政は身支度を終え、大内裏の朱雀門へと向かった。

その威容を闇の中に沈ませ、堅固にみやこの防衛を固める南の門——しかし驚いたことに団三郎が軽く会釈すると、門を守る衛士は礼をして彼女を通したのである。

「お主、一体なにをした？」

「かか。商いの秘訣というやつですかのう」

問い詰めようにも埒が明かない。諦めて頼政は現場へと向かう。

現場となった斎宮御所北の木陰には、既に巡回主番の兼綱と郎党達が集まっていた。時刻が宵の口とあつて、明かりの松明を掲げ、周囲を警戒するものと、地面に身をかがめてしきりに検分をしている者たちに分かれている。

「おお、これは親父殿！ わざわざお越しとは、申し訳ありません」

「氣にするな。これも役目だ。……件の狐とやらが出たのはここか？」

「はい。この者らが言うには、休んでいたのはあの木陰。斎宮御所の下より影が現れ、西へ走り去ろうとするのを見て、このように……こちらに向けて矢を射たそうなのですが」

兼綱の指示で検分が進められていたのだろう。息子の言葉に頷いて目を凝らしてみれば、地

面には確かに人間のものに混じって、獣のものと思われる足跡が乱れていた。争ったような痕跡は木陰より陰陽寮の方へと続き、途中で消えていた。

振り返れば、西雅院の壁に向けて、数本の矢が落ちていた。そちらに近づいて、頼政は静かに唸り声を上げた。

「これは、誰も触れてはおらぬのか」

「そのはずです。まったく、どうにもおかしいことばかりだ」

落ちていた矢は全部で六本。うち四本は中ほど折れていた。残りの二本は無傷だが、そこらも奇妙な事に、まったく汚れた様子がない。矢羽根を確かめ、頼政は髭を擦って唸る。

「唱、これらはお主らが放った矢に相違ないな」

「は、はい……」

郎党らの困惑も納得のものだ。矢が当たっていれば、たとえ抜け落ちたとしても血や毛などが鏃に絡みついてはいるはずだし。そうでないのだったら地面や壁に突き立っているはずだ。放たれた矢だけがその場に残され、血の跡も泥汚れさえないというのはあまりにもおかしいことである。

郎党達が揃って頼政を謀っているのでもなければ、狙われた誰かは、なにがしかの力をもって、矢が当たらぬように防いだとしか思えないのだ。しかし獣が鎧などを着て矢を防ぐなど、

絵巻の中ですら聞いた覚えもない。

「そのばけものとやらは、例の——鶴の姿をしていたのか？」

「いえ、巡回番のなかで休憩をしていた者達は八名おりましたが、このうちで影を見たというのが六名。そのうち五人が同じものを見ています。どうやら白い毛皮の狐のようだったと」

「狐、か」

頼政は敢えて狐という言葉を使わずに問い質してみたが、兼綱ほか、複数の郎党達はそれぞれに狐と答えた。唱の報告には一定の信頼が置けると見てよい。

「それも、どう見ても人の背丈もあろうという大狐であったということです。ここに詰めていた巡回番は唱、仕以下、郎党の中でも勇猛なものたちばかり。物怖じして夕闇の中にありもしないものを見たとは思えにくい」

宮中に獣が入り込むこと自体は、これまでも前例が無いではない。しかしただの狐であれば、渡辺党の郎党達が仕留め損なうとも思えないし、仮に六本もの矢が全て外れていたとしても、さまざまな事につじつまが合わない。

（ぬえは……昼頃から俺の部屋で寝ていたな）

昨夜から仲家にくつついて夜更かしをしていたらしく、頼政はそれで早々から床を追い出されたのだ。彼女の悪戯ではないことを確かめ、頼政は一人頷いてそっと胸をなでおろす。

「やはり、靈獣であつたのでしょうか……」

確かに、過去には神使とされた白蛇や白鹿などが、宮中の清涼殿などに現れ時の帝の治世を寿いだという記録もある。それに矢を射掛け、追い払つたとなれば——これは重大な責任問題であつた。

一体、これをどう扱うべきか——皆が頭を悩ませていた時だ。

「成程。これは大分性質の悪い狐ですのう」

頼政と共に地面にかがみこんでいた団三郎が、鼻の上に皺を寄せてそう呟いた。頼政が眉を上げれば、彼女は珍しく不快そうに顔をしかめ、喉の奥で唸るように口元を歪める。

「歳を経た狐は厄介なものでしてな。その化術をもつて徒に人を欺く。時に面白半分に、時に悪意をもつて、人を害するのです。その欺きが巧みであるゆえ、犠牲に気付くのも遅れてしまふ。長年の月を浴びて狡猾になつた狐はなお始末に負えませぬな。……人の背丈ほどもあるというなら、相当に悪知恵も働く。今頃は人に化けてどこかに潜んでおるやもしれませんのう」

真に迫つた団三郎の語り口に引き込まれたか、兼綱がこくりと息を飲む。

「さて。犠牲といつたな。その狐というのは、人を食うのか」

「さて……どうですか。年経た獣は皆、知恵をつけるにつれて、世を我が物顔で歩く人間を疎むものです。そうなれば後は自ずと人の肉の味を覚えて凶暴になるものですがのう。さて、

ここの狐がそうであつたかまでは分かりませぬ。誰ぞ、ある日より宮中でふらりと姿を見なくなつた方がいると言うのであれば、あるいは……」

「その辺にしておけ、団三郎」

怯える郎党の様子に嘆息し、頼政は団三郎に釘を刺した。

「これは失敬。少々、脅しがすぎましたかのう。かかか」

「お主が言うところと冗談に聞こえん。……いずれにせよ、郎党の多くが妖しきものを見たという事には違いあるまい。警備を三交代から二交代に変えて数を増やす。兼綱は引き続き現場を当たれ。念のため洛内警護の者たちにも伝えておけ。上には俺から報告しておく」

「はっ」

主の命令に答え、落ち着きを取り戻す郎党達。

「またも宮中に現れた影に、彼等も三度鶴の姿を見て怯えているのだろう。吐息と共に髭に触れ、頼政は静かに苦笑する」

「まったく、高いツケになつたものだ」

「は……？」

「いや、なんでもない。急げよ」

兼綱らを見送つて、頼政もまた急ぎ内裏へと向かつていった。またも長い夜を過ごすことに

なるのだろうか、思いを巡らせながら。

長引くかに思われた宮中の異変だが、事態は一夜にして急転直下の解決を見た。

夜更けから明け方まで警備につき、ようやく屋敷に戻った頼政のもとに、新たな報せが飛び込んできたのである。御所東町の荒れ御殿で、白い毛皮の大きな狐が死んでいるのが見つかったというのだ。

休む間もなく、疲れを押して駆け付けた頼政は、郊外の屋敷、荒れ放題の庭の草叢に倒れ伏す、巨大な狐の死骸を目にして驚いた。

「これがお主の見た狐か？」

「は、はい。間違いありません」

青褪めた唱が何度も首肯する。死んでいたのは確かに言葉通り、人の背丈ほどもある大狐である。狐の口は異の方角を向き、死骸の下には赤い血だまりが広がっていた。白い毛皮は固まらかけた血に汚れ、どす黒く染まっている。

骸の頸には一本の見事な矢が深々と刺さり、さらにはその全身に無数の歯型と、鋭い牙で食いちぎられたと思しき傷があつた。最近では洛内でも死骸を漁る野犬の被害が急増しており、おそらくこの狐もその餌食となつたのだろう。

ともあれ原因となつた狐の死骸が確認されたことで、以後の原因の究明は陰陽寮へと預けら

れた。

最終的に彼等は延久四年の記録を持ち出し、これは宮中の軒下に巢食っていた靈狐であり、世の乱れによつて我を忘れ、あやかしとなり果てて暴れていたのを頼政の郎党達が見つけ出し射殺したのである、ということになった。

致命傷となったのは頸の矢傷で、郎党らに追われ傷ついた狐はどうかここまで逃げのびたもののとうとう力尽き、死骸が野犬に食い荒らされたという旨が記録に書き残された。

このことは数日中には宮中に知れ渡り、またび宮中のばけものを討った頼政には報奨が出されることとなった。

「お見事です、父上」

「……しかし、今回は俺が何をしたわけでもない。まずは唱達に振る舞つてやれ」

そうして頼政は、狐に残されていた矢が誰のものかを尋ねるが、巡回番の八名は全員が全員、これに心当たりがないという。

不思議に思つた頼政は郎党達を集め、この大狐を射止めたものに名乗り出るように命じたところ、ここに進み出たのは渡辺党の競滝口きせうというものであつた。どうにも見ない顔だと思つて頼政が尋ねれば、彼はつい先日より一党に加わつた新顔であるという。

彼は狐の現れた夜、郎党達に混じつて洛内の警護にあたっており、その場で狐と遭遇して一

矢を放ち、これを撃退したという。唱らが宮中で狐をおいたてたすぐ後のことらしかった。

競が差し出した矢羽根と、狐に残されていた矢羽根の特徴はぴたり一致し、妖狐退治の報奨は見事競のものとなった。

ここに鶴退治の話を持ち出した者たちも居た。なるほど摂津源氏は主の頼政だけに留まらず、率いる渡辺党郎党に至るまで、名に聞こえる通りの辟邪の武であるなどと褒め称えるのである。市中の評判を余所に、頼政の胸中を占めるのは別のことであつた。

(狐……狐、か)

そして、予感があつた。確信していたと言ってもいい。

だからその夜、庭先に突如ぼうと燃え上がる炎を見ても、頼政は慌てることなく静かに彼女の来訪を迎えることができた。

「久しいね、頼政」

——赤々と、煌々とかがやく不死なる炎が、翼のように広がり舞う。

炎の照らす庭には、灰のように真っ白な髪の少女の姿があつた。

藤原朝臣紅子娘。不遜にも藤の姓を名乗り、昔日の頼政に、宮中に潜む狐について警告した娘であつた。

「なんだ、あまり驚かないんだな」

「……また、会えるのではないかと思つていたからな。それでもこうしてこの目に見るまでは、半信半疑だったが」

娘の姿は、若き日の頼政が目にしたときとまるで変わらぬ瑞々しき乙女のままだ。あれからゆうに三十年余りが過ぎていくというのに、だ。

「少しは信じる氣になったのかい、頼政」

「……俺も歳をとった。少しばかり、この世のありかたが俺の思うよりも複雑である事を知ることには、老いたつもりだ」

「ああ、まったくそのとおりだ。どいつもこいつも、老いさらばえて、死にそうになってからようやくそれに氣付くのだ。……何度教えてやっても、いつも同じだ」

幾度となく繰り返したやりとりで辟易するように嘆息する紅子。いや、実際にそうなのだろう。藤の娘は吸い込まれそうに赤い瞳で頼政を見る。

あの時と寸分変わらぬ、禿髪の幼い容貌——しかし、こうして再び彼女に会い、頼政は幼い姿の彼女のうちに、常人には測り知れぬ、幾百という歳月が折り重なっているのが感じ取れた。彼女は言葉の通り、五百年の昔よりずっと生き続けているのである。

永劫の命というものは、祝福ではなく罪科なのだ。人は老いて死ぬ。そうでないということ、世の理を曲げる悪業である。老いることなく、変わることなく留まり続けることは、途方

もない業を生むのだと、今ならば分かる。

彼女は、娘の形をした、酷く恐ろしき存在であった。

（俺が老いたからこそ、なおのことそう思えるのだろうか）

頼政も今年で七十五。死を身近に感じるようになって、生き続けることの罪深さを感じるようになった。若い頃は、まだ精も力も衰えぬうちから家督を譲り出家する者達が何を思うのか、いまち納得がいかにいたものだが——こうして老いた今、歳を重ねた人間が、俗世を離れ、仏の道に何かを求めようとするのは自然なことであろうと思うようになった。

「ここ数日、陰陽寮がやけに騒いでいた。それで、もしかやと思つてな」

「あそこの連中は相変わらず間抜けばかりだ。こうならないよう、清明にはきつく言つてやつたのにな。道満がいた頃はもう少し危機感があつたつてのに」

紅子が抱えていたものをどさりと投げ落す。それは——一抱えもある大きな、狐の髑髏である。間違いない、競が討つたあの霊狐のものだ。皮を剥がれ、肉を削がれ、生乾きの骸骨は、空虚な眼窩に頼政を睨む。

「あいつら、これを呪詛に使うつもりだったらしいね。……酷い話さ。崇徳の怨念が効かないなら、今度は化け狐だ。こんなもので清盛が死ぬと本気で考えてるんだからお目出度いもんだな」

さりと信じられぬことを口にする紅子。しかし——おそらく彼女の言葉は真実であろう。彼女とかの大陰陽師、また陰陽寮たちの間に何かの因縁があるのは間違いないさそうだ。

「この、狐が——お前の言っていた、世を乱す妖狐なのか」

「こんな小物がそうなわけあるか。こいつはあの九尾に従っていた眷族、使い走り、下っ端の一匹さ。主を失って知恵もなくし、式も外れ、ただの獣に返って行き場を失くしていたところを、お前の部下に見つかって殺された間抜けだよ」

紅子がひゅんと手をふるうと、そこから炎が飛んで狐の髑髏を包み込んだ。見る間に炎が火花を咲かせ、髑髏へと燃え移った。

赤い炎が業と渦を巻き、生乾きの骨は薪のように燃えあがる。

「美福門院殿は、薨去されて後、その遺骨は高野山に入られたはずだが」

「殷王朝の千年狐狸精と姐己の話くらい知ってるだろう。器が死んだくらいじゃなんともない奴なのさ。もうあそこにいる理由もなくなつて、居なくなつただけだ。院が用済みになったのか、下手を踏んだのかまでは知らないけどな。ま、それでも女人禁制の高野に逃げ込もうつてあたり、あいつの不遜さと好色さがわかるよな」

からからと笑う紅子。宮中の、しかも治天の君の傍に妖怪がずっと巢食っていたなど、悪い冗談にしか聞こえない。だがしかし、かつて紅子が狐と呼んだ美福門院・藤原得子は、近衛帝、

後白河帝、二条帝の三代にもわたって帝の擁立すら意のままとし、藤原家中御門流と結びついて絶大なる権力を誇ったのである。

対立する者たちを悉く失脚させ、みやこに起きた二度の戦乱でも主要な役割を握り、三〇年近くを宮中に君臨した彼女が、人智の及ばぬ存在であつたというのは間違いないことである。

「紅子。……何故、俺に忠告などしたのだ」

「さてね。ただの氣まぐれだよ」

あの時、美福門院への疑いを確かなものにしたところで、頼政には他に選択肢などなかった。他に従う主などいなかったし。摂津源氏は彼女の庇護なくして生き延びることはできなかっただろう。それでも頼政の耳には、三十年前に紅子が告げた言葉がずっとこびりついていた。

複雑怪奇なみやこの政争の中で、頼政と摂津源氏がその命脈を保ち生き延びてきたことは、ただの偶然ではありえなかったのだ。

「まさかお前が生き延びるとは思わなかつた。それはほんとうに驚きだよ。だからお前にもう一度忠告してやる。今お前の誘われている『さるやんごとなき人』の頼みを断るべきだ」

頼政は思わず息を飲む。

努めて、動揺は表に出さぬように努めたものの——『あのお方』との関係は、決して外に漏れ出るようなものではなかつたはずだつた。

「八条院のところではいろいろと野望を拗らせているようだけど、あいつには帝の器量はない。お前たちは使い潰されるだけだ」

「……参ったものだ。そこまでお見通しか」

「みやこの中のことは、寝てても耳に入ってくるんだ。五百年も生きてるとお節介な奴も多くてね」

言って微笑む紅子に、頼政は改めて、彼女が見た目通りの存在ではないのだということを実感する。

頼政の文の相手。それは三条高倉の以仁王——後白河院のお子の一人である。

平家打倒の中核者が皇の血筋にあることは、秘中の秘としてけて誰にも漏らしてはならぬ秘密であった。

紅子は、頼政の発する陰に気付いたか、ゆるゆると首を振る。美しい白髪が炎に生えた。

「ああ、心配しなくてもお前の秘密をばらすようなことはしないよ。確かに私は死なないけど、傷つかない訳でもないし、痛いことはきちんと痛いんだ。死ぬたびに元通り生き返るだけだね。それに頼政、私はお前のことを買っているんだ。お前にはあまり殺されたくない」

「……………」

ぱちりと炎が火花を散らす。気付けば、狐の髑髏はすっかり燃え尽き、灰になって崩れ落ち

ていた。紅子は懷から数枚の符を出して、それを周圍に散らす。

「忠告はしたよ。……せいぜい、頑張ることだ」

紅子の身体をぱつと赤い炎が包んだ。たちまち業と火柱になって燃え盛る炎は、現れた時と同じように闇の中に消えてゆく。

娘の言葉の余韻を耳に刻みながら、頼政はじつと、夜の中に深く物思いに沈むのみであつた。

十一 椎を拾いて

近衛河原の屋敷に牛車が乗りつけられたのは、治承二年（一一七八年）の秋も深まったある朝のことであった。

門前に止められた車から降りるのは、ふくふくと太った大柄な男。眉を引き唇には紅も塗った、公卿姿の美男子である。病で政治の表舞台を退いた兄・重盛に代わり、平家一門の棟梁となつた屋島大臣、平宗盛であつた。

宗盛はこの年初めの叙任で正二位となり、権大納言、右近衛大将を歴任。隠居後に福原に移つた父・清盛に代わり、みやこの平家はみなこの男の支配下にあると言つてよい。

「やれやれ、やっと着いたのかの」

近衆たちが恭しくかしづく中、じろりと屋敷の様子を見上げた宗盛は厭そうに顔をしかめる。「摂津源氏の長が、ずいぶんと貧乏臭いところにお住まいであるの。伊豆に若狭にと大層な知行も持ちであるうに、どこに無駄遣いしておるのだか」

甲高い声での厭味に、追従の笑いが上がる。家人の許可も得ぬまま、宗盛はそのまま屋敷へ

と上がり込んだ。

この宗盛、慈悲深く聡明でありながら勇猛果敢で知られた重盛とは対照的に、弓馬の道などどこかに忘れ、古くからの貴族のようにも振る舞う男であった。事実、院近臣や門院との渉外を得意とし、彼の活躍はもっぱら宮中での政治に傾いている。古くからの公卿にはここ二十年ばかりで躍進した平家の隆盛は鼻持ちならぬものであるが、それを差し引いても彼への反感は凄まじく、毒舌家で知られる九条兼実などはその意地汚さなどを徹底的に批判している。

宗盛の傲慢さと一門の権勢をかさにきた振る舞いは多くの軋轢を生んでおり、平家に非ずんば人に非ずの言葉を体現するような男であった。その悪評もけて根拠のないことではない。

そも、洛中において貴族の邸宅を訪ねるのであれば、車は門の手前で辻に停め、そこからは歩いて訪問するのが最低限の礼儀である。それを無視して相手の門前に車を乗り付けるなど、余程の身分差があつても許されぬことであつた。

それを、仮にも摂津源氏の棟梁、正四位の頼政に対して行うこと自体、眉を潜められるような行いであつた。

「これ、そんな家人。馬場頼政どのはおられるかの。宗盛が来訪したのであるぞ」

門前の家人を呼び止め甲高い声で取り次ぎを命じる。訪問するのであれば相手の不在など確認してからが当然であり、相手の家に押しかけて配下に出頭を命じるかのような宗盛の態度は、

相手の都合などお構いなしという傍若無人なものである。

平家の惣領たる己が命じるのあれば、それに従うのは当然とばかりに見下したもので、あまりにも礼を欠いていた。

「は、これは右大将殿、畏れ多くも——」

「雑兵ども、頼政殿はおられるか、と宗盛が聞いているのじや。答えよ」

慌てて飛び出してきた授、省が宗盛を押しとどめ、これに答えようとするが、宗盛の態度は一方的なものだった。ぱちりと手元の扇を鳴らし、尊大に言い放つ平家の棟梁に、郎党はただ動けず汗を流すばかりである。

平家一門の権勢を背にして有無を言わせぬ様子であるが、いかな平家の御大将とて、主の許しなく通したのであれば面目が立たぬ。板挟みになつて脂汗を流す授たちの無言が癪に触つたか、宗盛はぎろりと郎党を睨み付けた。

「ふん、名に聞こえる摂津頼政どのの郎党と聞いておるが、礼儀も知らんものが多いようじやな。良い、お主らは下がつておれ」

「で、ですが——」

「おお、これは宗盛様。このようなむさ苦しいところまで、ようこそいらつしやいました」

郎党達を庇うため、頼政は自ら屋敷の門前へと進み出る。余計な諍いで郎党が無用な責めを

受けぬようにする、摂津源氏棟梁のいじましい配慮であつた。

「なんじや、居るのなら居ると言えばいいものを。摂津の田舎侍どもはまともに口もきけんと見えるの」

一方、宗盛は頼政自身の歓迎を前にもこの態度だ。仮にも一門を率いる長を、まるで下人のように扱う。平家一門の栄華と奢りの体現者のような男であつた。

邸内へと迎え入れられてなお、宗盛はその態度を崩さない。同席している仲綱などには一瞥もくれる様子もなく、手元で扇を弄つては頼政を値踏みするように見下ろす。

「名に聞こえる摂津源氏のお住まいとは思えぬ質素な姿じやの。宗盛であれば耐えられぬのう。……帝にお仕えする武門としても、ちと飾ることを覚えてはいかがかの、頼政殿？」

「いや、まったくお恥ずかしい。家族が多いゆえ、何かと物入りでしてな。そろそろ隠居でもして樂をしたいのですが、まだまだ働かねばなりません」

地位に比べて、頼政の近衛河原の邸宅が質素であるのは確かだった。それには別の理由もあるのだが——そんなことはおくびにも出さず、頼政は笑みを作つて宗盛に訪ねる。

「して、このような老いばれに如何様な御用向きでありますしうかな」

謙やかな調子に、宗盛はようやく小さな笑みを見せ、

「なに、ちと挨拶に寄つたまでの事であるよ。ご健勝で何よりのようじやの、頼政殿。……い

やはや、そのお歳でなお現役を貫こうとは見上げた心意気であるな。流石は鶴退治で勇名の聞こえる頼政殿、いやはや、このような父君を持って、御息もさぞ心強かろう」

頼政が、清盛よりも十以上年嵩でありながら、なお摂津源氏棟梁にあることへの痛烈な皮肉である。一門を率いる立場は本来ならば仲綱に移って当然のものであり、なお老いらくのまま出世を望む浅ましい性根であると言っているに等しい。実際、頼政の年齢を考えればそれは当然であり、頼政自身も朝夕の勤めは若い頃と同じようにはいかなくなっていた。

「お恥ずかしい限りにございます。老骨ゆえ、お見苦しいところもありましたがご勘弁ください」

頼政はそれに気付かぬ老い耄れの振りをして、笑顔を作る。

実情として、摂津源氏と一門を率いているのはいまや半ば以上仲綱である。最近では歌壇でも作を増やし、父譲りの歌才という評も聞こえるようになった。あの毒舌家の九条兼実までもが好意的な評を寄せているのである。

というのに、もう十年以上も仲綱は嫡男と言う曖昧な立場のまま、頼政を立て、裏方に徹してくれていた。自分には過ぎた息子であると思えばかりである。

これも全ては頼政の願いである三位への出世を果たすためであつた。一門のため、息子たちのため、みやこ残った源氏の未来のため、前例をつくらねばならぬのだ。

「なんとなんと、宗盛を前にそのように謙る事はなからう。最近はお歌会にもお顔を出されぬとあつて、寂しく思う声もあると聞き及んでおる」

「最近はずつかりと衰えて、お恥ずかしいばかりであります。息子や娘の方がよほど巧みとなりました」

「これは頼政殿のお言葉とは思えぬ。ご謙遜も度を過ぎると厭味であるぞ。頼政殿にはまだまだお元気でいて貰わねばならぬ」

ぱちりと扇を鳴らし、ほほほと笑つてみせる宗盛。同時に、彼の言葉は頼政が今の源氏における最後の拠り所であることを如実に指し示していた。侮蔑に等しい言葉を、風と受け流して頼政はわずかに微笑むのみである。

「まったく、最近のみやこの様子も変わるものじゃ。野暮なことではあるがの、父が福原に移つてより、みやこに詰める者にも新しい顔が増えた。頼政殿もご存知であろう。かくいう六波羅でも郎党達が乗る馬にも事欠く有様であるのだ。そこで伝え聞くに、坂東は伊豆に伝手をお持ちの頼政殿が、とても良い名馬をお持ちというではないか」

「はて……?」

話がきな臭い方へと傾いているのを感じつつ、頼政は老いたふりを貫いて首を傾げてみせた。武士にとつての馬は戦力そのものに等しい。いかに優れた馬を持つかが戦場での趨勢を決め

る事に直結していた。畿内の馬に比べ、広大な大地を駆け伸び伸びと育つ坂東の馬は、持久力、瞬発力、体格のどれをとっても勝っている。体格も一回り半は大きく、長時間の行軍にもよく耐えた。

さらには弓矢の飛び交う戦場でも物怖じしないことから、坂東の馬は優れた軍馬として各所から求められていたのである。

馬の供出は摂津源氏の戦力を削り、平家一門に力を供出しろと言う服従要請である。しかし、頼政の直感には宗盛の要求がその程度では済まないことを感じ取っていた。

「いやいや、おとぼけになるとは頼政殿も意地の悪いことであるな。お隠しになっても、この宗盛には聞こえて参るぞ、かの源氏長者の元に素晴らしき駿馬がいると。う。名を——そうそう、木ノ下とか申すのだったな」

「な……」

宗盛が告げたその名に、近衛河原の屋敷は凍りついた。

一同の驚愕を面白そうに見つめ、宗盛はしららしくぼんと手を叩いて見せた。そのまま白塗りの顔を歪め、にやにやと頼政と仲綱を眺める。

「そうそう、木ノ下、木ノ下じゃ。たいそう良い馬だそうではないか。この屋敷で頼政殿やご子息が戯れておるといふ噂を聞いておるぞ。その名、遠く福原の父も耳にしておるほどじゃ。

どうか宗盛のもとで引き取りたいと思い、こうして参ったのであるぞ」

「なんと、そのような話がありますのか……」

「これは異なことを申されるのう、頼政殿。まことも何も、知れ渡っていることであろうよ。老いらくの摂津源氏棟梁殿が、たいそうな入れ込みようであると。弓馬の道において名門と謳われた摂津源氏の長老の目に留まったという名馬。鹿毛にて乗り心地、走り具合、またとあるとも思えぬ一品と聞く。さぞ素晴らしきものであらう？ ん？」

扇で口元を隠し、ほほほと笑う宗盛。平家の棟梁は、細めた目の奥から冷徹に頼政を値踏みしていた。その意図するところはただ一つ。

——みやこを占める平家の中にただ一つ残った源氏の一門。

——兵庫頭源頼政に平家への二心ありやなしや？

動揺を隠しきれず唸る仲綱の隣で、齒軋りしたくなるのを堪え、頼政は辛うじて表情を繕う。

（……これは、まずい）

宗盛の真意を測りかね、頼政は懸命に頭を巡らせる。

一体どこまで知られているのか——ぬえの素性、かつての鶴退治の顛末、最悪、以仁王との

関係性が露見すれば、この場で一門が処罰、討伐される可能性すらある。そうなればもはや後はない。いっその場で事を起こすしかないと言うのか。

頼政の頬を汗が伝う。宗盛はと言えば、涼しい顔で扇を弄ぶばかりだ。

「失礼ながら、宗盛卿」

答えあぐねている頼政の隣から、仲綱が進み出る。

「木ノ下は、あれで気性の難しいものにございます。私とて何度足蹴にされたことか。……躰けようにも気位が高く、ろくに言う事を聞かぬ始末。我等もあまり疲れ果て、いまは若狭の田舎へと送って休養させておりますほど。いかな噂であれど、そのような馬を御一門に献上して、騒ぎとなれば我等の体面は立ちませぬ、どうかお考え直しを——」

「仲綱殿」

宗盛は大きな咳払いをもって仲綱の言葉を遮った。子供の悪戯を咎めるような棘のある声で、不機嫌そうに眉をしかめ、じろりと仲綱を睨む。

「失礼ながら、摂津源氏の棟梁は頼政殿であらう？　のう、それを何じや、お主は父君に意見ができる立場であるのかかの？　宗盛は頼政殿と話しておるのだぞ。それをただ、居合わせただけの息子が割って入るといふのはいかなる了見であるのかのう？」

「ぐ……」

宗盛の言葉は、暗に、老いらくの頼政がなお地位にしがみ付いているという侮辱も含んでいた。そうした陰険な態度とは裏腹に、宗盛はさも具合が良いとばかりからからと笑うのである。

「……いやいや、つい失敬な物言いをしたの。聞けば、仲綱殿は伊豆の所領に多くの素晴らしき馬を抱えておると聞く。そのうえでなお一頭を手放すことすら惜しむとは……常ならば卑しき氣性であると誹られるところじゃが、なに、宗盛は分かっておるとも。名馬木ノ下を離したくないという仲綱殿の執着であらう？」

口元に寄せた扇を閉じ、宗盛はにんまりと笑みを見せる。

「ほほほ、氣性の激しい馬、実に結構ではないか。それを手名付けてこそその武者ぶりというものであらう。その様子ではかの木ノ下は、頼政殿もさぞ扱いかね、持て余しておると思われる様子であるな。であればなおさら、宗盛が引き取るに都合がよいというものではないか。のう、頼政殿？」

「……………」

苦渋の表情を見せる頼政に、宗盛は扇をくるりと広げ、目を細めた。

「ほほほ。まあ、仲綱殿のお気持ちも分かる。一門の重責を負うとなれば色々と苦労も多からうよ。宗盛もなあ、兄に代わりこうして六波羅を預かる身となつて、はじめてその重責に震えておるところであるぞ。先日も不屈きな奴原めが、鹿ヶ谷にてこともあらうに院を抱き込んで

平家を害そうなどという企みを見せたばかりじゃ。小人閑居して不徳を成すとは良く言つたもののよう。有事に備え、帝の御為に宗盛も備えねばならぬ。またいつ、二心を抱く不心得者が現れるとも限らぬからのう」

じろりと、頼政らを睨んで、宗盛。

平家がいまの帝である高倉帝を邪魔に思い、間もなく生まれる皇子を新たな帝に付けんと画策してしているのは周知の事実である。これによつて清盛は帝の祖父となることが確実視されていた。そうなれば宗盛も帝の外戚である。なんと空々しい言葉であらうか。

(……父上)

(逸るな、仲綱)

拳を握りしめる息子を制し、頼政は静かに吐息した。

「いえ、いくら宗盛様の願いとは言え、できぬ相談です」

あくまで頑迷なる老人を装つて、静かに首を横に振る。

「木ノ下は我が一門に欠かざるもの。仲綱らと同じ我が子です。いかな宗盛卿のお望みとて、お譲りするわけには参りませぬ。いかな黄金を積まれたとて、こればかりはお譲りできませぬ」
姿勢をただし、しつかと宗盛の視線を受け止め、睨みかえして。無理を通すのであればこの場にて意地を見せるという姿であつた。

決死の覚悟で臨む頼政に、しかし宗盛は涼しい顔。

「ふむ……まったくまったく、これはなんとも憎らしい。いや、まったく羨ましいものよ。た
いそう愛されておるのじやのう、木ノ下は。——ほほほ、そう邪剣にされずとも良いぞ、頼政
殿。なにもこの宗盛、道理を曲げ無理を通そうというのではないとも。御機嫌を悪くさせたの
ならばすまぬの。……どれ、出なおすでしょうか」

そのまま宗盛は頼政の用意した歓待など歯牙にもかけず、踵を返してしまった。

牛車が遠く六波羅に去ってゆくのを見届け、屋敷に残された頼政と仲綱は、どっと疲れ果て
てその場に座り込む。まったく生きた心地がしなかった。

やけにあつさりと去っていった宗盛だが、これで話が終わりであるわけではない。

今日の来訪はあくまで警告。そして、最後通牒なのだ。

「……父上。参ったことになりましたな」

「ああ……」

何事かと駆け付けてきた兼綱達に答える気力もないまま、深く息を吐いて、頼政は額を押さ
える。生温い汗が背中じゅうに広がっていた。

「どこまで気付かれているのでしょうか……まさか、例の件まで感づかれているとも思えませ
ぬが」

「分からぬ。が、平家の惣領が、何の意味もなくあのような脅しをかけては来るまい」

宗盛はおそらく、頼政とぬえの関係をほぼ正確に把握しているのだらうと推測できた。

宗盛の妹平盛子は、藤原北家近衛流の嫡流、藤原基実に嫁いでいる。夭折した藤原摂関家の嫡子が、父であつたつた関白忠通より宮中における秘中の秘、隠されたいくつもの真実について受け継いでいることは疑いようのないことであるし、基実の死後その領地や藤原氏代々の家領、記録、宝物などを東三条殿へと継承した盛子は、白河殿と呼ばれる摂関家の後継者である。宗盛が異母妹を通じて、かつての鶴退治の真実を突き止めたことは想像に難くない。

「親父殿、兄上、いったい何があつたのです」

「右大将殿がお越しでな。木ノ下を六波羅に差し出せと仰せだ」

「……なんと!？」

眼を剥く兼綱に、頼政は呻くように続けた。

「ありていに言えばな、宗盛卿は俺を試そうとしている。今日の来訪はそのためのものだ。いかな事があるうとも平家に尽くし、万が一にも弓引く事などなきようにと仰るのだよ」

木ノ下——ぬえの存在は、頼政と摂津源氏の武名の根底を揺るがしかねないものだった。

宮中を脅かし、帝を病の床へと伏せさせたばかりのもの、ぬえを射抜いた名に聞こゆ辟邪の摂津源氏、頼政の弓。それが虚飾であつたことはおろか、退治すべき妖怪を己が手元で買い馴らし

ていたこと——それは、考えようによつては帝への二心を疑われかねぬ行いなのである。

ぬえと共に暮らすようになって以来、それを努めて意識しようとしていなかった事を、頼政は酷く悔いた。

「すべて、俺の甘さが招いたことだ。……自業自得だな」

全ては自分の撒いた種だ。頼政は深い自虐の念に襲われていた。歲月や、後悔などで拭い去れるようなものでなかったのだ。あの夜の過ちは、本人すら思いもよらぬ間に、呪詛のように頼政を蝕み続けていた。

宗盛があつさりと引き下がったのは、頼政の意志を確認するためであろう。頼政がこれを拒絶すれば、宗盛はぬえに関する噂を流布すると脅しているのだ。

だが、同時にわずかながらの希望もあつた。

「恐らくだが、このことを知るものはそう多くない。……少なくとも福原にまでは知らせてはいないはずだ。そうでなければ、摂津源氏を従えることが功績にならんからな」

この一件、頼政は宗盛の独断であろうと踏んでいた。宗盛の性格からして兄・重盛を意識していることは明白であり、兄に代わって己の優秀さを示すため、より強くみやこを統制しようという意図が透けていた。

それに、これが清盛入道の知るところであれば、もっと上手く——頼政自身が、ぬえを手放

すことに不満を覚えない様な形で事を納めていただろうから。

宗盛が頼政の不満を押さえつけるような行動にでたことで、却ってこの要請が宗盛の単独行動であることが露呈していた。

「驕る平家、か……」

清盛は一代で平氏一門をこの国の中心にまで押し上げた稀代の傑物であったが、その子供たちは皆、彼の才能をばらばらに受け継いでいた。

一人ひとりを見ればそれぞれ、得意な分野において目を見張る部分があるのだが、一人でそれらを全てこなせる清盛入道の目からすれば、あれが足りぬこれに欠けると、粗ばかりが目につくのであろう。ゆえに彼はいつまでも一門を率いる地位から降りることができず、平家の柱としてその剛腕を振るい続けていたのである。

後継者の中で特に期待をかけていた重盛が政治への意欲を失い、病気がちとなって以降、平家の継嗣には目立った名が上がらなかつた。清盛自身があらたな国造りの枠組みとして福原に滞在するようになって以降、みやこでは宗盛が一門を率いる立場となったが、彼もまた優秀な兄と比較されることに強い劣等感を覚えていたのである。

表向き、みやこのことは息子達に任せている清盛も、やはり宗盛の手腕には満足いかぬ部分が多々あるとみえ、不満を漏らすことも多いという。いきおい、彼は大陸との交易をも見据え

る広く進歩的な視野から、なお力強くその辣腕を奮おうとしているのだらうが——そうした父への見えぬ反発が、息子達を憤らせ、殊更に横柄な振舞いへと駆り立てていることに果たして気付いていただろうか。

「ですが、それも時間の問題でしょう。木ノ下を庇って、あの事まで露見してしまつては本末転倒だ。この上はいっそ、あの方の元に……」

「馬鹿を言え、それこそ平家の思う壺だぞ！」

「しかし、ではどうする！ どちらに転ぼうと宗盛の利にしかならぬのだぞ」

頼政が少しでも恭順の態度を崩せば、宗盛は摂津源氏をたちまち押しつぶさんとするだらう。だが、宗盛の要求を飲むことは、未来永劫、頼政らが平家に隷属を余儀なくされることを示していた。

これがいまの平家の在り方だ。平家に非ずんば人に非ず——その言葉通りに、公卿も、院も、武家も帝すらも。その掌中に自在とし、この平安京を、平家の名のままに支配し、この日の元の国を遍く己がものにせんとしている。

「どうします、父上」

兄弟を代弁し、ひとり問いかける仲綱に——頼政は言葉なく押し黙る。
ぬえを人質に渡すなど、ありえない。

しかし、あの『計画』は頼政や摂津源氏一門だけではなく、さらに多くの者たちの運命を左右する重大事なのだ。それに関わる全ての者たちを切り捨てることなど、できるものだろうか？ 議論は夜にまで及んだ。夜が更け、やがて夜が白み始めるまで様々な意見が出たが、結論には至らない。激しく言い争う息子達の横で、頼政はずっと一人、考え込んでいた。

懊悩が深まる一方で、思考はぐるぐると渦を巻き、袋小路の中に飲み込まれてゆく。

そして——朝日がゆっくりとその顔を覗かせる頃。苦渋に歪めた顔を見られぬよう、手で覆い、頼政は議論を打ち切るように息子達に言った。

「もう良い。この話はこれまでだ。……皆、もう休め」

とても納得した様子ではなかったが、息子たちは渋々ながらそれに従う。一様に納得しかねるという表情であるが——それでも、めいめいに腰を上げ、部屋を出ていく。

一人残る頼政を最後まで案じていた仲綱だけが、じっと父の背中を見つめていた。



それから宗盛の要求は再三にわたって繰り返された。あくまで表向きは穏やかなもので、頼政に礼を尽くし、名馬「木ノ下」を求める申し出であったが——その実、頼政はいよいよ後

がないところまで追い込まれていたのである。

それでもどうにか回答を先延ばしにし、別の方策を模索していた頼政であつたが、どこからかそれを聞き付けたぬえは、若狭の所領を抜け出して近衛河原へとやってきたのである。

はじめ知らぬ存ぜぬを決め込もうとした頼政だが、彼女にしつこく詰め寄られ、終いにはこのまま六波羅に駆け込むぞとまで脅されて、とうとう根負けした頼政は、宗盛がぬえを所望していることを認めざるを得なくなつた。

「……そうだ。その通りだ。宗盛卿はお主を所望している」

「つは、馬鹿馬鹿しい。本気でそんな事で悩んでたのかよ、頼政」
「随分あつさりと言つてくれるな」

「くだらないことに執着して、みつともないからさ。で、わたしに秘密にして一体どうするつもりだつたんだ。言ってみろよ」

鼻が触れるほどにぬえの顔が近づき、少女の前髪が頼政の額をくすぐる。

頼政が答えに窮しているのを見て、ぬえは口元から尖った歯を覗かせ、頼政の背中に飛び乗つた。

「ほれみろ。それが考えなしだつて言うんだよ。簡単なことだろ」

「駄目だ」

「何が駄目なもんか。優柔不断のまま無駄に長生きしやがって、それで源氏の長老だなんてよく言えたもんだ。なあ頼政、お前の勝手で、仲綱達にまで迷惑をかけていいのかよ。……お前はそんなつまらない事にこだわる男じゃなかったはずだぞ」

「それでも、だ。それだけは出来ぬ」

背中から、不満げなぬえが頼政の顔を覗きこんでくる。

自分は今、恐ろしく仏頂面を浮かべているのだろうと頼政は思う。

「わがまま言いやがって、まるで子供だな。わたしを人間の娘なんかといっしよにすんなって言ってるだろ」

「それは違う、お主は——」

「……なあ頼政。わたしは妖怪だ。このみやこを脅かしたわけもの、鵠なんだぞ。それをなんだよ、この世の終わりみたいな顔しやがって。六波羅なんて目と鼻の先じゃないか。別に取って食われるような場所じゃないだろう？ 平家のお大尽のどこならもつとずつと贅沢させてもらえるつてもんだ」

捻くれた物言いは、ぬえなりの配慮なのだと、それくらいのことを察するほどには、頼政もぬえと暮らして長い。だから、頼政は静かに首を振った。

「違う。……お前の居るべき場所は、この近衛河原だ。六波羅などではない」

一息。さかさまに覗きこんでくるぬえの瞳をまつすぐ見つめ、頼政は言う。

「……俺の隣に居ろ、ぬえ」

一瞬。

ぬえの呼吸が止まった。

「……………、っ、ば、ばつかじゃないのか、お前!」

そっぽを向き、大声で叫ぶぬえ。だが頼政はあくまで真剣だ。

反らした視線を空に泳がせ、耳まで紅くなった頬を髪で隠して、ぬえはぶんぶんと腕を振り回した。くだらないことを言うんじゃないとばかりに。

「な、なに言ってるんだよ、いきなり。いい加減歳くって耄碌したのか、頼政。……惚けるには早いんじゃないのか? なあ?」

軽口で済まそうとするぬえに対し、頼政は沈黙を保ったまま、じつとぬえから視線を離さず、静かに答えを待つ。

「……………ッ!」

ぬえは耐えかねたように頼政の背中から飛び降り、その場に降りた。だんッ、と地面を踏み鳴らし、渦巻く感情を、じつと飲み込むようにして俯く。

そして、長い長い葛藤の末。

「……ありがとね、頼政」

小さく俯いて、少女はそれだけを口にした。

そうしてすぐ、いつもの笑顔に戻り、ぱっと顔を輝かせる。

（ああ）

努めて明るく振る舞おうとするぬえの仕草に、頼政はすぐに悟った。

（……また、振られたか）

ぬえは腕組みをして、大きく胸を反らし、ばしんと頼政の肩を叩く。

「買いかぶりもいい加減にしろよ、頼政？ 宗盛だか大盛だか知らないけど、このわたしが平家のぼんぼんなかに好きにさせるとでも思ってるんじゃないだろうな。見てろ、あいつら全員まとめて恐怖のどん底に突っ込んでやるさ」

「——だが」

「いいから。このままじゃ仲綱のやつに咎が及ぶかもしれないんだろ。あの堅物、平家の連中にまで頑固一徹に通してるとらしいじゃないか。らしくもない。……そんな心配せずに任せといてよ。つてかね、わたしを射殺したやつがそんなしよげた顔するなって！」

もう一度、頼政の肩を痛いほど叩き、ぬえはけけらと嘲ってみせた。

「ふん、意気地のない顔してんなよ、頼政。平家の御大将なんてったって、どうせお公家かぶ

れのぼんぼんだらう。いくら珍しい馬だからって、すぐに飽きるさ。……そうだな、いつそわたしの魅力で骨抜きにしてやるのも面白そうだ。なんだったら、六波羅の連中全員、お前の配下にしてやってもいいんだ。

……忘れるなよ頼政。わたしは妖怪なんだ。お前のところで家族ごっこなんかしてる方がおかしいのさ」

そう言い切って。

ぬえは次の日の朝、止めようとする頼政を振り切り、自ら宗盛の郎党の前に姿を見せ、『木ノ下』として六波羅に連れられていったのである。宗盛はこれをたいそう喜び、頼政に厚遇を与えることを約束してきた。

ぬえを見送る中、仲綱はひとり、険しい顔を崩さなかった。

恋しくは 来ても見よかし 身に添へる

かげをばいかか 放ちやるべき

仲綱がそう詠んだ一首の歌を書き添えてぬえに送るのを見て、頼政は天を仰いだ。仲綱だけは、頼政の意図を察していたのだ。ああと呻き、頼政は本当に、本当に自分は詰まらない男に

なつてしまった事を自覚した。

(……みつともない話だ。官位を望んでなお隠居をせずにいる俺よりも、息子の方が余程、一門を率いるに相応しい)

「父上」

全ては承知の上だろう。それでもなお、仲綱は敢えて頼政に聞いてくる。

「多くは申しません。……ですが、父上はこれで良いとお考えですか。いまでもなくとも結構。いつの日か、お答をお聞かせください」

静かな仲綱の問いに、頼政はもはや反駁する言葉を持たなかった。



しばしの後。頼政に対して唐突に叙任が行われた。与えられたのは従三位下。これまでまったく音沙汰の無かった、待望の三位への昇叙であった。

この年も頼政は左大将藤原家定の家に忍び込んだ賊を捕える、春日使として任じられる、中宮御座所への出仕と、七十五の高齢とは思えぬ働きをしているが、それをもつてもこの叙任は破格のことであった。九条兼実などはこれを「第一之珍事也」と記したほどである。

この昇進は京に訪れていた清盛入道の推挙によるものであったという噂がすぐに流れた。頼政の詠んだ歌が清盛の耳に止まり、たゆまぬ勲功にも関わらず長らく頼政の官位を四位に留め置いていた事を詫びた清盛が、その礼として推挙を行ったというのである。

のぼるべき たよりなき身は 木の下に
椎をひろひて 世をわたるかな

その歌と言うのがこれだ。

源氏の名門にあつてなお、摂津源氏の祖・源頼光や八幡太郎義家にも成し得なかつた三位叙任と昇進は、一門の中に大きな喜びをもたらした。ことさらに源氏を貶めようとする息苦しい日々の中で、この慶事は源氏一門にとつての久々の喜ばしい出来事だったのである。

「やりましたな、親父殿！」

「おめでとうございます！」

昇進を祝い、近衛河原で盛大に開かれた宴の中、息子達に、郎党達に囲まれながら、頼政の顔色は優れない。長年の悲願であつたはずの公卿の仲間入りすら、どこか上の空で、心ここにあらずといった様子であつた。

「親父殿？」

「ん、ああ、そうだな。これでようやく肩の荷が下りた。……長い間、苦勞をかけたな、仲綱」
從三位への昇進をもつて摂津源氏はついに昇殿を果たし、頼政は公卿として正式に認められたことになる。頼政は兼ねてより決めていた通り、叙任後すぐに仲綱に家督を譲り、出家するつもりでいた。もともと、頼政がこの地位を望んだのは平家全盛の世において源氏の命脈を保つためである。官位自体に執着はなく、源氏において三位の公卿を輩出した前例を作ることが目的であつた。

父がその地位にあるという事実があれば、仲綱や兼頼、ほか多くの源氏の息子達も昇進を望むことができる。その足掛かりとなるのが頼政の大望だったのである。

しかし——宴の席が終わりになる頃。頼政はいよいよ苦悶を深くし、苦しげに溜息を繰り返すばかりである。呻くように額を押さえるばかりとなつた父に、息子達はせっかくの美酒の酔いも醒め、何があつたのかと顔を見合わせる。

「……父上、ご気分がすぐれぬ様子ですが、なにか気になることが？」

「違ふのだ」

苦悶を吐きだすように、頼政は呻いて杯を煽る。このように飲めぬ酒を無理して飲む父を、仲綱達は初めて見るのだつた。

「違う……?」

「あれは、俺の歌ではない。俺はな、あんな歌を詠んだ覚えもない」

この昇進のきつかけとなった椎の歌のことであるとはすぐに知れた。しかし、自身の歌でないとは一体どういうことか。仲綱らは頼政の突然の告白に驚くばかりである。

「それは……一体」

「言葉通りだ。お節介な誰かが、俺の代わりにあの歌を詠んで、清盛入道どのの目に留まるような場所に押し込んだのだろうな」

その誰かについては、語るまでもない。

清盛入道のもとに歌を届けることができ、しかも歌に優れた頼政の真似をして気付かれぬことが出来る者など、他に誰がいようものか。

——たよりなき身は木の下に。

なによりも雄弁に、その歌は誰の手によるものかを語っている。

待望の三位、星の位。平家隆盛の中でひたすらに平家に尻尾を振り続け、幾多の源氏の同胞が命を落とすのを黙って見過ごし、ついには家族同然の娘を売り払ってまで得た地位だ。

「なにが、源三位、……なにが、辟邪の摂津源氏か。これが、こんなものが、……俺の望んだものなのか」

「……父上」

酔いの回った濁る目で、頼政は息子の肩を掴む。ただひとえに、己への嫌悪を飲み込んで。

「仲綱」

「はい」

「……お前は、俺のようにはなるな。良いか。決して、……決して、俺のようには、なるな」
血を吐くような頼政の言葉を。

仲綱は。息子達は、ただじっと聞いていた。



——さかのぼること去年の冬。

伊豆での動乱の話が、みやこのへも聞こえてきていた。

南海の伊豆諸島を治める豪族・工藤茂光が上洛し、伊豆の七島を支配して反乱を起こした者たちの狼藉を訴え、討伐の院宣を求めて願ひ出たのである。

「皆々様！ 一大事にございます！」

その首謀者とは、驚くべきことに大島に配流されていた鎮西八郎為朝であったのだ。

腕の腱を切られ、遙か海の向こうの伊豆大島に流されていた為朝であるが、やがてその傷も癒え、以前にも増して凄まじい剛弓の技を取り戻した。そうして彼は平家の支配に不満を抱く地元の豪族や、絶海の孤島鬼が島に住む怪物のとき大男たちを支配下に置き、伊豆の独立を目指して決起したというのである。

あまりのことに院は驚き、直ちに茂光に為朝追討の院宣を下した。これにて千人力とばかり、茂光は伊豆へと急行し、伊東氏・北条氏・宇佐美氏ら五〇〇余騎、二十艘もの軍船をもつて為朝のもとに攻め寄せたのである。

伊豆の海を舞台にした激しい戦いの中で為朝は何度も討伐の軍船を撃退したが、多勢に無勢の中ついに抵抗の無駄を悟り、凄絶な最期を遂げたという。

「為朝殿は、その無双なる剛弓を持つて攻め寄せる軍船二艘を射抜き、次々と沈没せしめたものの――もはや己の道に極まったものを知り、なんと自ら腹をかつさばいで自害なされたとの由にございます」

「……そうか」

その最期まで、なんと豪快で凄まじいものであったことか。彼の勇猛な戦いぶりを聞かされ、みやこの公卿たちは震えあがった。遠く伊豆にあつてもなお、為朝は古今無双の源氏の英雄であつたのだ。

思い返せば、清盛らと轡を並べ、共に争つたあの争乱からもう二十年以上が過ぎている。平家の栄華は旭日の極みとなり、福原に築かれた港は遠く大陸の宋との貿易を始めている。新たな都となるべく発展を続ける福原で、古きみやこで、清盛の息子達がこの国の中心となる一方、源氏の子息たちは坂東の僻地や鞍馬の寺で仏門に入ることを余儀なくされ、絶対の恭順を誓わされていた。

二度と再起できぬように腕の腱を切られ伊豆に流罪となつたはずの為朝が、なおかの地で領主たちを打ち滅ぼし、反抗をつづけていると聞いた時、頼政はまこと彼こそは真の英雄であると思つたものだ——そんな為朝ですら、もはやいまの世に生きるべき道はなかったのだ。

今の世はもはや神話の、英雄の生きる時代ではない。

人の敵は人だ。全ての人々は、同じ人同士で争い、抗い、憎み合う。

討伐されるべきばかりものはおらず、あらゆる夷敵もとうに消えた。

弓を向け合う先は同じ人間、同じ武者たちでしかない。

人の争い、人の醜さ。その最たるものが己である、頼政は思う。己の業によつて一人の娘をばけものに変え、その怨嗟と憎悪によつて多くの人々を災禍に巻き込んだ。あまつさえ、そのばけものを己の一存で匿つて、人のように囲つていたのである。

挙句、そんなぬえを売つて得たのが三位の位。これは一体何だというのか。

源氏一門の誉れ、辟邪の武、摂津源氏の長老、源三位頼政。きらびやかな武名を並べ立ててみても、その空虚さ、あまりの空々しさに、眩暈がするほどだ。

奔放で、豪快で、生まれる時代を間違えた英雄のようなあの為朝ですら、今の世に抗う事はできなかった。

では、己は、その生涯に一体どのような始末をつける？

自問する頼政に応えはなく、摂津源氏の長老の思いは、ただただ深い自己嫌悪の循環の中に飲み込まれていくのだった。

十二 名馬「仲綱」

「――殿。頼政殿」

「あ、ああ」

己を呼ぶ声に頼政が意識を引き戻されれば、目の前には呆れた様子の団三郎がいた。話の最中、いつの間にか物思いに沈んでいた事に気まずい思いをする頼政の前で、彼女は吐息を挟んで並べていた品を片付け始める。

「どうも、だいぶ身の入らぬご様子。また次の機会に出直すとしますかのう？」

「すまぬ、少しばかり気が抜けていた」

この年の春、頼政は病を口実に先延ばしにしていた三位への叙任を済ませ、秋には出家してその家督を仲綱に譲っていた。齢七十六、もはや先の短い老いらくの命を、仏門と歌会に向けるようになった頼政だが、近衛河原の屋敷にあつて彼はいまだ摂津源氏の長である。

団三郎がひよつこりと顔を出したのは先日のこと。またもしばらく前までみやこを離れていたという彼女が宋渡りの珍しい品々を献上して語ったのは、福原に築かれた平家のみやこの様

子であった。

先頃、清盛はついに後白河院との決別を決意。豊明節会に合わせて数千騎を率いて上洛し、院とその近臣より一切の権限を奪い、政治に関わることを禁じてしまった。世に言う治承三年の政変である。

清盛が動いた直接の原因は、病死した重盛や盛子の領地を院が一方的に没収したことだった。立て続けに命を落とした嫡男と摂関家の後継者に、平家の専横に対する神罰であるという声も上がるほどであったが――それを受け入れる清盛入道のはずがない。

そも、もはや両者の決別は時間の問題であった。後白河院と清盛入道、共に治天の君たらんとする両者の対立は避けられぬことであつたのかもしれない。

政変で解任された親院派の後任には平氏一門がこぞつて名を連ね、平家の知行国は十七より三十二と倍増。これらは皆、逮捕や罷免された公卿たちの所領であり、いまや国内六十六カ国のうち半数を平家が支配下におくという、ある種の異常事態。その権勢はかつての道長公の望月の世にも匹敵する隆盛の絶頂であつた。

その中であつて、清盛の本拠福原はきらびやかに栄え、港には大陸じゅうの宝が集めた唐船が休むことなく出入りするという有様であるという。

「それほどまでに、栄えておるのか」

「清盛入道の膝元ありますからな。揚州の金、荊州の珠、呉郡の綾、蜀江の錦……七珍万宝、一として欠けたることなしとはまさにあのことですかのう。しかし、どうやら源三位入道殿は、福原に集まる宝よりも気になるものがお有りのようすな」

「悪いか」

「かかか。七十五を過ぎてのご老体がそのような様では、いささか威厳と言うものが感じられませぬ。気もそぞろの上の空、まるで少年のように落ち着きがない。

……それほど大事なものであれば、手放してはならなかったのです。早まったことをなされましたな、頼政殿」

「言うな、俺は」

つい反駁しかけ、頼政は続きを飲み込んだ。何を言っても八つ当たりなのだ。仏頂面で腕組みをする頼政に、団三郎は思案するように片目を閉じ、

「木ノ下より、無事でやっておるといふ便りはあるのでしょうか？」

「まあ、な」

一度だけ、目を覚ました頼政の枕元に歌が残されていたのである。見覚えのある筆跡には寒椿が一枝、添えられていた。一体どうやって届けられたものかは分からないが、素っ気なく無事を知らせる歌には、その内容とは裏腹に頼政の胸騒ぎは増すばかりであった。

頼政もあれから黙っていたわけではない。ぬえの様子を探らせるためにあれこれと手を尽くしていたが、清盛とその父忠盛がその基礎を起こした平家の拠点は、幾多の戦乱を乗り越え、いまや無敵の結束を誇っていた。六波羅の警護は固く、また宗盛に気取られぬように勧めるには限界もあり、平家内部の様子など窺い知ることができなかったのである。

顔を曇らせる頼政に、団三郎はやれやれと首を振り、

「仕方ありませんぬのう。儂としても頼政殿がそうお悩みであるのをこれ以上黙って見ておるわけにもいきませぬ。どれ、ここは儂が一肌脱ぐといたしましょうかの」

「……お前がか？」

「まったく見ちゃおれませんからのう。恋し恋しやで気もそぞろでは、商いの話もできませぬ」

お任せくだされ、とばかりどんと胸を叩いてみせる団三郎。商人に何ができるものかと思う頼政だが、すぐにその疑念を打ち消した。そもこの団三郎という娘、宮中に伝手を持つばかりか、海の向こうの佐渡や平家のみやこである福原にまで出入りする、通り一遍の商人ではないことは明らかなのだ。

「なに。こう見えて、少しばかり姿を偽るのは得意ですのな。六波羅など目と鼻の先、ちよいとひと駆け様子を見て参るだけです。気取られぬようなへまは致しませぬよ。……そうなのう、お代は次の支払いに色を付けて頂くという事でいかがかな、頼政殿」

こうして団三郎は頼政に約定を取り付け、近衛河原の屋敷を後にした。

表に待たせていた荷車を連れ、辻を六波羅とは反対方向の西へ、西へと進んでゆく。賑やかなみやこの中心を離れるにつれ、辺りは見ると様相を変えていった。

かつて唐の長安を模して築かれた碁盤目のような平安京の街並みであるが、いまやその繁華は大きく偏り、美しく賑やかな左京に比べ、右京の荒廃ぶりは目に余るほどである。

没落して荒れ放題となった貴族の屋敷、大火で崩されたままとなっている土壁、打ち捨てられた寺院の後、廃屋に巢食う流民に野党たち——大内裏のある中央をすこし離ればこのような荒廃は常のことであつた。

団三郎はそんな寂れた区画を奥へ奥へと分け入ってゆく。奇妙なことであつた。あたりの家々は等に打ち捨てられ、とても女の住まいや、商いの拠点とは思えぬほど荒れ果てたものばかりである。しかし彼女は迷うことなく入り組んだ辻を抜け、並ぶ廃屋の一つに入つていった。後を追つた荷車もまた、廃屋の奥に消えていく。

程なくして、廃屋からは彼女一人が姿を現した。

いかなる不思議であらう。荷車は影も形もなく消えうせ、彼女自身の姿も見違えるほどに変わつていた。髪は灰にまだらに染まり、顔には深く皺が刻まれ、曲がつた腰と共に長年重ねてきた労苦を思わせる。先程までの格子模様の襟巻もろとも男装は煙と消え、その姿はいかにも

公家の屋敷で長年を務めあげた、初老の下女の姿であった。

どのような術にて化けたものか。団三郎はそのまま老婆然とした足取りで来た道を引き返し、やがて六波羅に通じる五条大橋へと差し掛かった。

そのまましれつとした顔で平家の本拠へと出入りする人々に交じり、団三郎は堂々と六波羅の門を潜つたのである。門を固める見張りの郎党達は、まったくこれに気付いた様子もない。

「……見張りの質は落第点じゃなあ」

一人そんなことをつぶやき、団三郎はさらに平家惣領の邸宅である泉殿へと向かう。

流石にこれは見咎めるものがいたようで、巡回していた郎党たちが慌てて近づいてきた。

「待て待て、こちらは駄目だ。止まれ！」

「言っていただろう、今日は近づいてはならぬと。……ん？　なんだ婆さん、見ない顔だな」

「……なんじゃと？」

ぎよろりとした目玉で不機嫌そうに郎党達の顔を見上げ、団三郎は口元を歪めてみせた。

「おぬし、ここに勤めて何年になる」

「あん？」

「何年になるかと聞いておるんじゃ、答えんか！」

突然怒鳴られ、郎党達が思わずたじろいだ。そこに畳みかけるように団三郎は身を乗り出し、

皺枯れただみ声を張り上げる。

「五十年もここにお仕えしているこの婆を捕まえて、その言い草は何じゃ！ 嘆かわしい、最近のひよつこはそんなことも知らずにこの館を守っておるのか！ ええ!? なんとか言ってみるか！」

唾を飛ばして迫る老婆の剣幕に郎党達がうろたえる。

「こりや、どうした！ お主ら、名は何と言う！ 申せ！ 宗盛様をお願いして叱つていただかねばならぬ！」

「わ、わかった、わかった、悪かった。呼びとめてすまなかつたな」

「ああん?! 悪かったで済むものか！ まったく最近の若い者は、年寄りへの敬意を知らん！ その態度は一体なんじゃ！ ええい、そこに直れ、婆が性根を叩き直してくれる！」

「ま、待て待て。謝る！ このとおりで！ 俺もこいつもまだ日が浅いゆえに無礼をした。この通りだ、詫びる。だからもう許してくれ！」

周囲の視線がちらちらと集まりはじめる中、彼等は居たたまれずにその場を逃げるように去ってゆく。団三郎はふんと鼻を鳴らし、どしどしと地面を踏み鳴らしながら、そのまま悠然と泉殿に続く門へと踏み入った。

「さて」

短くあたりを見回し、人目のないことを確認した団三郎、やおら腰を伸ばしたかと思うと、そのままトンと地面をけつて屋根の上に飛び乗る。瓦屋根の上に身を伏せて素早く移動し、屋根伝いに屋敷の奥へ奥へと侵入してゆく。

眼下に広がる六波羅の街並みを眺め、団三郎はふうむと顎をさすった。

「さすがにここらはいぶん厳重になっておるのう。それでも宮中とは雲泥の差じゃが」

貴族の屋敷ともなれば、その立地はただの地勢だけではなく、政治意図や血筋に基づいて細かく住居の区画を定められ、さらに風水、卜占、気脈や方位などを十分に吟味して建てられるのが常である。そうした屋敷は自ずから堅固な結界となり、侵入者を拒むものとなるはずなのだ、ここ六波羅にはそうした備えがあまり見られない。

平家の権勢はここ数十年で急速で拡大したものであり、それゆえに盤石の守りを固めるみやこには相応しくない乱れが目立つ。先程の巡回の郎党達の様子からも、人材の不足が目立っているのは明らかだろう。

泉殿に近づくにつれ、あたりには郎党の数が増していた。どうやら今日は惣領宗盛の元に多くの来客があるらしく、彼等の供をしてきた者たちが控えているらしい。殿のまわりでは忙しくなく家人が宴の準備に走り回っていた。彼等に細かい指示を出し、あれこれと指図しているのは大柄な初老の男。大きな赤い鼻がいやでも目につく醜男である。

彼こそ団三郎がみやこでしのぎを削る商売敵、いまや押しも押されもせぬ平家の御用商人、朱鼻伴朴であった。

「あの赤鼻めもすつかり大臣気取りじゃなあ。……おうおう、威張り散らして、みつともないのう」

どうやら、平家の増上慢はそれに関わる者たちにも伝播するらしい。一瞥で朱鼻への興味を失い、団三郎はさらに屋根を進んで、泉殿の西の廂に取りついた。ぴたりと身を潜め、静かに気配を殺して様子をうかがう。

すぐ下の庭ではまさに椿を囲んで宴の最中であつた。集まっているのは平家の重臣たちであり、清盛の息子や孫たちの姿も多い。皆、福原には向かわずみやこに残つた者たちであり、その中には宗盛の姿も見ることができた。

（昼間からずいぶんと豪勢なことじゃな）

既に大分、酒も回っていると見え、宗盛らの顔は紅い。いつから飲み始めているのだろうか
と呆れる団三郎である。

「やあ愉快、愉快。先の乱でみやこもずいぶんと風通しが良くなったものよ」

「これでお主も弟ともども公卿の仲間入りか。まったく良い世の中になったものだ」

「そういうお前も殿上人よ。鬱陶しい検非違使に悩まされることもなくなった。まさにこの世

の栄華、平家の御世であるな」

宴の参加者には先の政変で主要な地位についた者たちが多く含まれているらしかった。その話題はまったく聞くに堪えぬもので、誰某が媚び諂って賄賂を送ってきたのだの、官位を追い抜いたので気に入らなかつた公卿を呼び出し、あらぬ咎で怒鳴りつけてやつただの、どこぞの男と恋仲であつた娘を力づくで奪つてやつただの、所領から水増しして税を分捕つてやつただのと、醜惡なものばかりである。

これが今のみやこを治める者たちかと、団三郎は憤りを抑えられなかつた。

(己に逆らうものはここに入れぬ、か。拙いやり方じゃな)

清盛であれば、好悪で付き合ひを決めるこのような無様な真似はしなかつただらう。反発を許さぬ宗盛のやり方は、平家全盛の世の中にあつては間違ひとは言えぬだろうが、清盛入道の後継者としては器の小ささを露呈していると言える。

(まあ良い、今は用事が先じや。……しかし、この有様ではちと話にならんか)

宴に同席している者たちは皆ことごとく酒が回っており、まともなやり取りなどできそうにない。誰かを捕まえて話を聞こうにも、一人になる気配もついぞ見えぬのだつた。

幸いにして宴はまだ終わる様子を見せぬ。手薄なうちに邸内に侵入して様子を見ると、団三郎が考え始めたときであつた。

にぎわう宴の中でぐいと盃を煽った宗盛、白く塗りたてた顔を赤くして、声を張り上げる。

「さて、さて皆、実に今日は楽しい、みな愉快にやっておるな」

平家惣領の言葉に、居合わせた者たちは一斉に答える。未来永劫続く平家の繁栄を祝って、朱塗りの盃が掲げられた。その歓声にたいそう気を良くしたらしき宗盛、扇を広げて庭の隅を指し招く。

「そうかそうか。……まったく今日はめでたき日よ。どれ、それではこの宗盛より、お主たちにひとつ面白いもの披露すてやるとするか。……これ」

宗盛はパチンと扇を鳴らし、侍従を呼び付けて何事かを囁いた。ぱつと駆けだす侍従を見やり、庭の宴席に向き直る。

「さて皆、世に知られた名馬は多くあれど、その中の一番はいかなるものか、知っておるものは居るかの」

「ふむ……？ これは、宗盛様は面白い事を申される。これはなにかお考えがありそうじゃな」

「頑強、山地をも駆けると名に聞こえるならば木曾駒、甲斐の黒駒。あるいは坂東の千葉や上総が広大な土地に多くの馬を抱えておると聞くが」

「然り、田舎の馬はどうにも扱いにくいものだが、さりとてこればかりは畿内の馬ではどうもうまく行かぬな」

この時代、良い馬を確保することはそのまま戦力に繋がる。みやこを舞台にした幾度もの乱で武力が当地に直結することが証明された今、彼等は各地にある名馬を集め、その勢力拡充の手段としていた。栄華は極めようとやはり軍事貴族の一門。生まれながら学に欠け歌や漢詩は好まぬ者も、馬の話となれば興味を持つのは当然なのである。

「さて、名馬となれば上総の磨墨すずみ、下総神馬の生食いけつき、幾多がありましようが、その中の一番というのは、我等にはとんと見当がつかませぬな。宗盛卿のもとには、清盛入道より賜ったという白茸毛なんりようの煖延なんえん、あるいは遠山なる名馬が居られたはずでありますか……？」

「ほほほ。そのようなものではないぞ。なに、つい先日のことであるがの、とある伝手より良い馬を得たのじゃ。それを皆に披露してやろう」

「ほう……これはなんと、面白い」

ざわつく一堂の様子に満足したのか、宗盛はにんまりと口を捻めた。侍従の目配せに準備が整ったことを確かめ、扇をさしまねく。

「では皆、あちらを見るが良い。あれぞかの鶴退治の武勇を誇る、摂津源氏の長老三位入道頼政殿より拝領した名馬『仲綱』である」

「……なんと？」

「聞き間違いか、今たしか——」

ざわざわと場が乱れる。仲綱とは摂津源氏の現棟梁、頼政の息子の名前である。耳を疑うのも仕方ないことだろう。

だがその騒ぎは、次の瞬間にさらに大きくなった。

縄を引かれ、奥の厩舎から惹き擦り出されてきたのは——素裸に剥かれた、一人の娘であったのである。

「……………ッ」

くせのある黒髪、まだ十を少し過ぎたばかりの幼い娘であつた。できるだけ気丈に振る舞おうとはしているものの、娘の表情は隠しきれぬ恥辱に歪み、視線は下を向いていた。

一切の衣を身に纏うことを許されず、肋の浮いた白い肌が陽の光の元に引きずり出される。周囲の視線が一斉に集まる中、娘は懸命に己の身体を隠そうとしていたが、いくら小さな身体とて、細い手足で隠しきれるものではない。

「なにをしておる、馬が二足で歩くか！」

馬番より猛烈な勢いで鞭が振るわれた。激しく背中を打たれて地面に突つ伏した娘は、そのまま首の縄を引かれて四つ這いとなつて歩くことを強要される。ぐ、と呻く声が地に塗れた。四つ這いとさせられた娘の腰裏は痛々しいほどに赤く腫れ上がっている。そこには『仲綱』と、馬の名前とその所有を示す焼印が押されているのだ。

「皆、いかがか。これなるが名馬『仲綱』である」

「ほほう……これは」

嗜虐に白面を歪め、ほほと笑う宗盛が、愉快そうに扇を鳴らす。

驚きの表情を見せていた一同も、これがいかなる趣向であるかを理解したようだった。

（……………、なんじゃ、これは）

團三郎は絶句していた。

これが、人のすることか。ぎりど噛み締めた歯が軋り、知らず握りしめた拳に力がこもる。爪が掌に突き刺さって血をにじませるが、彼女はその痛みすら感じられぬほどだった。

六波羅は敵の、平家の本拠だ。けして、ぬえが良い扱いをされているとは思えていなかった。

しかしこれは、これでは、あまりにも酷すぎる。

地面を引きずられる娘を見て、宴はさらに醜悪な盛り上がりを見せ始めていた。鞭を振るわ

れ、首の縄を引きずられてなお、ぬえは気丈にも視線に力を保ち、反抗的な目を宗盛に向ける。

それをまた不敬だと鞭を振るわれ、みるみるうちに娘の背中赤く腫れ上がっていく。

ぬえは従者に追われながら、庭じゅうを引き回されてゆく。瘦せて肋の浮いた身体が、骨ばった手足に太腿が、わずかに色づいた胸の先や、産毛も生えぬ脚の付け根までが、男達の下卑た視線に晒される。

泥に汚れ、傷だらけであっても、娘の白い素肌に走った赤い傷痕が艶めかしくうごめき、また屈辱に歪む気の強そうな面立ちがきつと睨みかえす様は、実に男たちの嗜虐心をそそのめてあつた。

「この通り、この『仲綱』、実に気性の荒い馬での。扱いにはたいそう苦労しておるよ」

「ふうむ。なんとも貧相な身体じゃのう」

「然り、これが源三位どのの自慢とは、かの武門の凋落はあきらか、なんともまあ哀れなことだな」

「さて……どうであろうか。清盛様も信頼されておるようだが、なにしろあの老骨は腐つても源氏。不屈きなことを考えていたとしてもおかしくない。名馬とは名ばかり、愚にもつかぬ駄馬を送つて我らを謀つたとは思えぬか？」

口々に身勝手な言葉を向け合う男達に、宗盛はほほと声を上げて笑い、

「なるほどなるほど、名に聞こえる名馬とて確かに評判で決まるものではないの。実際に確かめてみねば納得いかぬというのは道理であるな。どれ、これなる名馬『仲綱』をもつて、誰ぞ一駆けしてみる者は居るか？」

白面を歪めての宗盛の言葉に、どっと一堂が湧く。

(……………！)

ざわりと団三郎の背中が逆立つた。激情のまま飛び出して行こうとする己の短慮を、すんでのところまで自制して、団三郎は懸命に冷静を保とうとする。

そうしているうちに、宴席の中から声を上げる者がいた。

「その役目、この早池峰の豪太がつかまつります！」

「おう、良い良い。宗盛が赦すぞ。存分に駆けさせてみよ。この『仲綱』、かの源三位入道どのが我が子のように大事にしておる自慢の名馬であるそうだから。見てくれはこのように貧相であろうと、さぞ素晴らしき脚で風のように戦場を駆けるのであるうよ」

宗盛が扇をもつて差し招く。彼を取り巻く郎党達が厭らしく笑った。

一番に名乗り出たの豪太という郎党は、背の丈六尺半はあろうかという巨軀の男であつた。ただ大きいだけでなく、腹は岩のように突き出し、小柄なぬえを片腕で抱えあげてしまえそうな太い腕と脚をしている。馬具を身につけ無遠慮に近づく豪太に、ぬえの顔は蒼白になつていた。

「どれ、乗り心地を試させていたどうか」

「豪太、宗盛卿がお赦しじや、体面など気にして加減などするでないぞ！」

「そうじや、それでは前の持ち主の源三位入道どのにもかえつて失礼と言うもの、存分に一駆けしてみせよ！」

「心得た」

豪太が力強く頷くと、さらに喝采があがる。げらげらと響く下品な笑い声には、娘をなじるように囁し立てる声も交じっていた。

太い手を伸ばして迫る男に、ぬえが思わず後ずさりそうになる。しかしそこに飛ぶ鋭い鞭が、娘の身体を地面へとねじ伏せた。荒縄と革の鞭は娘の白い肌を引き裂き、既になんども鞭をあてられた下腿はどす黒く腫れ、血塗れである。

「この愚図め、大人しくしろい！」

「っ……」

ぬえの首にかけられた荒縄を引きずり、馬番が無理矢理に彼女の身体を押さえ付ける。その背中に郎党は加減なく腰を下ろした。馬具を付けた踵で、ぬえの脇腹を容赦なく蹴りつける。

「あぐっ」

腹を押さえぬえが呻く。それでも彼女は懸命に、四足となつて身体を保とうとした。男一人の体重を支えるにはあまりにも頼りない細腕が震え、膝はみるみる血まみれとなる。

「どれ、駆けよ『仲綱』！」

肩を震わせ耐える彼女の腹へ、再度激しくかかどが打ち込まれた。肋を思い切り蹴り上げられ、ぬえはそのまま地面に反吐をまき散らした。

それでもぬえは懸命に進もうとするが、小さな身体で自分の倍以上あるような巨漢を支えるようなことができるはずもない。必死に地面を擦る掌と膝は、たちまち皮がめくれ血が溢れてゆく。

「どうした、ほれ！ 駆けよ！ 駆けて見せよ、『仲綱』！」

「豪太。どうした？ ちいとも動かぬではないか」

「……ふうむ、これはやはり、大した馬ではないと見えるのう」

「おうい豪太よ、おぬしまさか手を抜いておるのではあるまいな。それともお主では女に乗るようにはいかぬか？」

「あつはは、違ふ違ふ。この馬が強情なのよ。どうにもまだ己が宗盛さまのものであることを分かつて居らぬ。ゆえに生意気にも逆らうのだ。ほれ『仲綱』どうした、宗盛様の御前ぞ。ご命令に従つて駆けて見せよ『仲綱』よ。それとも、動けぬというのか？ 逆らうつもりであるか、『仲綱』よ！」

罵られ、鞭と脚に殴打されながら、ぬえは懸命に歯を食いしばつて動こうとする。しかし背に大の男ひとりを乗せて華奢な身体が支え切れるはずもない。腕は震え、ばしりと頬を叩かれた衝撃で投げ出された身体は地を擦り、無惨に地面を引きずる膝は擦り切れてゆく。

突つ伏した後ろ髪を掴まれ、無理やりに持ちあげられた顔に、容赦なく平手が飛ぶ。頬と目

の端が切れ、少女の顔を鮮血が伝う。

(何故じや)

団三郎は、唇を噛み締めて必死に耐えていた。とうに辛抱の限界は超えている。しかし、彼女があえて割って入るのを自制しているのは、ぬえが一切の反抗を見せぬからだ。宗盛から醜惡な辱めを受けてなお、従順なままにいる彼女が、あまりにも不可解だったのだ。

(何故じや、ぬえ……！ なぜ、何もせぬ！)

団三郎とて女だ。このようなおぞましい振る舞い、赦しておけるはずがない。この場の者たち全員をくびり殺してなお足りるはずもなかった。だというのに、ぬえは諸々と男達の成すがままにされているのである。

「強情な。動け、ほれ、どうした、駆けてみんか『仲綱』！ ええい、なんたることだ、この愚図め、まったくどうしようもない間抜けだな『仲綱』、貴様は！」

興に乗って罵声の調子を上げる豪太に、郎党、近臣達は腹を抱えて笑い転げる。小さな身体に跨って、仲綱、仲綱、と呼び付けてその尻を叩き、腹を蹴飛ばし、顔を殴り付け、必死に命令に応えようとするぬえを弄ぶ。

宗盛は一段上からそれを眺め、白面を喜悦に歪めていた。権力と、欲情と、さまざまな容貌の混じり合った醜惡な笑みだ。

「ふむ、古今の名馬と聞いていたが、……摂津源氏の自慢というのも案外噂倒れであつたな」
「なあに、いかな名門とてたまには調子の悪いこともありましよう。しかしこの様子では重大時にも役に立つとは思えませぬが」

「まったく、口ばかり達者で困りますのう」

「ほれ、どうした『仲綱』、この愚図め、まったく仕様の無い奴だ、駆けよ！ それでは亀よりも遅いぞ！ ほれ、進め、進まんか！」

「これは駄目ですな宗盛様、こいつはまったく、言う事を聞きませぬ」

「ほほほ、仲綱は仕様の無い駄馬じゃな。どれ、皆で躰けてやるがいいぞ。……誰ぞ、次に仲綱を走らせてみるものは居るか？」

次々に手が挙がる。もはや見て居れず、団三郎はきつく目を閉じ、耳を塞ぐしかできなかった。



長い凌辱が終わり、ぬえが引きずられていった場所は、古びた厩舎の片隅であつた。六波羅には新たに増築された厩舎があるため、手狭なここには病の馬や役に立たぬ老いばれを繋いで

おくための場所として使われており、ぬえはそこに裸のまま放り込まれていたのだ。

無論、人として過ごすための備えなど何もない。古びた板は外れ、隙間風も酷く、放ったらかされた水桶には蟲も沸いている。

宴席でさんざん弄ばれたぬえを厩舎に放り込み、馬番たちはすぐ外で酒盛りを始めていた。宴席のおこぼれに預かつて、彼等も上機嫌で顔を赤くし、酒臭い息をまき散らす。

ぬえの姿は、目を背けたくなるような酷い有様だった。

背は鋭い鞭を何度も当てられて皮がめくれ、生々しい肉を覗かせている。四足でいることを強いられ続け、泥に塗れて手足は傷つき、どす黒く腫れ上がって骨が見えているほどだ。腰裏の焼印は焼け爛れて皮膚には膿があふれ、かろうじて『仲綱』の文字を保っているばかり。

いかに出自の知れぬ娘とは言え、源三位から預かった少女を、牛馬のごとく厩に繋ぐという非道があらうか。馬の蹄や、棒で打たれたのであらう醜い痣が、ぬえの身体の至る部位に残っていた。

散々蹴り飛ばされた肋や二の腕の骨も、何本も折れていることだろう。眼は半分潰れ、張られた頬は毬のように晴れ、口も満足に開かぬ始末。うつ伏せになってか細い息を漏らし、時折背を丸めて咳き込んで血を吐く姿は、もはや見ておれぬ凄惨なものである。

人でないからこそ、辛うじて命を繋いでいると言っている。

だからこそ、団三郎には彼女の姿が理解できなかった。厩舎に忍び寄った彼女は、近くで酒を煽る馬番たちの様子をうかがう。

既に泥酔した様子も見える男達の増長はなお深く、平家の権勢を笠に着て、さらなるおぞましいものへと変貌していた。

「おう、あの娘をか？」

「そうよ。どうせ退屈しのぎだ。一度試してみたいと思つておつた」

「つくつくく、んだよ、またくだらねえ事思いついたのかよ、おめえはよお」

「どうだ、賭けぬか」

「何をだ」

ちらと厩舎の方に視線を向け、顔を寄せ合う男達。

その言葉は、下卑た欲望に塗れてあまりにも醜悪なものだった。

「女子の胎に、馬の一物が入るのかどうかだ。どうせこんな機会でもなければ試せぬだろう」
「つくつくく、馬の？ 馬か、そりやあ傑作だ！ そりやおめえよお、出来ねえに決まつてんだろ！ よしッ、乗つた！ 出来ねえに賭ける！」

「おい、良いのか、勝手にそのような事」

「宗盛様は好きにして良いと仰せだぞ。生きておればよからう。案外しぶとい娘だ、あれだけ

痛めつけられてまだ息がある。平気だろうさ。……そうだな、馬場入道どのより賜った名馬に種を付け、仔馬を産ませてお役に立てる心算だったとでも言えば理屈は付くさ」

酒の勢いもあつてか、目を濁らせた男達の言動には歯止めがきかない。

「馬の魔羅をか。馬鹿馬鹿しい。いくらなんでもあんな幼い娘だぞ。無理に突つ込めば、股が裂けてしまうだろうが」

「わからんぞ、女子というのは子を産むのだぞ？ 馬の一物はでかいが精々腕ぐらいだろう。あれぐらい、どうにかすれば入るのではないかな」

「つくく、お前の粗末なものと一緒にしちゃいけねえだろよ！」

げらげらと声上がる。罵声と共に酒臭い息。

「しかしなあ、まだ餓鬼だろう。あの肋だらけの身体、稚児と変わらんぞ？」

「いやあ分からんぞ。なにしろかの頼政卿のお気に入りであるらしいからのう。存外と、とうに男を知っておるのではないか」

「つは、そりやあお前、あれだ。老いぼれのしなびた一物なら丁度具合がいいってこつたろう」

「そりや違いないな」

どつと湧く場の中で、下卑た笑いを浮かべながら、馬番の一人が立ち上がる。濁った眼はとうに正気ではないと知れた。

「おい、本当にやるのか」

「当たり前だ。煩いことを言われる前に済ませればいい。ことによったら、本当に子を孕むかもしれない」

「産まれてくるのは馬の子か、人の子か？ どちらにせよ、源三位に送り返してやればどうだ。きつと良い後継ぎができたと喜ぶであろうよ！」

「……下衆めが」

もはや辛抱の限界であった。頼政との約束をかなぐり捨て、団三郎はその場に飛び出す。装っていた下女の姿は止め、元の姿へと戻って走る彼女に、馬番たちは反応できなかった。

団三郎はぎり握りしめた拳を押さえ、懷から榆の葉を出して男達の前に吹き付ける。

びゅおうと吹き付けられた葉は男達の身体を飲み込んでゆく。顔を、耳を、鼻を、息吹に塞がれ——馬番たちは一人残らず、意識を失ってばたばたと倒れ伏した。

「……………」

無言でじつとそれを見降ろし、団三郎は陰も露わに力を込めた爪を男の首へと押し付けた。そのまま逡巡をしばし。かろうじてそれ以上は自制し、侮蔑と共に一人の胸倉を蹴りつけて、団三郎は厩の奥へと走った。

「ぬえ、おい、ぬえ、起きんか！」

声を絞つて、ぬえを抱き起しその頬をはたく。

見るも無残な身体は、正視出来ぬほどに痛めつけられていた。人ならぬ妖怪の身とは言え、あれだけ身体を傷めつけられて無事な訳がない。ましてぬえは、ほんのしばらく前までただの娘だったのだ。

「ぬえ……！」

「……ん」

細く目を開け、何度もむせるように咳き込んだ。吐き出した痰にはひどく血が混じっており、片目はまっすぐ前を見れないほどに腫れあがっている。

「誰、……？」

「しっかりとしろ、団三郎じゃ！ 頼政どのから頼まれて来た」

頼政の名を出した途端、ぬえの視界が焦点を結ぶ。

「……あいつ、の？」

口の中を相当切っているのだろう、たどたどしく言葉を紡ぐぬえを抱え起こし、団三郎はぬえの耳に顔を近づけて囁いた。

「そうじゃ。お主の様子を見て来いと言われてな。手を出さぬと約束してきたが、この有様、とてもではないが看過出来ん。さ、ゆくぞぬえ。これ以上この場にはならん」

「駄目」

ぬえを抱きかかえ、立ち上がろうとする団三郎。しかし——かすかに、けれどはつきりと、ぬえは団三郎の手を拒絶した。彼女の手を振り払おうと、弱々しくぬえの手が持ちあがる。

「——頼政たちには、言わないで」

「何故じゃ！」

とうとう声を荒げ、団三郎はぬえに顔を近づけた。どうしてここまで、ぬえは抵抗を拒否するのか。その気になりさえすれば、逃げ出すことなど容易いはずなのに。何故こんなになるまで、平家の連中に虐げられることを受け入れるのか。団三郎には理解できない。

「いいから、はやく……にげて。見つかる……」

「そのような心配、されずとも心得ておるわ！ 儂がここの連中相手に不覚などとするものか！」

「平気。……これくらい、なんてこと、ないからさ」

ぬえは笑顔を作ろうとして咳き込み、健気に頷いた。口元から溢れた血が団三郎の胸を汚す。「わたしが逃げたら、頼政が疑われるだろ。……あいつ、いま、すごく大事なことをしてる最中なんだろ。……わたしが戻ったら、ぜったい、迷惑になる」

「迷惑など！ そんなもん、好きにさせてしまえ！ なにを世迷言を——」

「いいんだ。……わたしは、人間じゃないから」

げほりと粘つく咳をして、ぬえは哀しく笑った。

団三郎は気付く。ぬえがこうしているのは頼政のためだ。摂津源氏の長老を守るために、無力な人間の娘を演じているのだ。

「何故じゃ」

血を吐く思いで団三郎は問う。

「——おぬしは、なぜそうも諸々と、されるがままにしておる。たかだか人間風情に！」

彼女を知るものならば驚く叫びであった。あるいは、団三郎の矜持がそうさせたやも知れぬ。

ぬえとてみやこを騒がせた大妖怪だ。まだ年若く、妖怪としての立ち振る舞いこそ幼いものは残るだろうが、元は人である。事によれば団三郎よりもよほど、人の世で上手く立ち回る智慧もすべも持っているはずであった。

それがどうだ。この有様は、この惨めな姿は。帝すら脅かしたはずのぬえが、ただのか弱い娘のように、男どもの慰みものにされ、凌辱をあるがまま受け入れていることが、団三郎には信じられない。

「わたしは、これくらい、平気だから」

ごほりと、血の混じった痰を吐いて、娘は乾いた唇を震わせた。頬に張り付いた髪を払ってやろうと指を伸ばした団三郎は、その下に隠れた彼女のもう半分の顔を凝視し息を飲んだ。声

を押さえ、震える指先でそつと手を戻す。

「わたしは人じゃない。……これくらいじゃ、死なないからさ」

「限度というものがあろう！」

妖怪にとつて、人に化けることは己の力や格を誇示するものであると同時に、己が妖怪である事を忘れてしまいかねない諸刃の刃である。まるで人のように諸々と従つていては、いかなる強力な妖怪とても心が屈し、無尽蔵の命も頑強な身体も、無双の怪力も、始めからなかったかのように損なわれるものだ。

「今のおぬしなら、その気になればいくらでもできるじやろう！ あの下衆どもを残らず縊り殺してやることも！ 恐怖に狂わせ心を砕くことも！ 首を落とし、四肢を噛み千切り、腸を食い破つてやることも！ それなのに何故、なぜ、このようなおぞましい恥辱に塗れるをよしとする！」

ぎりり、鼻に皺を寄せ、剥き出しにした牙を軋らせて、団三郎はきつく爪を立てた。土壁にがりがりと食い込む左右の手に痛みを覚えながら、

「……お主には、他者をたばかることなど、容易かろう」

「くく……っ。無茶言うなよ。……わたしの正体不明の力は、都合良く、見せたいものを魅せられる力じゃない。自分が誰なのかを、分からなくするだけなんだ」

みやこを脅かした妖怪——鵺。その根源は、恐怖と怪異と、得体の知れぬ暗闇への畏れだ。頭は猿、手足は虎、体は猪、尾は蛇。不可解と、恐怖を継ぎ合わされて産まれたいびつな怪物。

そんなもののヨリシロにされた娘は、悲しき鳴き声と共に叫んだのだ。

——この身は、何ぞ。

頭は猿、手足は虎、尾は蛇、身体は猪。

見たものを恐れさせる力は、それゆえにぬえ自身にも制御できない。だから彼女はただ耐えたのだ。真実自分がそうであつたかのように。木ノ下という人間の娘として。

「それにね」

団三郎の腕に抱えられ、噓せながらぬえは答えた。半分だけのまともな顔で、なんということはないかのように、笑みを作つて。

「わたしが人でないことに気づかれたら、頼政が困るんだ」

平氏全盛の京にあつてなお知られる摂津源氏の棟梁、源三位頼政の名は、元をただせば八幡太郎義家の故事に倣い、宮中を騒がした鵺を射殺した事実の上に成り立っている。その彼が、

あろうことか仕留めたはずの鶴を手元に匿っていたとしたら？ 源氏の棟梁として、これ以上ないほどの醜聞である。頼政の名は地に落ち、長年にわたって築き上げた歌人としての信用すら失うことであろう。

それどころか、ばけものを使って帝を脅かす謀をめぐらせ、翻意すらあったと捉えられかねない。ぬえはそれを危惧していたのだ。

「だから、わたしは戻らない。……ここに、残るよ」

咳の中、静かにそう告げて、ぬえは団三郎の手を押しつけた。

「助けに来てくれてありがとう。でも、わたしは、平氣だから。あんな連中どうだっていいし、そのうちすぐに飽きるさ。だから、放っておいて。」

頼政の奴には、上手くやってるって、伝えて」

ひゅうと細い喉に息を吸い込み、ぬえはもう一度、団三郎の手をとって押しやった。

「——わたしは、へいき。」

だから……わたしのことなんか気にせずに、あいつは、あいつの好きなようにすればいいんだ。ただ……無茶はするな。それだけで、いいから」

団三郎がもう一度口を開きかけたところで——ちりりと小さく鈴の音が鳴る。見張りの術が仕掛けられていたらしい。一定以上の時間が過ぎると報告をする仕組みなのだろう。

（ちい、儂としたことが……！）

すっかり頭に血を登らせ、稚拙な毘すら見落としていた事に、団三郎は齒嚙みする。

「早く、行つて。……見張りが来る。いまの平家には陰陽寮の連中だつて言いなりなんだ。……

……あんたのことだつて、気付かれるよ。……早く！」

見る間にどかどかと足音が近づいてくる。数は多い。

ぬえの叫びに背中を押され、団三郎は身を低くして駆けだした。庭へ飛び出した直後、眼を覚ましていた馬番の一人が呻いて身を起こし、団三郎を見て居たぞここだと大声を上げた。たちまち、六波羅に武装した郎党達が溢れかえる。

みるみるうちに数十を超える郎党達に取り囲まれ、団三郎は逃げ場を失つていた。

「……く……ッ」

あつという間に窮地だ。己の不甲斐なさを噛み締め、せめて少しでも蹴散らそうと懷に手を入れる団三郎だが――押し寄せてきた郎党達は、団三郎を見て眼を見開いた。

「な、なんだ貴様!? 止まれ! そこに直れ!」

「ばけもの……くそ、ばけものだ!」

彼等の驚きぶりに一瞬戸惑った団三郎だが、黙つて隙を見逃す理屈はない。すぐにその動揺をついて包囲網を突破する。

同時、するりと自分の腕から正体不明の種が抜け落ちたのを感じて団三郎は悟る。

ぬえが、自分を逃がそうとしたのだと。

「くそ……くそ、こんな……ッ」

思わず悪罵が口をついた。大口をたたいて助けに来ておいて、当のぬえに助けられおめおめと逃げ帰るなど——不甲斐なさが、憤りが、溶岩のように団三郎の全身を駆け巡った。

「止まれ！ おい、止まれ、止まらぬか！」

六波羅の中を走る団三郎を見咎めて、誰何の声と共に押し寄せた男達が行く手を塞ぐ。彼等の懐へと飛び込んだ団三郎は、その顔に榆の葉息吹を吹き付けて隙を作ると、男達を得物ごと跳ね飛ばして、地面に叩き伏せ、なお矢のように走った。

追いつがる者達を力任せに殴り倒し、投げ飛ばし、叩き伏せて、ひたすらに走る。

「——どかんか！」

六波羅の門を、警備を固める衛士ごと弾き飛ばし。駆けつけてきた騎馬武者を五条大橋から鴨川に叩きこんで。

団三郎は、ひたすらに奔った。己のうちの悔恨と共に。

十三 頼政決起

六波羅でのぬえの様子について報告を受けた頼政は、それからひとり近衛河原の居室に閉じこもった。戸を閉ざし、けして誰も入れるなど言い残して、一切の接触を断った。

ちやうどこれに前後して九条兼実より歌合に招かれていたのだが、それを急病と断つてのことである。既に高齢の頼政が病を理由に公の場に顔を出さぬことは決して不自然ではなかったものの、兼実は何か感じるものがあつたのだろうか。後にこの日の違和感を日記に書き残している。

頼政は一人、深い懊悩の中にあつた。

ぬえを見捨てるなどではせぬが、彼女を救いだしたとて、それは平家への明確な反逆である。本気になって動く六波羅の前に、命を賭したとて彼女を守り抜くことはできないのは明白であつた。

ぬえも、それが分かっていたからこそ平家の元へ己を差し出したのだ。

（俺一人の命で済むならいくらでも賭してみせよう。今すぐ六波羅へ駆け込み平家の奴原と合

戦してでもぬえを救いだしてみせる。……が、それで息子たちは、渡辺党はどうなる)

源氏にあつて初の三位まで辿り着いた頼政が暴挙に出れば、仲綱も他の息子たちにも害が及ぶ。摂津源氏の名は地に落ち、平家の力の前に一族郎党残さず粉砕されるであろう。

皮肉なものだ。一門のためと得た武名が、頼政の行動を呪縛していた。

もはや老いらくの身だ、もとより死など恐れはしない。だが、だからこそ——父祖より受け継ぎ、子に託す源氏の嫡流を、己が潰えさせてしまう事への恐怖が、頼政を強く苛んでいた。(ぬえを助けてやりたい——だがそんな、自分の撒いた種の始末に、俺の我がままの為に、子供たちに死ねと命じるのか。……は、良い面の皮だ。なんのための源氏だ。なんのための武名だ。これが、人の親の考えることか)

己を突き放すように自嘲してみせても、それでもなお、頼政の苦悩は晴れぬ。こうしている間にも、六波羅でぬえは死にも勝る恥辱に苛まれているというのに。

頼政の自問自答は三日三晩続いた。

そして四日目の朝。絶えることのなかった居室の灯りが消え、頼政はついに黙考より目を開いた。

衣を変えゆるりと立ち上がった彼だが、一睡もしておらぬというのに憔悴した様子もなく、確かな歩みを保っていた。

食事をとらずにいたため幾分やつれてこそいたが、老いてなお鋭い相貌には秘めたる決意が宿り、白髪となつて豊かな髪は力強く結わえられていた。皺の浮いた手はなお意気に満ち、背はまっすぐに伸び、足取りはわずかも揺らぐことはない。この激動の時代を生き抜いた武士の氣迫、まさにこれありとばかりの威風である。

「父上、お待ちしておりました」

戸を開けた頼政に声がかかる。居室の外には、既に仲綱を始め、頼兼、兼綱、政綱、仲家そして宗綱ら、みやこに住む息子達の姿が揃つていた。

「お前たち」

頼政を囲むように並んだ彼等はみな、一樣に真剣な表情である。摂津源氏一門を率いる長の決意を既に悟っているのだろう。

息子たちの意志を理解し、頼政は深々と息を吐いた。

「……最後まで、苦勞をかけるな」

「父上が、深くお考えの上決断なされたことです。どこに反対する理由などありませんか」
皆を代表するように、仲綱はそう言つて居住まいを正し、父に向かつて進み出た。深く頭を垂れ、おごそかに告げる。

「摂津源氏嫡流、源仲綱。以下頼兼、兼綱、政綱、仲家。そしてその子ら。……源氏一門、渡

辺党を率いて源三位入道頼政殿に御助力いたします」

「すまぬ」

頼政は眼頭の熱いものを堪え、声を震わせた。結局、自分の我がままに一門を巻き込んでしまった。己は臆病ものにすらなれなかったのだ——そんな後悔が頼政の胸を焦がす。しかし、

「なにを仰るか、親父殿！」

豪快に胸を叩いて答えるのは兼綱である。かれは並ぶ政綱、仲家らと顔を見合わせ、力強く頷いた。

「木ノ下は俺達と同じです。身寄りを失い、親父殿に拾われてこの近衛屋敷にて、兄者達と共に育った。伊豆に、若狭に、同じ屋根の下で暮らした我らが妹、同じ源氏の一門であります！ その木ノ下の危機を救わずして、どうして清和より続く源氏の勇名を名乗れようものか！ なあ皆！」

「そうです、父上、我ら兄弟、皆同じ思いであります！」

寄る縁を亡くした源氏の遺児たちが、迫害のなか再び得た近衛河原の我が家を、それ導いた父を口々に誇る。彼らもまた人の親となり、こうして源氏の長老となった頼政の元に参じていた。

「そういうことです、父上。六波羅での平家の狼藉、聞き及んでおります。いかな平家の御大

将、宗盛卿の行いとても、このような辱めを受けて黙っているなど、それこそ源氏の——いや、源三位頼政の嫡男の名折れ。この上は、たとえ父上が止めようとも決起するつもりでした」

「——仲綱」

まったく、良く出来た息子であつた。自分のような日和見の半端者から生まれるには出来過ぎた子だ。胸にこみ上げる熱い思いが、頼政の視界をぼやけさせる。

（俺は、その物分かりの良さに付け込んで——……いや）

ゆるりと首を振り、頼政はしかと息子達を見つめ返す。
違ふ。そうではない。

懊悩の時は終わった。後悔も、苦悩も、迷いも。もう捨て置く時だ。息子たちの、皆の思いに、答えねばならぬ。

摂津源氏の長老として——一門を率いる辟邪の弓の頼政として。

「お主たちの心、有難く受け取った。今この時より摂津源氏渡辺党、一丸となつてこの窮地にあたる。敵は平家、いまや帝すら掌中におさめこの国を支配する難敵よ。相手にとって不足なし、みな死力を尽くして挑め。——良いな！」

「はいっ！」

重なる声と共に。

頼政はこの日、決起を決意した。



「そうか、そうか！ 叔父御であれば必ずや応えてくださると思っていた！ これで百人力、いやさ、万人力じゃ！ 共に宮のお力となり、この国に正道を取り戻そうではないか！」

報せを聞いて駆け付けた行家は破顔し、頼政の決意をひたすらに褒めそやした。その喜びよ
うを見るに、やはりこれまでの活動は目立った実を結んではいないらしい。元から期待しては
居なかつたことだが、やはり実情は想像以上に厳しいのだと実感する。

「そうとなつたらこうしては居れん。直ちに三条高倉にもお報せせねば」

やおら立ち上がった行家、そのまま取るものも取り合えず駆け出そうとする。興奮のせい
かはや符牒を使うことも忘れ、はつきりと王の居場所を口にしていた。頼政、慌ててそれを呼
び止め、いくつかの事をいい含めた。

「行家殿、待たれよ。まず、このことは可能な限り内密に。けして誰にも知られてはならぬ。

……可能であるならば宮にも伏せて頂きたいが——」

「何を言う、叔父御の協力こそ宮をお力づけるなよりの朗報じゃ。お報せせぬわけにはいか

ぬであらう」

「どこに平家の手の者が居るとも知れぬ。感づかれては折角の機会が無駄になる」

「ここは叔父御の屋敷の中じや、どこにそのような者——」

「敵を欺くにはまず味方と言うぞ。それに、俺は今すぐに宮の元に馳せ参じるつもりはない」

「なんと!?　いう事が違うではないか、叔父御!」

「……そう怒鳴るな、続きがある。良いかの行家殿、我らが宮に組していること、これまで俺は誰にも覺られぬようにしてきた。平家の者たちは俺達の恭順を疑わぬ。騒ぎさえしなければ、これまで通り宮中の警護や巡回に必要な事項を知らせてくるはずだ。それをもってすれば平家の動き、守りの手薄な場所、誰が指揮にでておるのかを逆に知ることできる。その利を自ら捨てるなど愚作の極みだ」

「む……」

兵法を持ちだされ、策略家の血が疼いたのか行家が眉を跳ねさせた。扱いやすい単純な男である。

「決起を決めたとして、今日明日いきなり平家の大将首を取らんと攻めのぼるわけではないだろう。無論俺達にも準備が必要となる。それまでは今までどおり、俺は平家の忠実な番犬、犬四位頼政を続けよう。その間に行家殿には決起に強調する者たちの調査と、宮への説得をして貰

わねばならぬ」

「おうとも、調べるのは良い。が、説得とはなんだ」

「御所を出ることをだ。いまの宮中は平家の傀儡だ。宮が三条高倉におありになつては、敵の懷にお守りするべき方を人質にされているも等しい。決起にあたつては御所を離れ、いずこかの守りに長けた地に移つてもらわねばならぬ」

「待て、待て。それはどだい無茶な話だぞ叔父御。宮は帝になるべきお方じゃ。そうであろう。それがみやこを離れ、背を向けて逃れるなど、己の正しさを捨てているようなもの。とてもできぬ事じゃ。それで道理が通るものであらうか？」

「では行家殿、お主が一人で攻め寄せる平家の赤旗五千騎より宮をお守りするか？」

皮肉でもつて行家の言葉を刺しとめ、頼政は彼に詰め寄つた。

「繰り返すが、今すぐにといいのではない。これも先程と同じことだ。決行の当日までに万難を排して準備を整えておかねばならぬ。平家の大軍を押しとどめるには生半かな守りでは足らぬ。どこかの寺社——行家殿のいうとおり、寺社が反平家の志を共にするというなら、園城寺、あるいは南都あたりの協力を頼むのが良いかもしれぬな」

「む、ム、ム……分かった。難しいが、試みよう」

寺社に協力を仰ぎ、大衆たちを反平家の軍勢として取り込むというのは行家の案だ。かれら

に言う事を聞かせ、指揮するには反乱の首謀者たる以仁王が自ら身を寄せることが、この決起に対していかに本心から偽りないかを示すことができる、もつとも容易く、有効な手段であるのかということがわかったのだろう。

行家は額に皺を寄せて顎をさする。考え込んだふりをしているが、実際は冷静に有利不利を見極め打算をしているところだろう。

「これがふたつ目。我等に係累の浅い場所であればある程この策の効果が薄いのはおわかりであるな、行家殿。是非、お主の働きを期待しているぞ」

「ふうム……なるほど、心得た」

神妙な顔をして頷いた行家を見送り、頼政は庭へ出た。

南の空を見上げて腕組みをし、思案を巡らせる。

「さて、どこまで通じるか……いずれにせよ、宮が御所をお出にならぬでは話にならぬな」

近衛河原は鴨川を挟んで平家の本拠六波羅の目と鼻の先である。以仁王は、平氏政権の中樞に深く食い込んだ摂津源氏と頼政を、平家の喉元に突き立てた刃であると考えていたのである。だが、いかにその切っ先が致命であろうとも、いま頼政の元にあるのは騎馬わずか五十と少しを数えるばかり。数千騎を超える兵力を常在させた平氏に対し、どれほどの影響を与えることができるのだろうか。

地方との連携がとれぬままでは、五条大橋の門を打って出た赤旗の軍勢に蹴散らされるばかりであろう。

だが、以仁王の考えは違うらしい。権勢を笠に着、帝すら我がものとする平家を堂々と糾弾し、みやこより追い払うことこそが正当なる皇統の後継者としての行いであり、それを貫くことで多くの賛同者が生まれると信じておいでのようであった。

「……本来ならば、あやつが一番にそれをお諫めせねばならぬのだ」

熊野の山に伏せ、山伏に化けて全国を行脚する行家であれば、全国の知行における平家の権勢を目の当たりとし、いまや平家の力がいかに盤石なものであるかは思い知っているはずなのだ。しかし彼にはそれがどうも実感できておらぬらしい。

行家には、腹心として一番重要な、現状を理解し他者に伝える力が欠けていた。なまじ頭が回るゆえに、世のものが全て自分の想像通りに行くことを信じて疑わぬ。故にこそ様々な策を用いて利を得ようとするのだ。

あるいはこれもまた、己が為義の正統を継いで河内源氏の後継たらんとする野望を夢見ているためであろうか。義朝の遺児たちはみな俗世より隔離され、河内源氏の正当は絶えたかのごとくである。行家はそれに代わらんと、身の丈に合わぬ大望を抱いているのかもしれない。

「寺社の協力というのもどこまで信のおける話でしょうか」

「……仲綱か」

「はい、今戻りました。有綱より使いがあり、伊豆の知行にある蔵地を開いて送らせるとのことです」

「そうか。……できることなら、あそこに蓄えた物資は、伊豆の佐殿に役立てて欲しかったが」

頼政は、常より儉約に努めて集めた物資を、伊豆の領地にある蔵に蓄えていた。表向きは飢饉に備え領民を守るためとしているが、いざという時の戦乱に備え、また息子や孫が暮らす伊豆の守りとするためである。父に代わり伊豆を守る有綱は、頼政決起の報せを聞いてその蔵の物資をみやこへ送りだしたのだ。

「^{つづく}続、^{たもつ}保などもこちらに向かっているとのこと。久しく皆が揃うと授も喜んでおりました」
「うむ」

珍しく穏やかな表情の仲綱。続も保も、昔から頼政に仕えている郎党達だ。仲綱も幼い頃から彼等に懐き、兄弟のように暮らしていた。彼等に会えると喜んでるのは息子も同じなのかもしれない。

皆が一意に心を揃え、長らく離れていた者達が集まろうとしている。まるで祭のようだと、頼政は場違いな事を考えていた。

（いや——そうなのかもしれんな。これは、俺達の祭りだ。いまのみやこに、再び源氏の徴の

白旗を掲げる為の)

そう考えると、自然と口元がほころぶ。予断を許さぬ厳しい状況は変わらぬというのに、だ。何の事はない。

頼政自身も、ずっと倦み飽きていたのだ。己を殺し、みやこの窮屈な階位としきたりの中に生きることに。

源氏の武者として、弓馬の道を心ざす者として。ただひとえに鍛えた己をもつて存分に戦う事を、頼政は心の奥底でずっとずっと望み続けていた。

絵巻にあるような英雄のように、奔放に生きることを願っていたのだ。

(ここまで老いさらばえて——因果なものだな、源氏の血というのは。死ぬ前に気付けただけ良しとするか)

五十年にも渡って燻っていた情熱の炎が、胸の内で再び焰となってふつつと燃え上がるのを感じながら、頼政は笑みをこぼす。

「父上？」

「いや、なんでもない、気にするな。……それより、叡山の様子はどうなっている」

「依然として不明瞭なままです。確かに平家を疎んじる声はあるのですが、とても北嶺は一枚岩とは思えぬ様子。一部がこちらに呼応して動いてくれれば御の字といったところでしょうか」

「いまの天台座主は清盛の受戒をした明雲だ。鹿ヶ谷の一件で叡山と院との関係が決裂した以上、清盛は延暦寺の調略を進めていると見てまず間違いないだろうな。南都の寺もみやこまで駆け付けるには時間がかかりすぎる。やはり、頼みにできるのは園城寺か」

園城寺は頼政の娘が寄進をするなど摂津源氏とも関係の深い寺であり、そこでの籠城であればいくらかの分が生まれると、頼政は考えていた。

だが、それでも万全とは程遠い。

「かりに、二百や三百の援軍を得たとして、どこまで役に立ちましょうか。今の平家は寺社に弓引くことに躊躇いなど覚えませぬ」

「同感だ」

なにしろ一門の当主清盛からして、強訴に持ち出した神輿に白矢を引いて打ちつけた逸話をもつ、神をも畏れぬ度量の持ち主である。その後も彼は自身が神罰にもあたらずびんぴんしていることを引き合いに出して、強訴に使われる神などにせもの、形だけと言つてのけた。

「小松殿が御存命であれば、いまま少し違つた方策もとれたことと思います」

「言うな。……惜しい命であつた」

仏門に篤く帰依し、温和で知られる小松殿、平重盛が没したのは昨年のことだ。晩年の彼は父清盛入道との方針の違いから心身ともに疲れ果て、官位を返上し職を辞していた。この国を

治めてなお一段高い視野から、海の向こうの大陸を見据えてさらなる栄華を求めた清盛と、天下を治めた平家に相応しい調和と安寧を求めた重盛、両者の溝は深く、ついに最後まで埋まることはなかったという。

仲綱は昔、衛府の藏人であつた時分に、重盛が帝や女房に細やかな心配りをしているのを何度も目撃していた。自分より十も若いというのに、けして荒ぶることも位を笠に着ることもなく、温和で優しい人柄に感銘を受けたと何度も述懐している。

「寢所に潜り込んだ大蛇を殺めることなく、騒ぎにならぬよう、そつと懷に入れて運び、私に逃がすように申された方です。小松殿が居られれば、平家一門は違つた形を成していたかも知れませぬし、宮もこのような御不満の形にはなさらなかったのではとも思えるのです」

「……仲綱」

「申し訳ありません。繰り言です。……それよりも父上、合流の手はずですが——」

「失礼いたします！」

仲綱が今後の予定について口にした時だ。慌てた様子の郎党が一人、その場に駆け込んでくる。

「頼政様、団三郎さまがお見えになつております！ その、今はお忙しいと断つたのですが、何を押ししてもお会いたい、会えるまではここを動かぬと裏門に居座る始末でして、どうした

ものかと……」

よほど頑固に言い張っていると見え、郎党も困惑気味である。頼政は仲綱と顔を見合わせた。決起前の大事な時だ。たとえ親しき相手とはいえ、部外者を招くことは避けるべきではあるのだが——頼政には予感があつた。

漠然としたものだが、きつと、こうなるのであらうという、確かな予感が。

予感、あるいは予兆。これはそういうものだろう。

己の老いたことで、ただ若さに任せていた時分には見えずにいたものが見えるようになったのかもしれない、頼政は思う。

「良い、通せ」

「良いのですか」

「——俺に用事、というのだろう。今から会う。支度をしろ」

驚く郎党に短く答え、頼政は静かに手を握り締めた。



人払いをし、頼政は団三郎と対峙する。邸の客間にやって来た団三郎は、頼政の前に深く頭

を下げ、切り出した。

「頼政殿、夜分に突如のご無礼、どうかご容赦を」

「……構わぬよ。お主がその気になればどうとでも、会いに来るすべはあったのだろう」

「この時分、貴重な時間を割いてお会い下さったこと、感謝いたします。そして、これまで、長きに渡り頼政殿を謀っておりましたこと、お詫びいたします」

「良い。分かっておるよ、団三郎殿」

切り出した団三郎を遮って、頼政は息を吐く。

明瞭ではないにせよ、頼政は察していた。この団三郎なる娘が、まともな人界を生きるものではないことを。

「お主は、おそらく人ではない。人のように振舞い、人の世を生きるあやかしだ。……違うか」
「お気付きで御座いましたか」

「……疑ったのは最近だがな。なにしろ俺は身を持ってあのぬえを見知っている。いまさらこの世に他の化生が居たと知って驚くものかよ」

思えば、団三郎の動向ははじめから不可解なものがあつたのだ。そも、このような風体の女商人など、みやこでまともに生きていけるはずがない。それを可能としていたのは、彼女自身の妖怪としての能力であつたのだ。

「そこまで見通されておったとは、儂もまだまだ精進が足らんですのう」

口の端をもたげ、団三郎はやおら立ち上がったかと思うと、たんとその場で床を蹴った。宙で身を丸めくると一転すれば、どろんと辺りに白い煙が舞いあがる。白煙の中、姿を見せた娘の髪からはひとそりの獣耳が跳ね、背中には彼女自身の身体ほどもある大きさのふさふさの尻尾が飛び出していた。

化貉の本性を露わにした団三郎は、改めて居住まいを正し頼政に向き直った。大きな尾を身に沿わせるように丸め、顔を伏せるとともに左右の耳を大きく立てる。彼女なりの札の立て方であろうか。

「改めて。源三位馬場頼政入道どの。お目にかかります——儂は四国、伊予にて狸衆の覇を誇る、八百八狸総帥、狗神刑部の名代を務めます、団三郎と申すもの。……佐渡の地に明るいゆえに佐渡の団三郎貉などと呼ぶ者もおりますな」

むじなとは、佐渡での狸の呼び名だと団三郎は言う。狐狸は長じて人に化けると言うが、これほどまでに人の成りを見事に装い、商いまでするなどという話を、頼政は生まれてこの方聞いたこともなかった。

「このみやこの朝廷に近付いたのは鳥羽帝の御世のころになりますのう。狗神刑部様より源氏の一族に取り入れとの命が下り、貴方様を利用させていただきました」

「すると、お主は俺よりもずっと年上なのか」

「さあて、生まれた年の事など覚えておりませんので確かなことは申せませんが、儂がこの世に生を受けてもう百五、六十年にはなりましようかの」

團三郎は訥々と己の出自を語り出した。狸の本邦、四国にて狸の親より生まれたこと。幼くして佐渡に渡ったこと。長じて智恵を付け二足で立ち、月光を浴びて化術を修め、人に変じて海を渡り、このみやこへとやってきたこと。様々な手段で、朝廷や武家に接触を試みていたこと。このように人の世に潜り込んだ狸達を、四国八百八狸総帥・狗神刑部は何匹も抱えているということ。

「では、俺の他にも化生と通じている者がおるのだな」

「詳しくは申せませぬが、そうですね。平家の御大將には讃岐の狸の総大將、屋島太三郎が与しておりました。小松殿がお亡くなりになって、最近は疎遠となっておりますがのう」

「かの御仁であれば、ありそうなことだな」

仏道に帰依し、禽獸を無闇と殺すことを厭っていたという重盛の名に、頼政は一人納得した。

「それで得心がいった。團三郎よ、先日の内裏の靈狐を射た渡辺党の競というのも、お主が化けた姿であるう」

彼女の耳がぴくんと跳ね上がる。意表を突かれたという彼女の顔に、頼政はようやくひと泡

吹かせてやつたと笑みを浮かべた。

「……見抜かれておりましたか」

「見くびつてもらつては困る。老いたとはいえ摂津源氏の長、出仕をする二百ばかりの郎党の顔と名は、みな覚えて居るよ」

「これは、まこと……お見逸れいたしました。まさか気付かれることはなかうとたかを括つておりました。……重ね重ねのご無礼、平にお許し下さいませ」

団三郎は再び深く頭を下げる。昨今巷に溢れる礼儀を知らぬ余所者達よりも、よほど、人の心の機微に通じていると見える。

「かの狐は悪狐でございます。神山の精凝つて形を為す九尾狐の眷族にございました。お耳になさったこととおありでしょう、鳥羽院の御世に、水藻、玉藻前などと名乗る娘が、寵姫となつたという話を」

「……うむ」

宮中に潜む狐が院を誑かしているという風聞は、何度となく人々の間を流れていた。頼政の仕えた美福門院こそが、かの狐その人であるなどと言う者までいたのである。

まったく荒唐無稽な話で、頼政もあの藤原紅子に警告を受けていなければただの戯言と一笑に伏していただろう。

「かの玉藻前とやは、古くは大陸の夏王朝、殷王朝を傾けた傾国の九尾であるなどと聞くな」「つかかか！ それは振るつた話ですのう。まったく聞くだに可笑しい限り。……かの狐自身そのように称しておりましたが、あれはまったくの出鱈目、紛い物でしてのう。本物とは数枚も劣る偽物じゃ。しかしまったく悔しいことに、生憎と、儂ら狸には手が出せませなんだ」

「何故だ」

「――今の陰陽寮の長がどなたか、ご存じか」

思い返すまでもない。陰陽司を率いるはかの名門の安部泰明。隠された秘密、秘された真実をまるで見通すように指差し暴くという神懸った秘儀を見せたことから「指神子」と渾名され、名だかき安部晴明以来の傑物とされた大陰陽師である。

「かの晴明の家系は、信太の森に住む靈狐葛の葉の子。ゆえに彼等は、狐にだけはまるで鼻が効かず、その魅了の術を跳ねのけることができぬのですよ。この国の靈護を預かる陰陽寮が、こぞつてかの九尾の言葉を疑うことなく信じ込み、その手足となつて動きましてのう。……まったくもつて齒痒い限りでした」

「そのようなことがあったのか……」

「その九尾もやがて宮中を去りましたがの。あの靈狐はその名残のようなもの。分不相応にも後金になり替わろうとしていたところを見つけましたので、儂が一化け披露した次第です」

「成程な」

こうして説明されてみても、あまりに荒唐無稽、まったく眉唾な話であった。それは団三郎も理解しているようで、どうにも納得いかないと眉を寄せてみせる。

「随分と素直な事ですのう。お疑いになりませぬのか」

「その真偽をお主に問いただしてどれほどの意味がある。団三郎、お主が言う通りの化け狸であるなら、俺を謀る事など容易いはずだ。違うか」

「む」

こう言われて団三郎、大きく眉を動かした。左右の耳もぴんと延びる。

「……それを含めてお主の望みを聞きたい。団三郎よ」

「もはや、隠し立てしても詮無きことですな。兵庫頭どのご事情、全ては窺い知ることとはできませぬが、経緯は耳にしております。――差し出がましいかと存じますが、木ノ下……いえ、ぬえのこと、儂に任せて頂けませんか」

「……良いのか」

「あれを生みだしてしまったのには、儂にも一端の責があります。雅頼どのが誰に吹き込まれたかも調べず、魔祓いの双生矢竹などを軽々しく佐渡から持ち出してしまったのがそもその過ちでありました」

静かに瞑目し、団三郎は吐息する。

「頼政殿がばけもの退治の芝居をした後、一条帝の御世に再び現れたぬえに、弓矢が届かなかったのを覚えておいでですか。……あれは、頼政殿の弓が原因なのです。即ちこれは、因果の逆転とでも申すべきもの。」

……順を追ってご説明いたしましょうかのう。まず、妖怪は人の恐れ、それに伴う伝承によって強くもなり、弱くもなるものです。ある妖怪が恐ろしい怪力をもっているとされ、それが広く知られるようになれば、その妖怪は実際に恐ろしい怪力を身に付けてしまう。そのような事がありますのじゃ」

団三郎、懷から一枚の紙を出した。彼女がそれを振るうと、紙はたちまち折り取られて一羽の鳥となる。そのまま彼女の術によつてぱたぱたと動き出した鳥が、団三郎の手に停まる。

「恐れは、あやかしの力となるということか」

「妖怪でなくともそのようなことはありません。敵を前に、あいつは強い、自分はとても叶わぬと怯えていれば、手足は委縮し、心は萎え、実際には互角の相手でも十全に力を出すことは難しい。そして、妖怪の場合はこれがさらに極端となるわけですのう。ある怪力無双の武者が妖怪に遭遇し、怪しきものへの恐れから存分に力も振るえず、手も足も出ずに殺されてしまったとしましょう。その場合、その妖怪には『あの怪力の武者でも勝てなかった』『人智を超え

た怪力を誇るわけものなのだ』ということになってしまふ。因果がひっくり返つておるのですな」

「むう……」

「その上で、なおも妖怪に力比べを挑もうとする者がどれほど残るのであるうかということです。ついには人が皆、その妖怪の怪力を恐れてしまえば、もはや誰もその妖怪の剛力には勝てぬものとなります。命知らずの無謀な力自慢が現れたとしても、妖怪への恐怖に心折られた者達の恐れが、その妖怪の強さを——恐怖を、補強してしまうのです。古くより生き残つて来た妖怪というのは、そうしたいいくつもの伝承や噂を己の爪牙や鎧にしております。だから強く、それゆえ恐れられるわけでしてのう」

「それを討つには、妖怪への恐れを知らぬものでなければならぬという訳か」

それを人の世では、英雄と呼ぶのだ。人智を超え、想像を超えた偉業を果たす、人の枠をはみ出したもの達だ。

團三郎は大きく頷いた。

「そして、妖怪の成り立ち、格のひとつに、いかなる名物で討たれたかというのがあります。強く不死身の妖怪であれば、それを討てる剣、射た弓は素晴らしい銘物でありましょう。——いや、名剣でなければならねばならぬのですな。でなければ、その妖怪がいかに強大だったか

がうまく説明できぬことになってしまふ。錆びた小刀で大江山の鬼が死んでしまつては文字通り、格好がつかぬでしょう」

頼政はふと、早太のことを思い出した。彼も己の短刀に、骨食などと名を付けていた。怪物鶴を討つた真の名剣であるのだと、事あるごとに見せびらかしては自慢していた。あれも同じ心の働きであらう。

「これもまた因果を遡るものなのです。名の知られた剣で討たれたのであれば、その妖怪は、それだけ恐ろしく強い者であつたことになる。ならざるを得ない。そうでなくては釣り合いがとれぬのです。そこいらの羽虫を潰すのに、三種の神器を用いて良いわけがない。

近衛帝のばけもの退治の折、帝を苦しめた正体不明のあやかしは、古今無双の弓の使い手、摂津源氏頼政にて、佐渡の矢島に伝わる双生武竹の矢で退治された。その噂が広く恐れられ広まることで、ぬえはそういった妖怪と成つてしまったのです。退治するためには魔祓いの双生武竹の矢が必要だつたことになり、逆に他の方法では退治できなくなつてしまった。

故にあの娘は、ばけものと成つた。成らねばならなかつたのです。帝を脅かし、みやこの夜を騒がす正体不明の妖怪たりえなければならなかつたのです。——あの日、あの夜。あの矢をもつて射抜くことがなければ、あの娘の怨念も妖怪になり果てることは無かつたでしょう」

長らく話し終えた団三郎は、大きく息を吐いた。

まこと。それが真実であるのならば。

鶴とは皆の恐れが、凝って生まれたものなのであろう。

（そこに、俺の恐れもあったのか）

頼政は思う。帝の前で謀を巡らすことへの逡巡、躊躇い、恐れ。己の心が咎める思いもまた、ぬえを生んだ畏れの一つであったのかもしれない。宮中に渦巻く無数の畏れ、それらが入り混じり、正体を掴めぬものへと変じた。

近年起きたいくつもの禍を、大魔縁と化した崇徳院の怨霊の仕業であるとしたように。

もはや人は天地自然のあやかしに頼らずとも、人を脅かす魔を生むのだ。

やり切れぬ思いと共に、頼政はゆつくりと額を擦る。

「それが、お主がぬえに肩入れする理由か」

「実のところ、四国ですらここ百年余りで、人に化けられる狸たちも大きく数を減らしましてのう。闇に潜むものに対する人の恐れというものは、時を経るにつれ減るばかりです。頼政殿のおつしやる通り、この世からあやかしというものが消え去るのはそう遠い事ではないのかもしれないませんか」

だからこそです、と団三郎は言う。

「――単に寂しいだけなのかもしれない。新たな妖怪を産んでしまったこと。その親とし

て責を取らねばならぬと……まあ、そういう理屈をつけることもできましようが。

これは、儂の望みでもあるのです。万事うまくやり遂げましょう。団三郎の名にかけて、今度こそぬえを救ってみせます。どうか儂を信じて、お任せいただけませぬか、頼政殿」

深々と頭を下げる団三郎に。

頼政は、礼を尽くして頭を下げた。

「こちらこそだ。よろしくお願いする、団三郎殿」

十四 渡辺競

近衛河原より鴨川を挟んだ南、六波羅。かつて洛内の葬地鳥辺野として知られた荒れ地は、平忠盛によつてその基礎が築かれ、いまや平家隆盛の象徴ともなつたかれらの拠点である。鴨川の東岸、みやこより伊勢や東国へと続く街道の出口にあたる五条から七条の区画には、みやこ三千二百余りの邸宅がひしめき、六波羅館などと総称されていた。

惣領邸宅の泉殿を中心に広がる街並みには、大陸の流行を取り入れた装飾も多くみられる。その威容は桓武帝以来の伊勢平氏の系譜を伝え、まさに平家によるもう一つのみやこと言えた。周囲には堀が巡らされ、洛内へと繋がる大橋には堅固な門が構えられ、警護の兵がずらりと並ぶ。軍事貴族平氏が辿つた闘争の歴史を示すかのように、その防護は厳重である。

事実、六波羅はこれまでに幾度となく戦場となり、侵攻を戦乱を食い止めていた。平治の乱においては二条帝を匿つて臨時の御所となし、義朝らが率いる源氏の精鋭を退けたように、有事には街一つがそのまま要塞へと変貌するのである。

いまや六波羅からは炊事の煙が上がり、有事を知らせる赤旗が翻っていた。平家の象徴であ

る赤とは、彼ら一門の驕りがもたらした騒乱で流れた血の色であろうか。

先の十五日、三条高倉の御所を脱した以仁王は、北の園城寺へと逃れていた。平家転覆の企みは世に暴かれ、六波羅は騒然となりながらもその準備を着々と進めていたのである。

かの寺を攻める軍は既に組織され、動員された兵が塀の外にまでひしめいていた。彼らは揃い、数日のうちにも園城寺への攻め手にかかるだろう。

あの軍勢の中からぬえを拾い出すのだ。身震いする己の頬を張って、団三郎は気合を入れ直す。場所は平家の総本拠。敵は平家の軍勢五千。対するは我が身たったひとつ。

「相手にとって不足なしじゃ。」

——団三郎狸、一世一代の大化術。とくとご覧あれ」

身の内に満ちる熱気が、白い呼気となって噛み締めた騎馬の隙間から漏れる。

独白と共に、団三郎は身を翻した。



百と五十年あまりを生きた化け狸とはいえ、団三郎は妖獣の中ではまだまだ若輩である。故郷の四国には齢五百を超える古老がごろごろしていたし、彼女が名代を勤める伊予松山の狗神

刑部に至つては、少なくとも七百と四十を数える古狸だ。かの聖徳王すら謀つたというその伝説は、畏怖と共になお語り継がれている。

獸性を脱するのに十年、智慧を付け、人の言葉を解し生き延びるのに二十年。月を浴びて続けて不足なく人の姿をとれるようになるまでさらに二十年を要した。そうして人の世に混じり、ようやく化け狸として独り立ちできたのは七十を過ぎてからである。

これは化け狸の中では際立つて遅い部類であつた。四国の狸達の中には、憚ることなく団三郎を指して落ちこぼれと呼ぶものも居た。それに対する反発を力に変え、団三郎は齒を食ひしばつて化術を磨き続けたのである。

しかしそうして身に付けた化術も、森羅万象を自在に化かす四国の古老たちに比べればまだまだ拙いものでしかない。いかに勝ち戦を前に慢心していると云えども、戦を前に気を張り詰めてさせている平家郎党の前に、どこまで通じるのかは分からなかつた。

あるいは、団三郎が他の狸達のように故郷の四国で育つていれば違つたのかもしれない。師と仰ぐに相応しい古老狸も多く、妖力、化け術を磨く事もたやすかつただろう。が——団三郎はそれを良しとしなかつた。一人故郷を離れ、人に混じり、人のように暮らした。

やがて彼女がみやこに人脈を築き、一端の商いをするようになったのはそれから間もなくである。

（――さて）

そうして、己の自分を自覚していたからこそ、団三郎は真正面から本性も露わに六波羅になだれ込むような愚を犯しはしなかった。

兵は詭道なり。古き人の世の兵法家はそう説いたとされるが、それは狸にも同じだった。寡兵をもつて大群を翻弄し、虚実を織り交ぜて謀ることこそ、化生狸の本懐である。

鴨川の岸より舞い戻った団三郎は、無人となった近衛河原の屋敷に戻り、懷から取り出した楡の葉を頭に載せてたんと地を蹴った。その場を宙返りすればあたりには白い煙が立ち込め、彼女の姿はたちまち精悍な若武者のものへと変じていた。

以前に頼政の配下と偽って内裏に出入りしていた、摂津渡辺党の若者の姿である。これは団三郎がみやこに持つ顔の一つであり、この姿の時は渡辺競という名を名乗ることにしていた。そして競に化けた団三郎、なにをやるかと思えばそのまま納屋へと入り込んで身を横たえ、ぐうぐうと大鼾をかき始めたのである。争乱迫るみやこ、敵陣である六波羅の目と鼻の先で、なんとも大胆な行いであった。

狸寝入りなどという言葉もあるが、これは本当に眠っている。そも、化術の大家たる狸が己を化かせずにどうして猜疑にかられる人を化かすことができようか。

近衛河原の屋敷に平家の郎党たちが押し寄せてきたのはそれから間もなくであった。源三位

入道決起の報せを聞いて、ただちにその本拠を押さえに掛かったのであろう。彼等はおもぬけの殻となった頼政の屋敷を見回し、卑怯もの、朝廷に弓引く反逆者と口々に騒いでいた。

彼らは邸内をくまなく探しまわり、やがて納屋の中で大の字になって寝こけている若者を見つけ出した。緊迫する中でなんとも呑気に高軒をあげる彼に不審を抱きつつも、それを取り囲んで声をかける。

「おい、貴様、おい！ 起きぬか！」

郎党の一人がずいぶんと深く眠っている若者の肩を掴み、激しく揺さぶった。そこでようやく団三郎、大欠伸をしつつ起き上がり、周りを見て青ざめてみせる。

「こ、これは如何に。おぬしらは誰じゃ、みなはどこへ行った?！」

「如何にではない、我らは宗盛様の郎党よ。おぬしこそ何故こんな場所におる」
詰め寄る郎党達を眺め、団三郎は視界に収まる攻め手の数を把握した。

（ひい、ふう……八人か。もう少し多いと思ったがの）

「ええい、怪しいやつ、名を名乗れ、名を」

「競。渡辺競じゃ」

「……渡辺、摂津の渡辺党か。うぬ、貴様、寝返った頼政の手勢ではないか！」

たちまち取り囲まれて引きずり出され、土の上にねじ伏せられる団三郎。適当に力を込め、

暴れるふりをしてから苦しげに声を上げてみせた。

「は、離せ！ ええい、そんなことをせぬでも逃げぬ！ 離せ！」

「信用なるものか。なぜこのようなところで寝こけておる」

「なにも何故も、一寝入りしておったらこの有様じゃ。昨日、丸一昼夜の勤めを終えて一日ぶりに飯を腹いっぱい食って、休んでいただけよ！」

「怪しい奴、何故、納屋の中などで寝ておった」

「屋敷の中は喧しくてかなわぬ。郎党にあてがわれた広間には必ず誰ぞが居るし、保の奴など寝ておつても齒軋りが酷い。そこへ行くとここは静かじゃからのう。急な勤めじやと起こされずにぐつすり眠るには都合が良いのよ」

「……呆れた奴だ。それでよく源三位の郎党が務まるな」

「そんな有様だから置いて行かれたのだろうさ。この危急を前になんと暢気なものだ」
堂々と語つてのける団三郎に、平家の郎党達は呆れ帰る。ここで団三郎、さらに首を傾げ、

「置いて行かれるとはなんじゃ。一体何があつた」

「ふん。そこまで知らぬとは哀れなものだ。貴様の主は平家に反逆の兵を挙げたのよ。源三位はおそれ多くも帝の地位を狙う以仁王に与し、この国に弓を引いた大罪人ぞ」

「な、なんじやと!？」

とどめに思い切り目を剥いて驚いてみせれば、郎党達からは笑い声まであがる始末。

「なんとも間抜けな。何千何万という大軍でもなかりうに、誰もお前が居らぬと探しはしなかつたのか」

「まったく馬鹿なやつだ。大事な戦の前に置いて行かれるなど、源三位もよほど扱いかねていたに違いないな」

「そうとも。考えても見ろ。この騒ぎにも気付かず眠りこけているのだぞ？ おおかた血の巡りが悪いと思われて邪険にされていたのだろう」

そう言つて嘲る彼等は、もはや微塵も団三郎の言葉を疑う様子はない。敵陣の屋敷にあるというのにすっかり毒気を抜かれ、悔しがつてみせる団三郎に哀れみさえ向けていた。

「おい、何を騒いでおる」

そんな中、足音を踏み鳴らしやつてきたのは立派な装束を着こんだ武者であつた。具足や兜は見事な装飾をされており、そこらのみすぼらしい郎党とは違つて立場のある武士だとわかる。「は、この者、頼政の手勢であるらしいのですが、どうも間抜けなことに寝坊し、出陣に出遅れていたようでして。こうして捕え、尋問をしていたところです」

「……源三位の手勢にしては呆れた愚鈍ぶりだな。その様子ではどうせ碌なことも知らぬであろう。手をかけるだけ時間の無駄だ。このような阿呆にかかずらつている余裕は無いのだぞ」

「はっ」

「ここがもぬけの殻と分かればもはや用はない。今より園城寺に向かったところで源三位には追いつけぬであろう。……おい、競と言ったか。運がよかったな、見逃してやる。どこへなりとも行くがいい」

「ちよいと待て、おい、それはならぬ！」

言い捨て、郎党と共に去つていこうとする武者を、団三郎は呼び止めた。鬱陶しげに眉を寄せ、いらいらと口元を歪める男に、なおも声をかける。

「待て、待たれよ。……そこのお主！　そう、お主じゃ！」

「なんだ、我らは忙しいのだぞ。見逃してやると言ったのだ、早く去ね。なにが望みかは知らぬが貴様の好きにするがいい」

「そうは行くか、たとえ己の失態とはいえ、置いて行かれた身でこのまま見逃され、おめおめと仲間の元に戻るなど、摂津渡辺党の面目が立つものか！」

「貴様……逃げぬというのか」

この言葉を抗戦の構えと取ったか、郎党達がやにわにざわついた。やおら太刀に手をかける男達に、団三郎は大きく手を突き出して、

「違ふ、逆じゃ。勘違いせんでくれ。源三位の連中にはほとほと愛想が尽きたんじや。確かに

わしは血の巡りは良くない。間抜けとからかわれることもあった。だが、馬鹿は馬鹿なりに精一杯勤めを果たしてきたつもりよ。それを、同じ釜の飯を食い、共に轡を並べて戦場を駆けたというのに、わしを置き去りにしてとつと尻尾を巻いて屋敷を逃げるなど、薄情にもほどがある。ええい悔しや！」

固めた拳を地面に叩きつけ、団三郎は大きく肩を震わせた。

「貴様がそれだけ間抜けだったのだ。所詮その程度、大事には役に立たぬ厄介者と思われておったのだろう」

「そうじゃ、ああ、そうじゃろうとも。だが、だが！ それで黙っておれるものか。間抜けだろうと木偶の坊だろうと心はある。恥もある。のう、お主、頼む。見たところその鎧作り、お主は平氏一門でも名のある武者であろう。頼む、わしをお主たちの陣に加えてくれぬか！ そうともよ、こうなれば恥をかかせてくれた源三位入道に一泡吹かせてやらねば腹が収まらないじゃ。ええい、思い出しても忌々しい！」

団三郎が地団太を踏み、大仰に悔しがってみせると、男達も顔を見合わせる。単純だが一途な渡辺競が、同じ郎党たちに邪険に扱われたことへの同情もあるのだろう。ここが見せどころと団三郎はまっすぐ彼らに向き直り、深く頭を下げた。

「のう、後生だ、お主からもうどうにか頼んで貰えぬか。生憎とわしには頼政の行方までは分か

らぬが、渡辺党の連中の顔ならば分かる。戦場で何を得意にしているかも知っておる。そして、これでも弓の腕は自身がある。嘘ではない、弓矢八幡にかけてまことのことじや。それしか出来ぬゆえ、ひとえに修練に励んだ。何かの助けになれるやもしれん。……頼む！ このままでは馬も弓もないのじや。どうか、どうか頼む！」

形振り構わぬ願いに、武者と郎党達はしばし困惑と共に顔を見合わせ——結局、この渡辺競を名乗る男を、六波羅へと連れて行くことにした。

さて、行方をくらました頼政達の情報を喉から手が出るほど欲しがっていた宗盛、この渡辺競に面会を決めたのである。団三郎はここでも一門に置いて行かれた純朴で間抜けな武者を演じ通し、宗盛卿の興味をかうことに成功した。

「ふむ。まったく愚鈍な男よのう。しかしお主、どうして三位入道の供をせずに屋敷にとどまつたのであるか」

「つい昨日まで、摂津源氏に万一の事があれば先陣を掛け、命を差し上げようと決めておりましたが、三位入道はなにを思われたか、何もわしに言つてはくれませんでした」

「成程のう……お主、確か宮中にも警護として参仕していたはずじゃの。そも、渡辺党と言えば頼光以来の摂津源氏へ忠心を捧げるものであらう。それがなにゆえ三位入道を裏切る。身の安全か、報奨が欲しいのか。いかにしてこの宗盛に仕えようというのか。正直に申せ」

宗盛が高圧的にこう問えば、団三郎、はらはらと涙を流し、

「先祖伝来の御縁は確かながら、どうして帝に弓引き、朝敵となつた方に味方することができませんようか。こうなればかつての主、仲間の過ちを止めるためにも、精一杯前右大將様に奉公いたしたくございます」

「ふむ、ではお主、源三位を討てるのであるな？」

「討てますとも！」

「ほほほ。言うたの。……これは面白い。これ、誰かおらぬか！」

これには宗盛、たいそう気を良くして頷いた。ぱちりと扇を鳴らし、頼政などとは比べ物にならぬ恩を与えるとまで言つて、団三郎——競が平家に仕えることを許したのであつた。

あるいは、袖にされた渡辺党の郎党を己が寛大に取り立てるといふ懷の深さを外に示したかつたこともあるやもしれぬ。また団三郎も忠臣を演じ、それから片時も離れることなく宗盛の近くに侍り、朝な夕なに呼び付けられるたび、『居ります』『居ります』と答えて伺候すれば、すぐに宗盛もその忠義を認めるようになったのであつた。

やがて日が暮れ、頼政が園城寺に入つたという報せが届いたところで、団三郎は宗盛の前に進み出た。

「御大將どの。三位入道は園城寺に留まるとお聞きました。間もなく討伐の兵が差し向けら

れるでしょう。敵は寡兵、畏れるに足らずです。……しかし、かの地にはわしを置き去りにした三位入道や渡辺党の者どもが居ります。この恥辱、なんとしても雪ぎたいのですが、馬も弓も全て彼らに持ち去られてしまいました。なにとぞ、わしに馬をお預けくださいませぬか」

そう、眼に涙を浮かべ、声を震わせて一心に願う団三郎を見て、宗盛もつい哀れに思ったか。あるいはかつての仲間と殺し合う頼政らを思い描いて悪趣味な嗜虐が動いたか。

いずれにせよ己の兵を失わずに源氏どもが食い潰し合うのであれば幸いと、秘蔵していた白葦毛の名馬・煖^{なんりよう}廷にこれまた良い鞍を置き、貸し与えてやることにした。

誰にも触れさせぬよう手元に抱えていた秘蔵の名馬を、いくら忠義を尽くすとは言えかつての敵の郎党、しかも会って間もない相手を信用して貸し渡すなど、冷静になつてみれば有り得ぬことである。これもまた、化狸の人を誑かす本領がみせた神業と言えよう。

団三郎もまた、欠片も油断なく宗盛の言葉に感涙してみせることを忘れず、

「早く日よ暮れる、この名馬に乗つて園城寺に馳せ参じ、敵陣へ駆けて一人でも多く奴腹を仕留め、討ち死にしてくれる」

などと戦意も露わに言つたので、宗盛もその配下達もすっかり彼の言葉を信じ、良い趣向じやと笑うのみであつたという。

そしてその夜。まもなく日が沈み、あたりが闇に覆われると、団三郎はすぐさま行動を開始

した。闇夜に隠れ、獣の俊敏さで風のごとく六波羅を駆け抜け、以前に確かめた泉殿の裏、厩の奥に囚われていたぬえの元へと辿りついたのであった。

ぬえはまるで檻樓切れのように、厩の奥に転がされているばかりであった。

わずか数日を離れたのにもかかわらず、ぬえの姿は以前にも増して酷い様相となっていた。突如平家を裏切った頼政への憎しみをぶつけんと、気性を荒ぶらせた宗盛や平家の者たち、そしてその郎党達までもが、身勝手に娘を連れ出し、鬱憤を晴らさんばかりに傷め付けていたのである。

少女の右眼は濁り、瞳孔の位置の判別もつかぬ。恐らくまともに見えてはいまい。顔の半分は鬱血して腫れ上がり、整っていた顔立ちは、憎しみの余りか見るも無残に切り裂かれていた。

揚句、左右の腕は肘から下がぶらりと垂れ下がり、右足は膝の下で断ち切られ、左の足もまた折れた骨が突出して、腐り落ちてゆく最中である。『仲綱』として四足で歩くことを強要された無体に他ならなかった。檻樓切れで覆われた下腹は血と膿で汚れ、白い肌には打たれた馬鞭によって赤々と裂けている。

陰謀、戦乱が常の裏社会で長く過ごした団三郎ですら、眼を背けたくなる酷い姿であった。

「待たせたの、ぬえ」

それでも動揺は押し隠して、ぐったりと力の無い娘の身体を助け起こし、団三郎はその耳元

に囁きかけた。

わずかながら反応があり、ぬえはぼんやりとした片眼を団三郎へと向ける。首を動かすのも難しいほど、娘は痛めつけられていたのだ。

そうしてぬえが恐怖に身を硬くする。己が若武者の姿である事を思い出し、団三郎は声音を変えてもう一度ぬえに囁いた。

「安心せい、儂じや、団三郎じやよ。……おぬしを助けに来た」

「……あんた」

か細い声が辛うじてぬえの唇を震わせる。今度はもう躊躇わない。団三郎は有無を言わずぬえの身体を抱え上る。頸筋の裏より引き抜いた紙片に息を吹きかけ、一枚の清潔な布と化けさせて、娘の身体をそつと包んだ。

「あまり時間がない。行くぞ、掴まっておれ」

「……ばか、やろう、はなせ……これじや、あ、頼政、が」

「その頼政殿の頼みじや。……もう、良い。おぬしはもう、このような責め苦を追う理由はない。ぬえ、おぬしは立派につとめを果たしたんじや」

静かに首を振り、団三郎はぬえの鼻先にふつと息吹を吹きかける。

か細い力で抗おうとしていたぬえが、かくんと意識を失うのを見て、団三郎は彼女の軽い身

体を再度抱え直した。

「すまん、しばし寝ておれ」

近くにあった適当な藁束に化術を掛け、横たわるぬえの姿を装っておいてから、団三郎は足早に厩を後にした。既に戦時となった六波羅の中には常に倍するほどの人がひしめき、戦支度を済ませた郎党や武者たちが気も荒く園城寺夜討ちの準備を急かしている。胸元にぬえを抱えた団三郎を不審に思うものも居たが、これは得意の弁舌と化術をもつて騙し通し、彼女は一路、六波羅を駆け抜けた。

「——ぬえ、おぬしのしたことは、けして無駄ではなかったぞ」

驚くほどに軽い少女の身体を抱きしめ、団三郎は腹の底で呻く。

宗盛が、どこから頼政の鶴退治の真相を聞きだしたのかはいまも分からない。だが、宗盛に確たる証があるのなら、このように以仁王が対立を露わにしてなお、彼女を有効に用いないまま放置しているとは思えなかった。

もっと早くの段階で、鶴退治が茶番であったことを顛末もろとも白日にさらし、堂々と摂津源氏の長老の不正を暴いて、頼政を糾弾することもできたであろう。

それをせず、見世物のごとくただ「名馬仲綱」を人前に引き出し苦しめる様を披露し、溜飲を下げるようなことを繰り返していたというのは、宗盛自身もぬえの正体に半信半疑であった

ことの証左ではないだろうか。

いずれにせよ、ぬえがその正体を現さず、幾度虐げられようとも人の娘の木ノ下として諾々とその非道に従っていたことで、宗盛もついにその執拗な猜疑心の行き場をなくしたと見えた。ただ藁束に転がされ、か細い息を繰り返す薄汚れた娘は、摂津源氏への場違いな恨み、郎党たちの格好の玩具とされながらもなお、源三位頼政を守り抜いていたのである。

夜闇に乗じて戻った団三郎は、宗盛より拝領した白葦毛の煖廷を庭へと引き出した。さらに一頭、これまた宗盛の元で名のある名馬『遠山』を引き連れ、鋭く口笛を吹く。

すると、闇の中から素早く駆け寄る小さな影。団三郎が使いとする狸達である。いまだ功足りず満足に化けることもできぬ彼らは、しかし禽獣でありながら団三郎の忠実な部下であった。彼らに何事か言い含めると、団三郎は深く念を凝らし、精を練り上げて再度ひと化けを試みる。果たして、化狸は渡辺競一世一代の晴れ舞台とばかりに、若武者の姿へと変じた。飾り菊をあしらった平紋の狩衣に、着背長緋威の鎧をかさね、銀の星の輝く兜を締めた威風堂々の姿である。さらには厳めしく作った太太刀、二十四本を差した太中黒の矢を背負い、滝口武士の作法を忘れずに鷹の羽で矧いだ的矢を添えて。

名実ともに摂津の渡辺競となつた団三郎は、滋藤の弓を取って煖廷にひらりと跨った。

「行くぞ、ついてこい！」

そう言ふと団三郎は馬上で、ぬえの身体を胸元にしつかとくくりつけ、呼び寄せた狸の一匹に化術をかけ、楯を持たせて従者とし、そのまま六波羅を飛び出したのである。

六波羅内で騎馬を走らせる騒ぎに、邸内は激しく混乱した。行く先の者たちを構わず蹴散らし、いまだ夜討ちの合図もない中、白茸毛の一騎は疾走する。

「滝口の渡辺競！ 急用じや、押し通る、押し通る！」

大橋の門を固めていた警備の兵たちは、折からの争乱に備え警戒を強めていたものの、硬く閉ざされた門を前に脚を緩めることなく、全速力で突つ切る団三郎を、あつけに取られて見送った。何事かと叫ぶ声、吹き飛ばされた郎党達の苦悶が広がり、六波羅の門はにわかに騒然となった。

そしてさらに声が上がる。

「火じや！ 火が出ておるぞ！」

同時、この時鴨川を渡って近衛屋敷に先回りした狸達が、あるじの命のままに頼政の屋敷に火をかけたのである。

やおらみやこの空を焦がし燃え上がる炎と、天の星々を覆う黒煙に、六波羅の者たちは大混乱に陥った。攻め手だ、火が出た、いや違う燃えておるのは向こう岸だ、誰かが忍びこんで居る。厩が荒らされた、以仁王の手のものか。戦を前に多く兵が動員され、普段顔を合わせぬ者

たちが詰めかけていた事も騒ぎの拡大に拍車をかけた。闇も手伝つて流言は交錯し、たちまち苛立ちが募り罵声に怒号が満ちてゆく。

「いかがした！ 何の騒ぎぞ！」

飛び出してきた宗盛、どうやら邸内に賊が忍び込んだという報告を受け、やにわに競を呼んだ。が、当然ながら答えはどこからもない。さらには貸し与えたはずの煖廷だけでなく、もう一頭の名馬遠山まで奪われたことが分かり、ここに至つてようやく前右大将も己が謀られたことを悟つた。

宗盛は白塗りの顔を真っ赤にして怒りをあらわにし、扇を握りしめて叫ぶ。

「おのれ、おのれ田舎武者め！ よもやこの宗盛を謀るとは！ ええい、追え、はようあの競を追いかけて討てい！」

甲高い怒り声が六波羅の夜を揺らす。平家総大将の命令一過、十数騎の騎馬が直ちに六波羅を走りだした。



その頃、団三郎の姿は白茸毛の馬上にあり、一路北の園城寺を目指し、みやこを脱するため

京極大路を北へ北へと駆け抜けていた。既に従者の姿はない。化術の足りぬただの狸に人のかたちを保つのは六波羅の門を抜けるまでで精一杯と見え、五条大橋を渡りきったところで力尽き、河の中へと転げてしまったのだ。

馬の脚を緩めず、彼等には近衛河原に向かった手勢と合流し安全な場所まで逃げるよう指示して、団三郎はなお馬を走らせた。

しかしその後ろより、たちまち迫る騎馬の足音がある。宗盛の号令一過、矢のように六波羅を飛び出した平家の精強なる武者達である。馬でこそ団三郎の跨る煖廷には及ばぬが、その練度は一介の化狸商人などはるかに超えていた。

しかも団三郎の胸元にはぬえが抱えられている。見る間に距離は詰められ、月明かりの下に彼等の姿がはつきりと見えるほどに近づいていた。

「ち、流石に早いの」

彼らは馬上にて素早く弓を引き絞り、一斉に団三郎に向けて撃ち放った。ひゅおうと風を切り飛びくる矢に身をかがめ、団三郎は舌打ちと共に振り返る。

矢がかすめたと当時、団三郎が装った戦装束もいくつかが欠け落ちていた。太刀も弓矢も彼女の化術に依って形を編まれたもの、全力疾走する馬上での激しい戦闘の間にそれらを全て維持するのは想像を絶する念の集中を必要とする。とてもそれら全てを保ち続けることは叶わ

かった。

追手の騎馬武者は遠慮なく次々に矢を射かけてくる。十二の追手が六騎ずつ分かれ、交互に矢を放つのだ。飛びくる鏃は途切れることなく団三郎を襲う。

矢雨の中でも、煖延、遠山の二頭はまるでおびえた様子がなく、団三郎の操るままに一意に北へと走り続けていた。成程平家の誇る名馬であると一人納得し、団三郎は手綱を食って大路を左右に蛇行し、弓矢の狙いを絞られぬことに専念する。

鮮やかに身をおかわす団三郎に、平家の騎馬武者達は焦れたように声を上げた。

「おう、おう、止まれ、止まれ競！ 逃さぬぞ！ 大人しく降りて下るがいい！」

「……誰がするか、阿呆」

吐き捨て、団三郎は腰を捻って背後を向いた。

首を振って兜の変化をほどき、豊かな後ろ髪から数本を引き抜いて、ふうと息をかければこれが見るみる見事な弓へと変じた。さらに数本の髪をより合わせて弦を張り、ここに己の爪を折り取って矢と変え、鏃に己の血と唾液を塗りつける。

「——とっておきじゃ、喰らえ」

獣の膂力も露わに弓弦を引き絞り、念じてやあつとばかりに射かければ、放たれた一矢は二に分かれ六に増え、たちまち十二の鏃となつて宙を走った。それらは団三郎の化術によつて鋼

の嘴となり、まるで毒蛇のように身をくねらせ、弧を描いて駆け寄る攻め手の一人一人を、見事に射抜いたのである。

化狸の血と精を練り込まれた身の一部は、化術によって、狙い過たず標的を射抜く矢となつたのだ。足並みを乱す追手に向けて、さらに一射。引き千切つた爪をもつて化術の技巧の極みを織り込まれた十二の鏃が、郎党達の頸を次々に射抜いてゆく。

化術と呪詛の粋を込められた矢に首を飛ばされ、腕を貫かれ、胴を串刺しにされ、どうと落馬し倒れ伏す攻め手たち。彼等のほぼ全ては今の二射で絶命していたが、その中でひとりだけ、辛うじて息を留めているものがあつた。

「……む」

間違ひなく頭を射抜いてやつたはずのその郎党の様子に、団三郎は眉をしかめた。ふと思いついて鼻を動かせば、不快な匂いを確かに感じる。

「ふん、ひとり狐が憑いておったか、忌々しい」

この男、普段より稲荷を熱心に奉じるものであつた。狐と狸は古くより不倶戴天の敵である。彼の信心と、宮中に残る霊狐の加護が相乗し、致死の一矢より辛うじて男の命を守つたのだ。

しかし腕と太腿とを深く貫かれ、もはや弓も引けず馬上にも上がれぬ様子。胸に抱くぬえの息が荒くなり始めているのを見て、これ以上彼らにかかずらっている暇はないと考え、団三郎

は馬を巡らせた。

「命拾いしおったな。……運のいい奴じや」

後に、彼らを追ってきた六波羅の郎党に助けられ、一命を取り留めた彼は、渡辺競の武勇を尋ねられ、身を震わせてその恐ろしさを語った。

その弓の優れたること、あるじ源三位頼政にも劣ることなく、精強なる兵^{つわもの}。その矢継ぎ早の弓業、速きこと神業のごとく、力強きことは人とも思えず、二十四本の矢を差しておれば、まず二十四人を射殺すことができようという彼の言に、平家の郎党達は震えあがったという。



ほどなくみやこを離れ、団三郎はあらかじめ調べておいた洛外の廃寺へと辿りついた。二頭の馬をつなぎ、胸に括りつけていたぬえを廃屋へと連れ込んだ。廃屋にはあらかじめ化術を仕込み、風景に溶け込ませて、遠目にはただの草叢にしか見えぬようにしてある。

団三郎は窮屈な競の姿をやめ、元の化け狸の本性に戻ってから、近くの落ち葉を布団に変え、彼女をそつとそこに横たえた。

改めてぬえの様子を目にし、そのあまりの凄惨さに、団三郎は齒軋りをせんばかりに平家の

者たちへの憎しみを露わにした。

ちらと寺の奥で傾いて埃をかぶっている本尊に視線を走らせ、口中の苛立ちを唾と共に吐き捨てる。

「……これだから仏などというのは好かぬ。お前らはそうやって澄ました顔をして救済などと抜き、結局何もせぬまま見過ごすだけじゃ。それが仏の慈悲だというなら、畜生道に堕ちた儂ら妖怪には向けられぬということか。その口で、貴様らはこのような鬼畜にも劣る所業を成す人間すらも、許し導くというんじやな」

引き千切った爪から血のにじむ拳を床へと叩きつけ、その怒りを堪えて、団三郎は少女の傷を手当てする。医者ではない団三郎にはせいぜい、傷口を清め、薬を塗ってやるくらいのことしかできなかったが——それでも手当てを終える頃には、ぬえの様子はいくぶん落ち着き、呼吸も穏やかなものへと変わっていた。

「——酷い、熱じやな」

ぬえの額をそつとぬぐい、団三郎は陰鬱にうめく。全身の深い傷は妖怪であるはずの彼女を酷く苛んでいた。

妖怪の本質は恐怖であり、人の恐れである。肉体が傷付くことは妖怪にとって本質的な傷とはなりえないはずだが、自分からそうと望んで受け入れた場合は違う。自分からその疵を受け

入れてしまえば、それは容易に妖怪の心を砕くのだ。

まだ若い妖怪であるぬえにそれがどこまで理解できていたかわからぬが、ぬえは宗盛の暴虐に對し命を賭して、ただの一人の人間の娘、木ノ下であることを貫き通したのであった。

「ぬえ、死ぬなよ」

できることはした。あとは彼女の心次第と己に言い聞かせる。

ひとまずぬえが落ち着いたのを見て、団三郎はその場を離れた。廃寺の外に出、榆の葉に頼政に向けて短く文をしたためた。これを鳥へと変じさせて頼政の元に届くように放つ。

次いで、繋いでいた馬に近寄り、まずは遠山に鞍を付け替えた。廃屋に戻って朽ちた本尊のもとへと歩み寄り、念入りに呪を書き込む。

「今宵ばかりは、儂ら妖怪の助けとなつてもらおうかの」

団三郎が荒い息を堪えて全身の念を込めれば、仏像はひとりでに起き上がり、これまで団三郎が化けていた渡辺競そっくりの若武者へと変わった。ぎこちない動きで歩くこれを遠山の鞍に乗せ、落ちぬようにしっかりと念を込めて括りつける。

遠山の耳元に、声を書きこんだ榆の葉を張り付け、団三郎はその尻を大きく叩いた。いなきと共に遠山は一路、北を目指して走り始める。園城寺まで辿りつくように声真似の化術を仕掛けたが、途中で捕えられれば偽の渡辺競として目くらましになろうし、これほどの良い馬だ。

うまく頼政のところまで辿り着けばわずかなれども力になるだろう。

「さて」

そうして置いてから、団三郎は残る一頭、白茸毛の煖廷へと向き直る。その肩は大きく上下し、額にはびっしりと汗が浮いていた。

六波羅潜入からこれまで、立て続けに大化術を使い続け、すでに化狸の疲労は頂点に達しつつあった。精も根も残りわずか、身は鉛のように重く、ともすれば意識までもが遠くなる。人のかたちを取るのもおぼつかない状態で、なお団三郎は榆の葉を抜き、化術を行使する。

もはや、執念のみが彼女を衝き動かしていると言っている。

残るわずかな力を振りしぼり、化術をもつて造り出したのは鉋と焼き印である。団三郎は暴れる煖廷の鬣と尾を短く切り、その尻に熱した焼き印を押しつけた。

さしもの名馬煖廷も、この仕打ちには声を上げて首を振る、蹄を蹴立てて暴れ回った。それでもなお団三郎は手を緩めぬ。その背に抱きつき、しつかと白茸毛の馬の頸を押さえこんで、鬼気迫る形相で印を押しこむ。

じゅうじゅうと煙を上げ焼ける馬の肌の上に、確実に『それ』が刻まれたのを見届けると、団三郎は転げ落ちるように馬の上から飛び降りた。最後の力で繋いでいた馬をほどき、その眉間に小さな火花を叩きこむ。

「―――よし。……行け」

前足を持ち上げ高らかに嘶いた白葦毛の馬は、口から泡を吹いてその場を跳ね回り、狂乱の中走り去る。かれが南へと向かった事を見届けて、團三郎はその場に倒れ伏した。

ぜいぜいと息を荒げ、身体を引きずって、近くの木にもたれかかる。

もはや身体は地面と一体となつたかのようだ。このまま泥のように眠りこんでしまえばどれほど楽か。それでもなお廃寺にいるぬえの事に心を震わせ、團三郎は必死に意識を繋ぎとめる。遠く、白む夜空のみやこに響くのは、かすかな合戦の音。

人と人とが争う鋼の音は、遠のく意識の中で、團三郎の心を不安にさせるばかりであつた。



ここからは余談である。

一夜明け、昨夜の混乱による騒動の爪痕がいまだ残る六波羅に、突如一頭の馬が舞い戻った。眼を血走らせ、口から泡を吹きながら、門を飛び越え厩になだれ込んだこの白葦毛の馬が、近くに住居した馬達を手当たり次第に噛み荒らしたため、厩の雑人達は慌てて大勢でこれを押しとどめた。

宗盛が驚いて駆け付ければ、それは確かに奪われた白茸毛の煖廷であつた。

しかし無惨に尾と鬣を刈り込まれ、齒を剥き出し、氣が狂ったかのように暴れ回る様子はかつての名馬とはとても思えず、雑人十人がかりでも押さえ込むことが難しいほどであつた。

しかもその尻にはまだ真新しい焼き印が押されていたのである。

その文字は、『昔は煖廷、今は平宗盛入道』と読めた。かつての木ノ下に対しての仕打ちの意趣返しであることは明白であつた。

「な、な、な……！」

これを見て宗盛、まさに絶句し、その後、何度もその場に躍り上がって激怒したという。

「忌々しきは競よ、すぐに園城寺に攻め寄せ、なんとしても生け捕りにするのだ！ その首、鋸で挽いて落としてくれん！」

そう叫ぶ宗盛の怒りを余所に、煖廷はいつまで経つても正氣を取り戻すことなく、尾も鬣も生えぬまま、焼き印の痕は消えることもなかったという。

十五 恨弓「源三位頼政の弓」

時はしばし前後する。

治承三年五月十五日。六波羅が拳兵の端緒を掴み、以仁王の企みが明るみに出たのはこの日であった。この年の春より以仁王の令旨なるものを持つてみやこを發った新宮十郎行家が、美濃、尾張、伊豆、木曾と各地を回り、源氏の血を引くものたちに平家打倒の命を下していたことが發覺したのだ。

折しも二月、高倉帝の讓位がなされ、清盛の孫である言仁親王が安徳帝として即位してすぐのことであった。平家はまさに治天の地位にあったと言える。

世を揺るがす大乱再びの氣配に平家は直ちに朝廷を動かし、以仁王の土佐配流が宣下された。同時に王の三条高倉の邸宅、また後見の八条院へも査察の手が入る。

翌十六日には以仁王は皇籍を剥奪、源姓を下賜されて「源以光」とし謀反人として訴追されたのである。

ただちに王の捕縛に檢非違使が派遣されたものの、この時すでに王は変装して宮中を脱し、

頼政との打ち合わせの通り園城寺へと入られていた。これを聞き、後白河院は痛快であると喜ばれたとも言ふ。

事実を確かめるべく園城寺には平家の郎党が王への使者として差し向けられたが、園城寺の大衆はこれを拒絶。寺社勢力が王に組していることを知り平家には緊張が走った。さらには地元の豪族たちが皆以仁王に呼応し、その勢力に与しているなどという風説も広まり、直ちに北峰たる比叡山延暦寺、南都たる興福寺へと使いが差し向けられる。

平家は何度となく園城寺に以仁王を追放するよう命じたが、大衆ばかりか寺を預かる僧綱までもがこれを拒否。なおも数日間の交渉を経て、ついに二十一日、平家は武力行使も辞さないことを決断する。翌々二十三日の出兵が決定され、反逆者鎮圧の部隊編成と、指揮官の選定が行われた。

この軍議による決定において、園城寺攻略軍の編成には平宗盛を総大将として頼盛、教盛、重衡、維盛らの平家一門の名が挙がる中、源頼政の名を見ることが出来る。ここから平家の頼政への信頼がいかに篤いものであり、また頼政が以仁王との関係を嚴重に隠匿し、慎重に、秘密裏かつ入念な準備を進めていたかを知ることができるだろう。

武力措置を前に宮中では王に関係した人々の捕縛が相次ぎ、一度でも王に見参のこなつた者たちはくまなく搜索をされた。この取り調べの恐ろしき様子に、九条兼実は病死でもした方が

まだましであると書き残している。

そしてこの二十一日深夜、頼政は新院高倉上皇の警護の任を終え邸宅へと戻つてきた兼綱、仲家らと合流、わずかな郎党達のみを引き連れて近衛河原の屋敷を發った。

渡辺党の中でも長らく家に仕え、信頼のおける選りすぐりの猛者、授、省、唱らを連れて少人数ごとに分かれ、夜闇に紛れて馬を走らせる。一族郎党は皆頼政について行くことを願つたが、頼政は頑としてそれを禁じ、次男の頼兼、末子の広綱ら、また伊豆に残る仲綱の子有綱と彼らに従う郎党達は、それぞれの務めに残すこととした。

頼政らは梨ノ木の邸宅に先行していた仲綱らと合流、その日のうちにみやこを抜け、空が白む前には園城寺へと辿りついたのである。

開けて二十二日。源頼政以下五〇騎が王の元へ下つたという報せにみやこは騒然となつた。摂津源氏の源三位頼政、その息子仲綱らの平家への忠臣ぶりは広く知られていたからだ。平家全盛のみやこにあつて源氏として冷遇されながらも一心に勤め励み、同じ源氏である伊豆の頼朝の動向を逐一報告するなどして尽くしていたことは周知である。

清盛に媚びて三位を得たことから、公然と頼政を大四位などと貶める者たちまで居たほどだ。そんな中での翻意は、あまりにも突然であり、朝廷、平氏陣営、畿内一円の武士においてもまさに寝耳に水であつた。

翻つてみれば以仁王の企図が判明した十五日は、後白河院が鳥羽殿から八条坊門烏丸邸に遷った日であり、数日前に兵を率いて上落していた清盛が福原へと帰還した日でもあった。清盛が再びみやこへ戻るのは全てが終わった二十六日の事である。この絶妙の機会を狙い澄ましたかのような挙兵は、間違いなく頼政の企図したものであり、前述の動向も合わせてこの時点において頼政は完全に平家を出し抜いていた。

頼政が鮮やかに雌伏の仮面を脱ぎ捨て、王に合流して平家への対立を明らかにした事で、以仁王には摂津源氏という軍事勢力が彼らに加担していたことが明らかとなった。王が令旨と言う手段で全国各地の源氏に決起を促していたことから、既に事態は内乱と呼ぶべき段階にまで達してしまつた。

これが、世に言う以仁王の挙兵である。



しかし、鮮やかなまでに平家を翻弄しながらも、頼政には予想外の事態がいくつも起きていた。誤算の一つは、行家によって王の令旨の存在が広く知れ渡ってしまったことである。

全国の源氏にこれを伝える役目を受け、行家は感涙と共にみやこを発つたのだが――彼の

つての住まいである熊野の別当湛増が行家の動向を察知、新宮に滞在していた行家を襲撃したのだった。これによって王の令旨の存在が平家に露見してしまった。この令旨こそは今回の決起において最重要機密であり、何に換えても守り抜かねばならなかったものなのである。

事前に打ち合わせた手筈では、以仁王の呼びかけに呼応した全国の源氏達が一斉に日付を示し合わせ、同時に兵を挙げることで平家の戦力を分散させる。さらに神社の協力をもってみやこの混乱を誘発させた後、そこに頼政らが精鋭を率いて六波羅を急襲。平家総大将の宗盛以下、重鎮たちを討つというものであった。

それが行家の不手際で不可能となり、さらに王の意図までも漏れ知られたことから、この時の決起はもはや他に手段なく、追い詰められての苦し紛れのものであった。

また、以仁王のお考えも頼政にとつて誤算の一つであった。

そもそも王は平家の圧力から逃れるため幼くして仏門に入られ、二度の大乱をひっそりと生き延びたお方であるが、いまでは還俗し八条院暲子内親王の猶子となっていた。

俗世にお戻りなされたのは、やはり皇位継承が王の悲願であったためである。が、宮中の権勢をほしいままにする平家隆盛の中でそれは難しく、母が女御でもなかったことから、王は長らく親王宣下すら受けることができずにいたのである。

それでも王は、いつか自らが親政を取りこの国を導くことを夢見て、力なき身の上を嘆いて

おられた。あるいは、そこに新宮十郎行家らの大望を抱く奸臣が不埒な事を吹き込み、王の心を乱したことはあつたかもしれぬ。

いずれにせよ、ながらく己が外様とされたことの反動からか、王はあまりにも苛烈であつた。

以仁王は決起にあたり、御自身を「最勝親王」と称して事にあつた。これは臣籍降下の宣下をまるで無視したものであり、今の帝や院に激しい対立姿勢を示したものである。

そしてまた王が全国に発した令旨は、四百字余りにおよぶ酷く攻撃的で烈しいものであつた。清盛をさして国を亡ぼし、百官万民を悩乱するといひ、皇院を幽閉し、国の財を盗み、公領を私掠する、帝皇を違逆し仏法を破滅する古代を絶する者とまで、ありとあらゆる罪業を並べ立て糾弾していた。はたしてこれを見て憤激せぬものがあるだろうか。

もつともこれはまだ、皇統の中枢より遠ざけられ、若き日々を懊悩の中に過ごされたゆえの怒りと納得することもできる。地方に伏せる者たちの心を奮い立たせ、決起を決意させるにはこれほどの激しい言葉と若き情熱が確かに必要かもしれない。

しかしその後にく、清盛に与し、王の令旨に背くものにあつては配流追禁の罪を科すといふのは同心を求めるにはいくらなんでもやり過ぎであるし、

『勝功有るに於いては先ず諸国の使に預かり、兼ねて御即位の後、必ず乞ひに随ひ勸賞を賜ふべきなり』

の一文は、どうあつても看過できぬものであつた。

平家の世を過ちと糾弾するのであれば、それを正すべくして行われる挙兵は、あくまで義心によるものなければならぬはずだ。相手の悪行を追及するのであれば、たとえ形の上だけでもそれは保たねばならぬ。そこに對し協力者に報奨を約束することは、それを餌として利のみを求める輩を呼び集めることに等しいし、なにより以仁王自身を同じく、私心にて帝位を望んでいると取られても他ならない。

たとえば自分が伊豆に隠居している立場だったと、頼政は想像する。行家よりあの令旨を伝えられ、その全文を読んで果たして、王のために一心なく決起を決意できるであろうか。平家への不満を十倍に膨らませてみたとしても、王の言葉は危うい誘いには違いないのである。

——ましてや、あの聡明な頼朝や、純朴なる義経がそれをどう思うのだろうか。どうにも不安ばかりが頼政の胸を占めていった。

「どうでしょうか、駒王であれば……」

同じことを考えていたらしいのが、仲家である。彼の弟、駒王丸は木曾にて義仲と名乗り、源氏の末として勢力を広げているらしかった。

「元が自分と同じ熱しやすい性格。まして父や母とも離れ、木曾の田舎で育つたとなれば、中央の政治など知りもしますまい。あるいは王の令旨が己に届いたというだけで感涙し、ただち

に決起となりかねません。……行家殿もそれを考えて、まずは伊豆の佐殿の元へと参られたのでしょうが」

そも、令旨とは皇太子か皇后の立場でなければ発することはできない。親王宣下の無い以仁王がそのような振る舞いに及ぶのは、身分を偽り世を乱すことに他ならなかった。

王としては己こそが正当なる帝であり、いまの平氏の手による傀儡の帝こそが陰謀によってつくられた偽物であるという主張なのだろうが、強行したとしてどれほどの協力が得られるのか、効果は疑わしい。

また、この令旨を触れまわる役目を与えた行家に対し、無官のままでは誰も信じぬであろうと王が独断で蔵人の位を赦したことも、頼政には受け入れがたいことであつた。官位の勝手をした王が平治の乱の折の藤原信頼の姿を思わせ、またそれに疑念を持たず、ただ感服して平伏する行家に、一抹の不安を覚えたのである。

果たして、その不安は徐々に的中しつつあることに、頼政は決起の先ににわか立ちこめる暗雲を眺める思いであつた。

頼政も挙兵にあたり、ただ無計画に動乱の中に身を投じたわけではない。この日に備え様々な手段を講じていた。平家に挙兵の意図を悟られぬよう、徹底して秘密の関係を隠匿したのもその一つだ。

頼政以下摂津源氏はみやこを守る武士団の要の一角である。それが突如翻意を見せたことで宮中、六波羅は大混乱に陥った。深く信頼し、無二の忠臣だと見ていた頼政が敵に回り、しかもそれは平家の思うはるか以前からのことであつたのである。この上には彼の他にも翻意を隠して陣営にあるものがあるのかもしれないと疑心暗鬼に陥り、平家は不審な動きがないかと自らの軍勢を調べ尽くし、その本心を確かめねばならなくなつた。

また、けして多いとは言えぬものの宮中で検非違使や宮中警護の要所にあつた摂津源氏が一斉に姿を消し、さらには大事な兵録、名簿、伝達のための手紙を焼いて行つたことが指揮系統にも大きな打撃を与えていた。兵団と言うものは一朝一夕に用意し動かせるものではない。たとえ兵を千人万人と揃えようと、個々がばらばらに動いてゐるのではただの烏合の衆。ただ千人の人がいるというだけだ。

これを命令によつて統率し、兵站を行い指揮を伝達して動かすことで、千の兵はひとつの軍団となり、戦略をこなせるだけの戦力となるのである。一旦ずたずたになつた編成を組み直し、指揮系統を立て直すには時間が必要であつた。それが大きな軍となればなおさらである。

そしてまた、王に園城寺へと脱出させたのもそのひとつである。園城寺は元来、源氏と関係の深い寺であるが、頼政にあつてはその関係はさらに一段深い。頼政の叔父にあたる者がこの寺に入つて周定坊行延と称し、また頼政の娘が産んだ子はこの寺に入つて桂園院を任されてい

た。摂津源氏とは並々ならぬ信頼で結ばれた寺なのである。

寺社が平家の専横に対して反発していたことが広く知られる中で、頼政は決起の拠点としてこの園城寺を選んだのにはそうした理由もある。また、寺社は常より法論によつて同門や他の山門とも激しく争い、武装した大衆同士の激突も日常茶飯事である。その守りは並の貴族の邸宅などよりもよほど堅い。さらには俗世と隔てられて多くの僧侶が暮らすだけあって、外部を包囲されて隔絶されてもひとつの町として存続が可能なのだ。

またこの頃、寺社への攻撃は仏罰を招くと広く信じられ、一般の武士は寺社への攻撃をためらう傾向があった。これも頼政の目論のひとつである。こうして園城寺に濠を築き、逆茂木など植えて武装化し、守りを固める手はずであった。

これに、人知れず六波羅で奮戦した稀代の化狸、団三郎の魅せた大化術や、みやこのなお深き闇に暗躍した藤原摂関家とその守護者紅子、陰陽寮の争いも関与し、時流をつくらんとしていたことは言うまでもない。

だが、そうしてまで頼政らが腐心し、稼いだ時間は、あまりにも無為に空費されていた。十八日は、平家が南都北嶺の寺社に使者を派遣して王への態度を調べさせた日であるが、この日同時に園城寺からも延暦寺、興福寺に向けて援助協力を求める牒状を送った日でもあった。この牒状で園城寺は延暦寺に対しては同じ天台宗の教門に呼び掛け、過去の遺恨を捨てての共

同を。興福寺に対しては清盛を王法・仏法破滅の首謀者と責め、惡逆の徒を退けることを求めている。

しかし遠く南都の興福寺がこれに同調し、清盛を平家の糟糠、武士の塵芥と評して平家への不満をぶちまけ、共同を示したのに対し、近く北嶺の延暦寺は本来自分達より分かれた、言わば『分家』の園城寺を並べて車の両輪とたとえたことに不満を露わにし、返牒も返すことなかったのである。ここに前後して、平家より延暦寺に近江米二万石、北国の織延絹二千疋が届けられ、彼らは完全に調略されてしまった。

さらには、園城寺では大衆を交えた評議が激しく紛糾し、軍略の決定を著しく引き伸ばされていた。頼政が平家への反抗を深く隠していたように、園城寺にも潜む親平氏勢力が密かに行動を開始していたのだ。彼らはいたずらに軍議を長引かせ、頼政が稼いだ貴重な時間を空費させていった。

以仁王は確かに高潔であり、皇尊のお血筋に相応しい御方であつたが、ながらく政の表舞台にあがることなく、世の動静にはけしお詳しくなかつた。王はけして専横とならぬよう、頼政や近臣の意見にも等しくお耳を傾けんとされたが、それは同時に反対を押し切つて己が正しいと信じる判断を下すという事に慣れていないことをも示していたのである。王は臣下の言葉すべてを等しく取り扱おうとし、それが帝たるものの在り方だと信じておられたのだろう。

平家に近しい園城寺の僧侶たちはそこに付け込んだのだ。かれらは素知らぬ顔をして軍議に馳せ参じ、あれこれと不確かな情報、定まらぬ言舌を持つて王を惑わし、時に犠牲を顧みず果敢に攻めるべきだ、いや六波羅は難攻の地、落ち着いて時を待つのだと正反対の言葉すら弄してまで、軍議を混乱させ、長引かせたのである。

そうなれば、戦の指揮などしたことのない王は不安に思われ、迅速な行動を軽はずみな短慮であるとお嫌いになり、一所に留まってただ平氏の動向を傍観することを、時流を読み、機の熟すのを待つ良策とお考えになつてしまったことも仕方のないことであらうか。

頼政はこの場において保元の乱、平治の乱の出来事を引き合いにし、六波羅の軍勢がまとまり切る前に出撃し、打撃を与える即時の行動こそが重要であると主張したが——足並みを揃えて動かねばならない園城寺大衆の賛同が得られず、それは退けられてしまった。

実際に参陣した者達の中には、寡兵で無謀にも平氏撃つて出る事は愚策と考える者も多く、南都興福寺の援軍を待ち、一斉に六波羅に攻めのぼるのが良いという意見は根強かった。いかに武装し、日頃他の寺社と闘争を繰り返しているとはいえ、彼らは所詮仏門。荒くれ者に違ひはなく、軍事、戦略の専門家ではなかったのである。

頼政の進言は退けられ、彼は無力感に打ちのめされた。

「——はは、ははは。俺が死力を尽くしたつもりで足掻いて、顛末はこのような有様か。これ

では、六波羅に攻め入り、木ノ下を救うなど、まるで夢物語であつたな」

ひとり、伽藍とした本堂で、肩を震わせ老境の父がそう漏らすのを、仲綱はこそりと聞いていた。決起以来、王と共に園城寺にあつては私事を表に出さぬよう堪え、逸る本心を押し殺し、ただ以仁王の忠臣、摂津源氏を率いる源三位頼政となつていた彼が、ついぞ本音を漏らした瞬間であつた。

「……なんと愚かなこの身よ。この上は、息子達を巻き込むことなぞなく、我が身を投げ打ち、ひとり六波羅に攻め入るべきであつた。いつもそうだ、瑣末なことばかりに頭を巡らせ、俺は本当にしたいこと、すべきことから目をそらしてばかりだ……」

せめて、せめて宗盛に一当て食わせてでも、ぬえを救つてやるべきだったのだ……！」

それは——摂津源氏の長老や、源三位の名をかなぐり捨て、素のままの源頼政が一人の男として、最後に叫んだ己の後悔であつたやも知れぬ。

頼政の苦悶とは裏腹に、評議はまるで結論を見ぬままにだらと長延びた。秘密裏の決起と造反という、頼政が稼いだ貴重な時間はあつという間に失われ、以仁王達ついに園城寺を出ることのないまま三日もの時間を無駄にしてしまった。

その間に、平氏は各寺社勢力、また畿内の勢力への調略を終えていたのである。彼らは園城寺の中にこもる勢力がけして一枚岩ではなく、また集まった戦力の中で、まともに戦のできる

武士は精々が頼政の率いる五、六〇騎余りである事を看破していた。

園城寺という俗世と切り離された寺社の領地に、こぞつて集う反平家の武士や大衆たち——はじめのうちこそその噂に踊らされ、かの地に数千騎の軍勢が集結していると怯えていた平家の者達も、時間と共に園城寺の実態を把握し、徐々に落ち着きを取り戻していったのだ。

総大将となつた宗盛は平家の息子の中から将を選別し、彼らに十分な兵を用意して、己に恥をかかせた摂津源氏頼政への復讐を誓つた。

「ふん、弓引きしか取り柄のない摂津源氏の田舎侍め、この宗盛が平家の戦というものを見せやろうではないか」

この動きに対し、以仁王は再三に渡つて檄文を飛ばし、他の寺社勢力、また近隣の豪族へ応援をあいだが——延暦寺はむろん、他の勢力も中立を保つたまま、ついに新たな賛同者は現れなかつたのである。当初は勢いの良かった園城寺大衆も、潜む親平家勢力の工作で一人また一人と分断され、ついには王と頼政は寺の中ですら孤立してしまつたのだ。

無情に過ぎる時間の中、二十三日の夜になって、ついに頼政は王に進言した。

「かくなる上は、南都へと逃げ伸び、再起を測る他にありませんまい。平家に近しき北嶺に比べ、南都は平氏の手の及ばぬところ。時がたてば宮の發した令旨が行家様の手によつて全国へと届けられ、各地の源氏が一斉にみやこへと攻め上つてまいります。さしもの平氏といえどもその

全てを同時に相手にすれば、隙も生まれましょう。その時こそふたたび兵を挙げるときです」
 六波羅の前に千載一遇の機会を無駄にして、苦渋の決断、血を飲むような思いであった。

頼政に諭され、ようやく現状を理解して悔しさを露わにする以仁王のお姿を目にしながら、
 頼政は己の言葉の空虚さに震えていた。南都に逃れての再起など、この場の誰もそのようなこ
 と信じては居ない。

いや、あるいは王も頼政も、心のどこかでは一分や二分ばかり、そんなかな希望を残し
 ていたかもしれない。……せずには居られなかったのだ。

頼政達は僧や郎党、家人のうち老いて動けぬもの、満足に戦えぬものに暇を与えてその場に
 残し、王と側近を守る精強な衆徒のみを選抜。元々連れ来た五〇騎とその随伴だけを伴って園
 城寺を脱出した。時に二十四日の昼であった。夜明け前に発つ予定のところを、撤収に余計な
 時間を費やしすっかり日も昇ってしまったのである。ここにも寺内に潜む新平家勢力の工作が
 見え隠れしていた。

しかし事ここに至っては夜を待つなどと悠長なことは言っておれず、出立は即座に行われた。
 以仁王を守りながら、頼政らは一路、南都の興福寺を目指した。

瀬田川尻を西の山路へと分け入り、笠山越えの難路である。折からこの数日は陰晴定まらず、
 細雨のちらつく悪天候であった。山越えの道もぬかるみ、馬上に不慣れな王は何度となく馬を

滑り落ち、六度も落馬なされた。はじめは己を奮い立たせる言葉を繰り返していた王であるが、半日もするとなぜこのようにとわが身を嘆くお言葉が増え、夜になる頃には何も口にできぬほど疲れ果ててしまっていた。もとより、宮の中でお育ちになった王に長らくの行軍など不可能な話であるのだ。それでもなお、頼政には王を励まし、南都への道を急ぐしかできなかった。仲綱はつねに宮の傍にあつて、献身的にそのお身体を支え続けた。

やがて丸二日、昼夜の行軍を険しい山野に続けて二十六日の朝。疲れ果てた一行がついに山を越え、長坂峠より宇治の里、平等院の麓や川縁の柳を見下ろした時のことである。

「おお、あれに見えるは宇治の川、あそこまで下れば奈良までは半日もかからぬ！」

兼綱がみなを鼓舞するようにそう言った時。頼政の目は同時に宇治の川を沿う道に兵馬を走らせる軍勢の一团を認めていた。平家の赤旗を掲げ、土を蹴立てて走る彼らは、頼政らが平等院への到達を阻止せんと疾駆しているのである。

「皆よ！ 六波羅の軍勢はいまや宇治に迫つておる！ 宇治橋を塞がれてはもはや南都へ下ることも、後に引くこともできぬ！ 先を急げ！ 後はこの峠を下るばかり、もう一息ぞ！」

頼政は先頭に立つて声を張り上げ、馬を飛ばして峠道を駆け出した。以仁王を囲み守るように仲綱、仲家がそれに続き、摂津渡辺党の五〇騎は雪崩を打って山を駆け下る。

徒歩の郎党達や、険しい山道をなお同道してきた剛力の荒法師たちもそれに続いた。彼らも

また頼政らと過ごした時間はわずかながら、生死を共に誓い、平家へ一矢報いんとする同志であつたのである。

「誰一人、置いて行つてはならぬ！ 隣のを助け、駆け乱れることなく先を急げ！ いずこに敵兵が伏せているとも限らぬ、氣を抜くな！」

最後まで供に従わんとする一門を率い、老将は走る。我が子たちの手を引いて、死地を突破せんとする者の氣魄であつた。



辛うじて、宇治橋へと到達したのは頼政らが先であつた。一人も欠けることなく険しい山を下りきつた彼らは、直ぐさま人馬の足音を百雷のごとく轟かせて橋を渡り、宇治川の西岸に源氏の白旗を掲げ、陣を張つたのである。

「残さず橋板を剥がせ！ 橋を断つて六波羅の兵を押し留めるのだ！」

折からの悪天候、宇治川の水は増水していた。濁流を卷いて流れる川はそうたやすく渡れるものではなく、周囲に馬の渡れる橋はない。橋桁を残して板を引き剥がし、それらを濁流に放り込み、橋の半分ほどを破壊したところで、東方に鬨の声が湧き起こつた。

平家の赤旗をはためかせる、平重衡、維盛らが指揮する五〇〇騎ばかりである。かくして宇治川の対岸を挟み、ここに合戦が切つて落とされた。

このとき、源三位頼政は御歳七十七。長絹の鎧直垂に科皮威の鎧を着、腰にはかつて帝より拝領した黒漆塗糸巻拵の太刀獅子王を刷いて、手には最も馴染む滋藤の弓。その日を最後と覚悟の上か、敢えて兜は付けなかった。嫡子仲綱は赤地錦の直垂に黒糸威の鎧を着けてその隣に並ぶ。彼もまた弓を強く引こうとし、兜を着けることはしなかった。

ざあと東岸から矢が射かけられる。平家の軍勢は数を頼みに頼政らを押し潰さんとしたが、肝心の橋が落とされているので思うように近づけぬ。橋の上では十分な兵量を振るうこともできず、ただ一騎打ちの競り合いとなる。また、対岸まで矢を射通すのは並大抵のことではなく、届いても精々へろへろと楯をつつくばかり。

一方頼政らの陣営は、主に負けず劣らずの剛弓を誇る渡辺党の精鋭である。授、省、続らの射た太矢は、対岸までやすやすと届き、鎧でも止めることはできず楯すらも深々と貫通し、防ぐことはかなわない。

さらにそれに呼応して弓を射るのは、筒井の浄妙明秀、五智院の但馬、大矢俊長といった園城寺の豪傑である。彼らは名のある武者にも負けず劣らずの剛力と、鍛えられた業前をもつて、橋に取りつかんとする平家の兵を射落とした。彼らは橋桁の上を飛び走り、飛び来る矢を薙刀

でもって次々叩き切り、太刀を振るい礫を打ち、組打ちを挑んでの大暴れを繰り広げた。それを見た渡辺党の者たちも、我も我もと壊れた橋の上を駆け、敵章の首を討ち、あるいは強敵と刺し違えて川に飛び込むものも居た。

頼政以下五〇騎はひとりたりとて弱兵はなく、一人でもって五人を相手し、十人を屠る活躍をしたが、孤軍奮闘する頼政らに対し、時間と共に宇治川東岸の平家には増援が到着し、その数は五倍にも十倍にも膨れ上がる。その趨勢は徐々に敵陣に傾いてゆく。

それでもなお、頼政らは奮戦した。死を顧みることなく、生の色を請うことはない。中でも源大夫判官と呼ばれた兼綱は白馬を駆って走り回り、その弓を射ればその鋭さはかの八幡太郎義家と見まごうばかりであったという。

そして。なによりも凄まじきは、七十七の老境にありながらなおその鋭さをわずかも衰えさせぬ頼政の弓である。その力強さにおいてはけしてかの為朝、あるいは渡辺党の者たちが射る剛弓に及ぶものではないが、神速にて弓弦を弾いて放たれるその狙いの精確さたるやまさに鬼神の如し。ひようと鋭く空を裂く風斬りの矢羽根が鳴れば、鎧の隙間、脚の付け根、手首を射抜かれて平家の郎党達が次々に川面に落ちてゆく。はるか対岸の岸より、戦場の全てを見通して放たれる弓は、頼政が弓弦を鳴らすたびに戦場より確実に一人の命を奪った。

「こ、これは……!」

「頼政……源三位頼政か！」

渡河を試みていた騎馬の一団がざわつき、足並みを乱す。すかさずそこに立て続けの五矢を射かけ、頼政は一人でもって彼らを押しとどめた。落馬した者たちが濁流の中に消えてゆく。

「ええい、何をしておる！ あのような老いばれに良いように掻き回されおって！」

敵陣にて憤るのは平家の大將、重衡、維盛の二人である。彼らはまだ若く、そして父や祖父のように戦に出たことのない者たちであった。この国を支配し、繁栄の後に生まれた、生まれながらの平家。ゆえに繰り返された戦乱、歴戦の中で鍛え上げられた武者達の戦いなど、目にした事がなかったのである。

（清盛入道よ。その子らが、お主の作りたかった世に生まれた者たちか）

わずかな郷愁を胸に、頼政は大きく弓を引き絞り、力の限りに矢を放つ。一際鋭く放たれた白矢は、平家の大將たちのすぐそばを掠め、近くの柳に深々と突き立った。

「ひ、ひい!? こ、このようなところまで、矢が、矢が！」

「ぬ、鶴じゃ……鶴退治の頼政じゃ！」

大勢の護衛に守られ、すぐごと戦場の後ろへと下がってゆく二人の若者。頼政はただの一矢にて、敵の大將とその近臣数十名を戦場より引き離したのである。

無様な姿を晒す重衡、維盛を見降ろし、頼政はふと口元をゆるめた。

いまや敵陣には動揺が広がっていた。平家の赤旗がおののきに震える。

辟邪の武、摂津源氏、源三位頼政。

かつて、二度に渡り宮中に現れては、みやこの夜に空を舞い、不気味な鳴き声にて帝を脅かしたばかりの——鶴を、黒雲の中よりその弓で射落とした英雄。

この宇治川を挟み、鶴退治の英雄と対峙していることに、ようやく彼等は気付いたのである。やにわに浮足立った平家の陣へ、頼政はさらに矢を放った。仲綱、兼綱もこれに続く。たちまち陣の一角が崩れ、逃げ惑う兵たちが宇治の川面へと落ちてゆく。

「——役に立ったな、あの茶番も」

ふと可笑しくなり、頼政はいつしか笑っていた。

三十年あまり、ずつと怯え、悔いながら装ってきた虚構の畏怖である。それがなお、こうして窮地に陥った頼政らの力となり、押し寄せる敵を食い止める役に立とうとは。

頼政はいよいよ高く声を上げた。

「皆、奮起せよ！ 敵が数千とて何するものか！ こちらにこの頼政率いる摂津源氏一門あれば、十矢にて百の兵を討ちとつてくれん！ それ、十度も射かければ敵は総崩れ、そうあれば間もなくここに駆け付ける南都の援軍と合流し、ふたたびみやこへと攻め登らん！ 平家の大将、重衡、維盛はあの向こうぞ、この場にて討ち取り、王に我等の武勇を示す時ぞ！」

白旗の下、朗々と響く老将の声に、おおっと関の声が重なり響く。徐々に橋の上を追い込まれ、じりじりと岸へ追い詰められながらも、陣営の士気は高く、戦の吠え声はいつまでも響かぬばかりに轟いた。

皆を鼓舞せんと声を枯らさんばかりに叫び、頼政が射る弓はなおも鋭く敵陣を裂いた。橋げたを超えてくる郎党の脚を撃ち抜き、弓を引き絞ったその右手を貫く。矢が尽きれば郎党より箠を受け取り、倒した平家の骸から奪ってまた射る。その全ては一矢も損じず、一体幾百の敵兵を射抜いたか。

眼下は増水する宇治川、落とされればたちまち鎧が重しとなって沈み、濁流に飲み込まれてゆく。狙い過たず急所を射抜く源三位の弓に助けられ、五十と千の戦いは二刻にもわたって続いたのである。

しかし。長らく善戦し、持ちこたえていた頼政達であるが、それでも多勢に無勢。園城寺より夜を徹しての山越えの強行軍の疲れもあり、ついには一人、また一人と討ち取られ、その骸を河原に晒してゆく。射落とされた郎党の死体が橋げたに引つ掛かり、頭を割られた悪僧が濁流の底へと飲み込まれてゆく。流れた血で川面がほの赤く染まり、その激戦を物語るようだった。

戦局を変えたのは、平家の郎党、足利忠綱の進言であった。橋を挟んでの激戦に攻めあぐね

た者たちが、迂回路を探そうとするのを押しとめ、馬を筏と組んで激流を堰き止め、激しく荒れる宇治川の流れを渡河したのである。新手の坂東武者三〇〇騎がこれに続き、ついに頼政達は橋のたもとの陣を追いやられ、平等院へと引かざるを得なくなった。これを見て平家の知盛が全軍に渡河の号令を出し、数千の軍勢は雪崩を打って激流に飛び込んだ。

乱戦となった平等院門前の戦いでは、頼政は王を逃がすべく先行させ、自分はその場に踏みとどまって、帝より拝領した黒漆塗糸巻の大太刀、獅子王を振るって文字通りの獅子奮迅、防ぎ矢を雨と嵐と射かけ、平家の軍勢に抗したのである。

だがもはや、こうあつては戦の趨勢は決したのも同然であつた。

「父様、どうやらこれまで。——お先に参ります」

「親父殿。今日までありますがどうございました。思えばあの日、親父殿に拾つて頂いて以来、この兼綱、碌な恩返しもできずにおりましたな。……いまこそその時です。では！」

仲家は郎党達と共に散々に戦い、幾多の敵を討ちとるもついに討死に。兼綱もまた、父を守らんと單身馬を駆つて敵陣に呐喊し、最後には平家の猛者十四、五騎と折り重なるようにして命を落とした。

授、省、仕、与、唱、続といった渡辺党の名だたる猛者も、次々に打ち取られていった。

皆、自分にはもつたないほどに強く、忠義にあふれ、最後を共にするに相応しい、素晴ら

しい部下たちであつたと頼政は思う。

頼政も激戦の中で幾矢も傷を負つていた。中でも酷いのが、左の膝頭を貫いた矢によるものである。彼はいま一人、脚を引きずつて平等院の奥へと向かつていた。

老境にあつて険しい山野を越えて、ほぼ一睡もないままの強行軍。そこから半日余りの激戦を戦い抜いて、幾百の矢を射たとも知れぬ。もはや彼の身体にはわずかな氣力すら残つておらず、後は死してなお恥を晒すことなく、静かに自害をする心算であつた。

「父上」

か細い声が聞こえる。振り向けば、釣殿の下に満身創痍の仲綱の姿があつた。額には脂汗を浮かべ、顔は蒼白。腹と肩の傷からはどくどくと血が溢れ、もはや息を繋いでいるのが精一杯と見えた。それでも仲綱は、懸命に笑顔を作り、父に微笑むのである。

「長い間、お世話になりました」

「仲綱……」

頼政は喉を震わせる。たとえいくつになつても己の息子だ。その死が悲しくない訳がない。傷の痛みも忘れ駆け寄ろうとした頼政だが、仲綱は震える手でそれを押しとどめた。

「後悔など、ありません。……摂津源氏に誇る古今無双の武勇、源三位頼政の息子として生き、こうして父上のために戦つて死ねたこと、なによりの誇りに思います」

息をしているのも辛いだろうに、一息にそう言いきつて、仲綱は手にした短刀を己の頸へと突き突ける。

頼政はそれを、ただ、呆然と見送るばかりであつた。

「決起に応じた者は私で最後。……父上、どうぞ、この上は父上の思うまま。父上の本心からのお望みを、果たしてください」

「な、仲綱、お主は……！」

「どうか、木ノ下を——救ってやってください」

最後まで、笑顔で言い切つて。仲綱は己の手で首を掻き切り、その場に事切れた。唇を噛み千切り、頼政は叫び出したいのを必死に堪える。

（ああ）

残された頼政は一人、天を仰ぐ。

見上げた向こうでは、以仁王が側近と共に立て簞もつていた堂が煙と炎を上げ始めていた。如何に若さに任せて苛烈にあらうとも、やはり貴き皇の血筋にお生まれになったお方。王のお優しき心は、これ以上の戦乱の前に耐えきれるものではなかったのだ。

「これまでか」

ひとり呟き、頼政が振り返る先。

赤旗を翻し、雲霞のごとく押し寄せる平家の軍勢が、平等院の門を押し破つてなだれ込んでくる。雷鳴のように轟く兵場の足音、鼓膜を震わせる鬨の声。閃く太刀、薙刀、そして雨と放たれる矢。

(いや)

頼政は残り少ない矢を弓に番え、彼らに向き直る。疲れ切った身体は、朝から晩まで、生涯を通じて最も繰り返した動作を、繰り返していた。

終わりではない。これで最後であるからこそ——頼政にはすべきことがある。わずかに口髭を震わせ、老将はきつと目を見開く。千を超える軍勢に、たった一人弓を引いて、一歩も下がることなく対峙する。

「源三位頼政——参る」

ぎりりと引かれた弓が、鋭く放たれ——平家の陣へと叩き込まれた。



雨が、降っていた。

さあざあと、ごうごうと、うねる濁流がどこまでも、どこまでも、宇治の大地を轟かせる。

莊嚴な平等院の威容は、血と煙と戦の土塵にまみれ、汚れていた。

その汚れを押し流さんばかりに、雨が降る。曇天の中渦巻く黒雲が、風をもって大地を薙ぐ。どこまでも灰色の景色の中を、雨が激しく打ちすえていた。

——なんだ

頼政はぼうと目を開けた。酷く全身がだるい。手足がまるで動かず、目玉を動かすのも恐ろしく億劫だ。腹から下がやたらに熱く、脈打つように蠢いている。自分の転がる水溜りがほの暖かく、やけにそこに浸かっているのが心地よく感じられた。

ちらと脇を見れば、切っ先の半ばほどで折れた獅子王が無惨に転がっている。帝よりの名譽も、辟邪の武の名譽も、もはや全てが潰えていた。

(どう、なった……俺は)

負けたのか、と口にしかけ、それ以外にどんな結末があるのかと、思い直して一人自嘲する。いや、もうその苦笑も声になってはいなかった。胸を動かすたび、頼政の喉からはひゅうひゅうとか細い息が漏れるのみだ。

ぼたり。頼政の頬に雨雫が垂れる。

それが妙に暖かい事を不思議に思い、頼政はようやく、己の片目が空いていない事に気付いた。熱をもった眼窩には、何か硬いものの感触がある。

どうなっているのかは分からないが、あまり直視したくない状態になっているのだろうと、他人事のように理解した。

そして、ちやうど見えなくなっていた死角に、小さな影がある事にも気付く。

それは黒髪の、まだ幼い少女のものだった。着崩した墨染の衣の下に全身を膏藥や包帯に塗れさせ、それでも懸命に頼政の声を呼び、その肩にすがって必死に揺すろうとする。

彼女の身体が陰となり、頼政の顔には雨が降り注いではいなかったのだ。かわりに頼政の頬に落ちる雫は、見開いた娘の目からこぼれ落ちる、大粒の涙だ。

——良かった

その姿を認め、頼政はわずかに微笑んだ。実際には口元がほんのわずか、動いただけだったが。できることならその身体を抱きしめ、声をかけてやりたい。そう思うが、もう自分の身体が自由にならぬことを知り、頼政は再度吐息する。

（無事だったのだな、ぬえ）

焦点のぼやける瞳が、一瞬だけ像を結ぶ。そこには泣き喚く、小さな少女の姿。彼女は、齒を食いしぼり、唾を飛ばして、叫んでいた。

「馬鹿だ、大馬鹿だよ、頼政はっ！」

こうこうと唸る風の中、少女の慟哭が響く。

もはや命の終えようとしている男の隣に、ただただ、すがって哭く無力な姿で。

「わたしは鶴だ！ たくさん、たくさん人間を殺した、正体不明のばけもの、鶴なんだぞっ!!」
尖った歯を剥きだし、ぬえは鳴く。悲しみと苦痛を叫ぶ声で。

「妖怪、妖怪なんだっ。人間なんかじゃないのに、だから、わたしは、何されたって平気だったのに！　なんで、頼政が、こんな、事のためにっ……!!」

いつまで、いつまでこんな事をと、泣き叫ぶ。

ああ、ああ。この娘のどこが妖怪だ。どこがばけものなのだ。
こんなにも無力で、一人鳴くだけの、孤独な少女ではないか。

(すまない)

頼政の謝罪はなんのためのものであろう。

彼女を置いて先に死ぬことか。宮中の陰謀に少女の運命を狂わせてしまったことか。彼女を口実に争乱に身をゆだねたことか。それに巻き込み、むざむざと殺してしまった一門、息子達への悔恨か。

あるいは、ついに勇気を出せぬまま死んでゆくことか。

「――ぬえ」

最後の最後、残るわずかな力を振り絞り。震える唇に、わずか、小さな言葉を乗せて。頼政

は力の入らぬ手で、ぬえの小さな手のひらを取る。

「埋木の 花咲く事も なかりしに」

頼政の意図を察し、ぬえははつと目を見開いた。冷たく凍えた紅い唇を震わせ、言葉を紡ぐ。

「……身のなる果は あはれなりける」

かすれた少女の声が重ねたその返しは、果たして、頼政の想いに叶っていたのだろうか。

頼政はただ、にこと口元を緩め、ぬえを見。

「どうか——幸せに、なつてくれ」

最後に、そうとだけ言葉を残し。

摂津源氏の長老、源三位頼政は、その波乱の生涯に幕を閉じ、息絶えた。

あとはただ、ざあざあど激しい雨が降り続き、激しい濁流の音が渦巻くのみ。

事切れた老人の身体は見る間に冷え、強張って色を失ってゆく。これまで生き続け、最後に死力を振り絞って戦いぬいた事で、彼の命は灰も残さず燃えて尽きていたのかもしれない。

その骸の傍らで、ぬえはただ、肩を震わせ、俯いていた。

雨が激しく打ち据えても、押し寄せる突風に煽られても、なお、ただ、ただ、じつと

そして――どれほど時が過ぎただろうか。やおらその場を立ち上がったぬえは、紅く腫れた目元を激しく擦り、震える口を大きく広げ、べえと舌を出して叫ぶ。

「つはッ!!」

眼の前で動かぬ、冷たき頼政の骸に見せつけるかのように。

ぬえは震える声で笑いを挙げた。

「ばあ——————つか！ なあに言ってやがんだ。人間めつ！ ざまあ見ろ、ちよつと弱つたふりしてやつたら、あつさり絆されやがつて！ つは、このわたしを誰だと思つてる!? 平安のみやこに君臨する大妖怪、ぬえ様だぞ!? わたしが本気でお前たちのことなんか、想つてたわけないだろうがつ……!」

大きく手を振り、雨雲を飛ばし。何度も何度も、必死になつて顔を擦り、後から後から濡れる頬をぬぐつて、ぬえは叫ぶ。鳴くように叫ぶ。

吹き付ける雨に顔を晒して、天を見上げ、哄笑と共に叫ぶぬえの姿を、頼政のものの言わぬ眼窩は、ぼうと見上げていた。

「いい気味だ人間ッ、そのまま、そこで、朽ちて死んでいくがいいッ！ ああ、これでやつと

だ！　ようやくだ！　お前に射られたあの時の恨み、これでようやく晴らしてやったぞ！！
もうお前らのことなんか知るもんかっ！　家族ごっこもお終いだ！

みろ、これでわたしは自由だぞ、頼政！　お前はここで、おわりだがなッ！！　ははっ、あははははっ！！　あーっはっはっはっはッ！！

ああ。

なんと哀しい声だろうか。

天を仰ぎ、叫ぶ少女の頬を――隠しきれぬ光るものが伝う。

さあざあと空に渦巻く黒雲から雨が注ぎ、たぎる炎とぶつかり合う。燃え落ちる堂の煙を背に、ぬえはいつまでも笑い続ける。悲しく、哀しく、寂しく、声を震わせて。

「……おい、娘」

そんなぬえに声をかけたのは、平家の郎党達だった。陥落した堂の中にあるはずの、以仁王の姿が見えず、なおその行方を搜索していたのだ。彼らは笑うぬえに不審がりながらも、雨だまりに倒れる頼政の姿を認め、敵方の大将と知ってその首を獲りに来たのである。

鶴退治の勇名ばかりが独り歩きする中、彼等の思い描く英雄の姿は見上げるような偉丈夫であつた。泥に塗れ、一人倒れるこの哀れな老人が摂津源氏の長の源三位とは思えず、ついその骸を見逃していたのである。

「娘、聞こえて居らぬのか、退け」

郎党のひとりが応えの無いぬえに近づき、その肩に、乱暴に手をかける。敵軍の大將である頼政の傍にうづくまつて動かない不審な娘を、邪魔だと思い近づいたのだろう。これは大手柄だと頼政の骸に群がる彼らに、ぬえは一言をもつて報いた。

「――煩い」

ぎろりと。爛々と血のように輝く赤い眼を見開き。ぬえは地に転がっていた獅子王の切っ先を掴み、その端をもつて男の頸を深く斬り裂いた。

ぶつりと血を噴き出させ、屈強な男の身体が横倒しに倒れてゆく。

「な」

驚愕に眼を見開く郎党達。ぬえはそのまま、空に呼び出した無数の赤黒い鏃を彼らに向けて浴びせかけた。悲鳴が上がる。顔を押さえ、腹を押さえ、全身を蝕む呪詛に暴れ、のたうちまわる男達の悲鳴に――何事かと周囲から平家の者たちが駆け寄ってきた。

それらを冷たく睥睨し、ぬえは地面をけつて空に飛び上がった。その背中から、三対左右非対称の赤と青の羽根が飛び出す。

「これ以上、私の目の前で、その汚い面を見せるな」

ぬえは頼政の矢筒から引き抜いた矢を、深々とその腕に尽きたてる。流れ出すぬえの血が呪

詛となつて。少女の憎悪を膨らませ、幾千幾万の鏃となつて天を覆い尽くす。

雨粒よりもなお、なお多く。天が地面に叩きつけられるかの如く、降り注いだ呪詛の鏃は。その場にいたすべての者たちを、区別なく貫き、射殺した。

——恨弓「源三位頼政の弓」。

これが。これこそがあの血弓だ。伝説の、鶴を射たあの弓だ。

この国で最も優れた腕前を持ちながら。英雄に憧れ、一門郎党を守るために苦悩し、ついにその願いをかなえることができなかった男の矢だ。

ずきりと、腹に残る傷跡が痛む。宗盛達に付けられた傷ではない。そんなものはもう全て癒えていた。邪魔になつた膏藥と包帯を引き剥がし、豪雨の中にぬえは叫ぶ。

正体不明の妖怪、鶴を傷つけることができるのは、後にも先にもあの矢、源三位頼政の弓だけだ。それ以外の全ては誰も、この身を射ることは叶わない。

頼政の他には、誰もわたしを射殺することなんてできやしない。

ぬえは怒りと激昂のまま両手を握りしめ、ありつたけの力を注いでこの地を呪つた。彼を踏み躪り、寄つてたかつて殺した奴らを、残らずくびり殺すために。

ぬえの放った万を超える呪詛の鏃が、その場に居合わせた平家の武者を串刺しにする。彼等の身体が微塵に碎けるまで矢を撃ち込み、なお止めず、荒れ狂う空に身を翻して吠える。

ひゅおう、ひゅおおおう、哀しき虎鶯の鳴き声が荒天の下にこだまし、黒雲が少女の身体を覆い隠す。

響く雷鳴が閃光の中に浮かび上がらせるのは、ああ、頭は猿。手足は虎。身体は貉。尾は蛇。言葉にするも恐ろしき、ばけものの姿。

この日。

宇治の橋に現れた恐ろしき怪物と、汚した夥しい血の痕を正しく記した史書は残されていない。多くの書には寡兵ながら勇敢に戦った頼政以下の摂津源氏渡辺党の奮戦と、彼等の自害が語られるのみである。

それがけて知られてはならぬ真実であるゆえ、人の目に触れぬよう厳重に覆い隠されたのか。彼にまつわる正体不明の妖怪を見定めること叶わなかったゆえ、触れることなく放置されたか。——あるいは、そのようなもの、はじめから無かった幻想であるのか。

それを、今となつては確かめる術はない。

結 心より心に伝はる花なれば

日々賑やかでありながら、変わらず長閑な幻想郷。境界の要たる博麗神社の樹上に寝そべり、ぬえは白い喉祖猫のように反らしてくあゝ、と欠伸をこぼす。

神社の境内には、紅白幕と派手な提灯で彩られた舞台の上、観衆の声援を浴びながら舞う少女の姿があった。軽妙な囃子に乗って次々と面を被り変え、舞台を右に左に踊り舞う彼女は秦こころという面の付喪神であるという。

彼女の新作能楽とやらは里の者たちには評判であるらしいが、ぬえにはまったく面白いものと思えず、彼女は何度も退屈に欠伸を噛み殺していた。

「……遅いな、マミゾウの奴」

今朝からぬえは不機嫌だった。真面目に朝の勤行に出ると五月蠅い一輪を撒き、命蓮寺を出ようとしたところを佐渡の二ツ岩に掴まったのだ。

たまには一緒に能楽見物にでも行こうと誘うマミゾウに、ぬえが露骨に嫌な顔をする、では一輪が探しておったようだから教えてやるかのうなどと脅しまでかけてくる始末。半ば無理

やりここまで引きずられて来たのである。

そのくせ、先に席を取っておいてくれと言が残し、化け狸はすぐにどこかへ行ってしまった。おかげでもう半刻近くもぬえはひとり、興味の湧かない能舞台を見続けている。

「だいたい、なんでわたしがこんなものに付き合わなくちゃならないんだよ」

頼杖についてぬえは口を尖らせる。少し前に起きた幻想郷の宗教戦争では、神・仏・道の宗教家たちが人気を取り合って派手な戦いを繰り広げ、大層な盛り上がりを見せた。あの時はぬえも世話になっている白蓮を応援したが、結局そのお祭り騒ぎも十日も保たずに収束してしまったのだ。マミゾウが色々と余計な事をしたせいだと聞いている。いまさらお芝居で顛末を見せられたところで興醒めするばかりだ。

ここは少しばかり退屈すぎる。長らく地底に居たぬえにとつて、穏やかな日々の続く幻想郷はどうにも馴染みにくいものだったのだ。

(七百年……もうそんなになるのか)

退屈の中で、ふと沈んだ追憶の中の年月を指折り数え、吐息する。

ぬえがみやこを離れたのは、鎌倉の幕府が倒れた頃の事になる。平家亡き後、源氏の棟梁が作り上げた武士の政権というのは、結局そう長続きはしなかったのだ。

頼政の死後、ぬえはマミゾウ——当時は団三郎などと名乗っていたが——に引き取られ、妖

怪として生きるためのすべを教わった。頼政の首を、平家の手より奪い返し、東国の神社まで送り届けたのもぬえだ。正体不明の種で変装したら、神社の連中にはぬえの姿はあの猪早太に見えたらしく、どうにも噴飯ものであったが、なんとか暴れるのだけは堪えて通した。

また、マミゾウは妖力や能力だけに頼らない強さをぬえに教えた。ぬえはそんなもの必要ないと断ったのだが、マミゾウはまるでそれを聞き入れなかったのだ。

同じ妖怪のくせにマミゾウは滅法腕がたち、武術や体術の稽古ではぬえはぽんぽん投げられ、一方的に打ち込まれるばかりであった。負けたままは癪だったからむきになってやりかえしているうちに、いつの間にかマミゾウに寄せられてしまったのだ。

商人を止めたマミゾウは京都に藤寺という寺を勝手に作り、そこに行く当てのない妖怪達を招いて暮らしていた。ぬえはそこに留まって、頼政の死に始まる平家の滅亡と源氏の再興を見届けることになった。

平家の顛末はあつけないものだった。まず病であつさり清盛が死に、さらに以仁王の令旨を得た全国の源氏が一斉に放棄したのだ。木曾にいた血気盛んな義仲という男と、信じられないくらい戦の上手い義経という若者がみやこに攻め込み、平家の残党を追い出して、ついには西の果ての壇ノ浦まで追いつめて滅ぼしてしまった。彼らを指揮していたのが、後に鎌倉に幕府を開いたばかりのみにたいに頭の切れる頼朝という男だった。

けれど、平家を亡ぼした源氏が仲良くしていたかと言うとそんなことはない。乱暴者の義仲はみやこで嫌われて義経に滅ぼされ、義経は院や公家たちにおだてられて鎌倉と対立し、実の兄の頼朝に北の果てまで追われて殺された。その頼朝も病で死んだ後、今度は源氏を補佐していた北条という一族が頼朝の孫を殺して幕府を乗っ取り、我が物顔で武士の世を仕切り始めたのである。

後鳥羽上皇が幕府に反逆を企てた頃、マミゾウは佐渡に戻ると言いだした。世古長けた彼女も、人間の世に絶えることなく続く争いにいささか辟易していたらしい。ぬえもこの時、彼女から一緒に佐渡に來ないかと誘われたのだが、それも断った。

頼政が戦い抜き、その死をもつて繋いだ武士の世。もう、ぬえ自身もすっかり期待はしなくなっていたけれど、せめて最後までは見届けてやろうと思っていたのだ。

それから戦は続いた。海の方こうの大陸から二度に渡って大軍勢が襲来し、それを武士達が撃退したのも間近で見た。過ぎる年月の中にかつての気概も継がれる遺志も失って、幕府は徐々に弱りながら、それでも内輪で小競り合いを繰り返し、疲弊を続けていった。それを見て帝が再び兵をあげ、武士を追いつ落としてまた貴族の世の中を作ろうとして失敗し、武士たちがそれに反抗して——いつまでも、いつまでも、ずっと同じことの繰り返しだった。

結局、武士が自分達の手で己の行く先を決められるようになって、頼政の望むような世の

中など、来はしなかったのだ。

頼政が死んでから百五十年余りが過ぎ、ついにぬえは諦めてみやこを後にした。向かった先は地の底の地獄。死者の魂が集まる場所だ。そこにいけば、頼政の魂があるかもしれないと思つたのだ。けれど、地底の鬼たちは頼政のことを知らなかった。彼らを統括する閻魔に聞いても応えてはくれず、代わりに妙な鏡で正体を見破られ、説教されそうになつたので慌てて逃げた。

もともと、嫌われ者の妖怪や死人ばかりの地底は、地上よりは暮らしやすかつた。特に地上に戻る気も起らず地底で暮らすうち、地獄の再編計画と移転計画が持ち上がり、是非曲直庁の官舎や公吏の鬼達はこぞつてどこかへ行つてしまった。あとに残された旧地獄にぬえは残り、そこで聖復活を掲げる奇妙な妖怪たちや、リストラにあつて置いて行かれた鬼たちと知り合う。その後は——もう、皆が知る通りだ。

地上に出られるようになってすぐ、ぬえは冥界の白玉楼の話を聞いた。白玉で作られた天井の楼閣には、才に優れた文人や書家たちの魂が暮らす場所であるらしい。頼政のように歌に優れたものならそこにいるのではないかと思つて向かつたが、生憎とそこにも頼政はいなかつた。彼は私心に兵を挙げ世を乱した故に、ここにすることは許されていないのだと言ふ。亡霊の姫にそう諭され、ぬえはまた落胆した。

結局、どこを探しても頼政は見つからなかったのだ。

「つまり、わたしを殺せる奴はもうどこにもいないってわけだ」

幻想郷には、多くの妖怪や人外、神様までもが集っている。出鱈目に強い巫女もいる。腕っ節でだけならば、ぬえよりも強い妖怪がいるだろう。しかしたとえぬえを負かすことができても、彼等には正体不明の本質を暴くことはできない。

頼政の弓でしか、ぬえの正体を射ることはできないのだから。

ぬえはそっと、服の上から腹の矢傷に触れた。あれからいくつもの傷を受けたが、それらは皆綺麗に治っている。けれどこの傷だけは別だ。あの夜、紫宸殿の屋根の上、頼政の弓矢で貫かれて以来、ぬえはこの傷をもつて正体を暴かれ、死ぬことになる宿命をその身に刻まれた。

けれどその弓矢は、鶴を脅かす源三位の弓は、いまやぬえの手にしか存在しないのだ。

あれから何度か、頼政の名前を歴史家の語る書の中に見た。そのどれもが、彼を源氏決起の要因と成した男として描いていた。義経や頼朝たちに令旨をもたらす契機とされ、彼の死は時代の源氏の寵児たちのきっかけでしかなく、そこにある苦悩も決意もすべて、大きな歴史のうねりの中の、淡白な一文に圧縮されてしまっていた。

どいつもこいつも、勝手だ。

「――埋木の 花咲く事も なかりしに 身のなる果は あはれなりける」

埋もれ木が花も咲かせることなく、枯れ朽ちていく様のように、己を重ねて詠んだ頼政の想いは、もう誰も覚えていないのだ。穏やかな神社の陽気とは対照的に、ささくれ立つ心を持て余し、ぬえはがりがりとした牙を擦り合わせる。

そこに、マミゾウがようやく戻ってきた。最近すっかり馴染んだ里の商人姿の装いで、何やら大きな風呂敷包みを抱え、ほくほく顔である。

「やーれやれ、すぐ済むつもりがずいぶん手間取った……んむ。なんじゃぬえ、ずいぶん不景気な顔をしておるのう」

「なんだよマミゾウ。……いま、あんまり話したい気分じゃないんだ。ほつといてよ」

「そう言うな。ちと面白いものを見つけてのう」

がさがさと枝を揺らし、ぬえの隣に腰掛けるマミゾウ。ふかふかの尻尾を脚の下に敷いて、その上で風呂敷包みを解く。中から出てきたのは二矢一弓一揃いの弓箭だった。

「雷上動と水破、兵破。文殊菩薩の化身とされる楚国の弓の名手、養由基の弓じゃ。甲冑七枚を貫き、蜻蛉の羽根を射止め、百歩先から柳葉を射て百発百中を誇ったという銘品じゃよ。先日、里の外れにある古道具屋に立ち寄ってみたら、無造作にこいつが並んでおつての。思わぬ掘り出し物じゃった。大分吹っ掛けられたがのう」

「ふうん」

嬉しそうなマミゾウに、ぬえはどうでもいいとばかりに羽根を揺する。彼女の骨董趣味は今に始まったものではない。その古道具屋の店主とやらが、葉っぱの代金を支払われていないことを祈るばかりだ。

「だが、こいつの持ち主としてはもっと知られた名があつての。ぬえ、おぬしも良く知つておる相手じゃ」

「……あん？ いま言つてた楚の養なんとかつて奴だろ？」

「いや。養由基は死に際し、その弓を譲る人物を探したがついに見つかることができず、娘の椒花女にそれを託した。その椒花女も命を落とそうとする時に、海を越え一人の男の夢の中に現れてこの弓を託したという。——それがかの源頼光。大江山の鬼退治の英雄じゃ」

マミゾウは面白げに口元を緩め、煙管を上下に揺らしながら、ぬえの顔を覗きこむ。

「頼光より、この弓箭はその子孫に伝わる。美濃守源頼國、下野守源頼綱、兵庫頭源仲政。辟邪の武、摂津源氏の嫡流が代々これを受け継ぎ、その証と成した。そしてこの弓の名が一躍知れることになったのが、その次代。」

東三条の森より黒雲と共に現れた化鳥、鶴を射落とした英雄——源三位頼政によつてじゃ」
「……………!？」

がばと身を起こしたぬえの隣で、マミゾウは片目をつぶり、やおら樹上に立ち上がった。口

に手を添え、舞台上の面靈氣に声をかける。

「こころよ！ 先の新作能楽、実に見事じやった。ここで儂よりひとつ、りくえすとをしても良いかのう！」

ざわつく観衆の中、舞台上の少女は無表情で翁の面をかぶり、こくりと頷く。マミゾウは良しとばかりに二本の矢と弓を彼女へと投げ渡した。

「二代観世大夫、世阿弥の二番目物・修羅能「頼政」、また五番目物・切能「鵠」じや！」
「わかった」

面靈氣はどどんと舞台上に脚を打ち付け、投げ渡された弓を構え、シテへと回る。被る面はこれまで彼女が見せた面のどれでもない、翁とも尉とも将とも違う、特異なものだった。

「あれが『頼政』。かの哀しき英雄を演じるための専用の面じゃ。

ほれ、何をしとる。——行つて来い、ぬえ」

背中を押され、ぬえはそのまま木の上から舞台上空へと押し出される。舞台上のこころはすぐに化け狸の意図を察したようだった。靈力で編み出した大太刀を脇に吊るし、雷上動に矢を番えてぬえを狙い、朗々と謡い始める。

舞台上の二人を見て、囃子を奏でていた太鼓の付喪神が大きく太鼓を打ち鳴らした。彼女のウイंकに、琵琶と琴の姉妹もうなずいて、がらりと曲調を変えた。

高らかに打ち鳴らされる太鼓、重なる弦の音。マミゾウもちやつかり楽隊衣装に化けてそこに加わる。景気良く始まる心綺楼の囃子に、舞台に詰めかけた観衆がどつと沸き、歓声が上がった。

「——マミゾウ!？」

二つ岩狸は笑っていた。

秦氏の末である世阿弥が時の將軍、足利義教の不興をかって佐渡に配流されていたのを、一休和尚に嘆願し京都へと戻したのは彼女、二ツ岩団三郎狸の計らいである。

ぬえの恨みと、頼政の弓。初めは虚構だったそれを風化させることなく、後世に伝え残さんと奔走したのは、ほかならぬ佐渡の二ツ岩であった。

頼政。源三位頼政。鶴退治の英雄。古今無双の弓の名手。辟邪の武、摂津源氏の長。伝承になった神話は、広く人に広まり、英雄は演じられる。

ぬえを討った弓は、伝承として武器となった。

同じことだ。大妖怪・鶴を退治した頼政も。広く人の口に上り、語られ、今も生き続けているのだ。名高き破邪の弓にて射られたぬえが、平安の世を揺るがした大妖怪となったように。大妖怪となったぬえを射た頼政もまた、伝承に謳われる英雄のひとりとなったのだ。

すべては因果。糾える縄のごとく。ぬえが鶴としている限り、それを討つ頼政の弓は表れる。

すなわちその意味するところは――

「……はやく。あなたが構えなきや始まらない」

急展開について行けぬまま、呆然としていたぬえに焦れたのか。こころはぬえのそばに飛び上がり、彼女の手を引いて舞台の上に引つ張り寄せた。合わせて腰の大太刀を抜き、ぬえへと斬りかかる。演目だというのに油断のない鋭さで繰り出された一閃を掻い潜り、ぬえは手元に槍を呼び出して構えた。

黒衣の少女の頬を涙が伝う。幾筋も、幾筋も、熱い雫はあとからあとから溢れて止まらない。

「どうした。平安京を揺るがした大妖怪が、泣いてばかりで終わりなのか」

不敵なこころの挑発に、赤くなつた目元を擦り、ぬえは齒をむき出して不敵に笑う。

「あつはははははは!! そうか、そうかよ! いいぞ、相手してやるっ」

大きく空を仰ぎ、ぬえは胸いっぱい息を吸い込んだ。

遠く遠く、想い人へと聞こえるように。叫ぶ。

「おまえは、ここで終わりだな!!」

空を蹴って走るぬえの槍と、それを迎え撃つこころ演じる頼政の弓。舞台の上を下へと飛び

交い、閃光を散らし、轟音をとどろかせて交わされる弾幕が、鮮やかにぶつかり七色の輝きを散らし、花火のように空を彩る。

ああ、頼政。聞こえるか。わたしのこの声が聞こえるか。

わたしはここにいます。今もずっと、ここにいます。

嘆きも、悲しみも、もうない。お前の望みどおり、わたしは存分に笑ってやる。

妖怪と、人間と。

両者があるべき姿で対峙することが叶う、この、東の果ての楽園で。

もはやのどぶ鵲鳥の声は聞こえず、

籠の鳥の羽ばたきを封じるものは、どこにもない。

【参考文献】

- 平家の群像 物語から史実へ 高橋 昌明
- 河内源氏 - 頼朝を生んだ武士本流 元木 泰雄
- 教えてあげる平清盛 南城司&冒険企画局
- 源平争乱 群勇ビジュアル百科 ポプラ社 監修: 二木謙一
- 源頼政(人物叢書) 多賀 宗隼
- 新・平家物語 吉川 英治

- 平家物語(原文・現代語訳) 学ぶ・教える. COM
(<http://www.manabu-oshieru.com/daigakujuken/kobun/heike.html>)
- ウィキペディア フリー百科事典
(<https://ja.wikipedia.org/wiki/>)
- 平城京左京三条五坊から「源頼政と親経卿記」
(<http://blog.livedoor.jp/puku2009/archives/985847.html>)
- 月桜(つきざくら)「中納言・源雅頼(みなもとのまさより)」
(<http://hmikann.blog110.fc2.com/blog-entry-1224.html>)
- 太皇太后宮小侍従ノート
(<http://homepage2.nifty.com/H-Suga/tkk01.html>)

- やる夫が日本に呪いをかけるようです 1 ◆.qh1IqzafM
(<http://jbbs.shitaraba.net/otaku/12973/storage/1271784242.html>)
- やる夫は鎌倉幕府の成立を見るようです
- やる夫は鎌倉幕府を成立させるようです
1 ◆uZxOfxKewg(和泉樹林) 泳ぐやる夫シアター収録
(<http://oyoguyaruo.blog72.fc2.com/blog-entry-1701.html>)

- 【歴戦文化祭】保元・平治の乱 保元の乱編 源頼政と封獣ぬえ
(<http://www.nicovideo.jp/watch/sm12836188>)
 - 【歴戦文化祭】保元・平治の乱 保元の乱編②
～源頼政と封獣ぬえ
(<http://www.nicovideo.jp/watch/sm12838323>)
 - 【続歴戦文化祭】保元・平治の乱 平治の乱編①
～源頼政と封獣ぬえ
(<http://www.nicovideo.jp/watch/sm12896661>)
 - 【続歴戦文化祭】保元・平治の乱 平治の乱編②
～源頼政と封獣ぬえ
(<http://www.nicovideo.jp/watch/sm13009623>)
 - 【続歴戦文化祭】保元・平治の乱 以仁王拳兵編
～源頼政と封獣ぬえ
(<http://www.nicovideo.jp/watch/sm13054386>)
 - その時歴戦が動いた 全盛期の源為朝伝説～ジャパニーズ呂布
(<http://www.nicovideo.jp/watch/sm16807006>)
制作: 淡島ヒルコ
-
- ニツ岩むじな考 ひよこ石／哄笑屋
 - 永啼鳥 DELI-TRE
 - 夜啼鳥奇譚 La Mort Rouge
 - 紅炉上一点雪 スアリテスミ

【奥付】

「悲しきかなや身は籠鳥」

平成26年5月11日

第11回博麗神社例大祭

発行 オルハザカサンパンチ 折葉坂三番地

(<http://oruhazaka.dojin.com/infoblog/>)

著者: あかがねおりは 銅 折葉

表紙: 木戸様

pixiv_id=1498309

印刷所: (株)ポプルス様

※本作は「上海アリス幻楽団」様の
「東方 project」の二次創作です。





折葉坂三番地

<http://oruhazaka.dojin.com/infoblog/>

表紙：木戸

pixiv_id=1498309